

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告10

桜町遺跡(2次)



口絵 1 2次調査区南部（真上から）



口絵 2 2次調査区北部（真上から）



口絵 3 93号土坑 (1)

- | | |
|---------------------|--------------------|
| 1 土層断面 (西から) | 2 土器出土状況 (西から) |
| 3 木質遺物出土状況 (西から) | 4 下部施設土器出土状況 (西から) |
| 5 下部施設長順壁出土状況 (西から) | 6 全景 (南から) |



口絵 4 桜町遺跡出土弥生土器 (桜町Ⅰ式)



口絵 5 桜町遺跡出土弥生土器 (左 桜町Ⅱ式・右 桜町Ⅲ式)



口絵 6 桜町遺跡出土木製品

序 文

文化財は、それぞれの地域の歴史に根ざした文化遺産であると同時に、我が国の歴史や文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものであります。

喜多方市と会津若松市を結ぶ延長13.1kmの地域高規格道路である会津縦貫北道路は、平成8年度に都市計画道路として決定され、平成9年度からは建設省（現国土交通省）直轄事業として建設工事が進められています。この計画路線上にも先人が残した貴重な文化遺産が埋蔵されており、福島県教育委員会は、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め、数多くの遺跡等の所在を確認してきました。このため、福島県教育委員会では、国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所と埋蔵文化財保護のための協議を重ね、現状での保存が困難なものについては記録として保存することとして、発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成21年度に発掘調査を行った、湯川村に所在する桜町遺跡の第2次調査成果をまとめたものです。

平成21年度の桜町遺跡の調査は、平成16年度の第1次調査に引き続く調査で、弥生時代後期の集落跡の一部が確認されました。掘立柱建物跡、周溝状遺構、竪穴状遺構、井戸跡、溝跡のほか、様々な形の周溝墓が確認されました。また、井戸跡からは木製の鎌・掘り棒のほか木製の梯子の一部が土器と一緒に廃棄されたと思われる状況で出土したり、縄文が施された在地の土器と共に、北陸や北関東系の土器と一緒に出土しています。

今回の調査成果は、弥生時代後期の会津盆地の集落の様相や他の地域との関係を明らかにしていく上で貴重な資料になると考えられます。

今後、この報告書が、県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いです。

最後に、発掘調査の実施にあたり、御協力いただいた湯川村教育委員会、国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所、財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成23年3月

福島県教育委員会

教育長 遠藤 俊博

あ い さ つ

当事業団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模開発の対象地域に所在する埋蔵文化財の調査を実施しております。会津縦貫北道路にかかる埋蔵文化財については、平成9年度の表面調査をへて、平成13年度から発掘調査を実施しております。

本調査報告書は、平成21年度に発掘調査を実施した湯川村桜町遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の発掘調査により、弥生時代後期の各種周溝墓が多数検出されるとともに、掘立柱建物跡や井戸跡、貯蔵穴の存在が明らかになりました。さらに遺構にともなって、高床建物の部材や農耕具、土器などが出土しました。これらは会津盆地において本格的な水稲農業が開始された当時の生活を物語っています。

この調査資料は、福島県および東北地方の弥生時代から古墳時代に移行する歴史を語る上で基幹となる資料になると確信しております。本報告書が歴史の基礎資料として利用されるばかりでなく、ふるさとの歴史を解明するための一助となれば幸いです。

最後に、今回の発掘調査にご協力をいただきました関係諸機関ならびに地元の皆様に、厚くお礼申し上げます。

平成 23 年 3 月

財団法人 福島県文化振興事業団

理事長 富田 孝志

緒 言

1. 本書は、平成21年度に実施した会津縦貫北道路遺跡発掘調査にかかる桜町遺跡の調査成果を収録した。

桜町遺跡：河沼郡湯川村桜町字千苺 埋蔵文化財番号：422-00030

2. 当遺跡発掘調査事業は、福島県教育委員会が国土交通省の委託を受けて実施し、調査にかかる費用は国土交通省が負担した。
3. 福島県教育委員会は、発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。
4. 財団法人福島県文化振興事業団では、遺跡調査部遺跡調査課の下記の職員を配置して調査にあたった。

専門文化財主査 福島 雅儀 文化財主査 福田 秀生
嘱託 西澤 正和 嘱託 大野 淳史

5. 本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。
6. 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図、並びに同省東北地方整備局郡山国道事務所が製作した工事用地図を複製したものである。
7. 本書に掲載した科学分析については、次の機関に委託し、その分析結果および考察は巻末に付章として掲載した。

付章1 桜町遺跡出土木質遺物の樹種同定及び放射性炭素年代測定 株式会社 パレオ・ラボ

付章2 福島県桜町遺跡における科学分析 株式会社 古環境研究所

8. 本書に収録した遺跡調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
9. 発掘調査および報告書の作成に際して、次の機関および個人から、協力・助言を頂いた。

湯川村教育委員会 福島県立博物館 福島大学

六澤 咏光 甘粕 健 植村 泰徳 大越 道正 岡田 文男 岡田 茂弘
梶原 文子 菅野 和博 菊地 芳朗 木本 元治 工藤 雅樹 小林 謙一
佐久間正明 杉浦 真琴 住田 雅和 田中 敏 千田 一志 長尾 修
永嶋 正春 生江 芳徳 中村 五郎 西本 豊弘 橋本 博文 柳沼 賢治
山岸 良二 横須賀倫達 渡邊 朋和 (敬称略)

用 例

1. 本文中および遺物整理に使用した略記号は次の通りである。

湯川村…UK 桜町遺跡…SKR 周溝墓・周溝状遺構…周 竪穴状遺構…SI
掘立柱建物跡…SB 溝 跡…SD 土 坑…SK 柱穴・小穴…P
グリッド…G 遺構外堆積土…L 遺構内堆積土…ℓ

2. 遺構挿図における遺構番号は、当該遺構は正式名称、その他の遺構は記号化した略称で記載している。

3. 本書における遺構実測図の用例は、以下の通りである。

- (1) 方位記号の表記がないものは、全て本書の上を真北とする。
- (2) 桜町遺跡の遺構番号は、1次調査からの連続番号である。
- (3) 縮尺は、各挿図版に示した。
- (4) 遺構内の傾斜面はⅢケバで表示した。
- (5) 断面図および地形図における標高は海拔標高を示す。
- (6) 遺構外の自然堆積土はローマ数字、遺構内堆積土は算用数字で表記した。

[例] 遺構外自然堆積土：L I ・ L II …, 遺構内堆積土：ℓ 1 ・ ℓ 2 …

4. 本書における遺物実測図の用例は、以下の通りである。

- (1) 縮尺は各挿図版に示した。
- (2) 土器断面は、弥生土器・土師器を白ヌキ、須恵器はベタ黒とした。
- (3) 挿図中の網点は、図版ごとに凡例を示した。
- (4) 遺物番号は挿図版ごととし、文中では下記のように省略している。また、掲載遺物の出土位置・層位は、右下に示している。

[例] 図28の10番の遺物…28-10

- (5) 遺物の計測値については、推定値を()、残存値を[]で示した。

5. 本書における遺物写真図版で個々に付した番号は、挿図番号と一致する。

6. 引用・参考文献は、執筆者の敬称を省略し、文末に収めた。

目 次

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の位置と自然環境	3
第3節 歴史的環境	5
第4節 調査経過	10
第5節 調査方法	12

第2章 調査成果

第1節 遺跡の概要と基本土層	13
第2節 周溝墓	19
第3節 周溝状遺構	66
第4節 竪穴状遺構	77
第5節 掘立柱建物跡	85
第6節 土坑	122
第7節 溝跡	161
第8節 その他の遺構と遺物	178

第3章 ま と め

第1節 弥生時代の遺物について	181
第2節 周溝墓の築造企画について	200
第3節 会津平における古墳時代のはじまり	204

付 章 自然科学分析

- 1 桜町遺跡出土木質遺物の樹種同定及び放射性炭素年代測定
- 2 福島県桜町遺跡における科学分析

挿図・表・写真目次

[挿 図]

図1	会津縦貫北道路位置図	1	図28	14号周溝墓出土遺物	44
図2	桜町遺跡と会津盆地北部地形	4	図29	15号周溝墓・27号獨立柱建物跡	46
図3	桜町遺跡と周辺の遺跡(1)	6	図30	15号周溝墓出土遺物	47
図4	桜町遺跡と周辺の遺跡(2)	7	図31	1号土器棺墓出土遺物	48
図5	会津縦貫北道路路線図(湯川村)	11	図32	16号周溝墓(1)	51
図6	桜町遺跡(2次)遺構配置図(1)		図33	16号周溝墓(2)	53
	調査区北部	15	図34	16号周溝墓出土遺物	54
図7	桜町遺跡(2次)遺構配置図(2)		図35	18号周溝墓	56
	調査区中央部	16	図36	18号周溝墓出土遺物	57
図8	桜町遺跡(2次)遺構配置図(3)		図37	19号周溝墓	59
	調査区南部	17	図38	19号周溝墓出土遺物	60
図9	9号周溝墓(1)	21	図39	20号周溝墓	61
図10	9号周溝墓(2)	23	図40	20号周溝墓出土遺物	63
図11	9号周溝墓出土遺物(1)	24	図41	23号周溝墓	64
図12	9号周溝墓出土遺物(2)	25	図42	23号周溝墓出土遺物	65
図13	9号周溝墓出土遺物(3)	26	図43	12号周溝状遺構	66
図14	9号周溝墓出土遺物(4)	27	図44	12号周溝墓出土遺物	67
図15	9号周溝墓出土遺物(5)	28	図45	13号周溝状遺構・28号獨立柱建物跡	68
図16	9号周溝墓出土遺物(6)	29	図46	13号周溝墓出土遺物(1)	69
図17	69号土坑	31	図47	13号周溝墓出土遺物(2)	70
図18	69号土坑出土遺物	32	図48	17号周溝状遺構・34号獨立柱建物跡	72
図19	10号周溝墓	34	図49	17号周溝墓出土遺物	73
図20	10号周溝墓出土遺物(1)	35	図50	21・22号周溝状遺構	74
図21	10号周溝墓出土遺物(2)	36	図51	24号周溝状遺構	75
図22	11号周溝墓	38	図52	24号周溝状遺構出土遺物	76
図23	11号周溝墓出土遺物(1)	39	図53	6号竪穴状遺構	77
図24	11号周溝墓出土遺物(2)	40	図54	6号竪穴状遺構出土遺物	78
図25	11号周溝墓出土遺物(3)	41	図55	7号竪穴状遺構	79
図26	11号周溝墓出土遺物(4)	42	図56	7号竪穴状遺構出土遺物	81
図27	14号周溝墓	43	図57	8号竪穴状遺構	82

図58	8号竪穴状遺構出土遺物	84	図87	弥生時代の土坑(3)(91・94号土坑)	130
図59	19・36・37号掘立柱建物跡	86	図88	弥生時代の土坑(4)(93号土坑)	131
図60	20号掘立柱建物跡(1)	88	図89	101号土坑	132
図61	20号掘立柱建物跡(2)	89	図90	64・65・67・68・70・72号 土坑出土遺物	133
図62	21号掘立柱建物跡	90	図91	73・75・91号(1)・95号 土坑出土遺物	134
図63	22・23号掘立柱建物跡	91	図92	91号土坑出土木製品(2)	135
図64	24号掘立柱建物跡(1)	93	図93	93号土坑出土遺物(1)	136
図65	24号掘立柱建物跡(2)	94	図94	93号土坑出土遺物(2)	137
図66	25号掘立柱建物跡	95	図95	93号土坑出土遺物(3)	138
図67	26号掘立柱建物跡	97	図96	93号土坑出土遺物(4)	139
図68	29号掘立柱建物跡	99	図97	93号土坑出土遺物(5)	140
図69	30号掘立柱建物跡・22号溝跡	101	図98	93号土坑出土木製品	141
図70	31号掘立柱建物跡	102	図99	94号土坑出土遺物(1)	142
図71	32・33号掘立柱建物跡	104	図100	94号土坑出土遺物(2)	143
図72	35号掘立柱建物跡	105	図101	94号土坑出土遺物(3)	144
図73	38号掘立柱建物跡	107	図102	平安時代以降の土坑(1) (65・71・76~79号土坑)	149
図74	39号掘立柱建物跡	108	図103	平安時代以降の土坑(2) (80・82~85号土坑)	150
図75	40号掘立柱建物跡	110	図104	平安時代以降の土坑(3) (81・86・88~90・104・107号土坑)	151
図76	41号掘立柱建物跡	111	図105	平安時代以降の土坑(4) (87・92・96・98・99・110号土坑)	152
図77	42号掘立柱建物跡	113	図106	平安時代以降の土坑(5) (102・105・106・108・111号土坑)	153
図78	43・44・45号掘立柱建物跡(1)	115	図107	77・81・85・87・89・92・ 98・105号土坑出土遺物	154
図79	43・44・45号掘立柱建物跡(2)	116	図108	78・80・82~85号土坑出土遺物	155
図80	43・44・45号掘立柱建物跡(3)	117	図109	86・87・89・92・98・99・102・ 105・108号土坑出土遺物	156
図81	46号掘立柱建物跡	118	図110	102・108号土坑出土木製品	158
図82	掘立柱建物跡出土遺物(1) 弥生土器	119	図111	調査区北半部の溝跡土層断面 (19~21・24・38号溝跡)	162
図83	掘立柱建物跡出土遺物(2) 土師器・須恵器	120			
図84	掘立柱建物跡出土遺物(3) 柱材・礎板	121			
図85	弥生時代の土坑(1) (63・64・67・68・70・73号土坑)	128			
図86	弥生時代の土坑(2) (72・74・75・95・97号土坑)	129			

図112 調査区南半部の溝跡土層断面 (22・25～35・37号溝跡)	164	図126 柱穴出土遺物	178
図113 19号溝跡出土遺物(1)	165	図127 遺構外出土遺物	180
図114 19号(2)・20・22・33号溝跡 出土遺物	166	図128 桜町Ⅰ式(93号土坑一括資料)	183
図115 21号溝跡出土遺物(1)	167	図129 桜町Ⅱ式・Ⅲ式(一括資料)	184
図116 21号溝跡出土遺物(2)	168	図130 周溝墓出土土器の変遷図①	188
図117 21号溝跡出土遺物(3)	169	図131 周溝墓出土土器の変遷図②	189
図118 23号溝跡出土遺物	170	図132 能登式・桜町Ⅰ式土器	209
図119 25号溝跡出土遺物(1)	171	図133 桜町Ⅱ式・ Ⅲ式(古墳受容Ⅰ期)の土器	212
図120 25号溝跡出土遺物(2)	172	図134 会津地域における周溝墓から 古墳への変化(1)	214
図121 25号溝跡出土遺物(3)	173	図135 会津地域における周溝墓から 古墳への変化(2)	215
図122 25号溝跡出土遺物(4)	174	図136 古墳受容2期・3期の土器(後半)	219
図123 25号溝跡出土遺物(5)	175	図137 古墳時代前期の土器	220
図124 25号溝跡出土遺物(6)	176	図138 会津の前期古墳と関連古墳	222
図125 37号溝跡出土遺物	177		

[表]

表1 桜町遺跡と周辺の遺跡一覧表	8	表3 土坑一覧	160
表2 土坑一覧	159	表4 会津地域の周溝墓から古墳への変遷	207

[写真図版]

1 桜町遺跡周辺航空写真	239	15 10号周溝墓周辺全景	249
2 2次調査遠景	240	16 10号周溝墓全景	249
3 2次調査区全景(1)	240	17 10号周溝墓検出	250
4 2次調査区全景(2)	241	18 10号周溝墓細部	250
5 2次調査区全景(3)	242	19 11号周溝墓全景	251
6 2次調査区北部	242	20 11号周溝墓細部	251
7 2次調査区全景(4)	243	21 14号周溝墓全景	252
8 2次調査区南部	243	22 14号周溝墓細部	252
9 2次調査区部分	244	23 15号周溝墓全景	253
10 9号周溝墓全景	245	24 15号周溝墓検出	253
11 9号周溝墓細部(1)	245	25 15号周溝墓細部	254
12 9号周溝墓土層断面	246	26 27号掘立柱建物跡全景	255
13 9号周溝墓細部(2)	247	27 27号掘立柱建物跡細部	255
14 69号土坑細部	248	28 16号周溝墓全景	256

29	16号周溝墓檢出	256	63	24·25·38号掘立柱建物跡檢出	276
30	16号周溝墓細部	257	64	24号掘立柱建物跡細部	277
31	18号周溝墓全景	257	65	25·38号掘立柱建物跡細部	278
32	18号周溝墓細部	258	66	26号掘立柱建物跡檢出	279
33	19号周溝墓檢出	258	67	26号掘立柱建物跡細部	279
34	19号周溝墓細部	259	68	29号掘立柱建物跡檢出	280
35	20号周溝墓全景	259	69	29号掘立柱建物跡細部	280
36	20号周溝墓細部	260	70	30号掘立柱建物跡檢出	281
37	23号周溝墓全景	261	71	30号掘立柱建物跡細部	281
38	23号周溝墓細部	261	72	31号掘立柱建物跡全景	282
39	12号周溝状遺構細部	262	73	31号掘立柱建物跡細部	282
40	13号周溝状遺構全景(1)	262	74	32号掘立柱建物跡全景	283
41	13号周溝状遺構全景(2)	263	75	32号掘立柱建物跡細部	283
42	13号周溝状遺構細部	263	76	33号掘立柱建物跡全景	284
43	17号周溝状遺構全景	264	77	33号掘立柱建物跡細部	284
44	17号周溝状遺構細部	264	78	35号掘立柱建物跡全景	285
45	21·22号周溝状遺構全景	265	79	36·37号掘立柱建物跡檢出	285
46	21·22号周溝状遺構細部	265	80	36号掘立柱建物跡檢出	286
47	24号周溝状遺構細部	266	81	36号掘立柱建物跡細部	286
48	17号周溝状遺構·34号掘立柱建物跡全景	266	82	37号掘立柱建物跡檢出	287
49	6·7号竪穴状遺構	267	83	37号掘立柱建物跡細部	287
50	8号竪穴状遺構	268	84	39号掘立柱建物跡細部	288
51	南部掘立柱建物群全景	269	85	40号掘立柱建物跡檢出	288
52	中央部掘立柱建物群全景	269	86	41号掘立柱建物跡檢出	289
53	19号掘立柱建物群全景	270	87	42号掘立柱建物跡全景	289
54	20号掘立柱建物群全景	270	88	42号掘立柱建物跡細部	290
55	20号掘立柱建物群細部(1)	271	89	43·44·45号掘立柱建物跡檢出	291
56	20号掘立柱建物跡細部(2)	272	90	43·44·45号掘立柱建物跡全景	291
57	21号掘立柱建物跡檢出	273	91	46号掘立柱建物跡全景	292
58	21号掘立柱建物跡細部	273	92	46号掘立柱建物跡細部	292
59	22·23号掘立柱建物跡全景	274	93	63·64·67·70·72·73·75号土坑	293
60	22·23号掘立柱建物跡細部(1)	274	94	91号土坑全景	294
61	22·23号掘立柱建物跡細部(2)	275	95	91号土坑細部	294
62	24·25·38号掘立柱建物跡全景	276	96	93号土坑(1)	295

97	93号土坑(2)	296	128	17号周溝状遺構出土土器	315
98	94号土坑	297	129	24号周溝状遺構出土土器	315
99	101号土坑(1)	297	130	6号竪穴状遺構出土土器	316
100	101号土坑(2)	298	131	7号竪穴状遺構出土土器	316
101	98・105・106・108・110号土坑	299	132	8号竪穴状遺構出土土器	317
102	76・92・102号土坑	300	133	101号土坑出土土器	317
103	19~21・23・25・30・37号溝跡	301	134	土坑(弥生)出土土器(1)	318
104	21・25号溝跡	302	135	土坑(弥生)出土土器(2)	318
105	グリッド・ピット	302	136	93号土坑出土土器(1)	319
106	9号周溝墓出土土器(1)	303	137	93号土坑出土土器(2)	320
107	9号周溝墓出土土器(2)	304	138	93号土坑出土土器(3)	321
108	9号周溝墓出土土器(3)	304	139	93号土坑出土土器(4)	321
109	9号周溝墓出土土器(4)	305	140	93号土坑出土土器(5)	322
110	69号土坑出土土器	305	141	93号土坑出土土器(6)	322
111	10号周溝墓出土土器(1)	306	142	93号土坑出土土器(7)	323
112	10号周溝墓出土土器(2)	306	143	94号土坑出土土器	323
113	11号周溝墓出土土器(1)	307	144	21号溝跡出土土器(1)	324
114	11号周溝墓出土土器(2)	308	145	21号溝跡出土土器(2)	324
115	11号周溝墓出土土器(3)	308	146	25号溝跡出土土器	325
116	14号周溝墓出土土器	309	147	土師器・須恵器	325
117	15号周溝墓・1号土器棺出土土器	309	148	石器(1)	326
118	1号土器棺墓出土土器	310	149	石器(2)	326
119	16号周溝墓出土土器	310	150	91号土坑出土木製品(1)	327
120	18号周溝墓出土土器	311	151	91号土坑出土木製品(2)	328
121	18・19号周溝墓出土土器	311	152	93号土坑出土木製品	329
122	20号周溝墓・17号周溝状遺構出土土器	312	153	94号土坑出土木製品(1)	330
123	20号周溝墓出土土器	312	154	94号土坑出土木製品(2)	331
124	23号周溝墓出土土器	313	155	102・108号土坑出土木製品	332
125	12号周溝状遺構出土土器	313	156	出土弥生土器細部(1)	333
126	13号周溝状遺構出土土器(1)	314	157	出土弥生土器細部(2)	334
127	13号周溝状遺構出土土器(2)	314			

付章 1

[表]

表 1	出土木製品の樹種同定結果	337
表 2	弥生時代後期の木製品の同定結果	340
表 3	遺構別樹種同定結果	341

表 4	出土木製品の樹種同定結果一覧	342
表 5	測定試料及び処理	350
表 6	放射性炭素年代測定 及び暦年校正の結果	351

[写真図版]

図版 1	出土木製品の光学顕微鏡写真 (1)	344
図版 2	出土木製品の光学顕微鏡写真 (2)	345
図版 3	出土木製品の光学顕微鏡写真 (3)	346

図版 4	出土木製品の光学顕微鏡写真 (4)	347
図版 5	出土木製品の光学顕微鏡写真 (5)	348
図版 6	出土木製品の光学顕微鏡写真 (6)	349

[挿 図]

図 1	各試料の暦年校正図 (1)	353
-----	---------------	-----

図 2	各試料の暦年校正図 (2)	354
-----	---------------	-----

付章 2

[表]

表 1	測定試料及び処理	355
表 2	年代測定結果	356
表 3	花粉分析結果	360
表 4	樹種同定結果	363

表 5	種実同定結果	367
表 6	昆虫同定結果	370
表 7	昆虫確認種結果	371

[写真図版]

写真 1	花粉・胞子・寄生虫卵	372
写真 2	木材 I	373
写真 3	木材 II	374

写真 4	種実	375
写真 5	昆虫	376

[挿 図]

図 1	暦年校正結果	357
図 2	花粉ダイアグラム	361

図 3	種実ダイアグラム	367
-----	----------	-----

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 調査に至る経緯 (図1)

1 会津縦貫北道路の概要 この道路は、会津盆地北部を南北に貫く基幹交通路として計画されている。喜多方市関柴町の起点から湯川村を経て、会津若松市高野町を終点とする全長13.1kmの地域高規格道路である。起点の関柴町では大峠トンネルから山形県米沢市に続く国道121号線から分離して、終点の高野町では磐越自動車道会津若松ICと連絡することになっている。

平成8年に都市計画道路が決定され、平成9年度から建設省(現国土交通省)の直轄事業として工事が進められている。この結果、平成21年度には、湯川北I.Cと塩川I.Cを結ぶ約3.2kmの区間で供用が開始された。

この道路の建設は、会津盆地北部の交通利便性が飛躍的に向上し、日常生活圏の拡大、観光発展をはかるとともに、交通渋滞の緩和による炭素排出量の削減等を意図して実施している。またこの事業が完成することにより、会津北部は高速道路網に組み込まれることになる。

2 平成21年度までの遺跡調査経過 平成8年度の事業計画策定を受けて、建設省(現国土交通省)と福島県教育委員会の間では、埋蔵文化財の保護に対する協議を実施している。この結果を受けて、福島県教育委員会では、会津縦貫北道路建設に関連する埋蔵文化財の表面調査を平成9年度に開始し、さらに平成12年度からは遺跡および遺跡指定地の試掘調査、平成13年度からは、事業地内における遺跡の発掘調査を開始した。

平成9年度の遺跡分布調査は、会津縦貫北道路建設予定地のうち、喜多方市関柴町から会津若松市高野町に至る12.3kmまでの区間で、予定地を中心に幅150mの範囲を対象として実施した。

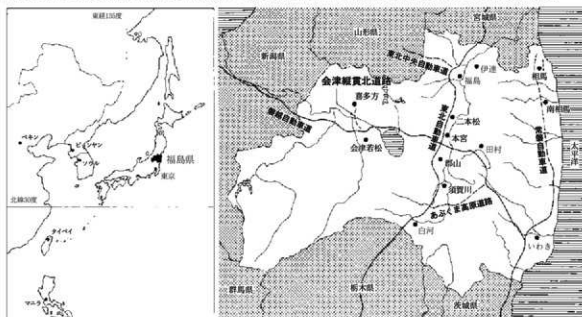


図1 会津縦貫北道路位置図

第1章 遺跡の環境と調査経過

この結果、21遺跡と遺跡推定地3箇所を確認した。本年度に発掘調査を実施した桜町遺跡は、この時の表面調査で発見された。この成果は『福島県内遺跡分布調査報告4』として報告した。桜町遺跡の面積は490,000㎡以上である。その後、平成19年に会津若松市高野町中沼地区を中心に約20haについても埋蔵文化財の分布調査を実施した。これにより、4遺跡と遺跡推定地3箇所を確認した。

遺跡の試掘調査は、日橋川架橋にとまなう工事の優先を考えて、喜多方市塩川町遠田地区の麻生館・荒屋敷遺跡から開始した。この後、工事にかかる遺跡の試掘調査を順次実施して、遺跡保存の必要な範囲を確定している。

本年度発掘調査を実施した桜町遺跡については、平成15年度に46,500㎡、平成16年度に26,500㎡の試掘調査を実施した。平成15年度5月には、主要地方道会津坂下・河東線の北側の16,500㎡を対象にして試掘調査が実施された。この地区では、近現代の溝跡や陶磁器類が確認されているようであるが、保存対象から除外された。また同年10月には、遺跡南部の30,000㎡の試掘調査を実施した。この調査によって、遺跡の北部を中心に弥生時代と平安時代の遺構・遺物が濃密に存在していることが確認された。一方、南半部では遺構・遺物の分布は希薄であった。そこで北半部の8,200㎡を保存対象範囲とした。この結果は、『福島県内遺跡分布調査報告10』として報告した。

さらに、平成16年度には、主要地方道会津坂下・河東線の南側、八日町集落の西部で約25,500㎡を対象に試掘調査を実施した。この結果、調査範囲の全域で、弥生時代と平安時代の遺構・遺物が確認された。この成果は、『福島県内遺跡分布調査報告11』として報告した。このほか、一部の残っていた2,500㎡の未試掘地区の調査を平成20年度に実施して、これを保存対象範囲に追加した。

発掘調査は、平成13年度に喜多方市塩川町麻生館遺跡の6,200㎡、荒屋敷遺跡の9,700㎡を対象に実施した。この調査によって、麻生館遺跡では平安時代の建物跡と中世の館跡の一部が確認され、『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告書1』として報告した。

また、荒屋敷遺跡では、平安時代後期の遺構と遺物を確認した。荒屋敷遺跡では、その後平成14・15・16・17年度にわたり継続した調査を実施して、『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告書2・3・4・5・6』として報告した。この遺跡からは、平安時代の中国産陶磁器が多数出土している。

平成17年度から20年度には、喜多方市高堂太遺跡の調査を実施した。この調査によって、室町時代の館跡内部の区画や建物配置が明らかになるとともに、中国産磁器と銅製提下を埋納した地鎮遺構も検出された。室町時代の館における生活を語る遺跡である。これに加えて、高堂太遺跡の南部湿地からは、平安時代後期の木製品が多量に出土した。このほか、平成19年度には、湯川村沼ノ上遺跡の調査を実施して、縄文時代後期の池状遺構を検出し、また鎌倉時代の木製品も多量に出土した。両遺跡については、『会津縦貫北道路関連遺跡発掘調査報告書6・7・8・9』として報告した。

桜町遺跡の1次調査は、平成16年度に実施した。遺跡南部の4,300㎡である。この調査では、弥生時代の周溝墓7基、土坑多数、平安時代では堅穴状遺構4基、掘立柱建物17棟、土坑などが検出されている。これとともに同年、調査を実施した荒屋敷遺跡（4次）において、桜町遺跡より新し

い型の周溝墓を確認した。両遺跡は、『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告書5』として報告した。

第2節 遺跡の位置と自然環境

桜町遺跡は、河沼郡湯川村大字桜町字千菊ほかに所在している。遺跡の中心は、世界測地系による北緯37度33分7秒、東経139度54分3秒である。湯川村は会津盆地の中央部に位置し、会津若松市の南東に接している。桜町遺跡は湯川村の南東部に位置し、瀬川（せせなぎがわ）の西岸に形成された自然堤防上に立地している。近年の圃場整備により、集落地区以外は平坦な水田になっている。遺跡の分布調査では、東西800m、南北800m程度の範囲で、弥生時代と平安時代の遺物や遺構の存在が確認されている。

湯川村は、西端は阿賀川により会津坂下町に接し、北側は猪苗代湖から西流する日橋川側を境として喜多方市に接している。また東側は、雄国岳の噴出物による丘陵地帯が広がっている。これに対して南側は、平坦な地形が続き、会津若松市の市街地に続いている。

湯川村の大半は、沖積期の低位段丘面である。村の地形は南東部から、北西部の阿賀川と日橋川の合流部に向かってゆるやかに傾斜している。標高は北西部で175m、南東部で187mである。この間は直線方向で約7kmである。湯川村は、河川の周辺で小さな起伏があるほかは、ほぼ平坦な地形である。

会津盆地は、東北地方を南北に貫く奥羽山脈の西側に位置している。北側は飯豊連峰、東は磐梯山塊・奥羽山脈、南から西縁は会津山地から越後山脈に連なる連山に囲まれた低地である。険しい山岳地帯に阻まれて、東側の阿武隈川流域や北側の最上川流域との交通は困難である。このため歴史的には、阿賀川を介して新潟方面と深く結びついた風土を形成してきた。会津地域のうち、会津盆地の低位部は、周囲の山岳地帯と区別してとくに会津平と呼ばれている。

会津盆地の気候は、日本海岸気候に属している。夏は湿潤多雨な高温で、東北地方太平洋岸で冷害をもたらすヤマセの影響が及ぶことは少ない。また冬期は、北陸から東北に連なる豪雪地帯に含まれ、3月中は会津平の根雪も完全に融けることは少ない。こうした環境にある会津平は、東北地方でも有数の米どころ、豊かな土地である。

会津盆地は、河川とその周辺に沿って帯状にのびる氾濫原、河川間の平坦な段丘、扇状地に大きく分けることが出来る。会津平の河川は、猪苗代湖から西に向かって流れる日橋川を境にして、北側の諸河川は南に向かい、南部の諸河川は北に向かって流れて会津平の西端中央部で合流して、日本海に向かって流れ出る。

会津平の歴史を考える上で、阿賀川の流路位置は大きな影響があった。中世会津の出来事を記録した塔寺八幡宮長帳によれば、1419年の阿賀川は、現在の宮川にそった流路を流れていた。これが1536年の洪水によって、現在の流路に変化したことが略図で示されている。1419年以前は、確かなことは文書記録では不明である。この低地には、中西遺跡や東館遺跡があることから、古墳時代前

期にこの場所は、阿賀川の流路とはなっていないかっただけであらう。阿賀川の流路が変化すれば、地域のまとまりにも影響が出る。大河川は、地域を区分する役割もある。

河川は、人が歩いて渡れる程度であれば、交流の障害にはない。また水運が可能な河川であれば、物流の動脈にもなる。近世の阿賀川は、会津と日本海を結ぶ水運路として機能していた。平坦な盆地内では、諸河川を利用した水運を想定しなければならない。さらに河川の漁労は、生活を潤す食料源としても、会津平の人々と結びついている。

低位段丘は、会津平中央部の標高170～200mの範囲に分布しており、極めて平坦な地形である。完新世に形成された地形で、湖成堆積により形成された。扇状地は、盆地の北部と会津平西南部で発達している。西南部では宮川と佐賀瀬川の流域が顕著で、盆地の沖積面に向かって大きく突出している。これは、沼沢火山の噴火による火砕流が堆積してできた地形である。一方、日橋川を境にした北半部では、諸河川により形成された扇状地が重なり、南に傾斜するなだらかな地形となつて

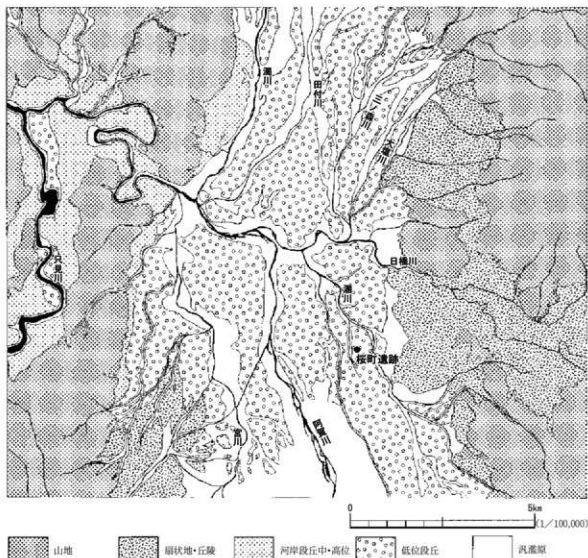


図2 桜町遺跡と会津盆地北部地形

いる。また東縁部では、雄国山や磐梯山の火山性堆積物による扇状地形が発達している。

奥羽山脈の西側に連なる盆地のなかで、会津盆地に特徴的なことは、阿賀川が盆地から流出する先に、大規模な河岸段丘が発達していることである。この河岸段丘は、沼沢火山噴出物起源のハラル堆積物が基盤となっている。この地層は、場所により厚さ20mにも達している(山元2006)。したがって地盤は脆弱で、崩落の発生により自然ダムが出現しやすい地形・地質である。

さらにこの付近に接して、会津盆地の西縁には活発な活断層があり、これを境とした東西では1m/1000年の速度で隆起と沈降が発生している(山元2006)。盆地西縁に発達する崖面は、この活断層線である。1611年の会津大地震により、活断層西部の隆起と阿賀川峡谷の崩落がかさなり、会津盆地に山崎新湖が出現して、盆地内の15ヶ村が水没したという(寒川1987)。

これに関連して、会津坂下町中平遺跡では、古墳時代中期の集落が水成堆積による砂層で厚く覆われていた。この集落地表面の標高は177m程度で、現地表面の標高は180m弱である。砂層は1.4m以上も堆積していた。古墳時代中期に、会津盆地の内部に大きな湖が出現していたことを示している(会津坂下町教育委員会)。

盆地西縁の活断層では、1611年の地震以外に、喜多方市慶徳において約1,900年前の東側隆起の逆断層が検出されている。さらにこの逆断層は、約1400~1600年前の土壌に覆われていた(福島県2001・2002)。桜町遺跡の炭素年代測定結果と近似した年代を示している。

逆断層の生成により、会津平側が隆起したのであれば、低地にあった湖沼も減少するであろう。そうすれば会津平の低地は、水稲農業に適した環境に変化する。弥生時代後期に集落が増加した一因ではないだろうか。逆に古墳時代中期における集落の消滅は、砂層に厚くおおわれた会津坂下町中平遺跡の状況から、会津平の低地部が、居住に不適合な環境に変化した結果であろう。

会津平は、平坦な盆地である。河川の出口は西端の一点である。ここが塞がれば、盆地内に湖が出来る。それだけでなく阿賀川はたびたび氾濫を繰り返し、会津平の地を豊かにするとともに、大きな災害をもたらした。弥生時代後期における集落の増加や古墳時代中期における古墳造営の途絶も、このような自然環境と結びついた現象との関連を考慮すべきであろう。

第3節 歴史的環境

会津平の遺跡を考える場合、自然環境が与える影響は無視できないものがあつた。弥生時代後期になって、この地で集落が急増する一因は、環境変化が大きな要因となっているからである。会津平では、縄文時代から平安時代にかけて、時代・時期により集落の増加と減少を大きく繰り返すことが知られている。この原因は、会津平特有の自然環境と結びついていた。

会津平の低地で遺跡が確認されるのは、縄文時代中期後葉の大木10式期以降であるが数は少ない。会津平で遺跡が増加するのは、弥生時代後期になってからである。この時期の遺跡は、低位河岸段丘の縁辺部に集中して分布している。現在までの調査で判明している状況を数えたところ、桜町遺



図3 桜町遺跡と周辺の遺跡(1)

0 2,000m
1/50,000



第1章 遺跡の環境と調査経過

表1 桜町遺跡と周辺の遺跡一覧表

№	遺跡名	時代	種類	備考「文献」	№	遺跡名	時代	種類	備考「文献」
1	桜町遺跡	弥生,平安	周溝墓,集落	『会津5』本書	41	和泉遺跡	弥生,古墳	集落	『隴新道1』
2	勝堂寺	平安	寺院	『藤田村史』	42	能登遺跡	弥生	集落	『隴新道10』
3	殿田遺跡	縄文	敷布地		43	細田遺跡	弥生,古墳	集落	『会津板下町7,14』
4	沼ノ上遺跡	縄文,中世	集落	『会津8』	44	野ノ内遺跡 (会津板下町)	弥生,平安	集落	『会津板下町14,54』
5	北田城跡	中世	城跡跡	『藤田村史』 『北田城跡』(藤田村,1984)	45	大村古墳群	古墳	古墳	『隴新道10』
6	荒屋敷遺跡	弥生,平安, 中世	周溝墓,集落	『会津2,3,4,5,6』 『塩川町10,13』	46	長尾原古墳群	古墳	古墳	『福島県博15』
7	麻生館遺跡	平安,中世	城跡跡	『会津1』	47	山王塚古墳	古墳	古墳	
8	館ノ内遺跡 (喜多方市)	弥生,平安	周溝墓,集落	『塩川町3』	48	東台遺跡	弥生,古墳, 平安	集落	『新鶴村10』
9	観音森古墳 (竹原古墳群)	古墳	古墳		49	糠渡台畑遺跡	古墳,平安, 中世	集落	『会津板下町17』
10	田中・舟森山古墳	古墳	古墳	『福島考古33』	50	杵ヶ森古墳 相府塚遺跡	弥生,古墳	古墳,周溝 墓,集落	『会津板下町22』
11	深沢古墳	古墳	古墳	『福島考古16』	51	壺ヶ森古墳	古墳	古墳	『会津板下町史』
12	十九塚古墳群	古墳	古墳	『福島考古14』	52	日ヶ森古墳	古墳	古墳	『会津板下町23,32』
13	金森古墳	古墳	古墳	『塩川町史』(1966)	53	稲荷森古墳	古墳	古墳	『会津板下町史』
14	松崎古墳	古墳	古墳		54	観音森古墳	古墳	古墳	『会津板下町史』
15	前塚古墳	古墳	古墳		55	宮ノ北遺跡	古墳,平安	集落	『会津板下町28,42』
16	前山古墳群	古墳	古墳		56	三本木遺跡	平安,中世	集落	『会津板下町28』
17	七ヶ塚古墳群	古墳	古墳		57	高畑遺跡	平安,中世	集落	『会津板下町27』
18	八幡山古墳群	古墳	古墳		58	ややこ森古墳	古墳	古墳	『会津板下町史』
19	新田山古墳群	古墳	古墳		59	雲雲ヶ城古墳	古墳	古墳	
20	方便古墳	古墳	古墳		60	金尾屋森古墳	古墳	古墳	『会津板下町史』
21	古敷古墳群	古墳	古墳		61	舟渡古墳	古墳	古墳	『会津板下町史』
22	金屋遺跡	弥生,奈良, 平安	敷布地	『河東町13』『会津若松市107』	62	上宇内古墳	古墳	古墳	『会津板下町史』
23	柳山遺跡	平安	集落	『河東町13,15』 『会津若松市109,114,115,118』	63	出崎山古墳群	古墳	古墳	『福島考古18』
24	大林塚古墳	古墳	古墳		64	森北古墳群	古墳	古墳	『福島考古19』『東北古墳群』 (1991,1992, 磐城大学1998)
25	南原遺跡	弥生,古墳, 平安	集落	『南原遺跡』(河東町,1978,1979)	65	雷神山古墳群	古墳	古墳	『会津板下町史』『福島考古17』
26	輪山古墳	古墳	古墳	『輪山古墳』(河東町,1980)	66	次郎坂古墳群	古墳	古墳	
27	長山古墳	古墳	古墳	『会津若松市5』	67	陣ヶ崎城跡	平安	城跡跡	『陣ヶ崎城』 (会津板下町,2005,2007,2008)
28	橋本木流古墳	古墳	古墳		68	殿治山古墳群	古墳	古墳	『会津板下町12』『福島考古19』
29	上古田遺跡	平安	集落	『隴新道9』	69	長井前ノ山古墳	古墳	古墳	『隴新道15』
30	矢立遺跡	奈良,平安	集落	『会津若松市1,43』	70	宮東遺跡	弥生,古墳	周溝墓, 集落	『会津板下町16』
31	鶴沼田遺跡	奈良,平安	敷布地		71	中西遺跡	古墳	集落	『会津板下町16』
32	西木流C遺跡	奈良,平安	集落	『会津若松市5』	72	雨沼遺跡	弥生,古墳, 平安	遺物包含層	『会津板下町13』
33	西木流D遺跡	奈良,平安	集落	『会津若松市46』	73	観ヶ森古墳	古墳	古墳	『会津板下町史』『法政考古3』
34	屋敷遺跡	弥生,古墳, 中世	集落	『隴新道12』『会津若松市94』	74	亀ヶ森古墳	古墳	古墳	『会津板下町史』『会津板下町37』
35	舟ヶ森西遺跡	奈良,平安, 中世	集落	『隴新道9』	75	男壇遺跡	古墳	周溝墓, 集落	『会津板下町13,16,54』
36	松原古墳	古墳	古墳		76	鶴塚遺跡	古墳	周溝墓	『塩川町1』
37	大塚山古墳群	古墳	古墳	『会津若松史 別1』(会津若松市,1964)『会津若松市2』	77	古屋敷遺跡	弥生,古墳, 平安,中世	藤原氏館, 古墳,集落	『塩川町6』
38	坊主山古墳群	古墳	古墳		78	内屋敷遺跡	古墳,平安, 中世	周溝墓, 集落	『塩川町12』
39	村北遺跡	弥生,平安	敷布地	『会津板下町7』	79	観ノ町遺跡A	平安	集落	『塩川町3』
40	田村山古墳	弥生,古墳	古墳, 遺物包含層	『会津田村山古墳』(新鶴村,1981)『福島考古15』	80	観ノ町遺跡B	平安	集落	『塩川町8』

※周溝墓 ①『会津5』：会津藩北流河田遺跡発掘調査報告①
『福島考古5』；『福島考古5』
②『隴新道9』：福島県立博物館紀要②③号
③『会津板下町7』：会津板下町文化財調査報告書第⑦号⑧
④『塩川町10』：塩川町文化財調査報告書第⑩号

⑤『隴新道10』：東北総合自動車遺跡調査報告⑩
⑥『法政考古3』：法政考古3号⑦号
⑦『会津若松市5』：会津若松市文化財調査報告書第⑤号⑧号
⑧『河東町10』：河東町文化財調査報告書第⑩号⑪号
⑨『新鶴村10』：新鶴村文化財調査報告書第⑩号

跡周辺10km四方で弥生時代の遺跡数は、おおよそ50遺跡であった。

このうち発掘調査が実施された遺跡では、会津若松市屋敷遺跡、会津坂下町能登遺跡、同和泉遺跡などがある。とくに屋敷遺跡では住居の周囲に溝を配置した掘立柱建物跡が多数検出されるとともに、素掘りの井戸跡や周溝墓も検出されている。このほか会津平で周溝墓の検出された遺跡には、喜多方市館ノ内遺跡、同荒屋敷遺跡、会津若松市屋敷遺跡、それに桜町遺跡がある。

本格的な農耕集落が、会津平においてこの頃までに出現したことを示している。それにともない水路や水田の開発が進んだであろう。会津平の景観は、それまでとは大きく変化した。稲作を基礎に豊かな歴史を育てた会津の原型が、ここに誕生したといえよう。

つづく古墳時代前期は、会津平では多くの集落が栄えるとともに、大小の古墳が造られるようになる。古墳時代前期の会津平では、盆地の東南部会津若松市地区、喜多方市塩川町東部、喜多方市南西部地区、それに会津坂下町北東部の4箇所に有力な古墳群が造られている。このほか、会津若松市の阿賀川西岸の田村山古墳も、漢式鏡が出土した有力な古墳である。

会津坂下地区では、稲荷塚遺跡の周溝墓から杵ガ森古墳が出現し、さらには、雷神山古墳や森北古墳など中小の古墳を従えて、全長164mにも及ぶ福島県最大の亀ヶ森古墳が出現する。この地区は、弥生時代後期から北陸系の土器が多数出土していることが判明している。さらに古墳時代前期になると、東海地域の土器も出土するようになる。

会津若松地区は、江戸時代以降に市街化が進み、小古墳の実態は不明であるが、飯盛山古墳、堂ヶ作山古墳、会津大塚山古墳という3代にわたる大型前方後円墳の存在が知られている。飯盛山古墳の位置づけが不明確であるが、堂ヶ作古墳につづき大塚山古墳が築造されたことが明らかになっている。さらに大塚山古墳の後円部には、石佛古墳出土と伝えられる石棺蓋がある。

喜多方市旧塩川町東部地区では、舟森山古墳（全長90m程度）、観音森古墳（全長70m）という大型古墳がある。ほかの3地区では、前方後円墳が最大規模であるのに対して、この地区では前方後円墳が最大となっている。ただし、舟森山古墳は前方部が失われているために墳丘の全長は不明であるが全長90m程度と推定されている（塩川町教育委員会1999）。観音森古墳は、測量調査も実施されていないが、高い後方に細長く低い前方部が結合する形である。南相馬市桜井古墳と近似した特徴である。このほか深沢古墳などが知られている。

喜多方市西南部は、灰塚山古墳、虚空蔵森古墳などからなる。ほかに天神免古墳などもある。発掘調査が実施されていないために詳しいことは不明である。虚空蔵森1号墳は阿賀川北岸の山頂上に立地して、埋葬施設の天井材と推定される石材が後円部に遺存している。また灰塚山古墳は、山裾部にあり、全長60mの整った前方後円墳である。会津坂下地区とは近接した位置にあるが、阿賀川によって隔てられていることから、古墳の造営者は異なっていたのではないだろうか。

古墳時代中期になると東北地方南部では集落が減少する。いわゆる古墳時代寒冷期に対応する現象である（工藤1986）。会津平での遺跡減少も、この一環と見ることが出来る。東北地方で、再び集落が増加するのは、7世紀代になってからである。阿武隈川流域や仙台平野などでは、とくに

遺跡数の増加が顕著となる。ところが、会津平では集落や古墳の数は少ないままである。会津平は、周辺地域と異なる特殊条件があったと考えられる。

会津平で遺跡が再び増加するのは、平安時代になってからである。これ以降から中世にかけて、数多くの遺跡が形成されている。さらに江戸時代には、豊かな自然環境を踏まえて各種開発が遂行された。会津若松城下の商工業が大きく発達し、東北地方で最も栄えた都市のひとつであった。

第4節 調査経過

本年度の桜町遺跡発掘調査は、平成16年度に続く2次調査である。2次調査区の東端は、1次調査区西端から約100m西側の地点である。財団法人福島県文化振興事業団が、福島県教育委員会の委託を受けて、発掘調査を担当した。本年度の調査対象範囲は、遺跡北部の12,000㎡である。福島県文化振興事業団では、遺跡調査部の職員4名を配置して、発掘調査を実施した。

4月10日、関係機関による現地協議を受け、遺跡調査部では、発掘調査にかかる諸手続きを進め、4月20日から現地作業を開始し、調査事務所・駐車場の造成、調査区の表土除去を開始した。また住宅跡地のコンクリートは調査区南側に集めて、産業廃棄物の処理に備えた。

調査区の表土除去が進んだ5月14日には、調査事務所と機材倉庫を設置し、同日発掘機材を搬入した。5月18日、関係機関三者による協議を行い、調査区西部に造られた。工食用道路については、7月末日までに工事側で撤去すること、住宅跡地のコンクリートは産廃処理を遺跡調査側で対応することとした。また本年度調査区西端の工食用側道部分(800㎡)については、本年度の調査範囲から除外した。したがって本年度の調査面積は11,200㎡となった。

5月から6月にかけて、遺構検出を進めた結果、四隅切れ周溝墓や前方後方形や前方後円形の周溝墓、それに掘立柱建物跡などが調査区の西半部に偏って分布していることが判明した。主要な遺構は、工食用道路の下に伸びていることから、遺構の本格的な掘り下げは、工食用道路の撤去後として、周辺の遺構から調査を開始した。

工食用道路の撤去が開始されたのは7月21日からで、同月末日までに撤去は完了した。これを受けて、この部分の表土の除去と遺構の検出を進めた。調査範囲の状況が判明したのは8月前半になってからである。弥生時代後期から古墳時代直前の周溝墓群が姿を現した。また、弥生時代的大型土坑からは、土器や鎌・掘り棒、建築部材が出土した。さらに93号土坑は、井戸跡であることが判明した。これらは、弥生時代後期の遺物・遺構として福島県で初めて確認された例である。

8月から10月にかけて調査は順調に進み、10月17日には現地説明会を開催した。参加者200名以上と盛況であった。この後、11月10日に遺跡全体の空撮をおこなった。

11月18日に関係機関三者で、調査成果を確認するとともに、発掘作業を終了した。この間、93号土坑の井戸基礎構造から弥生時代後期の土器がまとめて出土した。調査区の埋め戻しがほぼ終了し、12月10日には、調査の協議がほぼ終了し、国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務所、

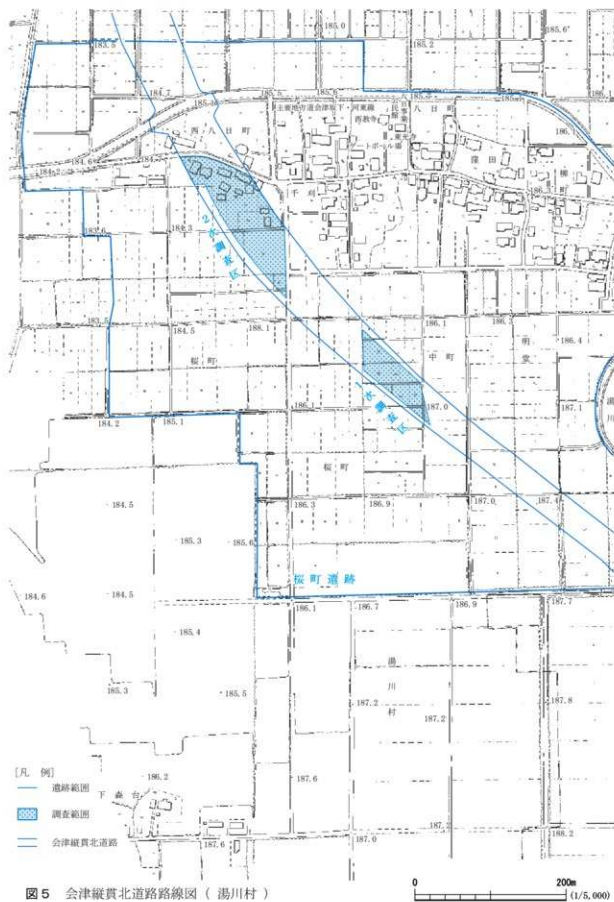


図5 会津縦貫北道路路線図（湯川村）

福島県教育委員会、福島県文化振興事業団にて終了を確認した。12月16日に、機材保管倉庫を残して本年度の作業を終了した。

第5節 調査方法

2次調査のグリッド設定は、1次調査の基準点にあわせて行った。基準原点は、遺跡の北西側に当たる測地系に基づくX座標173,000、Y座標5,400である。この点から東には100mごとにアルファベット、南には算用数字で大グリッドとした。また大グリッドの内部は同様な方法で10mごとの小区画を設定して区分を行った。遺構の標高は、会津縦貫北道路関連工事の基準点から設定した。

表土の除去作業は、パワーショベルにて行い、廃土は調査区外にクローラータンクで運搬した。住宅跡地では、建物基礎上部までパワーショベルにより、整地土と表土の除去を行った。水田部分では、耕作土の除去にとどめた。

遺構の掘り下げに際しては、各遺構の軸線に対応させて土層観察用畦を設定して掘り進めた。この時、土層の堆積状況を把握しながら掘り下げ作業を行うことに努めた。ただし小型の掘立柱建物跡では、柱穴が狭いことから、断面観察から深さと大きさを確認するために柱穴を半裁した。また必要に応じて、土壌分析や微細遺物の採取分析も行った。

遺構の実測図は、平面図は調査区全体を縮尺1/40を基本に手作業で作成した。一部小型遺構では、必要に応じて、縮尺1/20で作成した。土層断面図は、縮尺1/20を基本に手作業で作成した。報告書に掲載した遺構の縮尺は、対象の大きさに合わせて掲載した。土層の色調は、『新版標準土色帳 農林水産省農林水産技術会事務局監修』を参考に記載した。

遺跡の記録写真は、35ミリカメラを中心に、モノクロームとリバーサルフィルムを用いた。また必要に応じて、645カメラと4×5判リバーサルフィルムの写真も作成した。遺物の実測は、すべて手作業で実施した。報告書に示した縮尺は、1/2・1/3・2/3を基本としたが、大型木製品については、報告書の版面にあわせて縮尺を変えた。

発掘調査報告書の作成は、財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査部で行った。発掘調査の記録、および出土資料は、財団法人福島県文化財センター白河館に収蔵する予定である。（福島）

第2章 調査成果

第1節 遺跡の概要と基本土層

1. 遺跡の概要

2次調査地区の東端は、1次調査の西端から西北側へ約100mの地点である。調査区の形は、おおよそ台形である。南東辺230m、北東辺80m、幅60mの範囲である。調査区の現況は、北半部が八日町集落の屋敷地で、中央部が畑地と水田、南部が水田である。このため調査区内は、屋敷の増改築や整地による攪乱、耕作地の整備により、遺構の上部は著しい削平を受けていた。

2次調査で検出した遺構・出土遺物は、次のとおりである。

竪穴状遺構 3基、	周溝墓 11基、	周溝状遺構 5基	
掘立柱建物跡 28棟、	土坑 45基、	溝跡 19条、	土器棺墓 1基
弥生土器 30箱、	石器・石製品 1箱、	土師器・須恵器 20箱、	木製品 30箱

2次調査区は、瀬川西岸に形成された南から北に緩く傾斜する自然堤防上の西端にあたり、南から北に向かって緩やかに傾斜している。また北西隅では、自然堤防の縁辺から旧湯川の低湿地に至る小さな崖線があった。この低地は、航空写真でも調査区の西側に広がっていたことが確認できる。

2次調査で確認した遺構が、調査区の中央部西端から南東にかけて分布していたのは、自然条件と土地利用の影響を受けた結果であろう。北部では、その東寄りに弥生時代後期の91号・93号・94号の大型土坑あるいは井戸跡を確認した以外に、顕著な遺構はなかった。西よりでは、弥生時代の21号溝跡が自然堤防の西端に沿って延びていた。また弥生時代の101号土坑（墓）、平安時代の108号土坑（井戸跡）があった。これとともに、19号と23号溝跡を合わせて平安時代の道跡と見られる遺構が自然堤防の方向とあわせて調査区の中央部まで延びていた。

調査区の中央部は、弥生時代後期の遺構が集中していた。9号・14号周溝墓、13号・17号周溝状遺構や6・7・8号土坑、34号・42号掘立柱建物跡、73号・74号土坑などである。北部の井戸跡・土坑とあわせて、当時の集落を構成する遺構である。9号周溝墓は、全長20mを測る大型である。69号土坑はその埋葬施設である。

中央部から南部にかけては、北西端の10号周溝墓から南東端の23号周溝墓まで、10基以上の墳墓が連なっていた。墳丘は、円台や方台の一方に突出部を設けた形である。形の明らかなものでは、方形が3基、円形が5基である。調査区の南端部では、農道の高まりがあり、この部分には旧表土を確認したが、周溝墓は造られていなかったことから、周溝墓の築造はこの部分で途切れていると考えられる。一次調査区の周溝墓群と連続することはない。

中央部から南部の周溝墓は、15号と16号周溝墓の間隔が開いていることから、北部の四隅切れ周

第2章 調査成果

溝墓と合わせて、周溝墓のまとまりは3箇所に分かれている。北部の9号・14号、中央部の10号から15号、南部の16号から23号である。このうち、北部の周溝墓は弥生時代後期、中央部と南部は弥生時代末葉であろう。

大型周溝墓の周溝からは、平安時代の土器が出土している。9号や16号などである。このことから、平安時代でも大型周溝墓の墳丘は、弥生時代の形状を伝えていたと考えられる。周溝墓の中央に平安時代の遺構が存在しないことも、そのことを反映している。

平安時代の遺構は、調査区中央部西端から南部にかけて広がっていた。25号溝跡の南側に位置する範囲である。25号溝跡を境にした北側には、平安時代の遺構は分布しなくなる。この溝跡は、集落施設を区画する役割を果たしていたらしい。また南部の37号溝跡を境にして、南側に平安時代の遺構が存在しないのに対して、北側には25号溝跡との間に平安時代の遺構が分布している。同様に集落施設を区画する溝であろう。

平安時代の集落は、掘立柱建物が中心である。この分布は、16号周溝墓を境にして大きく2群に分かれる。北部の掘立柱建物跡は北西端の32号から16号周溝墓近くの29号まで12棟以上で構成されている。一部が耕地造成により失われているので、本来はさらに多数の掘立柱建物が存在したであろう。建物跡の重複関係からは、3時期以上の変遷が認められる。このうち20号・30号・29号掘立柱建物跡が、規模の大きな側柱建物跡である。集落の中心的な居住施設であろう。近接して生活廃棄物を処理した土坑が設けられている。また周溝墓と重なるように、桁行1間、梁行1間の小型総柱建物跡がある。

16号周溝墓の東側には6棟の掘立柱建物跡がある。3回以上の重複があり、同時に存在したのは3棟程度である。掘立柱建物跡にともなう土坑もある。ひとまとまりの住居群である。

2. 基本土層

桜町遺跡の立地する自然堤防は、第四完新世に形成された地層である。2次調査区の現地表面は、標高185m前後である。遺跡の東側には瀬川、西側には瀬川の旧川道が湯川に向かって延びている。南から北に向かって緩く傾斜する地形である。遺跡の基盤は砂礫層の上に形成された段丘堆積物である。井戸跡の壁面の土層、9号周溝墓西側の低地へ向かう斜面に設けたトレンチなどの観察により、2次調査区の基本土層を以下のように区分した。また、基本土層の表記は、アルファベットの太文字Lをつけて、これにローマ数字とアルファベットの小文字を組み合わせで表記した。

(例：L I a ○○○)

- L I 調査区の表土層である。北部の屋敷地では、整地土の砂や砂利などが顕著であった。中部では畑耕作土。南部では水田耕作土である。また農道部分では草木、小動物活動による表土化した腐食土である。
- L II 黒褐色土である。旧表土層に相当する土層である。層厚は薄く数cm程度である。また分布



図6 桜町遺跡(2次)遺構配置図(1) 調査区北部

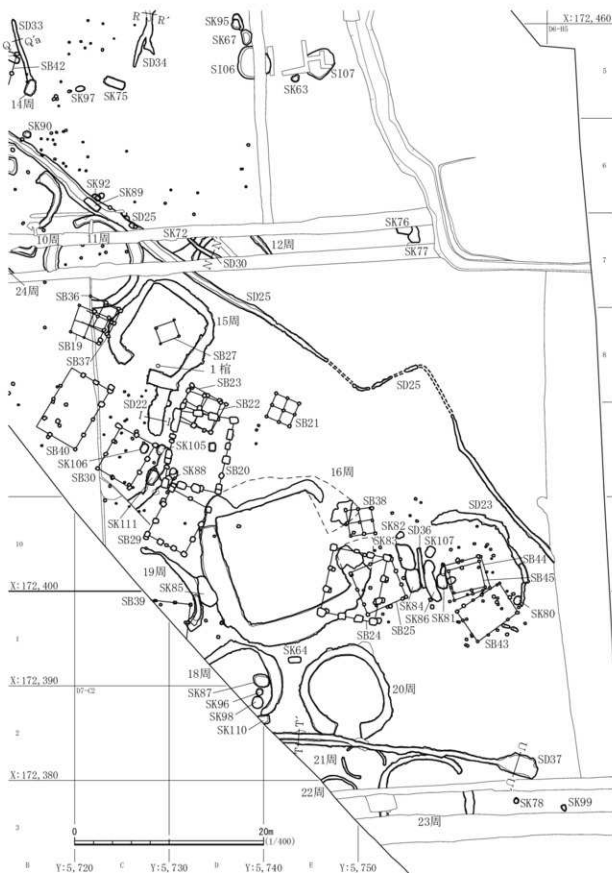


図8 桜町遺跡(2次) 遺構配置図(3) 調査区南部

第2章 調査成果

状況も部分的であった。調査区中部の畑地から北部の高所や旧庭地南部の農道部分周辺に分布していた。9号周溝墓東縁から93号土坑周辺、それに調査区北西部の101号土坑近くである。また調査区中部と南部の農道部分である。弥生土器や平安時代の土器片を含む。

- L III a 黒褐色土に沼沢火山噴出物を含む土層である。L II 層の周辺および下層から検出されることが多い。弥生時代より古い旧表土である。厚さは数cmと薄い。

沼沢火山噴出物は、水成堆積による二次堆積である。沼沢火山の噴火により会津盆地にあった湖の規模が拡大した時に堆積した土層である。沼沢火山噴出物の二次堆積層は、会津盆地低位部で広く検出されている。この層に含まれる沼沢火山噴出物は、小礫である。風化・表土化により細粒化や分解が進んでいる。

この土層から、遺物が出土することはほとんどない。わずかに含まれる弥生土器や平安時代の土器片は、上層からの混入物であろう。

- L III b 砂層。調査区西端の土層観察により確認した。上部は細かな砂と粘土の互層である。下部は砂層で下に向かって粒子が粗くなる。低地の河川流路に堆積した土層である。層厚は1m以上もある。

- L III c 灰褐色粘土。L III b 層の下に堆積していた。別層としたが、L III b 層の下部に含まれる可能性もある。

- L III d 黒褐色土。有機物を多量に含む土層である。低地に形成された泥炭層である。東岸から西側に落ち込むように形成されている。西端で層の厚さ40cm以上である。

- L III e 沼沢火山噴出物である。少なくとも3層以上に細分される。上層は粘土、中層は砂層、下層は火山弾を含む土である。噴火時とそれほどの時間経過はなく形成された地層であろう。西端で厚さ20cm以上である。

- L III f 褐色粘土。水成堆積により形成された有機物を含む土層である。湖底堆積土であろうか。

- L IV a 褐色粘土。自然堤防の基礎土層である。均一な土層である。水成堆積土である。下部は灰色に変化している。0.8m以上の厚さがある。

- L IV b 青灰色土。厚さ0.5m以上である。水成堆積土である。

- L V 砂礫層。自然堤防の基礎土層である。1m以上あったが、これ以上の掘り下げは行っていない。

沼沢火山の噴火は、紀元前3,400年頃とされている（山元1995）。この噴出物は、会津盆地南西部で地表面に厚く堆積している。一方盆地中央部の低地では、水成堆積の粘土層中で確認されている。喜多方市塩川町天沼地区や湯川村沼ノ上遺跡などである。当時の会津盆地に大きな湖があったとされる根拠である。桜町遺跡はこの中間部に位置している。西端の低地で検出した沼沢火山降下物は、当時この場所が湿地・湖沼であったと推定されよう。またL III a 層は自然堤防が一時期湖底に変化した結果、形成された土層である。会津盆地の低地は、弥生時代近くまで不安定な状態が継続していた。

（福 島）

第2節 周溝墓

今回の2次調査では、弥生時代後期後半に属する周溝墓を11基確認した。周溝墓の特徴は、方形墳丘の外周をめぐる周溝の四隅が途切れるもの（9・14号周溝墓）、方形墳丘で、周溝が土橋状に途切れ前方後方形になるもの（10・15・16号周溝墓）、円形墳丘で、周溝が全周せず、一部が土橋状に途切れて前方後円形になるもの（11・18・19・20・23号周溝墓）を確認した。最古段階となる9号周溝墓から南東方向に向かって周溝墓が継続的に造営される。最南端に位置する18・20・23号周溝墓が最も新しく、大きく3時期にわたり周溝墓が造営されていたことが判明した。

9号周溝墓

遺 構（図9-16、写真10-13・106-109）

9号周溝墓は、方形をなす墳丘の外周をめぐる周溝の四隅部が途切れる特徴がある。本遺跡で確認された周溝墓の中では、1次調査で確認した5号周溝墓とともに最も大型となる。9号周溝墓は調査区の中央部、C6-J3～J5、D6-A3～A5、D6-B3～B5グリッドに位置し、2次調査区内で確認した周溝墓の中で最も北端に分布する。周辺の地形は、北西から南東方向に向かって舌状に延びる微高地上の平坦面であり、その標高は184.5mである。

近年の農地や水路などの開発により旧地形が大きく改変されている。そのため遺構の東半部は表土直下のLⅢa、西半部は約30cmの段差となりLⅣa層が検出面となる。本遺構と25～28号溝跡が重複し、そのいずれよりも本遺構のほうが古い。本遺構の南東側、周溝南溝に接する場所に14号周溝墓、42号掘立柱建物跡が分布する。これら遺構は、その分布状況と周辺遺構との関係を勘案すれば、9号周溝墓に先行する可能性がある。墳丘部分からは、本遺構に伴う埋葬施設と考えられる69号土坑を確認した。

9号周溝墓は方形となる墳丘を区画する四方の溝で構成される。墳丘部分の平面形はほぼ正方形である。周溝内法の規模は、南北の長さが13.4m、東西の長さが13.1mである。墳丘部の主軸方向はほぼ真北になる。各周溝の形状は長楕円形を基調とするが、墳丘側は直線的、外側は弧状に突出する。各周溝の外周部分は、方形墳丘の対角線の交点を中心とした円周と重なる。その円周の直径は21.0mである。

周溝内の堆積土は、上層・下層・周溝底面の整地土層の大きく3つに分類できた。上層は周溝が半ば埋没した段階の堆積土で、土層断面図では、北溝の6層、東溝の6層、南溝の8層よりも上層部分に相当する。これらの土層には平安時代の土器が混入することから、平安時代までは周溝が完全に埋没せずに窪みとなっていたのであろう。併せて、墳丘部分に平安時代の遺構が全く重複しないことから、墳丘が壊されずに残っていたと推察している。

堆積土の下層は、周溝の底面を覆う薄い黒色粘土層で、周溝外からの自然流入土と判断した。周

溝墓の完成から比較的近い時期に堆積したものである。この堆積土の性格から、底面付近から出土した遺物については、9号周溝墓の葬送儀礼に直接関わる遺物で、周溝内に廃棄したもの、または墳丘上に置いた供献土器が周溝内に転落したものと判断した。

周溝の底面を平らに整地する土で、北溝では14層、東溝では15層、南溝では10・11層、西溝では4層に相当する。黒色土と灰白色粘土の混土で、約10cmの層厚がある。これらは周溝の壁面や墳丘を整形する際に生じた土を起原とし、これらの土で周溝の底面を平坦に整地したものと判断した。この土層中からの出土遺物は数点程度と極端に少ない特徴がある。

周溝の壁面は、墳丘側が60°～70°と急傾斜で立ち上がる。一方、周溝外側の壁面の立ち上がりは緩やかになる。周溝内堆積土の性格を併せて考えると、周溝外側の崩落が顕著で、墳丘側の壁面の崩落は極めて少ないことが分かる。特に北溝や東溝の壁面は、周溝墓の機能時期の姿を良好に留めている。周溝壁面の立ち上がりを勘案すれば、墳丘の傾斜もかなり急峻になる可能性が高い。さらに平安時代まで墳丘が残存していたことから、墳丘が高く盛土されていたのであろう。

各周溝の底面は、草木根の影響による微細な凹凸が見られるが、全体的には平坦に整えられている。その標高は184.0mである。周溝の内部に埋葬施設などの人為的な遺構は確認できない。

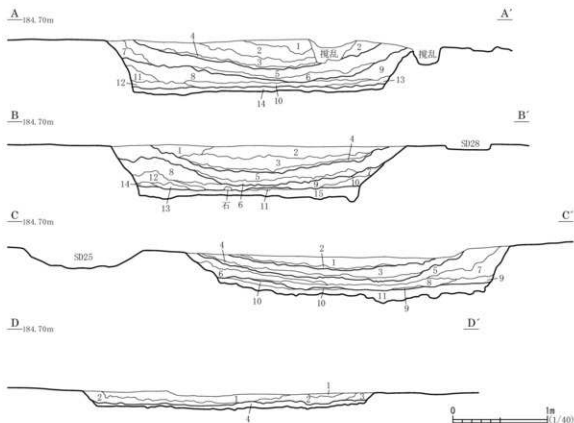
遺物 (図11～16, 写真106～109)

9号周溝墓からは弥生土器や石器の他に、古墳時代後期から平安時代の土師器や須恵器が出土した。周溝内堆積土の観察から、周溝の底面近くから出土した遺物は本遺構に直接関わる遺物で、その出土状況は、周溝の底面に人為的に置いた所作は認められない。周溝内に投棄されたもの、もしくは墳丘上に置いた土器が転落したものと判断した。また遺物は底面上で散在し、遺物の出土位置を特徴付ける傾向は見られない。

図11～13は在地系土器を図示した。器種は壺が主体を占め、わずかに甕・高坏がある。壺の器形は数種認められる。口径が大きく、頸部のくびれが弱い広口壺、口縁部の口径が小さく受け口状に開き、胴部から頸部にかけて長くすばまる長頸壺、受け口上の口縁部から頸部が垂直気味に細くくびれる細頸壺があり、口縁部形態と文様構成や装飾方法などの違いで数種のバリエーションが認められる。

図11-1は南溝中央部の底面上から出土した長頸壺である。口縁部は頸部から外傾して開く。やや丸みを帯びた体部上半部に最大径を持ち、底部に向かってすばまる。底部は輪台となる。文様の施文方法は、押し引き状の沈線で文様を描いた後に、文様内に縄文を充填して無文部と区別している。口縁部の文様は、押し引き沈線による三角文を面違いに配している。三角文の連結点に縦位の短い粘土紐を貼り付けている。口縁部と頸部の境には交互刺突による波状隆線がめぐる。頸部の文様は、横位にめぐる沈線で2段に区画され、それぞれ連弧文と楕円形で構成される。体部上半の文様は、円文や単沈線で飾られた三角文を主たるモチーフで、それを上下に2単位ずつ面違いに配している。沈線間の無文部にはベンガラにより赤彩される。体部下半は拵糸文の地文が施される。

図12-1・2は口縁部が受け口状に開く細頸壺である。1は東溝北側の底面上、2は北溝中央の



9号周溝墓北溝堆積土(AA')

- 1 暗褐色砂 10YR3/3(NP・黄褐色粒・砂含む)
- 2 にぶい黄褐色土 10YR4/3(NP・FP・黄褐色粘土多量, 炭化物含む)
- 3 黒褐色土 10YR2/3(NP・FP, 炭化物極少量含む)
- 4 黒色粘土 10YR2/1(NP・FP・砂極少量, 炭化物含む)
- 5 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物極少量含む)
- 6 黒色粘土 10YR2/1(NP・炭化物極少量, 褐色粘土含む)
- 7 黒褐色土 10YR2/3(NP・炭化物極少量含む)
- 8 黒褐色土 10YR2/2(NP・炭化物・砂・黄褐色土塊含む)
- 9 黒褐色土 10YR2/2(NP・炭化物・黄褐色土塊含む)
- 10 黒色粘土 10YR2/1(NP・焼土・炭化物極少量, 黄褐色土塊含む)
- 11 黒褐色土 10YR2/3(NP・黄褐色土塊含む)
- 12 黒褐色土 10YR2/2(NP・黄褐色土塊含む)
- 13 褐色粘土 10YR4/1(NP含む, 黒色土と灰白色粘土の混土)
- 14 褐色粘土 10YR6/1(NP含む, 黒色土と灰白色粘土の混土)

9号周溝墓東溝堆積土(BB')

- 1 暗褐色土 10YR3/3(やや砂質, NP・FP多量, 炭化物極少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/2(やや砂質, NP・FP, 炭化物極少量含む)
- 3 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物極少量含む)
- 4 黒色粘土 10YR2/1(NP極少量, 炭化物含む)
- 5 黒褐色土 10YR3/2(NP極少量, 炭化物・黄褐色粘土塊含む)
- 6 黒色粘土 10YR2/1(NP極少量, 炭化物含む)
- 7 暗褐色土 10YR3/3(NP・黄褐色土塊含む)
- 8 黒褐色土 10YR2/2(NP・炭化物・砂・黄褐色土塊含む)
- 9 黒色粘土 10YR2/1(NP・炭化物極少量含む)
- 10 褐色粘土 10YR4/1(黒色粘土と灰白色粘土の混土)
- 11 暗褐色土 10YR3/3(NP極少量, 黄褐色土塊多量含む)
- 12 黒褐色土 10YR2/2(NP・砂・炭化物・黄褐色土塊含む)
- 13 黒色粘土 10YR2/1(NP・炭化物極少量含む)
- 14 黒褐色土 10YR2/3(NP極少量, 黄褐色土塊多量含む)
- 15 褐色粘土 10YR6/1(NP含む, #10と同様で黒色土と灰白色粘土の混土, 人為堆積)

9号周溝墓南溝堆積土(CC')

- 1 暗褐色土 10YR3/3(やや砂質, NP・FP多量, 炭化物極少量含む)
- 2 黒色粘土 10YR2/1(NP・FP・炭化物含む)
- 3 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・砂多量, 炭化物極少量含む)
- 4 黒色粘土 10YR2/1(FP・砂極少量, NP・炭化物・褐色粘土塊含む)
- 5 黒褐色土 10YR3/2(NP・炭化物・褐色粘土塊含む)
- 6 暗褐色土 10YR3/3(やや砂質, NP・黄褐色粘土多量含む)
- 7 黒褐色土 10YR2/2(NP極少量, 褐色粘土塊多量含む)
- 8 黒色粘土 10YR2/1(NP・砂・黄褐色土極少量, 炭化物含む)
- 9 暗褐色土 10YR3/3(NP含む, 黒色土と灰褐色粘土の混土)
- 10 褐色粘土 10YR4/1(NP含む, 黒色土と灰褐色粘土の混土)
- 11 褐色粘土 10YR6/1(NP含む, 黒色土と灰褐色粘土の混土)

9号周溝墓西溝堆積土(DD')

- 1 黒色粘土 10YR2/1(NP・砂・黄褐色土粒・炭化物含む)
- 2 褐色粘土 10YR4/1(NP)多量, 酸化鉄・炭化物含む, 黒色土と灰白色粘土の混土)
- 3 褐色粘土 10YR5/1(NP)少量含む, 黄褐色粘土と灰白色粘土の混土)
- 4 褐色粘土 10YR6/1(NP含む, 黒色土と灰褐色粘土の混土)

図10 9号周溝墓(2)

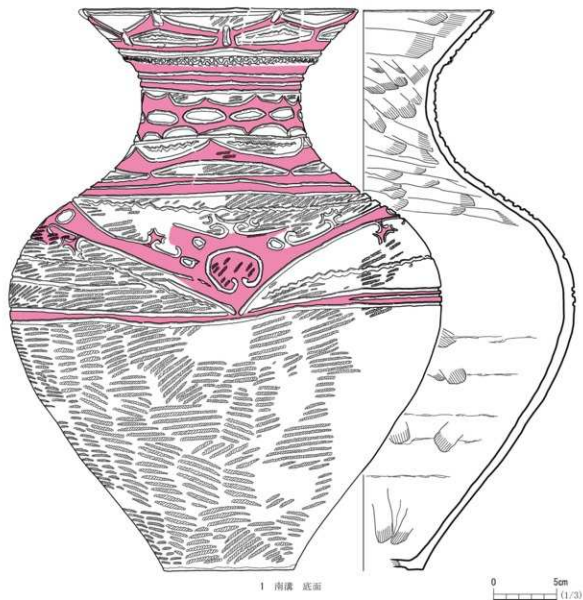


図11 9号周溝墓出土遺物(1)

底面上から出土した。1・2とも口縁部下端に円形竹管による横方向からの刺突が施される。口縁部の文様は、1は口唇部にキザミが施される。内部に波状沈線を配した連弧文を描き、それらの連結点に円形竹管の刺突が配される。2は鋭い内そぎになる口唇部になる。口縁部の文様は、上向きの連弧文とその連結点に円形竹管に刺突が配される。頸部の文様は、内部に波状沈線を配した連弧文と楕円形が描かれ、文様の連結点に円形竹管の刺突が施される。3は南溝中央部の底面上から出土した壺である。頸部を欠損するが細頸壺であろう。器形は体部上半に最大径を持ち、やや丸みを帯びて頸部につながる。下半部は底部に向かってすぼまる。外面の文様は、頸部と体部下半にめぐる平行沈線と波状沈線の間が文様帯となる。連弧文とV字状に配された楕円形を主たるモチーフとなる。各モチーフの連結点に円形竹管による刺突とV字の短沈線が配される。体部下半には垂下する2列の短沈線が観察される。4は北溝西端部の底面上から出土した高坏である。「ハ」の字状に

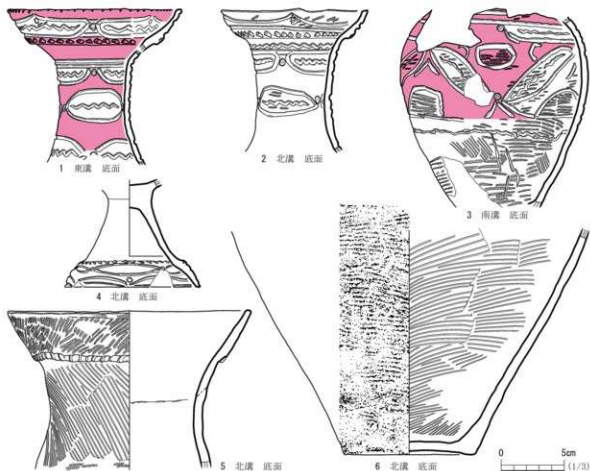


図12 9号周溝墓出土遺物(2)

開く脚で、脚下端に段を持ち、やや内湾気味の裾部となる。文様は裾部のみ施される。沈線で弧文を描き、これらの連結点に円形竹管の刺突を加える。裾部上端にはキザミを施す。5は北溝中央の底面上から出土した長頸壺である。幅の広い口縁部が外傾して開く。口縁部下端に指頭押圧によるキザミが施される。口縁部の外面は燃糸文が施されるが、頸部はハケメを残す。6は北溝中央の底面上から出土した壺の体部下半である。外面は燃糸文、内面は整形痕としてハケメが観察できる。

図13-1~34は、地紋として燃糸文を施し、口縁部から体部上半部にかけて刺突文と押し引き沈線を多用して文様を描く土器である。口縁部が平縁になるもの、波状口縁になるものも含まれる。文様の要素の一つに交互刺突による波状隆線文が多用される。これら波状隆線の施文方法に数種観察できる。一つは粘土紐を隆帯状に貼り付け、そこに上下の刺突を加えて立体的な波状線をつくもの(5~8)。二つは平行沈線の間で、隆帯状に高くなった部分に上下方向の刺突を交互に加えて波状線をつくるもの(20~23)がある。35~42は口縁部下端に指頭押圧によるつまみ上げで、立体的なキザミをめぐる。口唇部にキザミを施すものが見られる。口縁部の外面は燃糸文、櫛歯状施文を用いた波状文、無文になるものもある。43・44は口縁部下端に装飾を持たない壺で、外面は地文となる燃糸文が施される。45は方形に区画する沈線を描き、沈線の外側に刺突文を添える。文様の要素としては、北海道地域で見られる後北C₁・D式の特徴であろうか。



图13 9号周溝墓出土遺物(3)

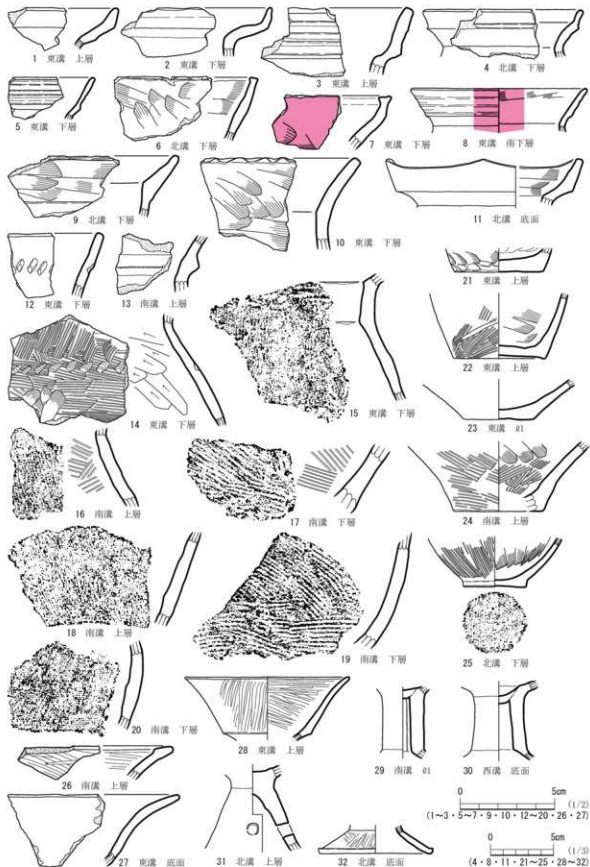


圖14 9号周溝墓出土遺物(4)

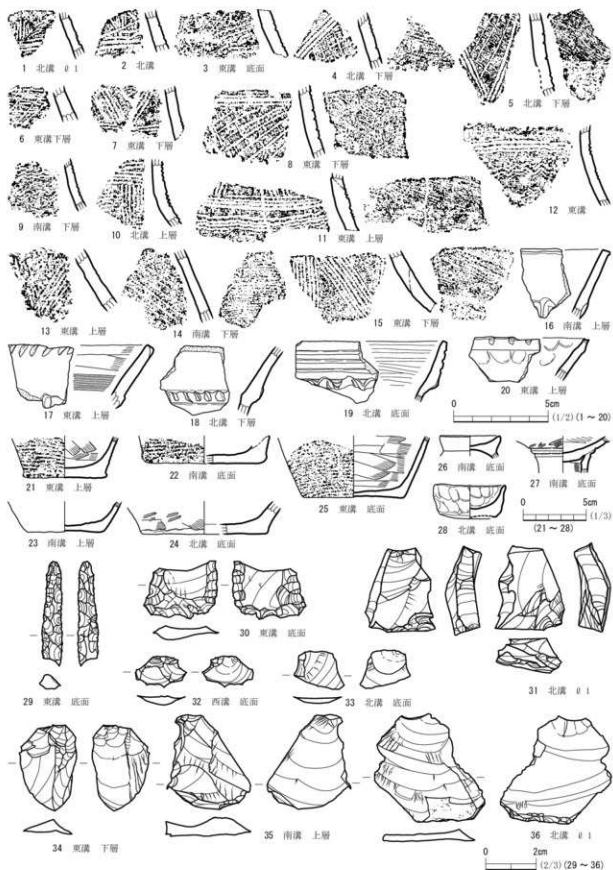


图15 9号周溝墓出土遺物(5)

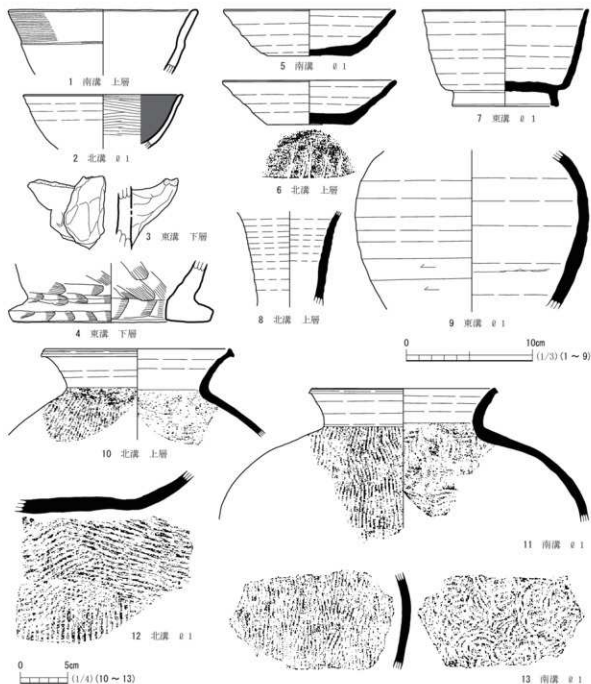


図16 9号周溝墓出土遺物(6)

図14は北陸系土器を図示した。壺や甕他に高環がある。1・2・4は口縁部の幅が短く、受け口状に開く甕である。口縁部下端の段がやや丸みを帯びる特徴がある。3・5・8は口縁部の幅が広い、有段口縁の甕である。口縁部直下に浅い凹線がめぐる。9～11は口縁部が無紋となる壺で、器形的には在地系土器と変わらない。9は口唇部に単節縄文を回転押圧する。10は口唇部にヘラ状工具によるキザミが施される。11は波状口縁となる壺で、口縁部は無文となる。14は甕の上半部破片である。体部外面は整形痕のハケメが残る。また列点状のキザミが観察できる。26～32は高環で、ベンガラで赤彩されたものを含む。26は口縁部内面が肥厚し、鋭い稜を持つ。27・28は口縁部が大

第2章 調査成果

大きく外反して開く。29～32は脚部である。円筒形の脚部から裾部に向かって大きく開く（29・30・32）。31は脚部が「ハ」の字状に開き、円孔が2～3箇所認められる。

図15-1～15は櫛歯状施工具を用いて文様が描かれる北関東系土器である。器種は壺が主体を占める。文様は縦位または鋸歯状に区画した内部に細かい格子文を描くもの（1～8）、波状文が主体となるもの（9～12）、鋸歯文（13～15）が描かれるものがある。19は有段口縁となる壺の口縁部破片である。口縁部には凹線が3条めぐり、下端には指頭押圧によるキザミが施される。21～15は壺または甕の底部資料である。26は蓋。27は高坏で、坏部と脚部の接合部に横位沈線がめぐり、28はやや粗雑なつくりの小型土器である。口縁部が指頭でつまみ上げて造られる。図15-29は基部を欠損するが、石甌であろう。30は石甌であろう。側縁部に細かい剝離を両面から加えて刃部を造っている。31は石核である。32～36は剝片である。

図16は周溝の上層部分から出土した古墳時代後期から平安時代の土器を図示した。1は土師器坏で、成形にロクロを用いていない。口縁部と体部の境に段を持つ。古墳時代後期に属する。2はロクロを用いて成形された土師器坏である。内面は単位幅の狭い横位のミガキが密に施され、黒色処理される。3・4は土師器の甕である。5・6は須恵器坏で、底部はロクロを回転させてケズリで仕上げられる。6の底面にはヘラ状工具による線が4本認められる。窯印であろうか。7は須恵器の高台付坏である。体部が垂直気味に立ち上がる器形で、坏身が深い。8・9は須恵器長頸瓶である。9は体部下半がロクロの回転を利用したケズリにより整形される。10～13は須恵器甕の破片である。外面は平行タタキメ、内面には同心円文のアテ具痕が観察できる。

まとめ

9号周溝墓は方形墳丘をめぐる周溝の四隅が途切れる。墳丘の規模は一辺が14mを測る。1次調査で確認した5号周溝墓と同様に、最も大型となる周溝墓である。墳丘部分において69号土坑とした埋葬施設を確認した。9号周溝墓の年代は、周溝墓群の最古段階に相当し、出土土器の特徴から弥生時代後期後半と考えている。

（福田）

69号土坑

遺構（図17・18、写真14・110）

69号土坑は、9号周溝墓の墳丘部に設けられた埋葬施設である。棺の痕跡は不鮮明であるが、粘土床の形状から木棺直葬墓と考えられる。墳丘の中心から北東よりの場所に位置する。69号土坑の主軸方向は真北に対して40度西に傾き、9号周溝墓の方形墳丘の対角線と直交する。

墓坑の平面形は、北側がすばまる楕円形である。長軸の長さが1.76m、南側の幅が1.02m、北側の幅が0.82mを測る。検出面から墓坑の底面までの深さは20cmである。棺の形状は4層上面の形状から、北側がわずかにすばまる長方形となる。規模は長軸が1.48m、短軸が0.68mである。

遺構内堆積土は4層に分けた。1・2層は黄褐色粘土を多量に含む褐色土で、棺を据えた後に墓坑全体を埋めた土と判断した。棺の腐食により埋め土が棺の内部に落ち込むような堆積状況が確認

できる。また棺を覆う粘土は確認できない。3層は炭化物を含む黒色土で、その層厚は12cmである。木棺と遺体の埋葬に起因する土層と判断した。土層観察では明確な木棺の痕跡は確認できないが、3層の中層に遺物が集中する点や4層上面が舟底状のくぼみとなることから、削り貫き材を用いた木棺の可能性が高い。4層にはぶい黄褐色土で、黄褐色土と黒色土の混土である。木棺を掘え置くために墓坑の底面を埋める土である。4層の上面は、木棺の形状に合わせて舟底状となる棺床を造っている。

遺物 (図18, 写真110)

69号土坑の遺物は1～3層から出土した。4層からは遺物が出土していない。いずれの遺物も小破片であり、一個体に接合できたものがない。出土状況からすれば、墓坑に棺が設置されてから墓坑の埋め戻しまでの間に混入した土器である。葬送儀式に用いた土器を破砕し、木棺とともに墓坑を埋めたのであろう。

1は交互刺突文が施された壺の破片である。5は壺の体部下半で、下向きの連弧文が描かれる。11・12は4本歯の櫛歯状施文具を用いて文様が描かれる土器である。体部上半部には横位の波状文が描かれ、下半部は地文として燃糸文が施される。14～18は甕の口縁部破片である。14～16は口縁部の幅が狭く、口縁部下端に軽い段を持つ。24は小型甕である。頸部ですばまり、口縁部が「く」の字に屈曲する。整形痕として体部下半にハケメを残す。

19～22は高環の口縁部で内外

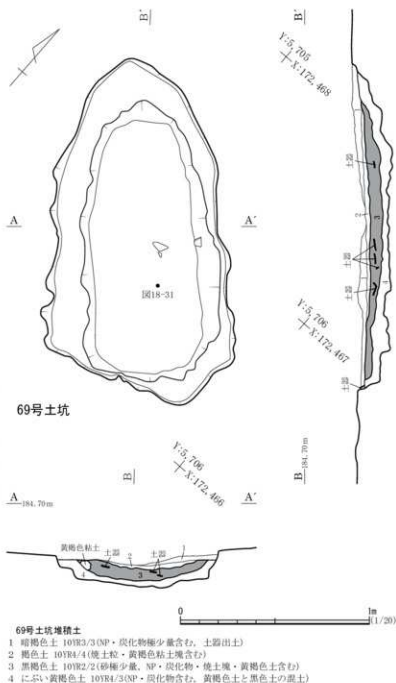


図17 69号土坑

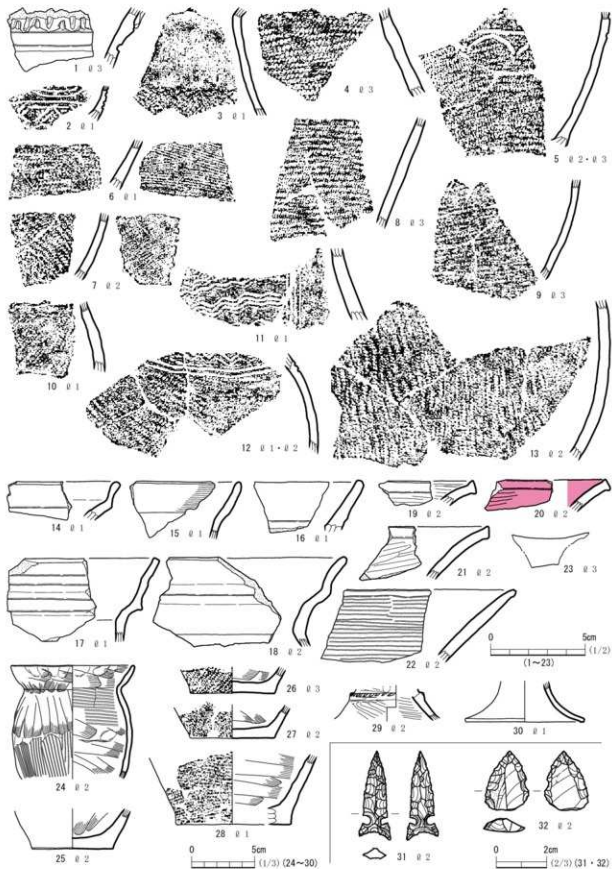


图18 69号土坑出土遺物

面ともに横方向のミガキが密に施される。23は高環の坯底部分の破片である。坯部と脚部の接合時に脚上端内に充填される。29・30は高環の脚部破片である。29は脚中位に段を持ち端部向かって開く。段部にキザミが施され、円孔が認められる。31はいわゆるアメリカ式石鐮である。細かい剥離により鋭い逆刺を造り出している。32は石匙の先端部であろうか。これら石器は副葬品であろう。

まとめ

69号土坑は9号周溝墓に伴う埋葬施設である。9号周溝墓の墳丘中心からずれた位置にあり、その主軸方向も異なることから、9号周溝墓の主たる人物の埋葬施設とするには検討を要する。埋葬施設の構造は、木棺直葬と推定される。副葬品として石鐮を伴う。また破砕した土器を墓坑内に埋めることから、葬送儀式のあり方を伺う良好な事例となる。(福田)

10号周溝墓

遺構 (図19～21, 写真15～18・111・112)

10号周溝墓は前方後方形の周溝墓である。調査区中央部、D6-B6・B7グリッドに位置する。周溝の形状や周辺の遺構との分布状況から、北西側に位置する9号周溝墓や17号周溝状遺構に後続し、南東側に位置する11号周溝墓に先行して造られた周溝墓と判断した。また本遺構と重複する34号・41号掘立柱建物跡、35号溝跡より新しい。

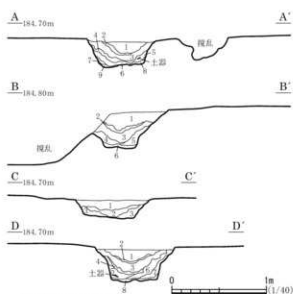
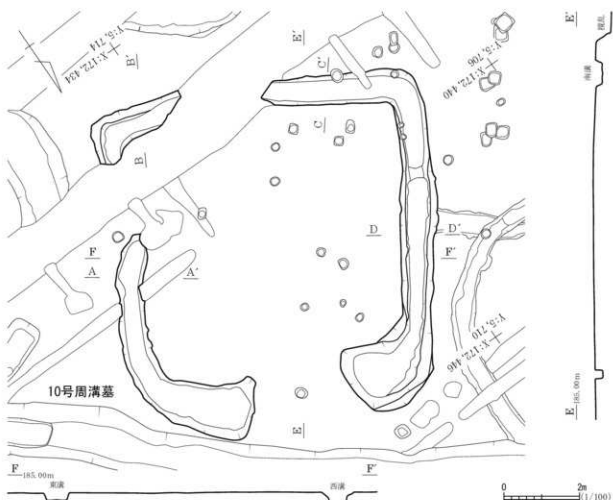
10号周溝墓の墳丘は方形で、周溝内法の規模は南北7.0m、東西6.6mである。主軸方向は真北に對して30度東に傾く。周溝は方形墳丘の北東辺と南東辺の2箇所で見切れる。北東辺の周溝は、その端部が墳丘に對して斜めに突出し、台形状に開く土橋となる。一方、南東辺の周溝は、南東コーナーに寄った位置で見切れる。台形状に開く土橋を指向した周溝端部の整形は認められない。北西辺の周溝は、17号周溝状遺構に接するため、北西隅付近が乱れて、周溝幅が狭まる。周溝の幅は北東端が最も広く1.5m、北西隅が狭く0.8mである。周溝底面の標高は184.2～184.3mと平坦で、検出面からの深さは、南東側が最も深く50cmである。周溝の壁面は、墳丘側が急傾斜に立ち上がる。周溝内の堆積土は黒褐色土を基調とする自然流入土である。また周溝底面の整地土は確認できない。

遺物 (図20・21, 写真111・112)

10号周溝墓の出土遺物は、いずれも周溝の堆積土中から出土したもので、周溝墓の機能時期から周溝の埋没過程において混入したものである。遺物の出土位置は周溝内に散在し、人為的に埋設された状態や周溝内でも特定の場所に偏在する出土状況は確認できない。

図20-1～22は地文に縷糸文を施す在地系土器である。器種は壺が主体となる。外面には交互刺突による波状隆線文(1～3)や指頭押圧によるキザミ(5～7)が施され、押し引き沈線で文様が描かれる。23～35は櫛歯状施工具により文様が描かれる北関東系土器である。25～34は壺の頸部を縦位や鋸歯状に区画し、その内部に格子文を施す。35は口縁部直下から連続波状文が描かれる。

図21は整形にハケメを多用する北陸系土器である。器種は壺・甕・高環がある。甕は口縁部形態が数種認められる。口縁部の幅が短く、緩やかな段を持つもの(1～3)。口縁部の幅が長く、下



10号周溝墓溝堆積土(AA')

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物極少量含む)
- 2 黒色粘土 10YR2/1(NP・FP・炭化物極少量含む)
- 3 暗褐色土 10YR3/3(NP・FP・炭化物・焼土極少量含む)
- 4 褐色砂質土 10YR4/4(NP極少量含む、FPの再埋積か)
- 5 黒褐色土 10YR2/3(NP極少量、黄褐色土塊含む)
- 6 黒褐色土 10YR3/2(NP極少量含む)
- 7 黄褐色粘土 10YR6/6
- 8 黒褐色土 10YR2/2(NP極少量含む、黄褐色土と黒色土塊の混土)
- 9 黒色粘土 10YR2/1(NP極少量、黄褐色土塊含む)

10号周溝墓溝堆積土(BB')

- 1 黒褐色土 10YR3/2(NP・FP・炭化物・焼土極少量含む)
- 2 黒色粘土 10YR2/1(NP・FP・炭化物極少量含む)
- 3 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・焼土極少量含む)
- 4 暗褐色土 10YR3/3(NP・炭化物極少量、黄褐色土塊含む)
- 5 に5:1黄褐色土 10YR4/3(NP・焼土極少量、黄褐色土と黒色土の混土)
- 6 暗褐色粘土 10YR3/3(黒色土と黄褐色土の混土)

10号周溝墓溝堆積土(CC')

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物極少量含む)
- 2 黒色粘土 10YR2/1(NP・FP極少量、炭化物極少量含む)
- 3 暗褐色土 10YR3/3(NP極少量含む、黒色土と褐色土の混土)

10号周溝墓溝堆積土(DO')

- | | |
|-----------------------------------|---------------------------------|
| 1 黒褐色土 10YR3/2(NP・FP・炭化物・焼土極少量含む) | 5 暗褐色土 10YR3/3(NP・黄褐色土粒含む) |
| 2 黒色粘土 10YR2/1(NP・FP極少量、炭化物含む) | 6 暗褐色土 10YR3/3(NP・FP・黄褐色土粒多量含む) |
| 3 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP極少量、炭化物含む) | 7 褐色土 10YR4/4(NP含む、黄褐色土と黒色土の混土) |
| 4 黒色粘土 10YR2/1(NP・FP・炭化物極少量含む) | 8 暗褐色土 10YR3/3(NP極少量、黄褐色土含む) |

図19 10号周溝墓

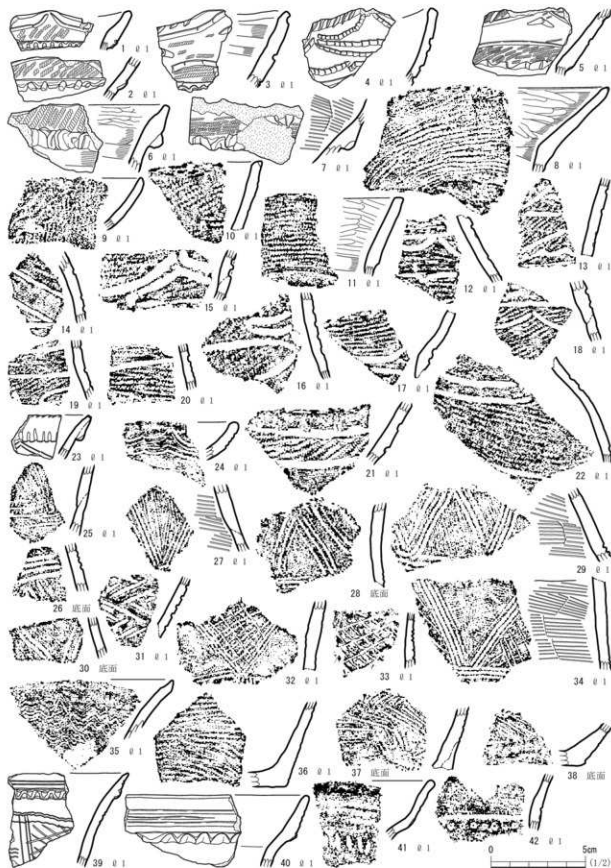


图20 10号周溝墓出土遺物(1)

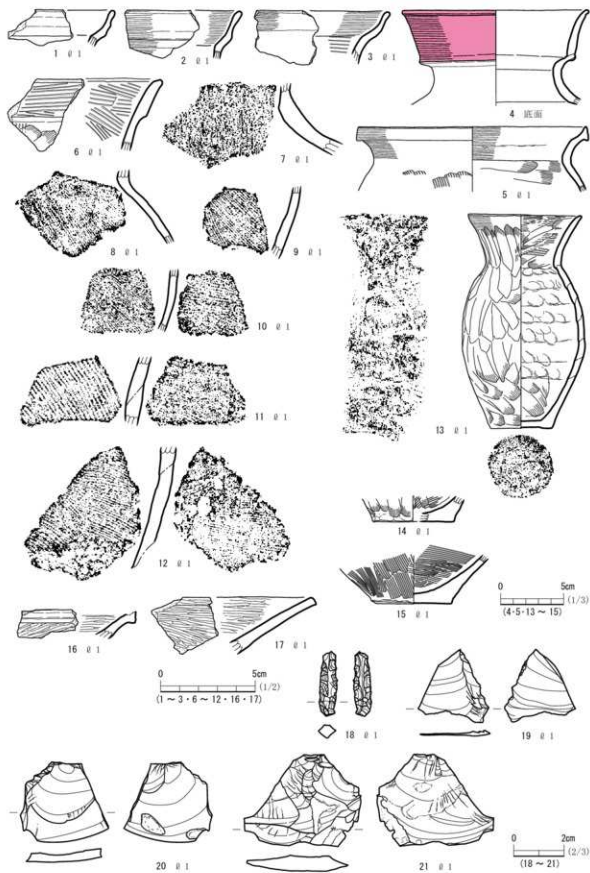


图21 10号周沟墓出土遗物(2)

端部に明瞭な段を持つもの(4)。短い口縁部で、口唇部の上端が垂直につまみ上げられ、断面が三角形になるもの(5)。13は小型壺で、胴部は丸みを帯びて細長い器形となる。体部外面はハケメ成形の後に、縦位ナデにより仕上げられる。内面は比較的粗雑で、粘土組織み上げ痕を残す。6・17は高環の口縁部で内外面ともにミガキが施される。

図21-18は先端や基部を欠損するが、石甌であろう。19-21は割片である。

まとめ

10号周溝墓は前方後方形の周溝墓である。周溝が北東側と南東隅で途切れる特徴がある。周辺に分布する周溝墓の位置から、9号周溝墓・17号周溝状遺構に後続して造られたと判断した。年代は、出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半の桜町Ⅱ式期に位置づけられる。(福田)

11号周溝墓

遺構(図22-26, 写真19・20・113-115)

11号周溝墓は円形を基調とする周溝墓である。調査区中央部、D6-B7・C7グリッドに位置する。9号周溝墓の南東側で、10号周溝墓と15号周溝墓の間に分布する。本遺構には平安時代の19号掘立柱建物跡、25号溝跡が重複する。遺構検出面は北半部がLⅢa、南半部は削平により約30cmの段差となり、LⅣaが検出面である。

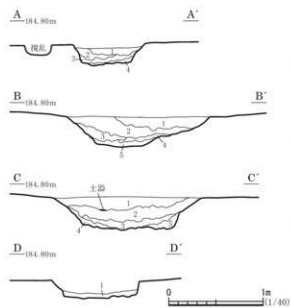
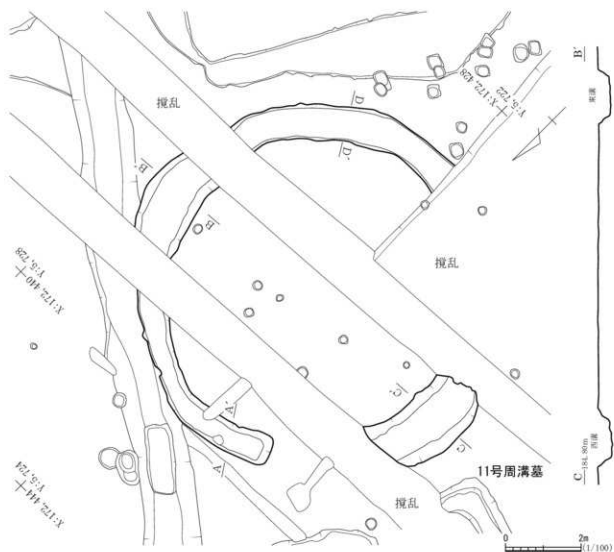
11号周溝墓の墳丘形は円形と推定される。北西側で周溝が途切れ土橋となる。土橋部分は外側に突出しない。土橋の中軸線を主軸とした場合、真北に対して45度西に傾く。周溝内法の規模は、直径7.4mを測る。最も良好な状態で遺存する東西の周溝で計測すると、周溝の幅は1.55m、検出面からの深さは38cmである。周溝の壁面は上端部が崩落して緩やかになるが、墳丘側が急傾斜に立ち上がる。周溝の底面は草木根による細かな凹凸は見られるものの、標高184.3mでほぼ平坦である。また周溝の底面に設けられた施設や底面の整地土などは確認できない。

周溝内の堆積土はいずれも黒褐色土を基調とする自然流入土である。堆積土の上層にはF Pが攪拌された状態で確認できる。F Pの降下時期を勘案すれば、周溝は完全に埋りきらず、くぼみとなっていたのであろう。底面を覆う下層の堆積土は、墳丘や周溝壁面の崩落土と考えられる黄褐色土を含む。周溝墓の機能時期に近い段階の堆積土と判断した。

遺物(図23-26, 写真113-115)

11号周溝墓の遺物は、いずれも周溝内に堆積する自然流入土から出土したもので、他の周溝墓と同様に、出土位置や出土状況に人為的な所作は看取できない。図23-1は大型壺である。球形の胴部から頸部が細く括れ、口縁部が大きく外傾して開く器形である。口縁部は幅が長く、下端部に鋭い段を持つ。口唇部にはへら状工具によるキザミが充填される。口縁部下端には指頭つまみ上げによるキザミが施される。外面はハケメで整形され、その後で地文となる擦糸文が施される。

図24-1は大型の長頸壺である。口唇部と口縁部下端の加飾が施されていないが、器形は図23-1と同様に、体部中央に最大径を持ち頸部に向かって細く括れる。口縁部がやや内湾気味に開くが、



11号周溝墓溝堆積土(AA')

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物極少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/4(黄褐色土粒極少量含む)
- 3 暗褐色土 10YR4/3(NP極少, 黄褐色土塊少量含む)
- 4 黒褐色土 10YR3/2(NP・黄褐色土粒極少量含む)

11号周溝墓溝堆積土(BB')

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物極少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/2(NP・FP・炭化物・焼土極少量含む)
- 3 暗褐色土 10YR3/3(やや砂質, NP・FP・黄褐色土粒極少量含む)
- 4 黒色土 10YR2/1(NP・炭化物極少量含む)
- 5 褐色粘土 10YR4/1(NP極少量, 炭化物含む, 黄褐色土と黒色土の混土)

11号周溝墓溝堆積土(CC')

- 1 黒褐色土 10YR3/2(NP・FP・炭化物・焼土極少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/3(NP・FP・炭化物・焼土極少量含む)
- 3 黒色土 10YR2/1(NP・炭化物極少量含む, 表土化)
- 4 暗褐色土 10YR3/3(NP・砂?・黄褐色土塊含む)
- 5 暗褐色土 10YR3/3(NP・砂・黄褐色土塊を多量含む)

11号周溝墓溝堆積土(DD')

- 1 灰褐色粘土 10YR4/1(NP極少量含む, 黄褐色土と黒色土の混土)

図22 11号周溝墓

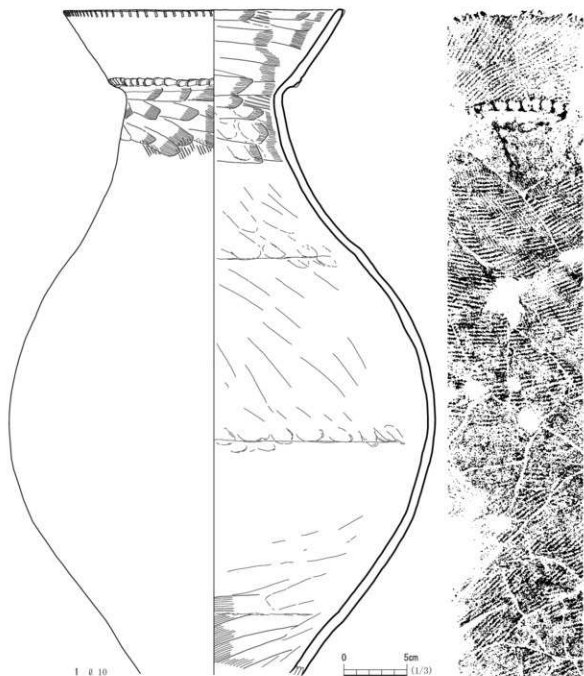


図23 11号周溝墓出土遺物（1）

口縁部の幅が長く、下端部に鋭い段を持つ特徴は共通する。器面調整は摩滅して不鮮明であるが、内外面ともに整形時のハケメを残す。外面のハケメは上から下へ縦方向に施し、体部はやや斜め下方向にハケメが施される。内面の調整痕は、口縁部がハケメの後に横方向の指ナデで仕上げられる。体部は底部から頸部に向かってやや斜め方向のハケメが観察できる。

図25-1~11は地文に撚糸文を多用する在地系土器を図示した。交互刺突による波状隆線文や押し引き状の太い沈線により文様を描く。

器形は壺を主体とする。1・2は波状口縁となる壺である。口縁部直下に連弧文が描かれ、連弧文間に撚糸文が充填される。1は連弧文の連結点下部に、円形竹管を左右から刺突した三角文が施される。3は口縁部の幅が短く、下端部にへら状刺突具によるキザミが施される。4は口縁部が大きく開く器形である。口縁部は無文で、体部は撚糸文が施される。5は甕で、頸部が「く」の字状に括れ、大きく外反して開く口縁部となる。

12~18は櫛歯状施文具により文様を描く北関東系土器である。施文具や文様に数種認められる。12~14・18は同一個体となる壺の頸部破片である。彫りの深い4本歯の櫛歯状施文具が用いられる。縦位に区画された内部に横位の波状文と斜格子文が施される。15はやや彫りの浅い櫛歯が用いられ、横位の波状文が描かれる。16は鋸歯状文であろうか。

図26は装飾的な文様がなく、整形痕にハケメを残す北陸系土器を図示した。壺・甕・高環などの器種が認められる。1・2・4は甕である。口縁部の幅が短く、口唇部の断面形は三角形になる。4はほぼ完形となる。体部は全体的に丸みを帯びた器形で、体部中央からやや上部に最大径を持つ。体部下半は底径が小さい底部に向かってすばまる。器面調整は、口縁部が内外面ともにヨコナデで仕上げられる。体部外面の調整痕は、上半は整形時のハケメを残し、下半はハケメの後にナデで仕上げられる。内面は頸部にハケメが観察できるが、全体的にナデで器面が平滑に整えられる。3は、内外面ともに段を持つ有段口縁の甕である。口縁部の幅が長い特徴がある。口縁部はヨコナデにより仕上げられる。10~13, 17・18は壺または甕の体部破片である。外面は整形痕のハケメを残し、内面はナデにより器面調整される。17は甕の体部上半の破片である。外面にへら状工具を用いた列点状のキザミが施される。14~16は壺または甕の底部資料である。14・15は底部外縁が輪台となる。

19~26は高環である。外面にベンガラで赤彩されるものを含む。内外面ともに丁寧にミガキが施されて仕上げられる。19は環部の破片で、口唇部の内面側がわずかに肥厚する。20は口縁部が直線的に開く環部となる。21・22は環部の破片である。環部の器形は口縁部が外反して開く。23・24・

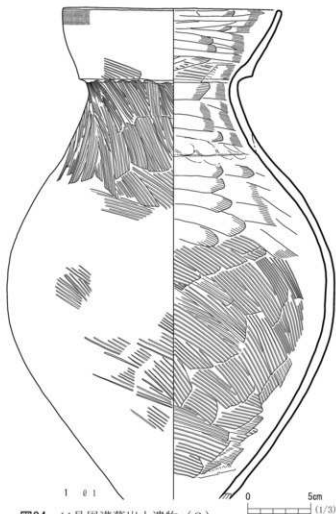


図24 11号周溝墓出土遺物(2)

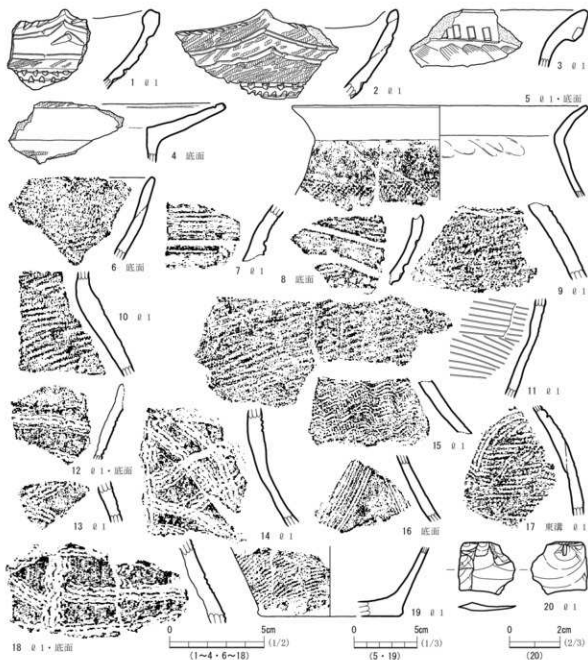


図25 11号周溝墓出土遺物(3)

26は口縁部が外反して開き、口縁部と体部の境に明瞭な段を持つ。体部下半は丸味を帯びて脚部と接合する。脚部はやや短い。筒形となる脚部で、脚部下半から裾部にかけて大きく開く。環部と脚部の接合には、粘土塊を環部の内面側から筒形となる脚内部に充填している。

まとめ

11号周溝墓は円形墳丘となる周溝墓である。周溝の北西側に土橋状の出入り口が設けられるが、10号・20号周溝墓のように、開口部の周溝端部が外側に肥大しない特徴がある。周溝の形状と周辺に位置する周溝墓の分布状況から、10号周溝墓に後続し、15号周溝墓に先行して造られる。年代は出土した土器の特徴から、弥生時代後期後半の桜町Ⅱ式期と考えている。(福田)

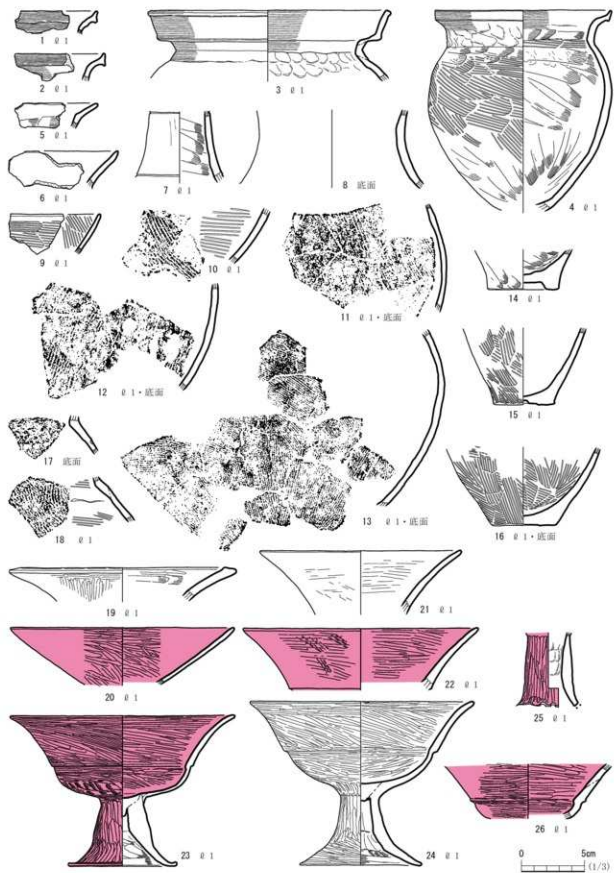


图26 11号周溝墓出土遺物(4)

14号周溝墓

遺構 (図27・28, 写真21・22・116)

14号周溝墓は方形墳丘をめぐる周溝の四隅が途切れる小型の周溝墓である。調査区中央部のD6-B5グリッドに位置する。42号掘立柱建物跡と重複するが、周溝と柱穴の直接的な切り合いはない。周辺に分布する遺構との関係から、本遺構は9号周溝墓に後続する周溝墓で、42号掘立柱建物跡よりも新しいと考えている。遺構検出面はLⅢa上面である。

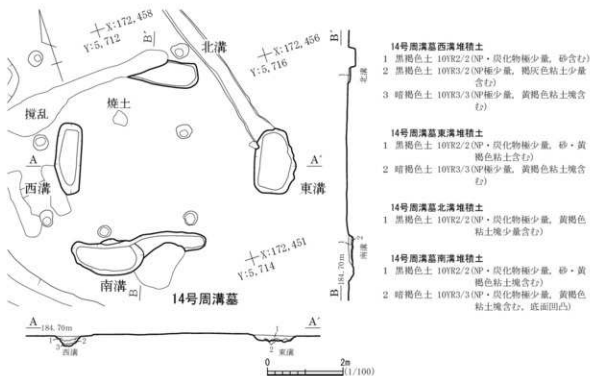
本遺構は方形墳丘を区画する四方の周溝を確認したのみで、墳丘や埋葬施設は確認していない。周溝内法の規模は、南北の長さが4.2m、東西の長さが4.6mである。平面形は東西方向に長い長方形である。主軸方向は真北に対して20度東に傾き、9号周溝墓の主軸方向と異なる。

周溝は削平のため、遺存状態が極めて悪い。遺存状態の良い西溝と南溝から判断すれば、周溝外側が弧状に張り出し、9号周溝墓と共通する特徴がある。周溝の深さは、南溝が15cm、西溝が30cmと深い。周溝内の堆積土は黒褐色土を基調とする自然流入土である。9号周溝墓で見られる周溝底面の整地土は確認できない。

遺物 (図28, 写真116)

14号周溝墓の出土遺物は、南溝に集中する傾向がある。堆積土中に散在する出土状況で、周溝内の人為的な所作は認められない。

図28-1~15は地文に摺糸文を施す在地系土器である。器種は壺が主体を占める。1は口唇部が鋭く面取りされる。外面の文様は太い沈線で描いた文様帯の内部に摺糸文を充填する。沈線内には



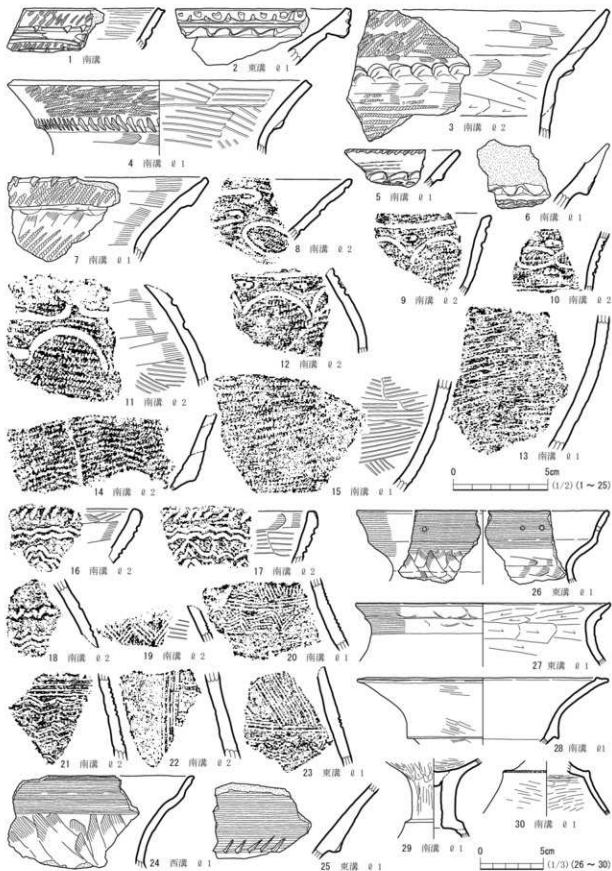


図28 14号周溝墓出土遺物

半截竹管状の施文具を用いた刺突が施される。2は口縁部の幅が短く、口唇部が肥厚して断面が三角形となる。文様は口唇部直下に交互刺突による波状隆線文、口縁部下端は指頭押圧によるキザミが施される。3～6は口縁部の幅が長く、下端部に指頭押圧やヘラ状施文具によるキザミで飾られたもので、キザミにより口縁部下端に明瞭な段を造る。6は頸部に櫛歯状施文具による横位の波状文が施される。8～12は押し引き状の沈線で文様が描かれる。4・11・15は、内面にハケメを残す。

16～18は半截竹管による横位の波状文が施される。19～23は櫛歯状施文具により文様が描かれる北関東系土器である。19は鋸歯状文、20～21は横位の波状文が施される。22は縦位の区画された内部に2段の波状文が充填される。

24～30は北陸系土器で、器種は壺・甕・高環がある。24・26は口縁部の幅が短く、下端部に軽い段を持つ。口縁部はヨコナデで仕上げられる。26は補修孔と考えられる貫通孔がある。内面には補修孔の他に、盲孔が認められる。28～30は高環である。28は体部との境に明瞭な段を持ち、口縁部に向かって大きく外反する。29・30は短い筒形の脚と裾部との境に段を持つ。30は段の部分にキザミが施される。

まとめ

14号周溝墓は四隅切れ周溝で、墳丘の形が長方形となる周溝墓である。年代は9号周溝墓とはほぼ同時期で、弥生時代後期後半頃と考えている。 (福田)

15号周溝墓・27号掘立柱建物跡

遺構 (図29・30、写真23～27・117)

15号周溝墓は前方後方形の周溝墓である。調査区中央部のD6-C7・C8・D7・D8グリッドに位置する。11号周溝墓の南東側に位置し、9号周溝墓から南東方向に向かって連続する周溝墓群の中で、最も南に分布する。近年の開削により周溝の底面付近が遺存する程度で、墳丘の盛土は遺存していない。本遺構は平安時代の19号掘立柱建物跡と重複する。周溝の内部では、27号掘立柱建物跡・1号土器棺墓が重複する。

15号周溝墓に重複する27号掘立柱建物跡と1号土器棺墓の新旧について、15号周溝墓の墳丘構造を復元的に捉えれば、27号掘立柱建物跡は15号周溝墓より古く、1号土器棺墓はほぼ同時期と考えている。27号掘立柱建物跡を構成する柱穴は、周辺に分布する平安時代の掘立柱建物跡の柱穴に比べ、建物跡の配置・方向が異なる。柱穴自体の規模・埋め土も異なり、弥生時代に属する42号掘立柱建物跡の柱穴に近似する。また出土遺物に平安時代の遺物を含まないことから、弥生時代の建物跡と考えている。次に、先学の研究による周溝を伴う建物跡の可能性が指摘されよう。本遺跡の13号・17号周溝状遺構は、周溝の平面形が円形である。方形周溝に建物跡が伴う事例は確認していない。27号掘立柱建物跡の主軸方向と15号周溝墓の主軸が約45度ずれている。建物の上屋構造と周溝の配置から、周溝を伴う建物跡との差異は明確である。周辺に分布する平安時代の掘立柱建物跡が本遺構の墳丘部分避けるように配置されていることを評価すれば、15号周溝墓より27号掘立柱

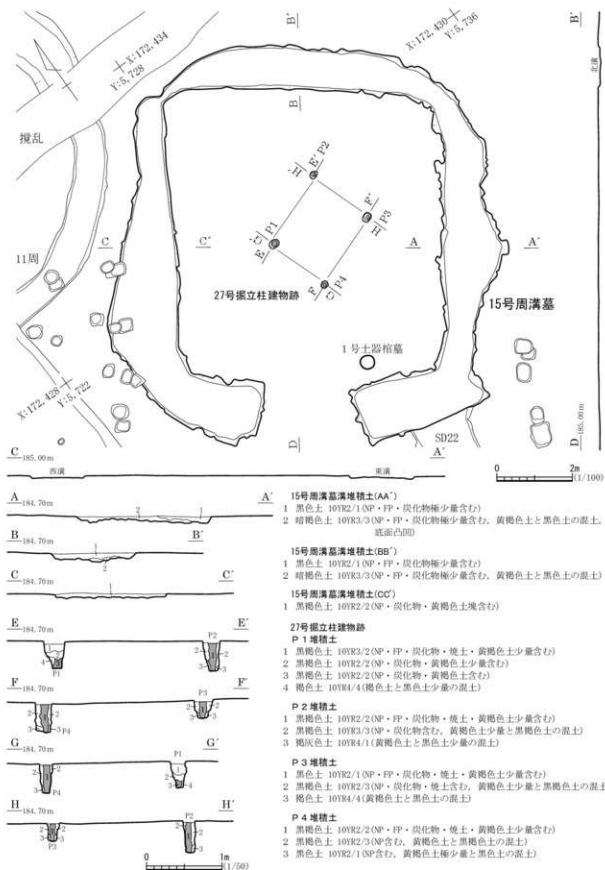


図29 15号周溝墓・27号掘立柱建物跡

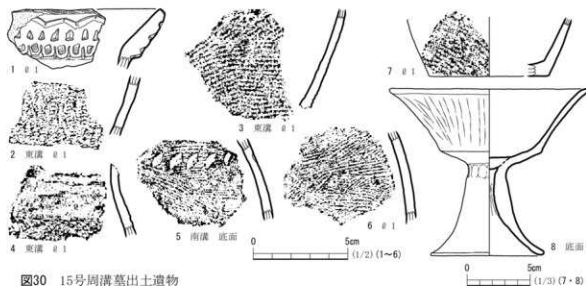


図30 15号周溝墓出土遺物

建物跡が後出する可能性は低い。

1号土器棺墓は、15号周溝墓の出土土器と年代差は看取できない。15号周溝墓の土橋部脇に設けられた土器棺墓あろう。15号周溝墓の主たる埋葬施設ではなく、広義の追葬と捉えておきたい。

15号周溝墓の墳丘の平面形は、南北辺が長い長方形である。周溝内法の規模は、南北辺の長さが7.7m、東西辺の長さが7.0mを測る。主軸方向は真北に対して32度東に傾く。周溝は方形墳丘の外周をめぐる、南西辺の中央部で途切れて土橋となる。北隅の周溝は、11号周溝墓と接するため周溝幅が狭くなる。また北東辺から南東辺にかけては、周溝の外側は弧状に張り出す。土橋部分の周溝は、その端部が「ハ」の字状に広がり、台形状に突出した土橋となる。周溝の幅は北隅が最も狭く0.8m、西隅が最大で1.9mとなる。周溝の深さは10cmと極めて浅い。周溝の底面は、草木根による細かい凹凸があるものの、標高184.4mほどの平坦面となる。

周溝内堆積土は黒褐色土を基調とした自然流入土である。F Pが攪拌された状態で混入することから、9号周溝墓の周溝と同様に、周溝は完全に埋没せずに開口していたと推察している。

遺物 (図30, 写真117)

15号周溝墓の年代に直接関わる遺物は図30-8である。8は北東辺の周溝中央部で、周溝の底面に接して出土した。それ以外の遺物は、堆積土中から出土した。1は広口壺の口縁部破片で、口唇部直下に押し引き状の沈線と鋸歯文が描かれる。口縁部下端は円形竹管状の刺突具を用いた上下からの交互刺突で、立体的な波状隆線がめぐる。3・4・7は壺または甕の破片である。外面の地文として摺糸文が施される。5・6は整形痕にハケメを残す甕の胴部破片である。5はへら状工具を用いた列点がめぐる。8は高坏である。坏部下端に鋭い稜を持ち、口縁部に向かって外反して開く。脚部はやや長く、接合部から直線的に開く。器面は摩滅するが、丁寧にミガキが施されている。

まとめ

15号周溝墓は前方後方形となる周溝墓である。11号周溝墓に後続して造られた周溝墓である。墳丘内には1号土器棺墓が造られる。年代は11号周溝墓に後続し、桜町Ⅱ式期と考えている。(福田)

第2章 調査成果

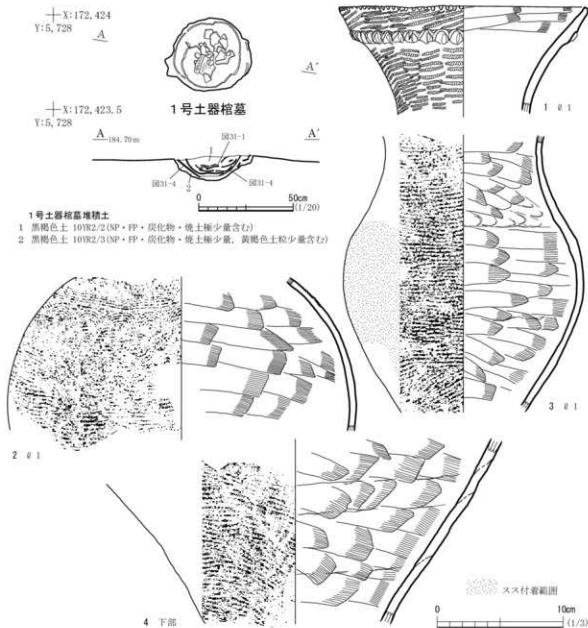


図31 1号土器棺墓出土遺物

1号土器棺墓

遺 構 (図31, 写真117・118)

本遺構は15号周溝墓の墳丘内に設けられた土器棺墓である。図31-1・4は同一個体，2・3はそれぞれ別の個体，計3個体の土器で構成されている。4は掘形内で原位置を保った状態で出土し，1～3は4の内部から潰れた状態で破片となって出土した。また底部の破片は1点もない。

土器棺墓の構造は，底部を打ち抜いた状態の1・4を棺としている。4の内部に2・3を入れて埋設していることから，当然同一個体である1・4は胴部付近で上下に分割されているのであろう。土器棺内部からは，人骨や副葬品などは出土していない。

遺物 (図31, 写真117・118)

1・4は同一個体の長頸壺で、器形は球形の胴部から頸部で細く括れる。口縁部は大きく外傾して開く。外面の文様は地文として捺糸文を施す。口唇部はへら状工具を押し当てたキザミが施される。口縁部下端には指頭押圧による立体的なキザミがめぐる。2は1・4と同様な器形の長頸壺である。外面は地文に捺糸文を施し、5本歯の櫛歯状施文具を用いて文様を描いている。文様は横線を境に、上部は縦位の区画線を描く。下部は下向きの連弧文が施される。3はやや小ぶりな長頸壺である。口縁部や底部を欠損するが、胴部の約半分が遺存している。外面には捺糸文が施される。また外面に炭化物が付着している。煮炊きに使用された土器を土器棺に転用している。

まとめ

本遺構は15号周溝墓の墳丘内に造られた土器棺墓である。大型壺の内部に遺体とともに壺2個体を副葬した可能性が高い。周溝墓に伴う土器棺墓は初見であり、周溝墓で行われる葬送儀式や墓前祭祀のあり方を示す好例となる。(福田)

16号周溝墓

遺構 (図32~34, 写真28~30・119)

大グリッドD6とE6グリッドにまたがって、水田耕作土を除去した段階で確認した。検出面は第IV層である。西側に20・29号の掘立柱建物があり、東側には24・25・38号などの掘立柱建物跡がある。いずれも掘立柱建物のほうが新しい。また西周溝では、85号土坑と重複しており、周溝墓のほうが古い。

南周溝墓群の北端に当たる位置にあり、西側から南側にかけて19・18・20号の周溝墓が近接して造られている。なかでも18号周溝墓は、東北部で16号周溝墓を避けるように造られている。このことから重複関係はないが、16号周溝墓のほうが古く造られたことを示している。

検出面段階では、西溝と南溝が明確であった。これに対して北溝と東溝では、かろうじて確認できる程度の遺存状況であった。墳丘部は方形で、東側に突出部が設けられた形状である。突出部から方台部を通る軸線の計測は不明確なことから、遺存状況の良い西端方台部から軸線方位を求めると、 $N-20^{\circ}-W$ である。周溝墓が立地する自然堤防の方向と同じ向きであろう。

方台部の四隅は、すべて確認している。しかし東部では、底面や突出部の一部を確認したに過ぎない。方台部の大きさは、南北約12.0m、東西11.5mである。南辺と西辺は、実測図で示すと緩やかな曲線で外側に湾曲しているが、北辺はほぼ直線である。全体の形状は方形に近い矩形である。方台の内部からは、北西部から小さな穴が1個と南東部の24号掘立柱建物跡柱穴を確認した以外に、遺構などは存在していなかった。

突出部の形状は、不明瞭であるが、桜町遺跡から検出した周溝墓のなかでは、比較的突き出した形態であったと推定している。東辺に遺存して38号掘立柱建物跡と重複する部分では、方台部東辺から3m程度の幅を確認している。また東辺南端の周溝も大きく幅を広げている。

周溝墓の外郭線は北辺と東辺では、大きく損なわれていた。いっぽう南辺と西辺では、基底面近くではあるが、全体の形状を把握することができた。外形線は、方台の中心付近から、半径9m程度の円弧を描くようになっていた。ただし、方台も周溝外郭線も厳密な測量により、設計されたとするには、歪みが認められる。

周南溝から西溝にかけて、周溝の底面は、平坦に造られていた。かすかに遺存していた程度で、深い部分で10cm程度である。底面の凹凸は、動植物による攪乱を受けた結果であろうか。周溝周辺の検出面とは大きく異なっていた。北西部の隅では西溝の底部から5cm程度高くなっていた。西溝の北端が方台部と垂直になっていた。このほか、周溝部に埋葬の痕跡はなかった。

堆積土の色調は黒褐色を基調としていた。自然堆積による堆積である。検出面出土遺物に平安時代の土器も含まれていた。この時代までは開口した状態を保っていたのであろう。方台部の大半で遺構が検出されないことも、このことの反映である。

遺物 (図34, 写真119)

周溝から出土した遺物は、平安時代の須恵器、土師器、弥生土器・石器である。平安時代の土器類は、いずれも細片である。遺構にともなわないことから、図示はしていない。弥生時代の遺物も出土量は少ない。いずれも桜町Ⅰ式からⅡ式の土器である。また土器の胎土は在地のものである。

1から16は、在地系土器である。1・2は口縁部上面に縄文の押圧が施されている。また外面の縄文に続いて、沈線と刺突を組み合わせた刻み目文が巡らされている。3は太い沈線を主体に文様が施されている。やはり口縁部に縄文による押圧文様で刻みを入れている。破片下端の刻み目文はへら状工具の押圧で施されている。4は直径2mm程度の竹管状工具による刺突と沈線、押圧を組み合わせて文様が施されている。最上段の円文は、器面に対して直交させた刺突文、二段目は沈線の上端を狙った斜め刺突、土器頸の突出部は工具の側面を用いた押圧である。またこの上に沈線に直交刺突を加えて交互刺突文としている。5はつまみ上げである。7・8・9は縄文の上に沈線で文様を描いている。7は口縁部頸の破片で、斜め方向の刺突を加えて、上側に工具を押し当てている。このため器面に小さな皺が生じている。8には文様の要に円形凹文を配置している。12の上端は、櫛描き波状文が施されている。長頸壺の破片であろうか。13も櫛描き波状文が施されているが、波長は細かく短い。14はハケメではなく、撚糸である。16と同一個体であろうか。15・16は底部破片である。15は底部から斜めに立ち上がっている。16は体部下端に指頭による押圧で形が整えられ、底部周端が小さく突き出している。

17～29は、北陸系土器である。整形にハケメやケズリが多用され、調整手法にミガキやナデが顕著な特徴がある。甕と高坏、壺が主な器種である。17は小型甕の口縁部である。内外面にヨコナデが施されている。16は中型の甕であろう。外面にハケメ、内面にナデがわずかに残っている。19はいわゆる月影甕である。口縁部の内外面は強いヨコナデで仕上げられている。また端部は小さく外反している。頸のくびれは小さく滑らかである。体部内面にはケズリとハケの痕跡がわずかに残っている。20は甕の肩部である。ナデの上から丸粒形の刺突文が巡らされている。21は壺の頸部であ

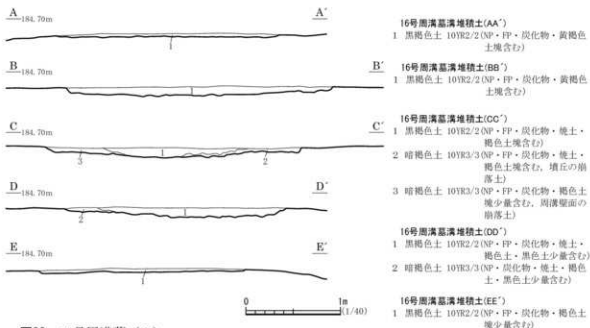


図33 16号周溝墓(2)

ろう。22は球形壺の体部である。内外面ともナデで整えられている。周溝の底面から出土している。23・24は壺の底部である。23の底部には、端部の突き出しはない。内面はナデ、外面はハケメで整えられている。24の器壁は薄く、均一である。底部端は強く突き出している。内面はナデツケで整えられている。25は瓶の底部である。外面はハケメ、内面はナデとナデツケで整えられている。26～29は高坏の破片である。脚部が円柱状の29に対して27・28はラッパ状に開いている。外面はミガキで丁寧に仕上げられている。26は坏部口縁である。上面は平坦で、内面は小さく突き出した作りである。

30は、南溝の底面から出土した。凝灰岩の石皿である。自然の平石をそのまま用いているが、上部の平坦面は滑らかに摩滅して浅く凹んでいる。

まとめ

この遺構は、桜町遺跡の調査において検出した前方後方形周溝墓のなかで、最も大きなものである。出土した関連土器には、桜町Ⅰ式とⅡ式である。土器から築造時期の限定は難しいが、周辺の周溝墓との比較と墳形から、桜町Ⅱ式期としておく。

周溝の外郭線は円形を描くように延びていた。これは前段階の9号周溝墓からの形態を受けついで在地の要素である。15号周溝墓の周溝も同様な痕跡を伝えているが、これよりも大きく湾曲した外形線になっている。

前方部は攪乱により痕跡を確認したにすぎない。推定線では先端が開く撥形とした。これは東周溝の遺存部分と周溝外形線の延長を結ぶ形からの推定である。周溝幅から大きく突出した形状である。15号周溝墓の突出部が周溝幅を、大きく突き出すことはなく、「ハ」の字状になっているのと比べて、一段階新しい要素である。また前方部先端部で、周溝は確認していない。この部分の遺構検出面に攪乱は無かったことから、先端に溝を造らない形態と考えられよう。(福島)

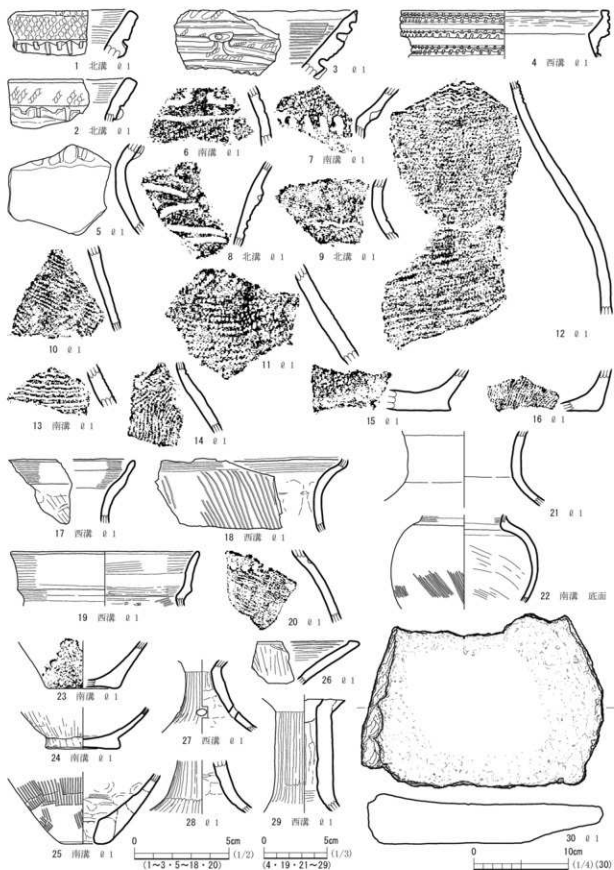


图34 16号周溝墓出土遺物

18号周溝墓

遺 構 (図35・36, 写真31・32・120・121)

D7-D1・E2・E3グリッドにおいて、水田耕作土を除去した段階で確認した。検出面は第Ⅲ層である。調査区の西南端に当たり、東半部を検出した。北西側に19号周溝墓、北東側に16号周溝墓、南東側に20号周溝墓がある。周溝墓間に重複はない。しかし、この周溝墓の北東部は、16号周溝墓の南西隅を避けるように変形していることから、この周溝墓の方が新しいことを示している。このほか、東側に、弥生時代の64号土坑がある。また円台部の南東部で、87・96・98・110号土坑と重複して、いずれの土坑よりもこの遺構の方が古い。

遺存する周溝は、南溝に土橋を設ける形態である。東部の北よりを境にして形状が異なっている。これより南側は、円弧を描いて延び、形も整っている。これに対して北側では、東北部と北部により形状に差異がある。東北部の台部は隅丸方形の一隅のように湾曲し、周溝外郭線は、16号周溝墓におかれて直線的に造られている。また北部では方台部も少し外側に湾曲しているものの、直線的に延びている。これに対応して周溝外郭線も直線的になっている。

周溝の深さは、最大でも0.1mである。とくに北東部では底面の痕跡が遺存している程度であった。周溝の形状が変形していることも、少しは関連しているようだが、大きな変形であることから、旧状の基本的な形態は反映していると考えられる。

堆積土は、黒褐色系である。炭化物・焼土粒を多く含んでいる。自然堆積の状況であるが、表土直下であるため、動植物の影響を受けている。周溝の底部に見られた凹凸も同様であろう。

墳丘の形は、16号周溝墓との関連で北東部が変形していることから、南東部の形状が構築者の意図を反映していると考えられる。南東部の湾曲する周溝墓からは、円形を基調とした形であろう。16号周溝墓との関連で、変形を余儀なくされたのであろう。土橋部分は、周溝が途切れる形態で、長く発達する以前の形状である。土橋部の付け根から北溝に直交する線を軸とすれば、南北7m程度になる。また周溝の最も広い部分は、東部で幅1.4mである。

遺 物 (図36, 写真120・121)

周溝から出土した遺物は、桜町Ⅲ式が中心である。7・8・9は、それぞれ周溝の底面に潰れた状態で出土した。このほか桜町Ⅰ式・Ⅱ式なども土器片も出土している。図36には、比較的形状の判明するものを示した。出土量は少なく、すべて細片で、周溝堆積土に散在していた。

1は沈線と半截竹管の沈線、細竹管の刺突により文様が施されている。半截竹管の幅は広く、線の断面形は、鋭いV字形である。弥生時代中期の土器文様と近似している。縄文の痕跡は確認できない。時期は不明である。2は半截竹管による平行沈線で文様が施されている。

4は小型の甕である。体部には撚り糸による縄文が施されている。口縁部に接する部分は撚り糸の端部であろう。強く押しつけられている。また口唇の上にも撚り糸が施されている。口縁部内面はナデで仕上げられているが、かすかにハケメの痕跡も残っている。体部内面はナデである。6

の底部は、粘土板を二重に合せて作られている。下板の端部は体部下端を構成する粘土で挟み合わせられ、上板は底部から体部に大きく立ちあがっている。

5は、口縁部外面が内湾し、下端が突き出して小さな凸帯を作っている。桜町I式甕の口縁であろう。3は、細かなハケメで整えられている。

7は、頸部が逆コ字に屈曲して、口縁部が大きく直立している。また体部は球形を基調として少し下膨れである。底部は小さく、内側に凹んでいる。外面はヘラミガキで仕上げられ、体部下部は縦方向、中位は水平方向、上部から頸部は縦方向、口縁部は、内外とも水平方向という変化がある。またヘラミガキが施された部分は赤彩が施されている。体部内面ナデにより仕上げられているが、一部でハケメの痕跡も残っている。胎土は精良で、砂粒は少ない。

8は、赤彩の高坏である。坏部の下端に大きく下に突き出す段があり、これから口縁部にかけて内湾して大きく開いている。胎土には、比較的多くの砂粒が含まれている。坏部内面は、カキトリにより整形が施されている。粘土の硬化が比較的進んだ段階で施されたと推定され、この作業によりはじけた砂粒の痕跡が小さな穴となって残っている。更にその上から、ミガキとナデが施されている。坏部外面のうち立ち上がり部分は丁寧なミガキで仕上げられているが、段の下側から脚部にかけては、ナデにより粗い調整のままである。また脚部との連結は、脚部頂点に粘土を充填する方



図35 18号周溝墓

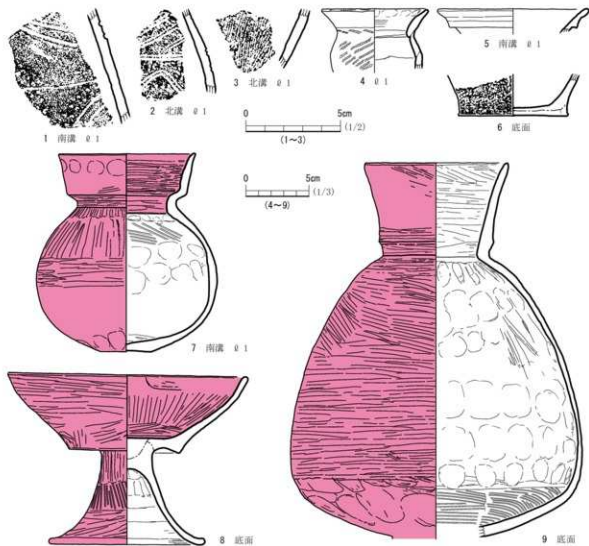


図36 18号周溝墓出土遺物

法で処理されている。脚部上半は比較的幅広く作られ、下部端の直径は坯部直径の約2/3である。開きは比較的短く、端部は丸く収められている。脚部外面は縦方向のハケメの後、ミガキで仕上げられている。内面はナデで仕上げられている。器壁の厚さが一定しており、また精美な作りである。カキトリ、あるいはケズリが加えられたと推定されよう。

9は底部を失っている。また体部から口縁部にかけて劣化して調整が不明瞭になっている。体部の下端近くに最大径のある下膨れの器形である。体部下部から湾曲して大きく立ち上がり、頸部に小さな稜帯を巡らしている。口縁部は少し外反気味で、急角度で立ち上がっている。外面には赤彩の痕跡が残っている。口縁部の内面は上部斜めのナデ、下部は水平方向のナデである。外面は劣化が著しいが、ミガキ調整であろう。稜帯付近では、水平方向のミガキが残っている、体部外面も劣化しているので、細かな観察は難しいが、頸部付近と体部中央は水平方向のミガキ、上部の中心は斜め左上りのミガキであろう。また下部は部分的にヘラケズリの痕跡もみられるが、大きな単位のおサエで仕上げられている。体部内面は、頸部に沿っておサエの痕跡が残っている。下部から頸部

近くは比較的大きな単位のおサエである。器壁の厚さが薄く一定に仕上げられていることから、ケズリやハケメによる整形が施されたと推定されよう。底部付近はハケメによる整形が明瞭に残っている。この部分より上部とは分割成形が行われたのであろう。

ま と め

この遺構は、土橋の設けられた円形周溝墓である。出土した7・8・9の土器は、この周溝墓にもなるものである。縄文の施されない土器で、桜町Ⅲ式とした。桜町遺跡の周溝墓では最も新しい段階のひとつである。

(福 島)

19号周溝墓

遺 構 (図37・38, 写真33・34・121)

D6—C10・E10グリッドなどにおいて、水田耕作土を除去した段階で確認した。検出面は第IV層である。調査区の西端に当たり、東半部の一部を検出したにすぎない。北側の29号掘立柱建物、東側で85号土坑と39号掘立柱建物と重複し、この遺構の方が古い。周溝墓では、東側に16号周溝墓、南東側に18号周溝墓がある。周溝墓間に重複はない。

遺存する周溝は、南東部から東部を経て北部端に至る部分で、弧状になっている。北端から南端までの長さは、おおそ10mである。削平により、旧状は大きく損なわれている。特に北半部の周溝は、底部まで失っている。

東部の台部端線は直線的に延びて、北部に至り、約45度程度の角度で折れ曲がっている。またこれに対応する周溝外郭線も直線的に延びて、底部幅を狭くするようになっている。この形状から、方形墳丘の可能性も検討した。

しかし南東部の周溝は滑らかに円弧を描いて造られ、方台の隅とは大きく異なる形である。また土橋部分も、台部から直線的に突き出す端部が明確に造られている。東部や北部の周溝は削平を受けて変形した結果であろう。墳丘基底部の東端線が直線的に延び、周溝外郭線が外側に膨らんでいる。これは方形墳の特徴である。しかし北端は逆「く」の字形の屈曲点があり、まもなく周溝は途切れている。方形墳としては、不自然な屈曲である。円形墳の不正形とみて、19号周溝墓は一応、円形墳とした。いずれにしても、整った墳形では無かったであろう。

周溝の底面は、南端から北に向かって、深さを減じるように造られている。とくに南東部が深く造られ、検出面から最も深い部分、土層断面B—B'で深さは50cm程度になっていた。周溝の東部中央から北側にかけては、底部は比較的平坦になっていた。遺存する部分で最大幅は、土層断面A—A'付近で1.3mであった。

周溝南東部では、長さ3m、幅0.5mにわたって、細長い土坑状の施設が設けられていた。これについては、周溝内埋葬も検討を行った。この部分の堆積土層は、3層に分かれた。1層と2層は、自然堆積に特有な土層で、炭化物粒や焼土粒が含まれていた。埋め土が表土化した可能性もある。3層は、黄褐色粘土の塊が含まれているが、最下層であり、侵食による墳丘などを源とする堆積土

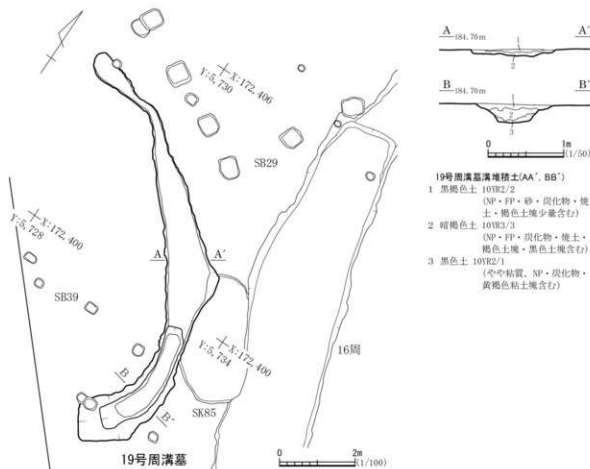


図37 19号周溝墓

の可能性もある。また底面は凹凸が著しい。これらの点から、土坑墓として整えられた痕跡は確認できなかった。遺物の出土状況からも、土坑墓とする積極的な根拠は得られなかった。周溝墓では、土橋部分の両脇が深く造られる例も少なくないことから、この造作もそのひとつと考えておきたい。

遺物 (図38, 写真121)

周溝から出土した遺物は、弥生土器と少量の平安時代の土器である。平安時代の土器類は、図示はしていない。弥生時代の遺物も出土量は少ない。桜町Ⅱ式が多く、これに桜町Ⅰ式が混ざっている。また土器の胎土は在地のものである。

1・2・4～6・11・13は、在地系土器である。1の口径は小さい。細頸壺であろうか。縄文に凹線で文様が施されている。文様の要には、円形の穴が配置されている。交互刺突文は上側の工具端の側面で押圧を連続させ、この間に下方から工具側面の押圧を対応させて施されている。

2は広口甕の口縁部である。横に走る燃糸が施されている。頸には、積み上げによる波文が巡らされている。4は口縁部頸に凸帯をつくり、これに刻み目を入れが施されている。5には、櫛描き沈線と波状文が施されている。6は縄文である。

11は、底部中央の外端が少し下に突き出し、これに対応して粘土の合わせ目痕跡が残っている。底面外面はオサエが多用されている。内面はナデツケで凹凸や粘土のねじれがある。13の底面直径

第2章 調査成果

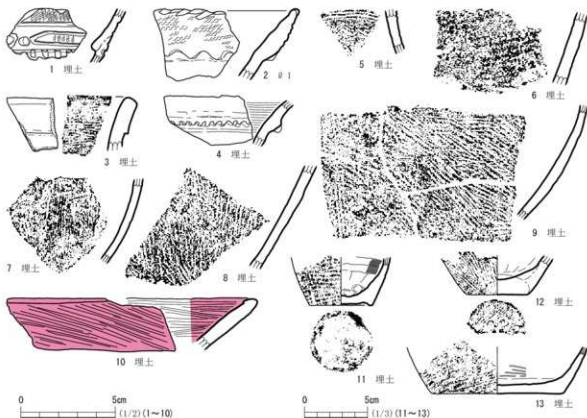


図38 19号周溝墓出土遺物

は11cmと大きい。底部から続く粘土板が体部下端まで連続している。

この他は、北陸系の土器である。3は、角張る口縁部が特徴的である。内面にはハケメも残っている。外面はミガキで仕上げられている。色調は赤茶色である。7～9はハケメが多用されている。7の内面にはケズリが施されている。8・9は内面までハケメである。12は8・9の底部であろうか。同様な調整が施されている。12の底部は、円盤の周縁から粘土を積み上げて体部へと続いている。また内部は、ナデで仕上げられている。

10は高環の口縁部破片である。端部は広い平坦面があり、内側に小さな段が作られている。外面はハケメの痕跡がある。この上をミガキで仕上げている。また内外面とも赤彩の痕跡が認められる。

まとめ

この遺構は、土橋の設けられた円形周溝墓の可能性が高い。出土した土器の多くは、桜町Ⅱ式である。築造時期は、土橋の特徴と出土土器から桜町Ⅱ式期としておく。(福島)

20号周溝墓

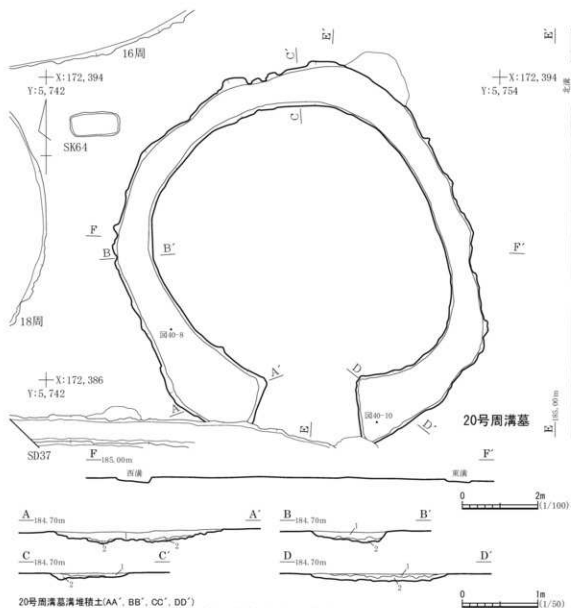
遺構 (図39・40, 写真35・36・122・123)

墳形は、帆立貝状の前方後円形周溝墓である。D7-D1・E2・E3グリッドにおいて、水田耕作土を除去した段階で確認した。検出面は第四層である。調査区の南端に近い場所である。前方部の先端は、平安時代の37号溝跡によって失っている。西側に18号周溝墓、北側に16号周溝墓、南

東側に23号周溝墓がある。周溝墓間に重複はない。このほか南側に21号周溝状遺構、北西側に64号土坑がある。

周溝墓の主軸はほぼ真北に沿って造られ、前方部は南に造られている。E-E'で計測すると、墳丘部の全長は8.9m、周溝まで含めると11m以上である。円台部の西端線は、ほぼ正円状になっているのに対して、北東部の端線は円弧の湾曲が緩く、正円ではなくなっている。これは、北東部の周溝が、かろうじて遺存していたにすぎなかったことも関連しているが、それだけが理由ではないであろう。本来から歪んだ形の円台と考えられよう。円台の計測値はF-F'で7.6m、西部の周溝幅は1m、東部は0.5mである。円台部において、埋葬施設は確認できなかった。

前方部は、円台側から先端に向かって開く形である。東西の側端線は直線である。円台部とは円



20号周溝墓墳堆積土(AA', BB', CC', DD')

- 1 黒褐色土 101R2/2(NP・FP・炭化物・酸化鉄多量、黄褐色土粒極少量含む)
- 2 暗褐色土 101R4/1(NP・FP・炭化物・砂・黄褐色土粒多量含む)

図39 20号周溝墓

台端線と側線の交わる角度は、東側がほぼ直角で、西側が少し開き気味で95°程度である。前方部先端は失われているが、東部周溝の外線と前方部東側端線をそれぞれ延長して前方部側端を求めれば、側端の長さはおおよそ2mとなる。西端も同様にして2m弱となる。

周溝は前方部付近が少し深くはなっていたが、大きく掘り込まれてはいない。全体に平坦な造りである。前方部の左右で深さ0.3m、北東部では痕跡が遺存した程度となる。また底面の凹凸は、動植物などによる変形である。周溝部埋葬の痕跡は、無かった。堆積土は黒褐色系で、炭化物粒が多く含まれていた。底面近くにあった黄褐色土粒は、墳丘や周溝壁の崩落土であろう。

遺物 (図40, 写真122・123)

周溝から出土した遺物は、桜町Ⅲ式が中心である。7～10は、それぞれ周溝の底面から出土した。このほか在地系土器(1～5)、北陸系の6が出土している。これ以外は細片である。

1は口縁部下端に押し引き沈線が巡らされている。また頸部には下から斜め上に工具を押し当てて、半円を連続させた刻み文としている。2の上端は刺突文である。刺突の後、工具を斜め下に下げている。3は、異節の縄文である。上端はヨコナデを施して消されている。4は体部下半の破片である。加熱による劣化が著しい。縄文の節は横行している。

5は、大型壺の上半部破片である。図示した以外では、5の体部破片がある。頸部は内傾し、口縁部は受け口である。口唇部上面をケズリとって山形にしている。6単位であろう。口縁部の縄文は節が斜めで、体部の節は横方向である。内面はケズリによる整形が施されている。その上を、口縁部は丁寧にナデで仕上げられ、頸部や体部は軽くおさえる程度の仕上げである。

6は、いわゆる月影甕の口縁部であろう。口縁部外面は横ハケメの上からヨコナデが施されている。擬凹線ではない。7は甕の体部破片である。内外面ともハケメで整形した上からナデで平坦に仕上げている。外面のナデはかなり強く施され、一部で砂粒の移動が見られる。11は小型甕の口縁部である。器面に凹凸がある。12は、小さな台環状の土器である。全体がナデとオサエで仕上げられている。

8は、底部以外、ほぼ遺存している。外面は斜めハケメ、内面は横ハケメで整形されている。口径は18cmである。口縁部は丁寧にヨコナデで調整されている。斜めに開く頸部から鋭くとがる口唇となる。口唇直下の外面は、幅8mmの帯状になっている。この下端は小さく突き出している。体部には煤が付着している。

9は甕の底部である。外面は斜めハケメで、底部端はオサエで整えられ、円盤状の底部となっている。底部外面は周辺が土器の自重で潰れて平坦となり、中心部が凹んだようになっている。内面はヘラナデで仕上げられている。底部からまっすぐに引き上げて施され、ヘラの当り痕による多角形が残っている。このとき、体部下端は粘土が軟らかいためか、幅4cm前後でヘラケズリ状の痕跡となっている。

10は精製鉢である。小さく屈曲する頸部から大きく開く口縁部が特徴的である。胎土は精製粘土で、砂粒はほとんど含まれていない。内外面をヘラミガキで仕上げられ、口縁部の内外面と体部外

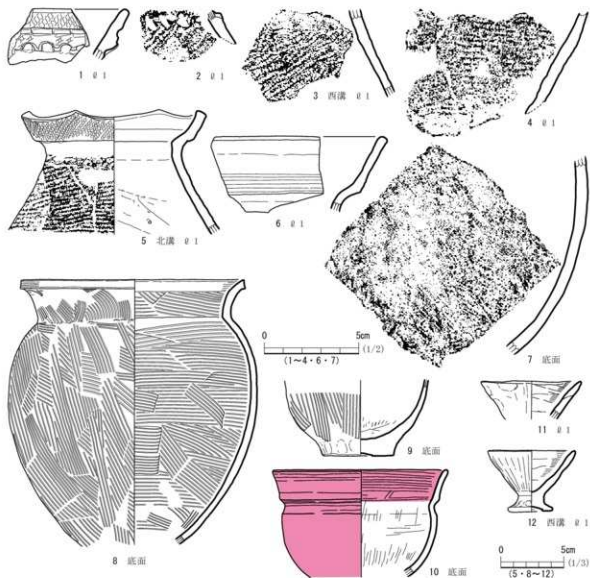


図40 20号周溝墓出土遺物

面には、赤彩が施されている。また外面には炭化物が付着している。

まとめ

この遺構は、前方部の突出が明確になった段階の前方後円形周溝墓である。後円部の形は不正円形である。時期は桜町Ⅲ式である。桜町遺跡の周溝墓では最も新しい段階のひとつである。

前方部の先端は、37号溝跡によって削平されていることから遺存していない。しかし、突出部東部の周溝墓が前方部の側線と周溝外郭線が交わる部分近くまで遺存していた。また西部でも同様な形状であったことから、前方部先端を区画する溝は造られていなかったと考えられる。

前方部付近の周溝は、他の部分と比べて幅が広がっている。したがって、突出部の奥行きが深くなり、強調されるような形状となっている。また前方部の先端が広く、墳丘側が狭く造られていることも出入口を明確に示す効果があろう。

(福 島)

23号周溝墓

遺 構 (図41・42, 写真37・38・124)

D7-F2・F3グリッドにおいて、耕作土を除去した段階で確認した。検出面は第IV層である。今回検出した周溝墓群の南端に位置している。調査区の南端に近い場所である。これより南側の畦の高まりからは、周溝墓が検出されなかったことから、2次調査で検出した部分の周溝墓群の南端に位置していると考えられよう。

北溝の一部は、平安時代の37号溝跡によって失っている。西側に22号周溝状遺構、西北側に22号周溝状遺構、さらに20号周溝墓がある。また、周溝墓の中央部を現在の水路と旧水路が東西に貫通して造られている。このため南部の大半は、遺存していない。

北部の周溝も、底部近くがかろうじて遺存していたにすぎない。南部もあわせて円形に造られている。形状のゆがみは、少ない。E-E'線を延長した部分で、周溝の円台部は8.7m、西部周溝幅0.8m、東部周溝幅0.9mである。突出部の有無は、遺存状況から判断することはできなかった。東北部で周溝の切れ目はあったが、これは削平を受けた結果であろう。

周溝のなかで、最も深く遺存していたのは西部のE-E'付近である。0.4m程度であった。底面は、動植物による凹凸が見られた。ほぼ平坦で、周溝部埋葬の痕跡は無かった。堆積土は黒褐色

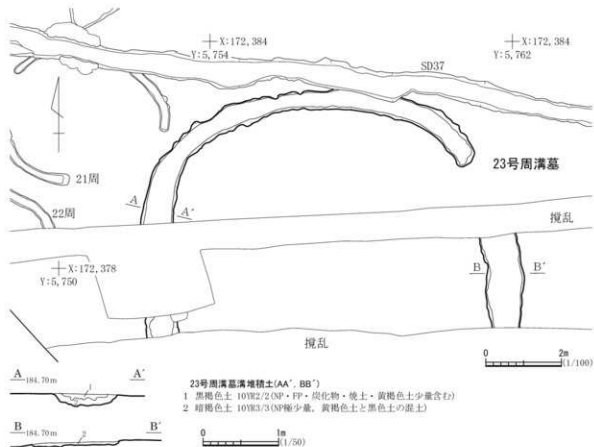


図41 23号周溝墓

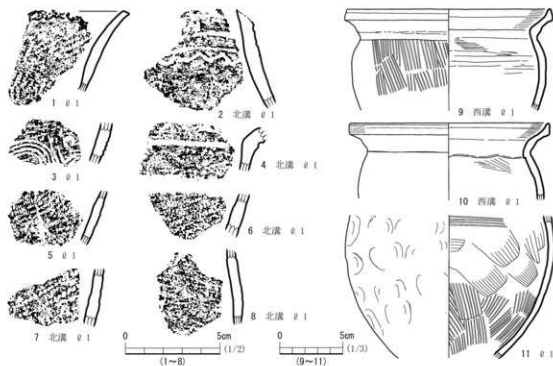


図42 23号周溝墓出土遺物

を基調として、焼土粒・炭化物粒と黄褐色土の小さな塊を含んでいた。

遺物 (図42, 写真124)

周溝から出土した遺物は、桜町Ⅲ式が中心である。9～11である。周溝の遺存状況から見て、この周溝墓にともなう土器であろう。9は甕の上半部破片である。「く」の字に曲る頸部から外傾し立ち上がり、口縁部内面の先端は急角度で立ち上がる。外面の無文帯は内湾気味で、内面と合わせて突き出すように収めている。外面の無文帯下端は、丸く小さな突き出しになっている。口縁部は内外面ヨコナデで仕上げられている。体部は外面が縦方向の左上りのハケメ、内面は横方向のハケメである。10の口縁部形は、9と大きな違いは無い。頸部内面の影みは、粘土帯の貼り付けたままになっているためである。全体に摩滅して、整形・調整痕跡の観察は難しい。11は、体部下半部の破片である。内面の下部には、斜め左上りのハケメが明瞭に残っている。上半は不明瞭で、遺存する上端は横方向のハケメらしい。外面は劣化が著しいが、ナデで仕上げられている。

在地系土器は、縄文(1・5・6)と撚り糸(7・8)、それに沈線や櫛描文などを示した。

まとめ

この遺構は、円形周溝墓である。周溝は整った円形で、幅も一定している。18号や19号周溝墓と比べると墳形は明確である。突出部は確認していないが、南部に設けられていた可能性がある。周溝から出土した9～11により、桜町Ⅲ式としておく。桜町遺跡の周溝墓では最も新しい段階のひとつである。この周溝墓より南側では、周溝墓は検出されていない。近くには、圃場整備による農道の高まりが遺存していたが、この部分にも周溝墓は造られていなかった。今回検出した周溝墓群の南端を限る遺構である。

(福島)

第3節 周溝状遺構

周溝内に掘立柱建物跡を伴うもの（13・17号周溝状遺構）、周溝の規模が小さく、周溝の壁面や底面の造りが安定しないもの（21・22号周溝状遺構）、削平などで周溝の平面形が不明なもの（12・24号周溝状遺構）を周溝状遺構とした。これら周溝状遺構の年代は、前掲した周溝墓とはほぼ同時期で、弥生時代後期後半頃を中心とすると考えている。

12号周溝状遺構（図43・44、写真39・125）

遺 構

12号周溝状遺構は調査区中央、D6-D7・E7グリッドに位置する。30号溝跡と重複し、本遺構の方が古い。本遺構の西側には11号周溝墓が位置する。

本遺構の平面形は円形と推察している。周溝内堆積土は黒褐色土を基調とする自然流入土である。周溝の幅は、西溝が最も広く72cmである。検出面からの深さは西溝で8cm、東溝で12cmと極めて浅い。底面は平坦でなく、西溝に比べ東溝が深い。周壁はわずかに遺存する程度で、底面と周壁の境は明瞭でない。

遺 物

遺物はいずれも周溝の底面からわずかに浮いた位置から出土した。1～3は壺の上半部破片で、押し引き状の沈線で文様が描かれる。4～8は壺の体部下半部であろう。外面はやや粗い撫糸文が施される。10～16は櫛歯状施文具で文様が描かれる壺である。13は波状文、15・16は籐状文が施される。18・19は口縁部幅が短く、有段口縁となる甕である。20は頸部で括れ、口縁部にかけて「く」の字に開く甕である。口縁部中位に軽い段が観察できる。体部外面は縦位のナデで仕上げられる。内面は口縁部が横位ミガキ、体部は整形痕のハケメを残す。21～23は有段口縁となる甕で、口縁部外面には浅い凹線が数条めぐる。23は口縁部下端にキザミが施される。24は高坏脚部で、脚下端に円孔が認められる。

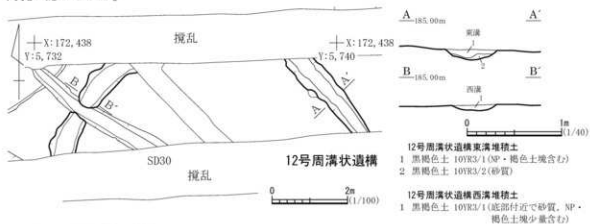


図43 12号周溝状遺構

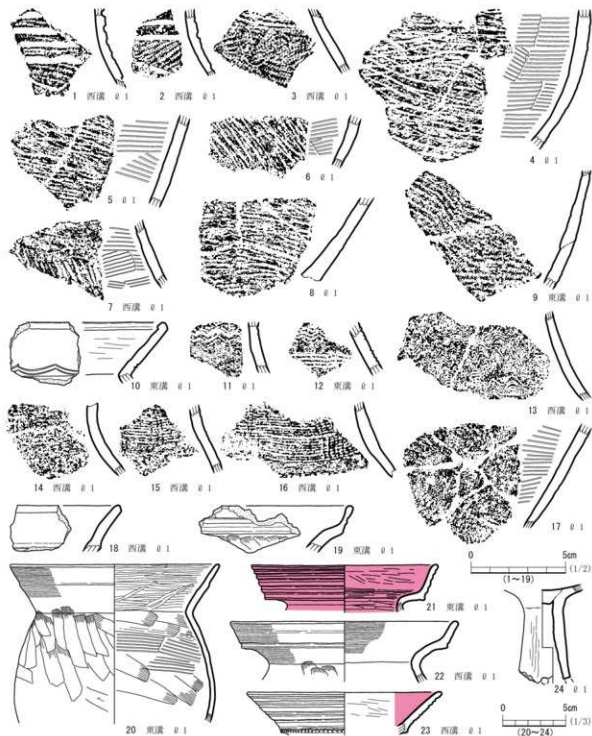


図44 12号周溝墓出土遺物

まとめ

本遺構は全体的な形状は不明であるが、西溝が弧状になることから、円形の周溝状遺構と推察している。11号周溝墓と比べて、周溝の壁面や底面が安定しないため、周溝墓とは断定できない。また周溝内に柱穴も確認できないことから、13号周溝状遺構に見られる周溝を伴う平地式住居とも考えにくい。本遺構の年代は、弥生時代後期後半頃の桜町Ⅱ式期と考えている。(福田)

13号周溝状遺構 (図45~47, 写真40~42・126・127)

遺 構

本遺構は円形周溝とその内部に配された28号掘立柱建物跡で構成される。調査区の北東側、D6-C3・D3グリッドに位置する。本遺構と重複する遺構はないが、北側に弥生時代の井戸跡とされる93号土坑、西側には9号周溝墓・46号掘立柱建物跡、南側には26号掘立柱建物跡が分布している。本遺構の周溝は円形に巡り南側で途切れて全周しない。周溝内法の規模は直径8.8mを測る。

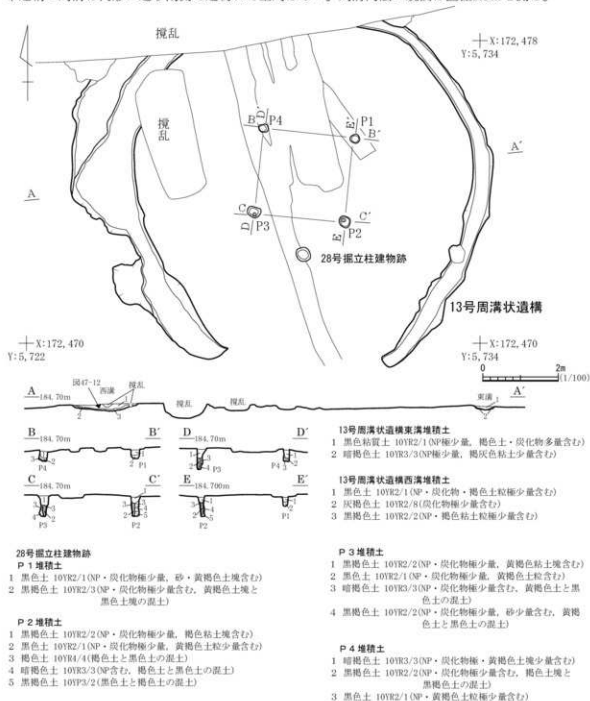


図45 13号周溝状遺構・28号掘立柱建物跡

周溝の形状は東西で異なる。東側は周溝幅が45~60cmと狭くなるが、西側は50~170cmと部分的に幅が広がり周溝の幅が一定しない。東側の周溝は遺存状態が悪く、深さが8cmと極めて浅い。周溝西側の中央部は部分的に深くなり、底面の凸凹が顕著である。周溝内堆積土はいずれも黒褐色土を基調とする自然流入土である。底面上には壁面の崩落土と考えられる黄褐色粘土を含む薄い黒褐色土層が覆っている。

28号掘立柱建物跡は、周溝に区画された内部空間のほぼ中央部に位置する。主軸方向は真北に対して7度東に傾く。南側柱列と周溝の開口部の向きが揃っている。柱間は1間×1間の小型建物である。柱間距離は南北が2.2m、東西が2.4mを測る。各柱穴の平面形は隅丸方形を基調とする。その規模は直径が25~30cmである。柱穴の深さは35~55cmを測る。P3・P4では柱痕跡が確認できた。柱材は直径10cmの細い丸太材と推定している。また、南側柱列の前面に柱穴GP1がある。深さが15cmと浅く、柱痕跡も観察できないことから、本建物跡を構成する柱とは考えにくい。

遺物

本遺構の出土遺物の多くは、周溝西側の中央部で周溝幅が広がる部分に集中する。底面から3~5cmほど浮いた状態で出土した。

図46-1は完形となる長頸壺である。体部中央に最大径を持ち、頸部にかけて長くすぼまる。口縁部が大きく外傾して開く。口縁部の下端部は段を持ち、指頭押圧によるキザミがめぐる。外面は地文として撚糸文が施される。内面は体部下半に接合痕を残すが、ナデを主体に器面調整される。図47-1~3は交互刺突による波状隆線や沈線文で文様を描く壺の破片である。7~9は櫛歯状施文具を用いて文様を描く壺である。7・8は鋸歯状に区画した内部に波状線を描く。9は口縁部が横位の波状文を数段めぐるし、頸部は押し引

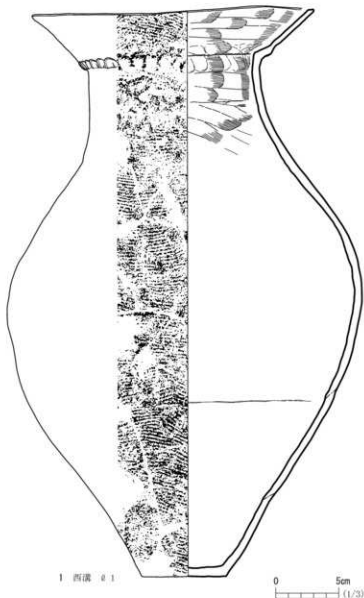


図46 13号周溝墓出土遺物(1)

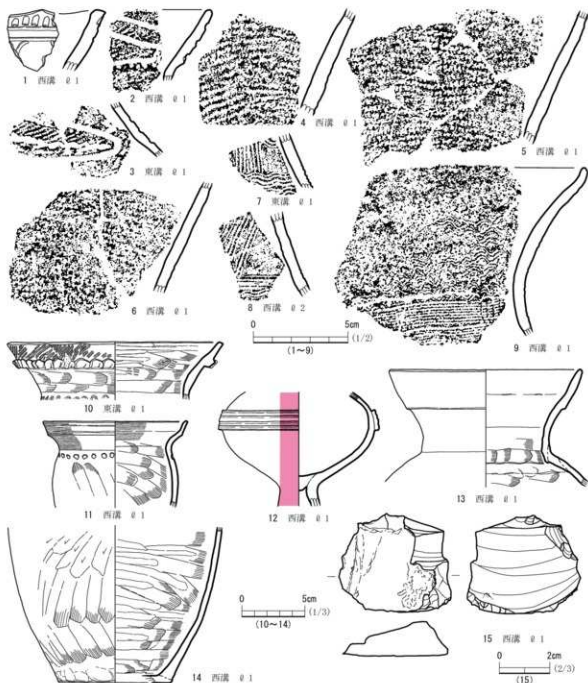


図47 13号周溝墓出土遺物(2)

き状の糜状文を描く。10は口縁部下端に隆帯状の粘土紐を貼り付け、その上部に指頭押圧によるキザミを施す。体部上半には燃糸文の結節文が観察できる。内面はナデで仕上げられるが、整形痕のハケメを残す。11は小型甕である。受け口状に開く有段口縁となる。体部は直線的に立ち上がり、上半部に列点状のキザミがめぐる。12は台付の裝飾壺であろうか。球形となる体部にたが状の突帯が貼り付けられる。体部は円筒形の脚部に粘土紐を重ねて造られ、脚の接合部に粘土を充填させて底部をつくる構造で、高環のつくりと共通する。13は壺の上半部破片である。口縁部の幅が長く、下端部に軽い段を持つ。頸部は体部と明瞭な境があり、口縁部に向かって直立気味に立ち上がる。

内外面とも摩滅して整形痕が観察できない。内面は体部と頸部の接合痕が明瞭に残る。14は壺または甕の体部下半の資料である。底部から直立気味に立ち上がる細長い体部となるのであろう。内外面ともナデで器面調整される。15は剥片で、背面に細かい2次加工痕が見られる。

まとめ

本遺構は円形にめぐる周溝とその内部に配された小型掘立柱建物跡からなる。17号周溝状遺構と類似した特徴を持ち、周溝を伴う平地式住居の可能性が高い。年代は出土土器の特徴から、桜町Ⅱ式期と考えている。

(福田)

17号周溝状遺構 (図48・49, 写真43・44・128)

遺 構

17号周溝状遺構は円形にめぐる周溝とその内部に建つ34号掘立柱建物跡で構成される。調査区の中央部、D6-A5・A6・B6グリッドに位置する。南東方向に延びる微高地状の平坦地に立地する。本遺構は9号周溝墓の南側、10号周溝墓の北西側に近接する。遺構検出面はLⅢa上面である。本遺構は25号溝跡より古く、35号溝跡よりも新しい。

本遺構の周溝は、北側にやや歪んだ円形になる。周溝の西側で端部が直角に屈曲して途切れ、周溝が全周しない。周溝内法で直径は7mを測る。周溝の形状は南北で特徴が異なる。北側の周溝は幅が広く、底面の凸凹が顕著となる。一方、南側の周溝は幅が狭い。底面は平坦に整い、周壁の立ち上がりが急峻になる。周溝内の堆積土は黒色土を基調とする自然流入土である。

34号掘立柱建物跡は17号周溝状遺構の内部でも北西よりに位置する。建物の規模は、南北柱列の長さが3.25m、東西柱列の長さが2.25mである。柱間は東西柱列が1間である。南北柱列の柱間は、西側が3間、東側が2間で、柱間の距離は0.7~1.9mと一定しない。柱穴の平面形はいずれも円形で、その直径は10~18cmである。深さは18~25cmを測る。P4~P6は柱痕跡が残る。柱材は直径6cmほどの細い丸太材と推定される。

遺 物

17号周溝状遺構の出土遺物は、周溝内の堆積土中から出土したもので、底面からわずかに浮いた状態で出土した。1は壺の頸部破片である。押し引き状の沈線で、2本の平行線と波状線が描かれる。2~4は壺または甕の体部破片で、外面に地文となる燃糸文が施される。5は甕の体部破片で、外面に整形痕のハケメを残す。6は完形の壺で、周溝が途切れる西端部でつぶれた状態で出土した。体部中央に最大径を持ち、やや丸みを帯びた体部となる。体部下半は底部に向かってすぼまる。口縁部は頸部で「く」の字に括れ、口唇部に向かって外反する。体部は内外面ともに整形痕のハケメを残し、体部下半はハケメの後にナデが施される。口縁部はヨコナデで仕上げられる。8は交互刺突による立体的な波状隆線文で飾られた壺である。口縁部の幅が広く、大きく外傾して開く。口唇部直下に浅い凹線がめぐり、その下部に2段の波状隆線がめぐる。9・10は高坏の脚部である。9は円筒形の脚から端部に向かって開く。10は短い棒状の脚となる。



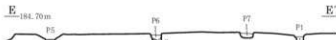
17号周溝状遺構堆積土(AA')

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・褐色土塊、炭化物・焼土極少量含む)
- 2 褐色粘土 10YR4/1(NP・黄褐色粘土多量含む、炭土)



17号周溝状遺構堆積土(BB')

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP、炭化物・焼土極少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(NP・FP・炭化物極少量、黄褐色土塊含む)
- 3 黒褐色土 10YR3/2(やや砂質、NP・黒色土塊含む)
- 4 黒色土 10YR2/1(NP含む、黄褐色土と黒色土の混土)



34号掘立柱建物跡

P 1 堆積土

- 1 黒色土 10YR2/1(NP・炭化物・黄褐色土粒極少量含む)

P 2 堆積土

- 1 黒色土 10YR2/1(NP・炭化物極少量、砂含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/3(NP・炭化物極少量、砂・黄褐色土塊含む)

P 3 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3(NP・砂・炭化物含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(NP含む、黄褐色土と黒色土の混土)

P 4 堆積土

- 1 黒色土 10YR2/1(NP・FP・炭化物極少量含む)
- 2 褐色粘土 10YR4/4(黒褐色土塊極少量含む)

P 5 堆積土

- 1 黒色土 10YR2/1(NP・炭化物極少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(NP極少量含む、黄褐色土と黒色土の混土)

P 6 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・砂・炭化物・焼土含む)
- 2 黒色土 10YR2/1(NP・炭化物・黄褐色土粒含む)

P 7 堆積土

- 1 黒色土 10YR2/1(NP・砂・炭化物含む)



図48 17号周溝状遺構・34号掘立柱建物跡

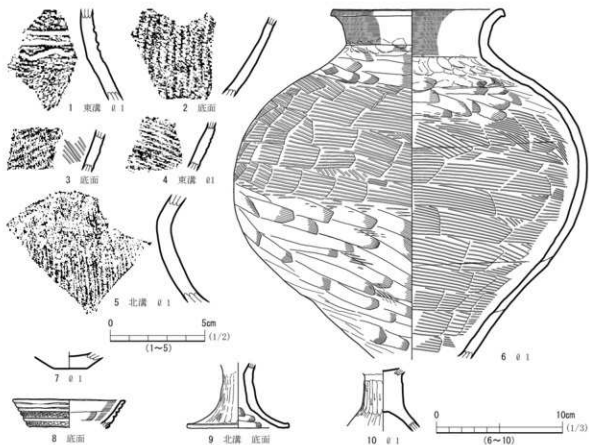


図49 17号周溝墓出土遺物

まとめ

17号周溝状遺構は円形周溝によって区画された内部に34号掘立柱建物跡が伴う。北陸地域に見られる周溝を伴う平地式住居跡に類似する特徴がある。周溝の形状から9号周溝墓に後続し、10号周溝墓に先行する時期、桜町Ⅱ式期と考えている。(福田)

21号周溝状遺構 (図50, 写真45・46)

遺 構

D7-E2・F2グリッドにおいて確認した。検出面はIV層である。周溝墓群の南端近くである。北側に20号周溝墓、南東側に23号周溝墓があり、南西には21号周溝状遺構がある。北部は、平安時代の37号溝跡によって失っている。

南西部と北西部に途切れがあり、弧状に湾曲する細長い溝が対面するような位置で配置されていた。溝幅は0.2~0.3m、深さは0.3m前後である。溝の断面形はU字形で、壁面は直立している。溝の東北部は、北部が37号溝によって、長さ約2mが失われている。この部分で途切れていないとすれば、この溝の東端と西端は4.3mである。

堆積土は黒褐色系で炭化物や黄褐色土粒を含んでいる。土の特徴は周溝墓の堆積土と同じ特徴である。また周溝墓の間に位置して、これと重複していないことから、弥生時代の遺構と考えている。

22号周溝状遺構 (図50, 写真45・46)

遺 構

D7-E2・E3グリッドにおいて確認した。検出面はⅢ層である。21号周溝状遺構の南西部に位置している。西端は調査区外に延びており、南端は水路により、失っている。幅0.8mの水路を越えては延びていない。北側に突き出して円弧を描いて延びている。

堆積土は周溝墓と共通していること、また重複していないことから、周溝墓と同時期と判断した。周溝墓とするには小型である。21号周溝状遺構と合せて遺構の性格は不明である。 (福 島)

24号周溝状遺構 (図51・52, 写真47・129)

遺 構

本遺構は調査区の中央部、D6-A7・B7グリッドに位置する。周辺は近年の水田開発により旧地形が大きく改変されている。削平が少ない農道部分において周溝の一部を確認した。本遺構と重複する遺構はないが、北東側には10号・11号周溝墓が位置している。

本遺構の周溝は直角に曲がるコーナー付近を確認したのみで、全体的な平面形などは不明である。周溝の屈曲部で、10号周溝墓に近接する部分の幅が狭くなる。周溝の西端部は連続せず、南側に屈曲する。この部分が土橋となる可能性を指摘しておく。周溝の壁面は上半部が崩落により緩やかな



図50 21・22号周溝状遺構

傾斜となるが、下半部は急峻な立ち上がりとなる。周溝の底面は平坦で、その標高は184.3mである。周溝内に堆積する1～3層はF Pを含む黒褐色土層で、周溝外部からの自然流入土である。4層は墳丘や壁面の崩落土を含む暗褐色土で、周溝の底面を薄く覆う。

遺物

遺物はいずれも堆積土中で、周溝の底面から浮いた位置から出土した。図52-1・2・6は口縁部下端に交互刺突による波状隆線で飾られた壺である。押し引き状の沈線で文様を描き、区画内部に捺糸文を充填させる。3・4は口縁部直下に隆線をめぐらし、その上部に指頭押圧によるキザミが施される。8・9は口縁部が「く」の字状に開く壺であろう。口縁部には沈線文などの文様がなく、地文となる捺糸文が施される。10～13は地文に捺糸文を施す壺で、12は内面に整形痕のハケメを残す。14・15は地紋に捺糸文が施される壺の底部資料である。

16・20は口縁部の幅が短く、やや丸みを帯びた有段口縁となる甕である。20は口縁部下端にキザミがめぐる。21は外面に整形痕のハケメを残す甕で、体部上半にへう状工具によるキザミがめぐる。18は口縁部下端に軽い段を持つ壺で、段の部分に指頭押圧によるキザミが施される。口縁部は浅い凹線が数条めぐり、在地系土器と北陸系土器の特徴が折衷している。

24～26は楕円状土文具で文様が描かれた壺である。24は鋸歯状に区画された内部に斜格子文が描かれる。25・26は押し引き状の波状文が描かれる。

27は蓋または台付鉢の破片であろうか。28・29は高坏である。28は脚部下端に段を持つ。29は坏部下半に明瞭な段を持ち、口縁部にかけて外反する。内外面ともミガキが密に施される。

まとめ

本遺構は直角に曲がる周溝の一部を確認しただけであるが、周溝の形状や底面の状態から、方形墳丘となる周溝墓の可能性はある。10号周溝墓に接する部分の周溝が狭く乱れることから、10号周溝墓よりも新しい時期に属する周溝墓と推定している。年代は10号・11号周溝墓に後続する時期で、桜町Ⅱ式期と考えている。

(福田)

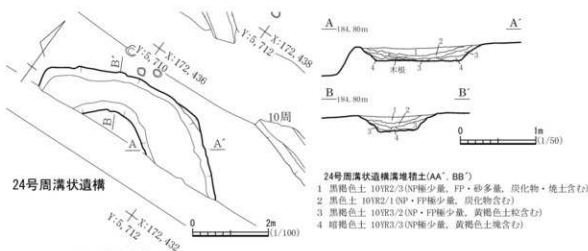


図51 24号周溝状遺構

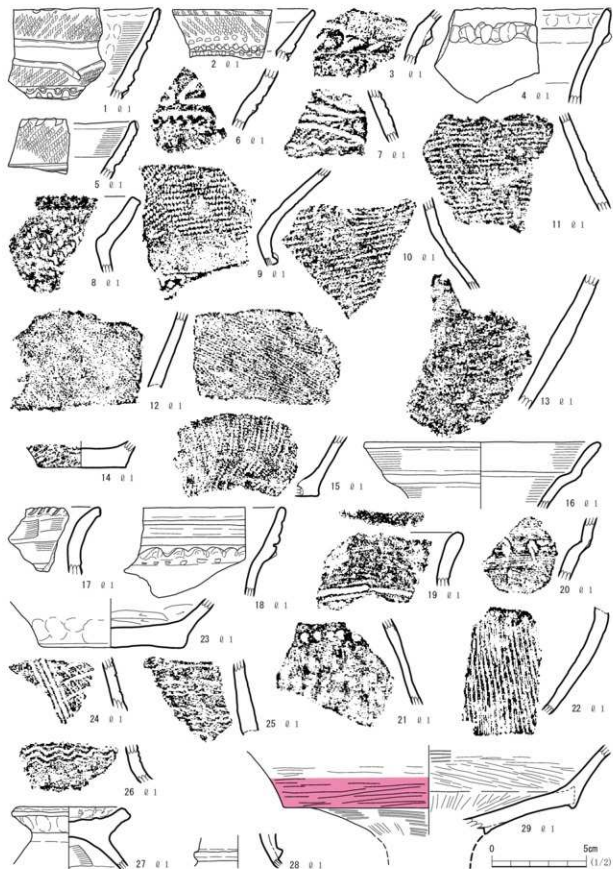


图52 24号周沟状遗構出土遺物

第4節 竪穴状遺構

竪穴状遺構を検出した段階では竪穴住居跡を想定していた。調査の結果、底面上に炉跡や上屋を支える柱穴などがなく、竪穴状居跡とする積極的な根拠を見出すことができない。こうした特徴を持つものを竪穴状遺構とした。年代は弥生時代後期後半と考えている。

6号竪穴状遺構

遺 構 (図53・54, 写真49・130)

6号竪穴状遺構は調査区中央から東より、D6-D5・E5グリッドに位置する。本遺構に重複する遺構はないが、東側に7号竪穴状遺構、北側には26号掘立柱建物跡が分布している。遺構はLIVaとした黄褐色粘質土の上面で確認した。

本遺構の東側は、現代の水路などで壊されて遺存していない。残存する西側の形状から、平面形

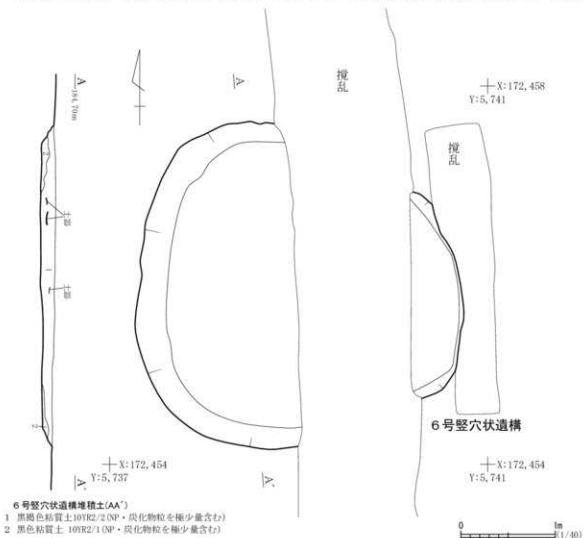


図53 6号竪穴状遺構

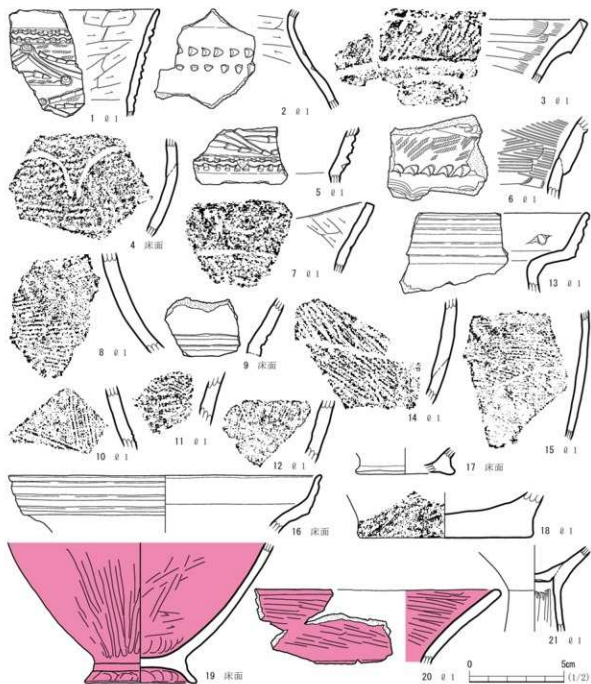


図54 6号竪穴状遺構出土遺物

は隅丸方形になると推定される。規模は、長軸の長さが3.42m、短軸の長さが3.40mを測る。

検出面から底面までの深さは15cmと浅い。底面は周壁から中央部に向かってわずかに深くなるが、全体的には平坦面となる。なお、底面上に炉跡や柱穴などの施設は確認できない。遺構内の堆積土は、炭化物を含む黒褐色粘質土で、自然流入土と判断した。

遺 物 (図54, 写真130)

遺物はいずれも底面からわずかに浮いた位置から出土した。1・5は円形竹管を用いた交互刺突と押し引き状の沈線文で文様を描く壺である。6は口縁部下端に指頭押圧によるキザミを持ち、体

部には櫛歯状施文具による波状文が描かれる。内面には整形痕のハケメを残す。10・11は櫛歯状施文具で文様が描かれる壺である。10は鋸歯状の区画が描かれる。11は横位の波状文が描かれ、下半部は地文の燃糸文が施される。13・16は有段口縁となる甕である。口縁部外面には浅い凹線がめぐり、13の内面には豆であろうか、穀物類の付着痕が観察できる。19は鉢であろう。底部からやや丸みを帯びに立ち上がる体部となる。底部はリング状に貼り付けた粘土紐をつまみ上げて高台様になる。20は高環の口縁部で内外面とも密にミガキが施される。21は高環の脚部である。脚内部には整形時の工具痕が残る。

まとめ

本遺構は底面が平坦に整えられるが、炉跡や上屋を支える柱穴がないことから、竪穴住居跡とは考えにくい。その詳細な性格を特定する所見は得られなかった。年代は弥生時代後期後半ごろと考えている。

(福田)

7号竪穴状遺構

遺 構 (図55・56, 写真49・131)

本遺構は調査区の中央から東よりの場所で、D6-E5グリッドに位置する。本遺構に重複する



図55 7号竪穴状遺構

遺構はないが、西側に6号竪穴状遺構、63号土坑が分布する。遺構検出面はLIV a層である。

本遺構は、現況が宅地であったため、遺存状態が極めて悪い。わずかに遺存する周壁と底面から判断すると、平面形は楕円形になると推定される。遺存する規模は、長軸の長さが3.30m、短軸の長さが2.84mである。検出面から底面までの深さは10cmと極めて浅い。周壁は南東側でわずかに遺存している。遺構自体が浅いが、その立ち上がりは急傾斜となる。底面は微細な凹凸があるが、全体的には平坦である。なお、底面上で炉跡や柱穴は確認できない。遺構内の堆積土は黒褐色を基調とする粘質土で、自然流入土と判断した。

遺物 (図56, 写真131)

遺物は堆積土の下部から底面にかけて出土したものが多く、遺構の廃絶に近い時期の遺物と考えられている。出土位置は遺構の南東側に集中する傾向が見られる。1～13は地文が撚糸文で、刺突や沈線が多用する在地系土器で、器種は壺が主体を占める。14～28は文様で加飾されない北陸系土器で、器種に壺・甕の他に高坏が含まれる。

1～4は円形竹管状工具を用いた交互刺突と押し引き状の沈線で文様を描く壺である。1は口縁部下端に段を持つ長頸の壺であろう。文様は口縁部下端に横位沈線をめぐらす。口縁部の文様帯には連弧文を二段に互い違いに描き、連弧文の連結部に円形竹管の刺突を加える。頸部は沈線文と同じ施文工を用いた波状文が描かれる。体部外面の地文は撚糸文である。2は波状口縁となる壺である。器面が剝落しているが、わずかに交互刺突と沈線文が遺存している。3は体部中位で、下向きの連弧文がめぐる。5～9は口縁部下端に指頭押圧によるキザミが施される。5は口縁部に浅い凹線がめぐる。それ以外は地文の撚糸文が施され、口唇部にキザミを持つものも見られる。11は折り返し口縁となる壺であろう。口縁部下端に上方からの刺突を施す。

14・15は甕の体部破片で、ヘラ状工具の刺突によるキザミがめぐる。16は鉢であろう。口縁部が受け口状に開く。17は折り返し口縁となる壺であろう。18・19は口縁部の幅が短い甕である。口縁部下端に鋭い稜を持ち、口唇部が上方につまみ上げられる。外面は整形痕のハケメを残す。20は口縁部の幅が長く、有段口縁となる甕である。口縁部下端の内外にやや丸みを帯びた段を持つ。21は鉢であろうか、口縁部に軽い段を持つ。24は体部上半部の破片で、頸部に向かってすぼまる壺であろう。27は高坏の口縁部破片で、口縁部が外反して開く。28は高坏の脚部である。円筒形の脚部下端に段を持ち、裾部は大きく開く。段の上部には円孔があり、この部分を中心にベンガラにより赤彩される。

まとめ

7号竪穴状遺構は遺存状態が極めて悪く、形状などの詳細な特徴は不明である。西側に分布する6号竪穴状遺構と同様に、底面上に炉跡や上屋を支える柱穴などの施設が確認できないなど、竪穴住居跡とは考えにくい。年代は出土した土器の特徴から、9号周溝墓とそれほど時間差はなく、弥生時代後期後半頃と考えている。

(福田)

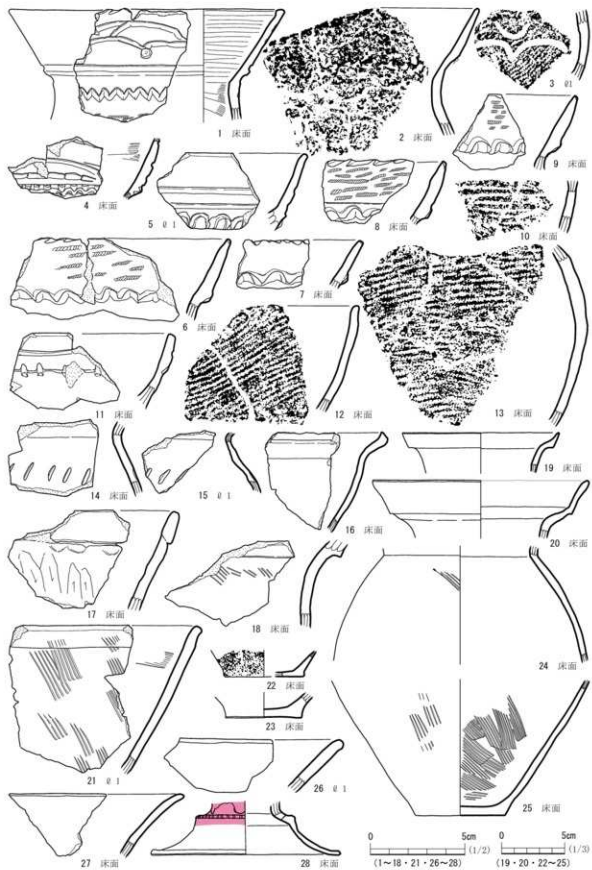


图56 7号竖穴状遺構出土遺物

8号竪穴状遺構

遺 構 (図57・58, 写真50・132)

本遺構は調査区の中央部、D 6-B 4 グリッドに位置する。周辺は南東方向に延びる微高地上の平坦地で、その標高は184.50mである。本遺構の周辺は、弥生時代と平安時代に属する遺構が数多く分布する。28・31号溝跡と重複関係にあり、本遺構は31号溝跡より新しく、28号溝跡よりが古い。本遺構と近い弥生時代の遺構としては、西側に9号周溝墓、北側に46号掘立柱建物跡・70号土坑が分布している。遺構検出面はLⅢaとした沼沢バミスを含む褐色土の上面である。

8号竪穴状遺構の平面形は楕円形である。長軸の方向は、真北に対して55度西に傾く。北側に分布する46号掘立柱建物跡の主軸方向と一致している。規模は長軸の長さが4.12m、短軸の長さが2.60mを測る。検出面から底面までの深さは15cmと極めて浅い。長軸側の周壁は崩落が著しく、その傾斜は緩やかになる。一方短軸側の周壁は、崩落が少ないためか、長軸側に比べれば急峻に立ち上がる。底面は草木根の影響による微細な凹凸があるが、本来的には平坦に整えてつくっている。なお、底面上に炉跡や柱穴などの施設は確認できない。

遺構内堆積土は3層に分けた。1・2層は炭化物を含む黒褐色土で、遺構全体を覆う自然流入土

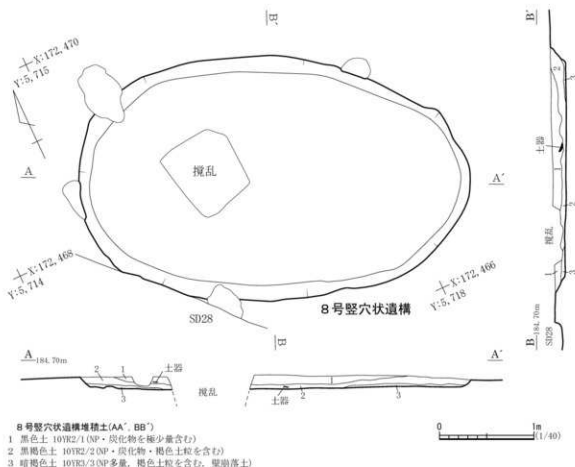


図57 8号竪穴状遺構

である。3層は周壁の崩落土を含む暗褐色土で、周壁際の底面を薄く覆う。遺構の廃絶直後の堆積土と判断した。

遺物 (図58, 写真132)

8号竪穴状遺構の遺物は、いずれも1・2層の下部から底面上にかけての位置より出土した。出土遺物は、円形竹管を用いた交互刺突や押し引き状の沈線文を多用する在地系土器が主体を占める。これに混ざり甕と高坏などに北陸系土器が出土している。

1は壺であろうか、口唇部付近の小破片である。口唇部の内外面に小突起を互い違いに配している。小突起に上端には円形竹管を用いた刺突文が施される。内外面とも小突起間には押し引き状の沈線で描かれた連弧文が充填される。2・3は折り返し口縁となる壺である。口縁部下端に下方向からの刺突、刺突具の側縁を利用して押し上げ気味に押圧したキザミを交互に施し、立体的な波状隆線文をつくる。7は口縁部上端に断面三角形となる粘土紐を貼り付けて肥厚した口唇部となる。口唇部上端には摺糸文を施し、沈線をめぐらす。また口唇部上端が内面に小さく突出する。この小突出は4～5単位であろう。口唇部下端は下方からの刺突2単位と刺突具側縁を押し上げ気味に押圧したキザミを交互に加えた、立体的な波状隆線文になる。頸部には口縁部の文様帯を区画する横位沈線と波状沈線がめぐる。8は波状口縁となる広口壺であろう。文様は押し引き状の沈線によって描かれた連弧文をモチーフとする。文様間に摺糸文を充填して無文部を作り出している。頸部の文様は、連弧文の連結部に円文と円形竹管の刺突が配されたものが基本的な文様配置となる。これら文様を頸部中央で反転し、90度ずらせて上下に対峙している。9は直線的に立ち上がる頸部から口縁部が大きく開く器形の広口壺である。口縁部と頸部の境には、並行する二重沈線により隆帯風に出出した部分に交互刺突を加えて、波状隆線文を施す。頸部の文様は、大小の弧文を連結したものが基本モチーフとなり、それを上下で反転させて、大小の連弧文をずらせて対峙させている。その後、文様間に摺糸文を充填して無文部をつくる。15～17は沈線文による文様が描かれる壺の破片である。10・18・20は沈線文が描かれない壺の口縁部破片である。18は口縁部の幅が長くなる。21は口縁部が無文となる壺であろう。

22は断面三角形となる突帯状の粘土紐を貼り付け、口縁部下端に段をつくる壺である。段の上部にベンガラにより赤彩される。24は高坏である。坏部下端に明瞭な段がある。内外面とも単位幅の狭いミガキが密に施される。25～26は壺または甕の底部である。外面は摺糸文が施される。25は小型土器で、体部が直立気味に立ち上がる壺であろうか。

28～30は二次加工がある剥片である。31は側縁部に両面から細かい調整刻線を加えている。

まとめ

8号竪穴状遺構は平面形が楕円形をなす大型遺構で、6・7号竪穴状遺構に類似する。底面上に炉跡や上屋を支える柱穴など住居機能に関連する施設が確認できない。本遺構の長軸方向が北側に近接する46号掘立柱建物跡の向きと一致することを評価すれば、建物跡に伴う廃棄坑の可能性を指摘しておく。年代は弥生時代後期後半ごろと考えている。

(福田)



図58 8号竪穴状遺構出土遺物

第5節 掘立柱建物跡

今回の2次調査では掘立柱建物跡を28棟確認した。弥生時代に属する掘立柱建物跡は8棟確認した(26・27・28・34・35・41・42・46号掘立柱建物跡)。13号周溝状遺構に代表される周溝をとともなう平地式住居跡となるものもある。一方で91・94号土坑から出土した建物部材や梯子などの特徴から、大型建物や高床建物も存在する可能性が高い。

平安時代に属する掘立柱建物跡は、すべて集落の北西外縁を区画する25号溝跡の南西側に位置する。建物の配置から、3間×4間の建物と2間×2間の小型総柱建物がセットで分布している。建物跡の向きや建て替えの痕跡などから、8世紀末葉から9世紀後半代にかけて、大きく3時期の変遷が確認できた。また、9・10・15・16号周溝墓の墳丘部分に建物跡が造られていない点や、9・16号周溝墓の周溝内からは平安時代の土器が出土することから、平安時代までは周溝墓の墳丘が残り、周溝も完全に埋没せずに凹地となっていたのであろう。

19号掘立柱建物跡 (図59・82, 写真53)

遺 構

本建物跡は平安時代に属する2間×2間の総柱建物跡である。36・37号掘立柱建物跡と同所で連続して3軒の建物跡が建て替えられている。3軒の建物跡の中で最も新しい時期に属する。調査区の中央部、D6-C7・C8グリッドに位置する。遺構検出面はLIV A層である。

本建物跡の西側は、近年の水田により削平されているため、柱穴の底面付近がわずかに遺存する程度である。建物跡の向きは真北に対して23度東に傾く。南北柱列の長さが3.0m、東西柱列の長さが3.4mである。柱間距離は南北柱列が1.5m、東西柱列が1.7mで揃う。

柱穴の平面形は隅丸長方形である。その規模は長辺が40cm、短辺が30cmである。柱穴の深さは最大で40cmで、その底面の標高は184.1m付近で揃う。柱穴の土層観察から、柱材は直径20cm前後の丸太材が用いられたと推察している。

遺 物

本建物跡の柱穴から弥生土器・土器が数点出土した。図82-12はP2の埋土から出土した弥生土器である。壺または甕の体部破片で、外面に地文として燃糸文が施される。

ま と め

本建物跡は2間×2間の総柱建物跡である。36・37号掘立柱建物跡と同所で連続して建て替えられている3軒の建物跡の内、最も新しい時期の建物跡である。南側に位置する40号掘立柱建物跡の主軸方向と一致することから、これに付属する倉庫跡と考えている。また、詳細な年代を把握できる遺物はないが、周辺に分布する建物跡の配置と本建物跡の連続性から、9世紀前半代を中心とする時期と判断した。

(福 田)

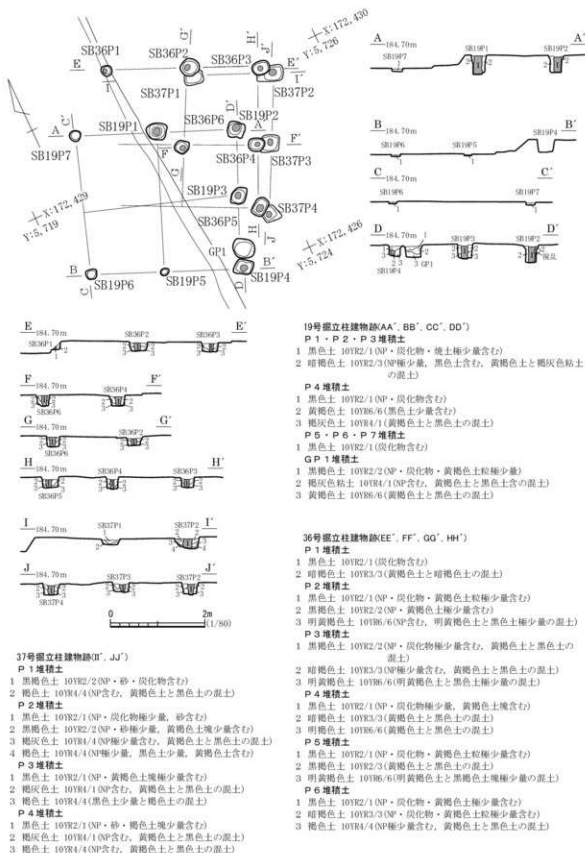


図59 19・36・37号掘立柱建物跡

20号掘立柱建物跡 (図60・61・82~84, 写真54~56)

遺 構

調査区南部、D6-D9グリッドに位置している。試掘調査において確認された掘立柱建物跡である。南側に29号掘立柱建物跡、西側に30号掘立柱建物跡があり、北半分で22号・23号掘立柱建物跡と重複して、20号掘立柱建物跡の方が新しい。このほか西側に23号溝跡や土坑などがある。

桁行5間、梁行2間の南北棟である。想定柱芯間で規模を測ると梁行5.8m、桁行7.95mである。今回検出された掘立柱建物では最も規模の大きなものである。主軸はN-13°-Eである。

柱穴番号は、北西端の柱穴を基点として、時計回りに付した。柱穴の平面形は矩形、あるいは長方形を基調にしている。比較的大きな柱穴2では長さ1m、幅0.6mで、小さな柱穴8では幅0.4m、長さ0.5mである。壁は垂直に造られている。深さは、大半が0.6m前後で一定しているが、柱穴6と柱穴15、柱穴7と柱穴11は、極端に浅く、深さは0.1m前後であった。ただし柱穴7において、直径20cmの柱痕を確認している。この大きさは、ほかの柱穴5基から検出した柱痕の直径と同様な大きさである。柱痕は、柱穴2・7・11で確認した。

埋土は黄褐色土を主体にして、これに黒褐色系の土が混ざっていた。いずれも水平に堆積している。突き固めて、叩きしめられていることを示している。柱穴1からは、柱の沈下防止の礎木が残っていた。

柱穴の作り変えは、柱穴9・10・12・14、柱穴1と柱穴17で2回の重複を確認している。柱穴1と柱穴17の重複は、平面観察では確認できななかったが、土層断面によって確認した。柱穴17の最終柱穴は、旧柱穴より、南に寄せて造られていた。柱穴12と柱穴9も同様である。また柱穴10では、西側に移っていた。新しい掘立柱建物は、古い掘立柱建物に対して、少し南西に寄せて造られたのであろう。

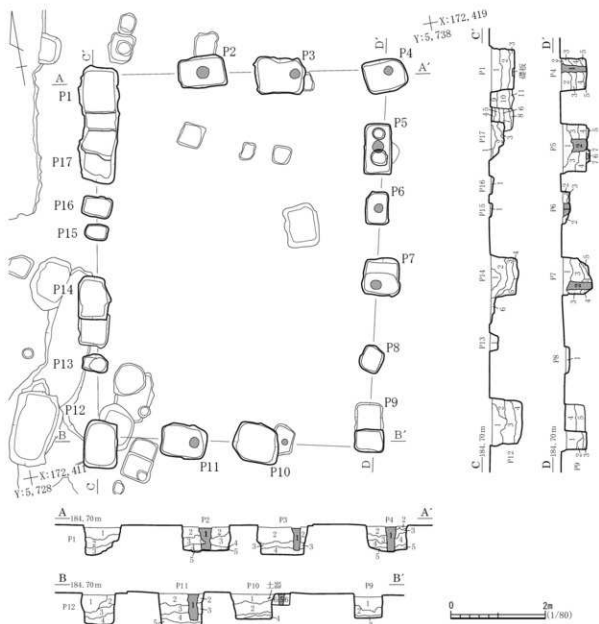
このほか、柱穴5では、底面に柱圧痕と考えられる円形の凹みが、最終柱痕を南北に挟むように2箇所で見出されていた。この建物跡は3回以上の立替があった可能性が高い。比較的長く使われたのであろう。

遺 物

柱穴の埋土からは、弥生時代の土器と平安時代の土師器・須恵器が出土している。弥生土器は、混入である。平安時代の土師器は、坏5点を示した。いずれもロクロ成形の内黒土器である。体部下端の整形方法は回転ヘラケズリが3点、手持ちヘラケズリが2点である。須恵器は坏4点といわゆる焼き台1点を示した。坏の体部は内外面の凹凸が除去されている例が大半である。底も広く、立ち上がりが低い。

ま と め

この掘立柱建物跡は、今回検出したなかで、最も規模が大きい。桜町遺跡における平安時代の中心的な住居のひとつである。西側には、建物にともなう土坑などがあった。(福 島)



20号掘立柱建物跡

P 1 堆積土

- 1 黄褐色土 10YR6/6 (NP・黄褐色土と黒色土少量の混土)
- 2 黒褐色土 10YR3/2 (NP・炭化物・焼土含む, 黒褐色土と黄褐色土の混土)
- 3 褐色土 10YR4/1 (NP含む, 黄褐色土と黒色土の混土)

P 2 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (NP・FP・砂・炭化物・焼土・黄褐色土塊含む)
- 2 黄褐色土 10YR6/6 (黄褐色土と黒色土少量の混土)
- 3 褐色土 10YR4/1 (黄褐色土と黒色土の混土)
- 4 褐色土 10YR4/1 (褐色土と黒色土少量の混土)
- 5 黒褐色粘土 10YR2/2 (炭化物・黄褐色土少量含む)

P 3 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (NP・FP・炭化物・焼土・褐色土少量含む)
- 2 暗褐色土 11YR3/3 (NP・FP・褐色土塊多量, 黒色土少量含む)
- 3 黄褐色土 10YR6/6 (NP含む, 黄褐色土と黒色土少量の混土)
- 4 褐色土 10YR4/1 (黄褐色土と黒色土の混土)

P 4 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3 (NP・炭化物含む, 黄褐色土少量と暗褐色土の混土)
- 3 黄褐色土 10YR6/6 (黄褐色土と黒色土少量の混土)
- 4 褐色土 10YR4/1 (黄褐色土と黒色土の混土)
- 5 褐色土 10YR4/1 (黄褐色土と黒色土の混土)

P 5 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2 (NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)
- 3 黒褐色土 10YR3/2 (NP・炭化物含む, 黒褐色土少量と黄褐色土の混土)
- 4 褐色土 10YR4/1 (NP・炭化物含む, 混土)
- 5 黒色土 10YR2/1 (NP・黄褐色土含む)
- 6 黒色土 10YR2/1 (NP・炭化物・黄褐色土少量)
- 7 暗褐色土 10YR3/3 (NP含む, 黄褐色土多量と暗褐色土の混土)

図60 20号掘立柱建物跡 (1)

20号掘立柱建物跡

P6堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・焼土含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/2(NP・FP・炭化物・焼土含む、黄褐色土少量と黒褐色土の混土)
- 3 暗褐色土 10YR3/3(NP含む、黄褐色土と暗褐色土の混土)

P7堆積土

- 1 暗褐色土 10YR3/3(NP・FP・焼土・炭化物含む、黄褐色土多量と暗褐色土の混土)
- 2 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 3 黒褐色土 10YR3/2(NP・FP・炭化物含む、黄褐色土多量と黒褐色土の混土)
- 4 黒褐色土 10YR2/2(NP・炭化物含む、黄褐色土少量と黒褐色土の混土)

P8堆積土

- 1 暗褐色土 10YR3/3(NP・炭化物含む、黄褐色土と黒褐色土の混土)

P9堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/2(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)
- 2 褐色土 10YR4/4(NP含む、褐色土と黒褐色土少量の混土)
- 3 褐色土 10YR4/1(褐色土と黒褐色土少量の混土)
- 4 暗褐色土 10YR3/3(NP・FP・炭化物多量、混土)
- 5 褐色土 10YR4/4(黒褐色土多量、混土)

P10堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/2(NP・FP・砂・炭化物・焼土含む、黄褐色土少量と黄褐色土の混土)
- 2 褐色土 10YR4/4(NP・炭化物・焼土含む、褐色土と黒褐色土少量の混土)
- 3 暗褐色土 10YR3/3(NP含む、黄褐色土と黒褐色土の混土)
- 4 褐色土 10YR4/1(NP含む、黄褐色土と黒褐色土の混土)
- 5 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土含む)
- 6 暗褐色土 10YR3/3(NP・FP・炭化物・黄褐色土含む)

P11堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(NP・炭化物・焼土含む、黄褐色土と黒褐色土の混土)
- 3 黒褐色土 10YR3/2(NP・炭化物・焼土含む、黄褐色土少量と黒褐色土の混土)
- 4 褐色土 10YR4/1(黄褐色土と黒褐色土の混土)
- 5 褐色土 10YR4/4(黒褐色土少量、混土)

P12堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・砂・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)
- 2 褐色土 10YR4/4(NP含む、黄褐色土と黒褐色土の混土)
- 3 暗褐色土 10YR3/3(NP含む、黄褐色土と暗褐色土の混土)
- 4 褐色土 10YR4/1(黒褐色土と褐色土の混土)

P13堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・焼土少量、黄褐色土少量含む)

P14堆積土

- 1 暗褐色土 10YR3/3(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/3(NP・FP・炭化物・焼土含む、黄褐色土多量と黒褐色土の混土)
- 3 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・焼土含む、黄褐色土少量と黒褐色土の混土)
- 4 黄褐色土 10YR6/6(黄褐色土と黒褐色土少量の混土)
- 5 褐色土 10YR4/1(NP含む、褐色土と黄褐色土少量の混土)
- 6 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土多量含む)

P15・P16堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)

P17堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/2(NP・FP・炭化物・焼土含む、黄褐色土と黒褐色土の混土)
- 3 暗褐色土 10YR3/3(炭化物・褐色土含む、黒褐色土と暗褐色土の混土)
- 4 褐色土 10YR4/4(褐色土と黒褐色土少量の混土)
- 5 黒褐色土 10YR3/2(NP・炭化物・焼土含む、黄褐色土少量と黒褐色土の混土)
- 6 褐色土 10YR4/1(黄褐色土と黒褐色土少量の混土)
- 7 黒褐色土 10YR3/2(NP含む、黄褐色土少量と黒褐色土の混土)
- 8 黄褐色土 10YR4/4(黄褐色土と黒褐色土少量の混土)

図61 20号掘立柱建物跡 (2)

21号掘立柱建物跡 (図62, 写真57・58)

遺 構

調査区南部、D6-E9グリッドに位置している。22号・23号掘立柱建物の東に当たる場所である。各柱穴に重複や他遺構との重複や、柱穴の造り替えはなかった。桁行2間、梁行2間の縦柱建物跡である。建物跡の軸線は、N-22°-Eである。西側にある23号掘立柱建物跡と近似した方向である。

四方の角に位置する柱穴の想定柱位置を結ぶ四角形は、ほぼ正方形となる。この四角形の一辺は、2.6mである。中央の柱穴9は、四隅の柱穴を結ぶ対角線の交点に近い位置にある。また、南側柱列の中柱、柱穴6も柱穴4と柱穴5の midpoint から少し東にあるが、大きく外れることはない。

柱穴の平面形は矩形で、一辺0.25m程度である。掘形に沿って内部の埋土を掘り下げることは難しく、柱穴を断ち割って形状を確認した。深さは、柱穴8が約0.3mと最も深くなっていた。それ以外は0.2m前後である。また柱穴8では直径10cm程度の柱痕が底面から直立していた。埋土は、黄褐色土と黒褐色土の混土である。

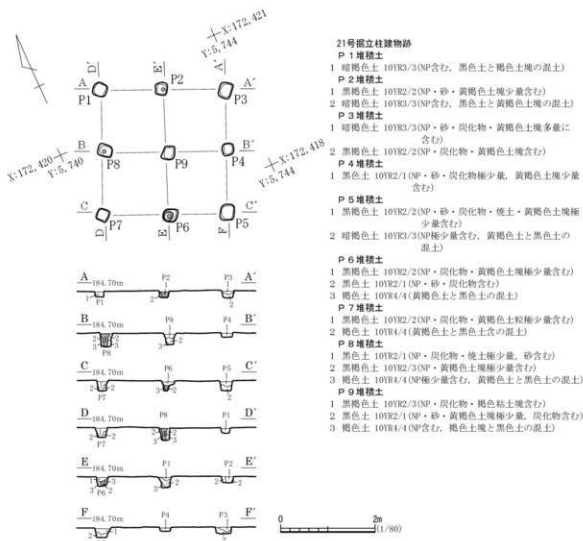


図62 21号掘立柱建物跡

まとめ

この掘立柱建物にともなう土器類は、確認していない。建物の軸線は西側にある22号掘立柱建物跡と共通していることから、これらと関連する遺構であろう。(福島)

22号・23号掘立柱建物跡 (図63・82～84、写真59～61)

遺構

調査区南部、D6-D8・9地区にグリッドしている。22号掘立柱建物と23号掘立柱建物は、ほぼ重なる場所に造られていた。両建物跡とも、桁行2間、梁行2間の総柱建物跡である。柱穴の重複関係から22号掘立柱建物の方が新しい。また南半部で20号掘立柱建物跡とも重複して、22・23号掘立柱建物跡の方が古い。

22号掘立柱建物跡は、東側柱列中央の柱穴と西側柱列南端の柱穴、それに建物中央の中柱が、20号掘立柱建物跡の柱穴と重複して失っている。北柱列の中央と東端柱穴は、23号掘立柱建物跡の柱

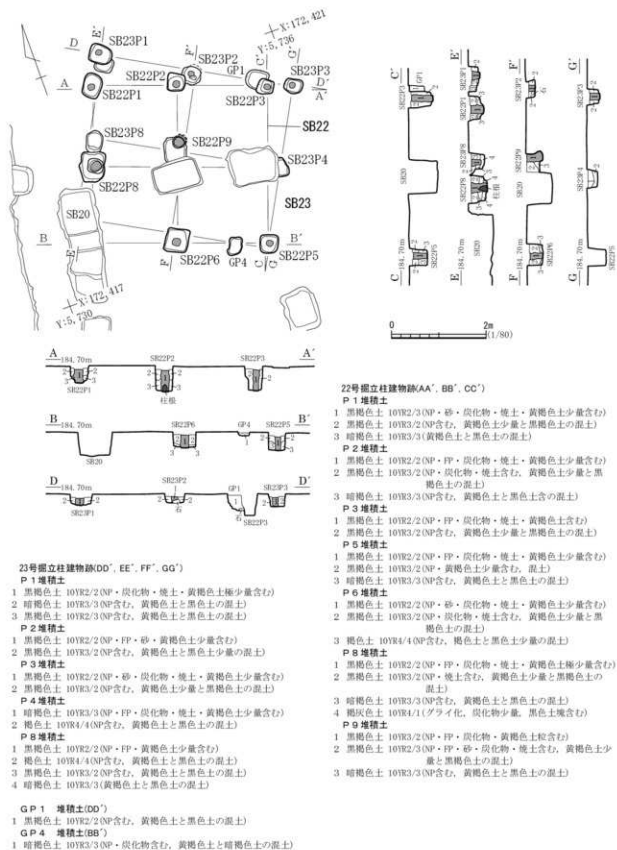


図63 22・23号掘立柱建物跡

第2章 調査成果

穴と重複して、22号掘立柱建物跡の方が新しい。しかし、南端柱列の中央と東端では、ほぼ完全に重複して、個々の建物柱穴を把握することができなかった。

22号掘立柱建物跡の軸線は、 $N-20^{\circ}-E$ である。東側にある21号掘立柱建物跡や南側の30号掘立柱建物跡と近似した方向である。建物の規模は、北端柱列と東端柱列で計測すると、東西3.65m、南北3.15mである。南北方向が少し短い、ほぼ方形の建物である。

柱穴の平面形は矩形で、柱穴2では、0.6m、幅0.4m、深さ0.4mであった。またこの柱穴では、底面から直立する柱根が遺存していた。このほか確認した柱穴からは、すべて柱痕跡を確認した。柱痕は円形で、直径15cm程度である。

23号掘立柱建物の軸線は、 $N-30^{\circ}-E$ である。22号掘立柱建物とは約 10° ずれている。柱穴1と柱穴3の柱痕の芯を結ぶ長さは4.1m、柱穴3と柱穴5では3.4mである。柱穴の形状・大きさ、柱痕とも22号掘立柱建物跡とほぼ同じである。

柱痕は、柱穴4と柱穴7以外、確認した柱穴すべてで確認した。柱穴2では、底面に川原石が置かれていた。これは礎板の代わりであろう。

このほか北東隅の柱穴3では、柱穴の重複があった。この新旧関係について、柱穴5の西側にある柱穴と23号掘立柱建物跡の柱穴1と重複する柱穴との関連を検討したが、明確にはできなかった。

遺物

出土した大半は弥生土器破片であるが、平安時代前半の須恵器・土師器片も含まれていた。細片である。図83-21は須恵器大甕の体部破片である。内面にハケメによる整形が施されている。

遺物のうち、図82-23は、弥生時代の高坏頸部である。縦に割れて、坏部との接合状況が明瞭にわかる資料である。頸部の上面から粘土塊を充填して、坏部の底としている。また頸部上面はロート形に加工され、この傾斜面はハケで細かな凹凸をつけている。充填する粘土の接合力が増すための工夫である。

まとめ

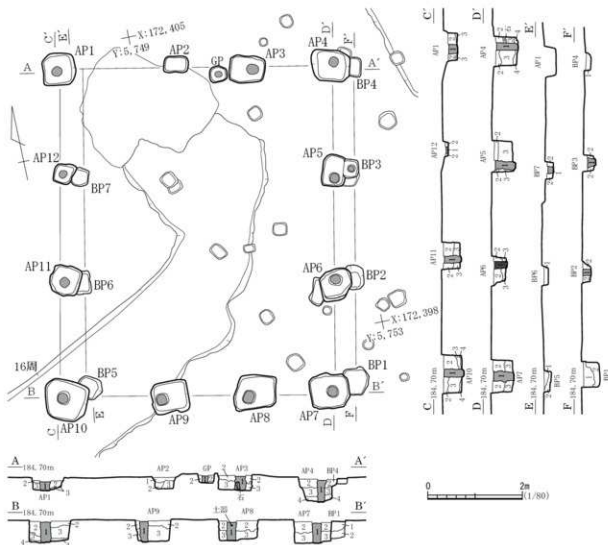
両方とも、平安時代前半の建物跡である。建物軸線は、南側に並ぶ29号・30号・40号掘立柱建物、北東側の21号掘立柱建物と軸線をあわせて造られている。これらとあわせて一連の建物群を構成していたのであろう。

(福島)

24号掘立柱建物跡 (図64・65・83・84, 写真62~64)

遺構

調査区南部、D6-E10・F10, D7-E1・F1グリッドに位置している。検出面は第IV層である。主軸方位は $N-10^{\circ}-E$ である。梁行3間、桁行3間の側柱建物跡である。桁行と並行する柱列があり、建替えのあることを示している。古い方を24号A掘立柱建物跡、新しい方を24号B掘立柱建物跡とした。北側に38号掘立柱建物、東側に83号土坑などの土坑群がある。また、16号周溝墓・25号掘立柱建物跡と重複して、この建物跡の方が新しい。



24号掘立柱建物跡A(AA', BB', CC', DD')

P 1 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土粒少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/3 (NP・FP・炭化物含む、黄褐色土粒多量と黒褐色土の混土)
- 3 褐色土 10YR4/4 (褐色土と黒色土少量の混土)

P 2 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (NP・FP・褐色土粒少量含む)
- 2 にぶい黄褐色土 10YR4/3 (NP含む、黄褐色土と黒色土の混土)
- 3 明黄褐色土 10YR6/6 (明黄褐色土と黒色土少量の混土)

P 3 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/2 (NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土粒少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3 (NP・FP・炭化物・黄褐色土粒少量含む)
- 3 褐色土 10YR4/1 (黄褐色土と黒色土の混土)

P 4 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/2 (NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3 (NP・FP・炭化物・黄褐色土含む)
- 3 黒褐色土 10YR3/2 (黄褐色土と黒色土の混土)
- 4 黒褐色土 10YR2/3 (黄褐色土粒を含む)

P 5 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/2 (NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土粒少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (NP・FP含む、黄褐色土と黒褐色土の混土)
- 3 褐色土 10YR4/4 (褐色土と黒色土少量の混土)

P 6 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (NP・FP・黄褐色土少量、炭化物含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3 (NP・FP・炭化物含む、黄褐色土と暗褐色土の混土)
- 3 黒褐色土 10YR2/2 (NP含む、黒色土と黒褐色土の混土)

P 7 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (NP・FP・炭化物・焼土・褐色土含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3 (NP・FP・炭化物含む、黄褐色土と暗褐色土の混土)

- 3 褐色土 10YR4/4 (黒色土と褐色土の混土)

P 8 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/2 (NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 褐色土 10YR4/4 (褐色土と黒色土少量の混土)
- 3 暗褐色土 10YR3/3 (黒色土少量と暗褐色土の混土)

P 9 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2 (NP・FP・炭化物含む、黄褐色土少量と黒褐色土の混土)
- 3 褐色土 10YR4/4 (褐色土と黒色土少量の混土)

P 10 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/2 (NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土粒少量含む)
- 2 褐色土 10YR4/4 (褐色土と黒色土少量の混土)
- 3 暗褐色土 10YR3/3 (黒色土少量と暗褐色土の混土)
- 4 暗褐色土 10YR3/3 (黄褐色土少量、混土)

図64 24号掘立柱建物跡 (1)

第2章 調査成果

24号掘立柱建物跡A(AA', BB', CC', DD')

P11堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/2(NP・FP・炭化物含む、黄褐色土少量と黒褐色土の混土)
- 3 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP含む、黄褐色土少量と黒褐色土の混土)

P12堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/2(NP・FP含む、黄褐色土少量と黒褐色土の混土)

24号掘立柱建物跡B(EE', FF')

P1堆積土

- 1 暗褐色土 10YR3/3(NP・砂・炭化物・黄褐色土・黒色土含む)
- 2 褐色土 10YR4/4(NP・黒色土少量含む)

P2堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/2(NP・炭化物・焼土含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(NP含む、黄褐色土と黒色土の混土)

P3堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 褐色土 10YR4/4(褐色土と黒色土少量の混土)

P4堆積土

- 1 暗褐色土 10YR3/3(NP含む、黄褐色土と黒色土の混土)

P5堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(やぐら灰化、NP・焼土含む、褐色土と黒色土の混土)

P6堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/2(NP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)

P7堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 褐色土 10YR4/4(褐色土と黒色土少量の混土)

図65 24号掘立柱建物跡(2)

24号B掘立柱建物跡では、柱穴2を除いた残りの柱穴から柱痕や柱根を確認している。柱痕の芯を結ぶ長さは、梁行5.7m、桁行6.9mである。建物跡の平面形は、南北方向に少し長い方形である。掘形の平面形は、方形を基調にしている。壁面もほぼ垂直に造られている。柱穴1は、幅・長さとも0.65m前後である。深さは0.3mである。全般に北部の柱穴と比べて、南部の柱穴のほうが少し深い傾向がある。柱穴7では、深さ0.6mであった。

柱痕は、直径20cm前後の円形である。柱がほぼ垂直に据えられた状態になっていた。柱穴6では柱根が遺存し、これを検出面から確認した。直径15cm前後の円柱であった。柱の側面は粘土に包まれていた。これは、柱根が劣化することにより生じた空間に雨水などが入り込み、これに含まれた粘土が集積した結果であろう。均一な粘土である。

柱穴の埋土は、暗褐色系の土である。これに黄褐色系の土が混ざることもある。厚さ20cm程度のまとまりを持って水平に埋め戻した状況である。埋土には、炭化物粒と焼土粒などが含まれていた。

北端の柱列、柱穴1と柱穴4を結ぶ線の上にある柱穴のうち、柱穴2は、長さ0.4m、幅0.3mとほかの柱穴と比べて小さい。また柱痕も確認されていない。これと対応する南端柱列の柱穴9とは対応しない位置である。南端柱列では2～1.8mの柱間で対応していたが、柱穴1の柱痕と柱穴2の中央は、約2.5mと他の柱間隔より広がっている。

24号A掘立柱建物跡は、24号B掘立柱建物跡と同形同大で、建物軸線方向にも大きな変化もない。柱穴は方形で、長さ・幅0.4m程度である。柱根の確認はできなかった。柱穴の埋土にも大きな違いは無い。24号Aと比べると、柱穴は一回り小さい。建替えてより丈夫な建物としたのであろう。

遺物

柱穴には、平安時代の土師器が比較的多く含まれていた。坏の破片と長胴甕である。図83・8・12の体部外面は回転ヘラケズリである。12は貼り付け高台である。この遺物が最も新しい遺物である。10世紀代の遺物であろう。20は須恵器大甕である。

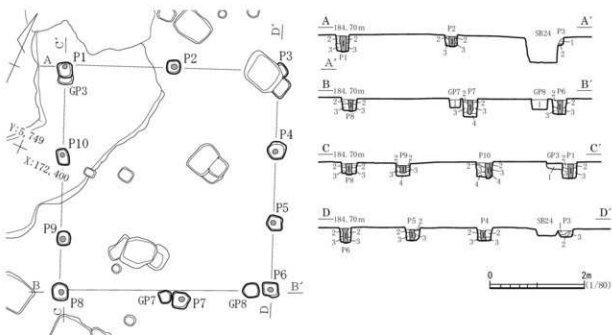
まとめ

24号A掘立柱建物跡は、25号掘立柱建物跡を含めれば、3回以上の重複がある。周辺からは平安時代前半の遺物の多数出土していることから、この頃に最初の建物が造られ、中期に最後の建物が造られたと考えられよう。(福島)

25号掘立柱建物跡 (図66, 写真62・63・65)

遺構

調査区南部、D6-E10・F10, D7-E1・F1グリッドに位置している。検出面は第IV層である。主軸方位はN-20°-Wである。梁行2間、桁行3間の側柱建物跡である。24号掘立柱建物跡と大半が重なる位置にあり、柱穴3は24号掘立柱建物跡の柱穴4と重なり、25号掘立柱建物の方が古い関係である。北側に38号掘立柱建物、東側に83号土坑などの土坑群がある。この土坑は細長



25号掘立柱建物跡

P 1 埋積土

1 黒褐色土 10YR2/2 (NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)

2 褐色土 10YR4/4 (NP・FP含む、褐色土と黒色土少量の混土)

3 褐色土 10YR4/1 (NP含む、黄褐色土と黒色土の混土)

P 2 埋積土

1 黒褐色土 10YR2/2 (NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)

2 暗褐色土 10YR3/3 (NP含む、黒色土少量と暗褐色土の混土)

3 褐色土 10YR4/4 (褐色土と黒色土少量の混土)

P 3 埋積土

1 暗褐色土 10YR3/3 (NP含む、黄褐色土と暗褐色土の混土)

2 黒褐色土 10YR2/2 (NP含む、黄褐色土と黒色土の混土)

3 褐色土 10YR4/4 (褐色土と黒色土少量の混土)

P 4 埋積土

1 黒褐色土 10YR2/2 (NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)

2 暗褐色土 10YR3/3 (NP・FP含む、黄褐色土と暗褐色土の混土)

3 褐色土 10YR4/4 (褐色土と黒色土少量の混土)

P 5 埋積土

1 黒褐色土 10YR2/2 (NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)

2 暗褐色土 10YR3/3 (NP・FP・炭化物含む、黄褐色土少量と暗褐色土の混土)

3 褐色土 10YR4/4 (NP少量含む、褐色土と黒褐色土少量の混土)

P 6 埋積土

1 黒褐色土 10YR2/2 (NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)

2 暗褐色土 10YR3/3 (NP少量含む、黒色土少量と暗褐色土の混土)

3 褐色土 10YR4/4 (褐色土と黒色土少量の混土)

P 7 埋積土

1 黒褐色土 10YR2/2 (NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)

2 黒褐色土 10YR2/3 (NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)

3 暗褐色土 10YR3/3 (NP含む、黄褐色土少量と暗褐色土の混土)

4 褐色土 10YR4/1 (黄褐色土と黒色土の混土)

P 8 埋積土

1 黒褐色土 10YR2/2 (NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)

2 褐色土 10YR4/4 (褐色土と黒色土少量の混土)

3 褐色土 10YR4/1 (黄褐色土と黒色土の混土)

P 9 埋積土

1 黒褐色土 10YR2/2 (NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)

2 黒褐色土 10YR2/3 (NP・黄褐色土多量含む)

3 褐色土 10YR4/4 (褐色土と黒色土少量の混土)

4 褐色土 10YR4/1 (黄褐色土と黒色土の混土)

P 10 埋積土

1 黒褐色土 10YR2/2 (NP・FP・炭化物・褐色土少量含む)

2 黒褐色土 10YR2/3 (NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)

3 暗褐色土 10YR3/3 (NP含む、黄褐色土と黒色土の混土)

4 褐色土 10YR4/1 (NP含む、黄褐色土と黒色土の混土)

図66 25号掘立柱建物跡

第2章 調査成果

形で、25号掘立柱建物跡の側柱列と1～2mの間隔を置いて並んでいる。また、16号周溝墓・25号掘立柱建物跡と重複して、25号掘立柱建物跡のほうが新しい。

24号掘立柱建物跡の柱穴と重複する柱穴3を除いて、残りの柱穴から柱痕を確認している。柱痕の芯を結ぶ長さは、梁行4.4m、桁行4.8mである。南梁行中央の柱穴7は、この掘立柱建物の柱筋から外れた位置にあるが、これ以外に対応する柱穴は確認していない。これに接して柱穴状の穴があり、同様な関係の穴は柱穴6にもあるので、別の掘立柱建物跡の検討を行ったが、明確にはできなかった。建物跡の平面形は、南北方向に少し長い方形である。

掘形の平面形は、方形を基調にしている。壁面もほぼ垂直に造られている。柱穴1は、幅0.25m、長さ0.35mである。深さは0.4～0.2mの間で凹凸がある。柱痕は直径15cm前後の円形である。柱は、ほぼ垂直に据えられた状態になっていた。柱穴の埋土は、暗褐色系の土である。これに黄褐色系の土が混ざるものもある。水平に埋め戻した状況である。埋土には、炭化物粒と焼土粒などが含まれていた。

遺物

柱穴からは、平安時代の土器が少量出土している。しかし、いずれも小破片であるため、図示していない。

まとめ

25号掘立柱建物跡は、24号A掘立柱建物跡まで造られた一連の継続する建物で、最初に建てられたものである。周辺の細長い土坑との関連から、住居施設の可能性が高いと考えている。平安時代前期の建物であろう。(福島)

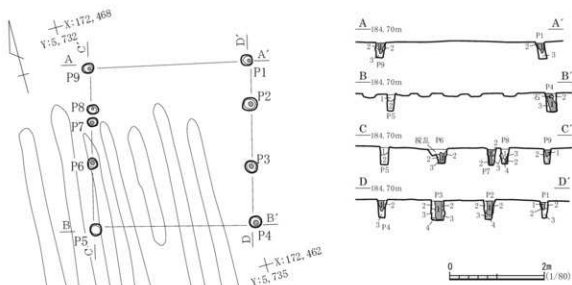
26号掘立柱建物跡 (図67, 写真67)

遺構

本建物跡は弥生時代後期後半に属する。調査区中央部から東よりの場所、D6-D4グリッドに位置する。本建物跡の北側には13号周溝状遺構・73号土坑、南側には6号竪穴状遺構・64号土坑・95号土坑など弥生時代後期後半に属する遺構が集中している。遺構検出面はLⅢa層とした沼沢バミスを含む褐色土の上面である。

本建物跡は南北3間、東西1間の側柱建物跡である。南北柱列を基準とした建物の向きは、真北に対して15度東を向く。本建物跡の西側に位置する42号掘立柱建物跡と方向を同じくする。建物の規模は、南北柱列が3.45m、東西柱列が3.4mである。東側柱列のP2に対応する位置には、西側柱列P7・8が近接して分布する。わずかに変則的な柱の配置が見られるP7・8を除けば、各柱間の距離は、1.1～1.2mで、ほぼ一定している。

柱穴の平面形はいずれも円形である。その直径は20～28cmを測る。深さは40cm前後で、柱穴底面の標高は184.1m付近で揃う。遺存する柱痕跡から、柱材として直径10cm前後の丸太材が用いられている。



26号掘立柱建物跡

P 1 堆積土

- 1 黒色土 10YR2/1(NP・褐色粘土極少量含む)
- 2 褐色土 10YR4/4(ブロック)
- 3 黒褐色土 10YR2/2(NP極少量, 褐色粘土塊含む)

P 2 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・褐色粘土極少量含む)
- 2 にぶい黄褐色土 10YR4/3(NP極少量含む, 褐色粘土と黒色土の混土)

P 3 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・褐色粘土極少量含む)
- 2 にぶい黄褐色土 10YR4/3(NP極少量, 砂少量含む, 褐色粘土と黒色土の混土)

P 4 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・褐色粘土極少量含む)
- 2 にぶい黄褐色土 10YR4/3(NP極少量, 砂少量含む, 褐色粘土と黒色土の混土)
- 3 暗褐色土 10YR3/3(NP極少量含む, 褐色粘土と黒色土の混土)
- 4 黒褐色土 10YR2/2(NP・砂・褐色粘土極少量含む)

P 5 堆積土

- 1 黒色土 10YR2/1(NP・褐色粘土極少量含む)
- 2 明黄褐色土 10YR6/6(黒色粘土極少量含む)
- 3 黒褐色土 10YR2/2(NP極少量含む, 褐色粘土と黒褐色土の混土)

P 6 堆積土

- 1 暗褐色土 10YR3/3(NP・褐色粘土多量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/4(NP極少量含む, 褐色粘土と黒色土の混土)

P 7 堆積土

- 1 黒色土 10YR2/1(NP・褐色粘土極少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(NP極少量含む, 褐色粘土と黒色土の混土)
- 3 黒褐色土 10YR2/2(NP・褐色粘土極少量含む)
- 4 明黄褐色土 10YR6/6(NP含む, 明黄褐色土と黒色土極少量との混土)

P 8 堆積土

- 1 黒色土 10YR2/1(NP極少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2(NP極少量, 褐色粘土含む)
- 3 褐色土 10YR4/4(褐色粘土と黒色土の混土)
- 4 にぶい黄褐色土 10YR4/3(砂含む, 褐色粘土と黒色土の混土)

P 9 堆積土

- 1 黒色土 10YR2/1(NP・褐色粘土極少量含む)
- 2 褐色土 10YR4/4(NP極少量, 褐色粘土多量含む)
- 3 明黄褐色土 10YR6/6(NP極少量含む, 褐色粘土と黒色土の混土)

図67 26号掘立柱建物跡

遺物

本建物跡柱穴P4から敲き石の破片が1点出土しただけである。柱穴の掘形埋土内から出土したもので、混入したものと考えている。小破片のため図示していないが、丸く扁平な石の側縁部に敲打痕がわずかに観察できる。

まとめ

本建物跡は南北3間×東西1間, 南北棟の側柱建物跡である。年代を把握できる出土遺物がないが, 柱穴の形状や堆積土などは, 28号・42号掘立柱建物跡など弥生時代後期後半に属する建物跡の特徴に近似する。(福田)

29号掘立柱建物跡 (図68・82~84, 写真68・69)

遺 構

調査区南部、D6-D10グリッドに位置している。北側に20号掘立柱建物跡、西側に30号掘立柱建物跡があり、この間には22号溝跡がある。また東北部で16号周溝墓の周溝と重複しているが、この掘立柱建物の方が新しい。

桁行3間、南端の梁行3間、北端の梁行2間の変則的な南北棟である。南端梁行には、北端梁行の柱穴に対応した位置にも柱穴が設けられていたが、この柱穴から柱痕は検出されなかった。この建物と同様な柱穴配置は、会津若松市屋敷遺跡、20号掘立柱建物跡などで確認されており、特異な形態でもない。

確認した柱穴すべてから、柱痕を確認している。さらに南部の柱穴では柱材の下端も遺存していた例があった。柱芯間で規模を測ると梁行5.4m、4.34mである。主軸はN-29°-Eである。軸線は、20号掘立柱建物跡とはずれているが、西側の30号・40号掘立柱建物跡の軸線と平行している。

柱穴の平面形は矩形である。多少の長短あるが、長さと同様な幅に大きな差はない。方形に近い形である。柱穴1は長さ0.6m、幅0.5m、深さ0.4mである。また北端梁行の中柱に当たる柱穴2は、長さ幅0.4m前後で深さも0.2mと小型である。底面は、西部の柱穴は平らに整えられていた。これに対して東部では底部の中央が低く、周辺は高くなっていた。

柱穴間の重複は柱穴1・10・12にあった。しかしほかの柱穴には重複の痕跡は認められなかった。重複関係のある柱穴のうち、柱穴10では南側へ柱穴1基分ずれていたが、これに対応して建物を構成する柱穴は存在していない。西側に移動している柱穴12も同様である。この建物の建替えは、なされていないであろう。

遺 物

柱根2本と平安時代・弥生時代土器が少量出土している。平安時代の土器は細片である。平安時代前半の土器である。

ま と め

桜町遺跡から検出した掘立柱建物跡では、比較的大きな掘立柱建物跡である。主軸をそろえた30号・40号掘立柱建物跡と共存していたのであろう。しかし、20号建物跡とは、位置関係から同時に建っていた可能性は無い。

(福 島)

30号掘立柱建物跡 (図69・82・83, 写真70・71)

遺 構

調査区南部、D6-C9グリッドに位置している。西側に40号掘立柱建物跡、東側に20号・29号掘立柱建物跡がある。また北東側から東側は22号溝跡があり、この溝跡と重複して105号・111号土坑がある。

第2章 調査成果

桁行3間、梁行2間の南北棟である。確認した柱穴すべてから、柱痕を確認している。柱芯間で規模を測ると桁行5.0m、梁行は北側柱で4.2m、南側柱列で4.0mである。主軸はN-29°-Eである。建物軸線は、西側の40号・29号掘立柱建物跡の軸線と平行している。

柱穴の平面形は矩形を基調としている。円形は柱穴7のみである。1号柱穴は長さ0.4m、幅0.4m、深さ0.3mである。柱根は円柱形で、直径0.2m程度である。

柱穴間の重複は柱穴1・2・5・6・7・10にあった。しかしほかの柱穴には重複の痕跡は認められなかった。重複関係のある柱穴のうち、1・6・7は西側に古い柱穴が重なり、柱穴2・6は北西部、柱穴5は南部で重複していた。建替えの痕跡であろう。

柱穴の埋土は褐色土と黄褐色土の混土である。このなかには炭化物と焼土粒が含まれている。垂直に据えた柱根の周囲に水平方向に重ねて柱穴掘形を埋めている。また柱穴の底面は平坦なものもあるが、丸くなっているものや、柱の沈下により凹面に変化したものもある。

遺物

各柱穴からは、若干の土器片が出土している。このうち、柱穴1の須恵器環と柱穴4の須恵器壺片を図示した。いずれも平安時代前半の土器である。

まとめ

調査区南部に並ぶ、平安時代前期の掘立柱建物群のほぼ中央に位置している。主軸をそろえた29号・40号掘立柱建物跡と共存していたのであろう。(福島)

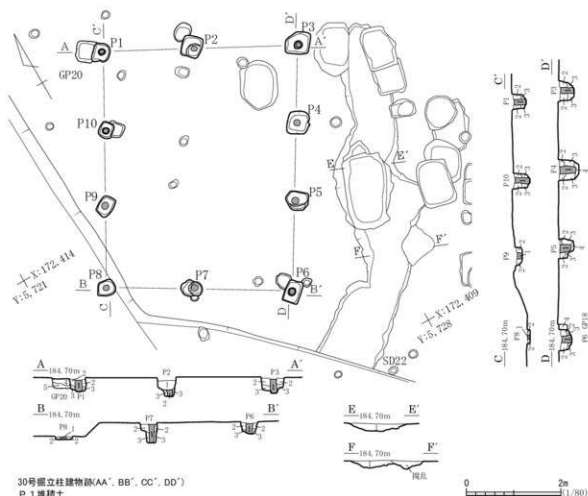
31号掘立柱建物跡(図70・82、写真72・73)

遺構

本建物跡は平安時代に属する掘立柱建物跡である。調査区の中央部から西よりの場所、D6-A6・A7グリッドに位置する。本建物跡は32・33号掘立柱建物跡と重複し、そのいずれよりも新しい。本建物跡の西側は、近年の水田開発により約30cmの段差となって削平されているため、この範囲では柱穴が遺存していない。

本建物跡は南北2間、東西2間分を確認しただけで、建物跡の全体的な規模は不明である。東側柱列を基準とする建物の向きは、真北に対して4度西に傾く。南北柱列(P3-P5)は2間で、その距離は3.35mである。柱間距離はP3-P4が1.8m、P4-P5が1.55mである。P2-P6は3間で、その距離は3.42mである。柱間距離はP2-P8が1.3m、P7-P8が0.82m、P7-P6が1.3mを測り、中間部の柱間が狭くなる特徴がある。東西柱列(P1-P3)は3.4mである。その柱間距離はそれぞれ1.7mを測る。

柱穴の平面形は隅丸方形である。その規模は一辺が50~60cmである。深さはP3が最も深く8cmである。柱穴底面の標高は、184.0~184.1mでほぼ一定している。柱穴内の堆積土は柱痕跡と埋土に分けられる。柱痕跡は黒色土で、抜き取り痕などは観察できない。柱穴底面には直径20cm前後の浅いくぼみが見られる。柱材が上屋の重みで沈下した痕跡と判断した。埋土は黒色土と黄褐色土の



30号掘立柱建物跡(AA', BB', CC', DD')

P 1 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(NP含む, 黄褐色土と暗褐色土の混土)
- 3 褐色土 10YR4/4(NP含む, 黄褐色土と黒色土の混土)
- 4 黒褐色土 10YR3/2(NP・炭化物・焼土・黄褐色土含む)
- 5 暗褐色土 10YR4/4(NP含む, 黄褐色土と黒色土の混土)

P 2 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/2(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土多量含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)
- 3 褐色土 10YR4/4(褐色土と黒色土少量の混土)

P 3 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(NP・FP・炭化物・焼土含む, 黄褐色土少量と暗褐色土の混土)
- 3 褐色土 10YR4/4(NP含む, 褐色土と黒色土少量の混土)

P 4 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土少量)
- 2 黒褐色土 10YR3/2(NP・FP・炭化物含む, 黄褐色土と黒褐色土の混土)
- 3 暗褐色土 10YR3/3(NP・FP・炭化物含む, 黄褐色土少量と暗褐色土の混土)
- 4 褐色土 10YR4/4(黄褐色土と黒色土の混土)

P 5 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(NP・FP・炭化物・焼土含む, 黄褐色土少量と暗褐色土の混土)
- 3 黒褐色土 10YR3/2(NP・FP・炭化物含む, 黄褐色土極少量と黒褐色土の混土)
- 4 褐色土 10YR4/4(黄褐色土少量と褐色土の混土)

P 6 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/2(NP・FP・炭化物含む, 黄褐色土極少量と黒褐色土の混土)
- 3 暗褐色土 10YR3/3(NP・FP含む, 黄褐色土少量と暗褐色土の混土)
- 4 褐色土 10YR4/4(NP含む, 黄褐色土と黒色土の混土)

P 7 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 3 褐色土 10YR4/4(黄褐色土と黒色土の混土)

P 8 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 褐色土 10YR4/4(褐色土と黒色土少量の混土)

P 9 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(黄褐色土少量と暗褐色土の混土)

P 10 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/2(NP・FP・炭化物含む, 黄褐色土と黒褐色土の混土)
- 3 暗褐色土 10YR3/3(黄褐色土と黒色土の混土)

22号溝跡堆積土(EE', FF')

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土極少量含む)

図69 30号掘立柱建物跡・22号溝跡

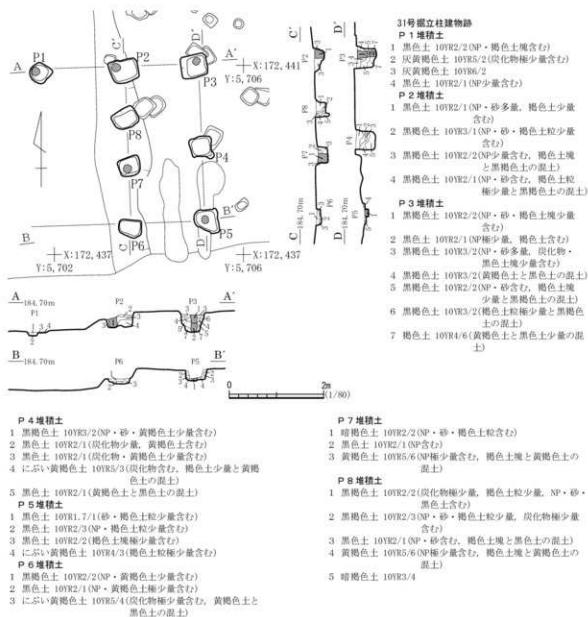


図70 31号掘立柱建物跡

混土で、硬くしまっている。

遺物

本建物跡のP3・4・6から弥生土器が数片出土した。いずれも摩滅した小破片のため、図示していない。図82-26はP4から出土した石器剥片である。

まとめ

本建物跡は削平のため、その全容を把握できない。周辺に分布する掘立柱建物跡の配置や、重複する建物跡との関係から、32・33号建物跡よりも新しい時期で、9世紀後半頃の建物跡と考えている。(福田)

32・33号掘立柱建物跡 (図71・82, 写真74~77)

遺 構

本建物跡は平安時代に属する2間×2間の総柱建物跡である。33号掘立柱建物跡から32号掘立柱建物跡の順で、同所で連続して建て替えられた建物跡である。調査区中央から西よりの場所、D6-A6・A6グリッドに位置する。31号掘立柱建物跡と重複し、本建物跡のほうが古い。

本建物跡はいずれも西隅の柱穴を欠くが、南北2間、東西2間である。建物の向きは、真北に対して38度東に傾く。平安時代の集落の北西外縁を区画する25号溝跡の方向と揃う特徴がある。32号掘立柱建物跡は南北柱列が3.0m、東西柱列が2.95mのほぼ正方形となる。柱間距離は1.4~1.5mを測る。柱穴は隅丸方形または隅丸長方形となる。規模は長辺が40cm、短辺が30cmである。柱穴の深さは20~40cmで、柱穴底面の標高は、184.2~184.3mとばらつきが見られる。柱穴の堆積土は柱痕跡と埋土に大別できる。柱痕跡はいずれも炭化物を含む黒褐色土である。柱材は、直径16cm前後の丸太材が用いられたと推定している。埋土は黒褐色土と黄褐色土の混土で、硬くしまる。

33号掘立柱建物跡は32号掘立柱建物跡に先行して建てられた建物跡である。その柱穴は32号掘立柱建物跡の柱穴から東側にずれた位置で重複する。西隅と南隅の柱穴を失うが、規模や柱間距離などは32号掘立柱建物跡とほぼ同じである。建て替えにあたって、各柱穴に明確な抜き取り痕は確認できない。柱穴は32号掘立柱建物跡より10cmほど深く掘り込まれ、柱穴底面の標高は184.0~184.1mになる。柱穴の底面には、上屋の重みで柱材が沈下した痕跡として、直径16cm前後の浅いくぼみが観察できる。

遺 物

32号掘立柱建物跡からは弥生土器・石器・土師器が数点出土している。33号掘立柱建物跡からは弥生土器が出土した。いずれも埋土内に混入したもので、形状が分かるものを図示した。図82-20は33号掘立柱建物跡のP2から出土した弥生土器である。壺の体部破片で、外面に整形痕のハケメを残す。図82-25は32号掘立柱建物跡のP8から出土した破片である。

ま と め

本建物跡はいずれも同規模で、同所に連続して建て替えられた総柱建物跡である。周辺に分布する掘立柱建物跡の配置から、その用途は小型倉庫の可能性が高い。詳細な年代を把握できる出土遺物はないが、9世紀前半代を中心とした時期と考えている。

(福 田)

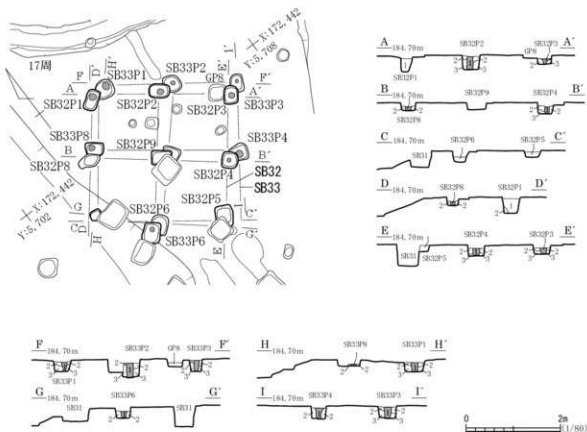
35号掘立柱建物跡 (図72, 写真78)

遺 構

35号掘立柱建物跡は弥生時代後期後半に属する。調査区の中央部、D6-A6・B6グリッドに位置する。本建物跡は10号周溝墓・17号周溝状遺構、35号溝跡と重複し、そのいずれよりも古い。

本建物跡は重複する10号周溝墓に壊され柱穴を失うが、南北2間、東西2間の側柱建物跡である。

第2章 調査成果



32号掘立柱建物跡(AA', BB', CC', DD', EE')

P 1 増積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(黒色土と黒褐色土の混土)

P 2 増積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/2(NP・FP・炭化物少量含む, 黄褐色土少量と黒褐色土の混土)
- 3 褐色土 10YR4/4(褐色土と黒色土少量の混土)

P 3 増積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2(黄褐色土含む)
- 3 褐色土 10YR4/4(褐色土と黒色土少量の混土)

33号掘立柱建物跡(FF', GG', HH', II')

P 1 増積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(炭化物含む, 黄褐色土粒少量含むと暗褐色土の混土)
- 3 褐色土 10YR4/4(褐色土と黒色土少量の混土)

P 2 増積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/2(NP含む, 黄褐色土と黒色土の混土)
- 3 暗褐色土 10YR3/3(黄褐色土と黒色土の混土)

P 3 増積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3(NP・FP・炭化物・黄褐色土含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP少量含む, 黄褐色土少量と黒褐色土の混土)
- 3 暗褐色土 10YR3/3(NP・FP少量含む, 黄褐色土と黒色土の混土)

P 4 増積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/2(NP・炭化物少量含む, 黄褐色土少量と黒褐色土の混土)
- 3 褐色土 10YR4/4(褐色土と黒色土少量の混土)

P 5 増積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)

P 6 増積土

- 1 黒褐色土 10YR3/2(NP含む, 黄褐色土と黒色土の混土)

P 8 増積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(黄褐色土と黒色土の混土)

P 4 増積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(黄褐色土と黒色土の混土)

P 6 増積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土含む)
- 2 褐色土 10YR4/4(黒色土少量含む)

P 8 増積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・黄褐色土含む)
- 2 褐色土 10YR4/4(褐色土と黒色土少量の混土)

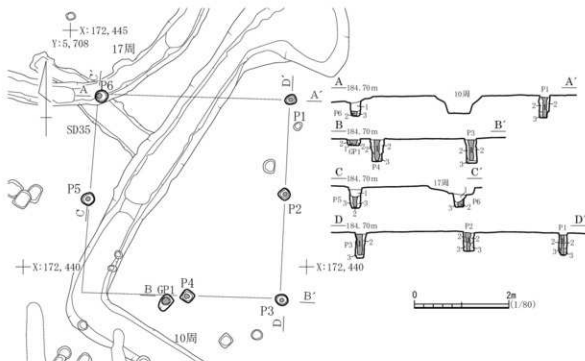
P 9 増積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/2(NP・FP含む, 黄褐色土と黒褐色土の混土)
- 3 褐色土 10YR4/4(褐色土と黒色土少量の混土)

GP 8 増積土

- 1 暗褐色土 10YR3/3(NP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)

図71 32・33号掘立柱建物跡



35号掘立柱建物跡

P 1 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 0NP・炭化物・焼土・褐色土含む
- 2 黒褐色土 10YR2/2 0NP・炭化物含む、黒褐色土と黒色土の混土
- 3 暗褐色土 10YR3/3 (黒色土多量と黄褐色土の混土)

P 2 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 0NP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む
- 2 黒褐色土 10YR3/2 0NP含む、黄褐色土少量と黒褐色土の混土
- 3 暗褐色土 10YR3/3 (黄褐色土と黒色土の混土)

P 3 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 0NP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む
- 2 黒褐色土 10YR3/2 0NP・炭化物含む、黄褐色土少量と黒褐色土の混土
- 3 暗褐色土 10YR3/3 0NP含む、黄褐色土と黒色土の混土

P 4 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 0NP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む
- 2 黒褐色土 10YR2/2 0NP・砂少量含む、黄褐色土少量と黒褐色土の混土
- 3 暗褐色土 10YR3/3 0NP含む、黄褐色土と黒色土の混土

P 5 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 0NP・砂・炭化物・焼土・黄褐色土含む
- 2 黒褐色土 10YR3/2 0NP・炭化物・黄褐色土含む
- 3 暗褐色土 10YR3/3 (黄褐色土塊と暗褐色土の混土)

P 6 堆積土

- 1 暗褐色土 10YR3/3 0NP・炭化物・焼土含む、黄褐色土と暗褐色土の混土
- 2 黒褐色土 10YR2/2 0NP・砂・炭化物・焼土含む、黄褐色土と黒褐色土の混土
- 3 暗褐色土 10YR3/3 0NP含む、黄褐色土と黒色土の混土

図72 35号掘立柱建物跡

南北柱列を基準とする建物の向きは、ほぼ北を指し、南側に近接する41号掘立柱建物跡と同じ建物向きとなる。建物跡の規模は、南北柱列（P1-P3）が4.25m、東西柱列（P1-P6）が4.0mである。柱間距離は2.0～2.3mである。

柱穴の平面形は、円形または隅丸方形である。その直径は20～28cmと小さい。深さは50cm前後で、底面の標高が184.1m付近で揃っている。柱痕跡はすべての柱穴で確認できた。直径10cm前後の細い丸太材を柱材としている。

遺物

本建物跡のP1から弥生土器片が1点出土したが、小破片のため図示していない。

まとめ

本建物跡は南北2間×東西2間の小型建物跡である。建物の向きを揃え、南側に41号掘立柱建物跡が近接する。2軒が同時期に機能している可能性が高い。建物跡の年代は、周辺に分布する周溝墓に先行する時期で、弥生時代後期後半頃と考えている。（福田）

36・37号掘立柱建物跡 (図59, 写真79~83)

遺 構

本建物跡は平安時代に属する2間×2間の総柱建物跡である。19・36・37号掘立柱建物跡の3軒が同所で連続して建てられている。37号掘立柱建物跡が最も古く、次に36号掘立柱建物跡が同所で建て替えられ、最後に南側に約1mずれた場所に19号掘立柱建物跡が建てられる。調査区の中央部、D6-C7・C8グリッドに位置する。11号・15号周溝墓の周溝と重複し、そのいずれよりも本建物跡が新しい。また、南側には本建物跡と方向を同じくする30号・40号掘立柱建物跡が分布している。遺構検出面はLIVaとした黄褐色粘土の上面である。

36号掘立柱建物跡の西側は、近年の水田造成によって削平されているため、柱穴などは遺存していない。遺存する東側の柱穴から、建物の向きは真北に対して25度東に傾く。規模は、南北柱列の長さが2.9m、東西柱列の長さが3.3mである。柱間の距離は、南北柱列(P3-P4)間が1.55m、P4-P5間が1.35mと北側の柱間が広くなる。東西柱列(P1-P2)間が1.8m、P2-P3間が1.5mと西側の柱間が広い。柱穴は円形または隅丸方形を基調とするが、各柱穴で形状は異なる。規模は直径が30~42cmである。柱穴の深さは20~25cmで、その底面の標高は184.3mでほぼ揃う。柱穴内の堆積土は柱痕跡と埋土に大別できた。柱痕跡はいずれも炭化物を含む黒色土である。柱材として直径16cm前後の細い丸太材が用いられたと推察している。埋土は黒色土と黄褐色土の混土で、硬くしまる。各柱穴の堆積土の観察から、建て替えに伴う、柱材の抜き取り痕跡などは確認できなかった。

37号掘立柱建物は、36号掘立柱建物跡に先行する建物跡である。その柱穴は37号掘立柱建物跡の柱穴の南東側にずれた位置で重複する。南北柱列の長さが3.0mである。柱間距離はいずれも1.5mで一定である。東西柱列は東側の1間分が遺存し、その柱間距離は1.7mを測る。柱穴は隅丸長方形である。その規模は長辺が40cm、短辺が30cmである。柱穴の深さは30cm前後で、その標高は184.3m付近で揃う。各柱穴の特徴は、36号掘立柱建物跡に比べれば、比較的整った形状や配置の柱穴となる。柱穴の堆積土は36号掘立柱建物跡と同様な特徴である。柱材は直径16cm前後の丸太材を用いたと推定している。また、建物跡の建て替えに伴う柱材の抜き取り痕跡は確認できない。

遺 物

36号掘立柱建物跡のP1から平安時代の土器器甕の体部破片が1点出土した。37号掘立柱建物跡のP1~P3から弥生土器と平安時代の土器器が数点出土した。弥生土器は地紋に捺糸文を施す壺または甕の破片、土器器は甕の体部破片である。いずれも小破片のため、図示していない。

ま と め

本建物跡は2間×2間の総柱建物跡である。19号掘立柱建物跡を含めて同規模の建物跡3軒が同所で連続して建て替えて存続している。30・40号掘立柱建物跡に付属する小型倉庫跡と推察している。年代は9世紀前半代を中心とする時期と判断した。

(福 田)

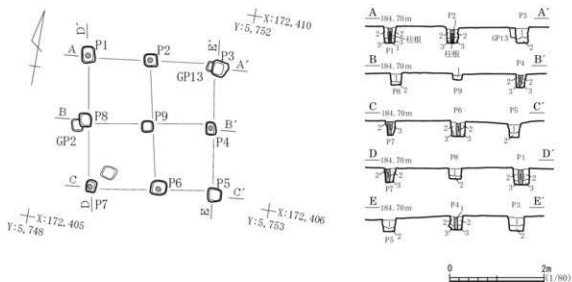
38号掘立柱建物跡 (図73, 写真62~65)

遺 構

調査区南部、D6-E10・F10グリッドに位置している。24号・25号掘立柱建物の北に当たる場所である。柱穴3と柱穴8において、各1基の小穴と重複して、この遺構のほうが新しい。ただし、この柱穴は、この建物跡の柱穴ではないので、建物の造り替えではないと判断している。桁行2間、梁行2間の総柱建物跡である。建物跡の軸線は、N-14°-Wである。南側にある24号掘立柱建物よりは、25号掘立柱建物跡に近い方位である。

各柱を結ぶ桁行・梁行線の交点は、柱穴の中心からずれた位置になるために、建物跡の平面形は、少し歪んだ矩形になる。とくに建物跡の中心にあたる柱穴2・柱穴9・柱穴6を結ぶ直線は各側柱列との対応関係にずれがある。建物跡は、桁行・梁行とも、2.6m程度である。中央の柱穴9は、四隅の柱穴を結ぶ対角線の交点に近い位置にある。

柱穴の平面形は矩形で、一辺0.3~0.4m程度である。掘形内部の埋土を掘り下げることは難しく、



38号掘立柱建物跡

P 1 増殖土

- 1 暗褐色土 10YR3/3(NP・FP・砂・炭化物極少量、黄褐色土少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 3 褐灰色土 10YR4/1(黄褐色土と黒色土の混土)

P 2 増殖土

- 1 暗褐色土 10YR3/3(NP・FP・砂・炭化物・黄褐色土極少量含む)
- 2 黒色土 10YR3/2(NP・炭化物・黄褐色土含む)
- 3 褐灰色土 10YR4/1(黄褐色土と黒色土の混土)

P 3 増殖土

- 1 暗褐色土 10YR3/3(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 褐色土 10YR4/4(褐色土と黒色土少量の混土)

P 4 増殖土

- 1 暗褐色土 10YR3/3(NP・FP・炭化物・黄褐色土極少量含む)
- 2 黒色土 10YR3/2(NP・砂・炭化物含む、黄褐色土と黒色土の混土)
- 3 褐灰色土 10YR4/1(黄褐色土と黒色土の混土)

P 5 増殖土

- 1 黒褐色土 10YR3/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(NP・炭化物含む、黄褐色土少量と暗褐色土の混土)

P 6 増殖土

- 1 暗褐色土 10YR3/3(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物含む、黄褐色土と黒褐色土の混土)
- 3 褐色土 10YR4/4(褐色土と黒色土少量の混土)

P 7 増殖土

- 1 暗褐色土 10YR3/3(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物含む、黄褐色土と黒褐色土の混土)
- 3 褐色土 10YR4/4(黄褐色土と黒色土の混土)

P 8 増殖土

- 1 黒褐色土 10YR3/2(NP・FP・炭化物極少量、黄褐色土少量含む)
- 2 褐灰色土 10YR4/1(黄褐色土と黒色土少量の混土)

P 9 増殖土

- 1 黒褐色土 10YR2/3(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)

図73 38号掘立柱建物跡

第2章 調査成果

柱穴を断ち割って形状を確認した。深さは、柱穴1が約0.4mと最も深くなっていた。逆に柱穴9は深さ0.1m程度で、この掘立柱建物跡で最も浅い。また柱穴9は、各柱穴との対応にも、柱穴1個分程度のずれがある。各柱穴の埋土は、黒褐色土系を基本に、黄褐色土が混ざっている。

まとめ

この掘立柱建物にともなう土器類は、確認していない。建物の軸線は南側にある25号掘立柱建物跡と共通していることから、これらと関連する遺構であろう。(福島)

39号掘立柱建物跡(図74, 写真84)

遺構

D7-A3・4グリッドにまたがって造られている。調査区南部の西端である。東側に平安時代の85号土坑がある。また19号周溝墓と重複して、この掘立柱建物跡のほうが新しい。検出面は第IV層面である。検出したのは建物跡の東北部である。

19号周溝墓を検出するなかで、L字状に並ぶ4基の柱穴を確認した。建物軸線は、N-5°-Eである。北端柱列は3基、東端柱列は2基である。北端柱列は西側へ、東端柱列は南側へ、それぞれ調査区外に伸びていた。検出した柱穴の平面形は、柱穴1・2が長方形、柱穴3・4は円形基調である。それぞれの長さ、径は、0.2~0.3m程度である。深さは柱穴2で0.25m程度である。この柱穴では、柱痕が良好に遺存していた。柱穴4は、他の柱穴と重複して、この方が新しい。

各柱穴の埋土は褐色・黒褐色土である。これに黄褐色土が混ざる。また炭化物と焼土も含まれる。

まとめ

この掘立柱建物にともなう土器類は、確認していない。大きさも不明であるが、柱穴の大きさからすれば、小型の掘立柱建物跡であろう。(福島)

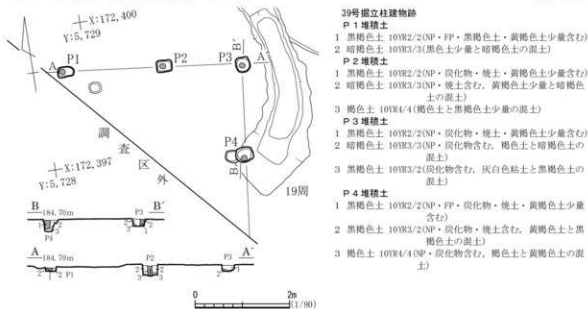


図74 39号掘立柱建物跡

40号掘立柱建物跡 (図75, 写真85)

遺 構

調査区南部、D6-B7・8、C7・8グリッドに位置している。東側に3間×2間の30号掘立柱建物跡、北側には19号・36号・37号掘立柱建物跡とした2間×2間の総柱建物跡が分布している。

40号掘立柱建物跡は桁行4間、梁行3間の南北棟である。梁行は4.4m、桁行5.2mで、主軸はN-29°-Eである。この建物跡の西側では、柱穴の痕跡を確認しているが、建物跡として把握することは出来なかった。ただし24号周溝墓付近で、平安時代に属する柱穴を確認していないことから、32号掘立柱建物跡とは、途切れる部分があったと推定されよう。

柱穴2・3・4の検出面は、これら以外の柱穴より0.3m前後、標高が高くなっていた。水田造成時に生じた段差である。柱穴3は矩形で、0.6m、幅0.4m、深さは0.4mである。柱穴4も同程度であった。比較的良好に遺存していた。

他の柱穴は、かろうじて遺存する程度で、なかには痕跡の確認できないものもあった。南側柱列と西側柱列である。遺存する柱穴では柱穴3・8で重複関係があり、柱穴8・10では近接して柱穴が遺存している。この状況から、この掘立柱建物跡は2時期の重複があったと判断している。柱穴3・8・10の重複関係からすれば、古い段階の建物跡を踏襲した規模で、北側に少し移動して建替えたのであろう。そうすると実測図の北側柱列は、古い段階のものを示したことになる。また南側柱列は、新しい段階の柱列である。

また柱穴1と柱穴8を結ぶ直線上近くで、柱穴11・12を検出した。この柱穴と対応するものは、40号掘立柱建物跡以外には検出していない。また柱穴11では、柱根が遺存していた。円柱である。直径は15cm程度である。

確認した柱穴のうち、柱痕が不明なものは柱穴3の古い方と、柱穴8の新しい方である。これ以外は柱痕を確認している。柱痕はすべて円柱形である。柱穴の埋土は、灰褐色土が中心である。なかには、黒色土や黄褐色土が部分的に含むものもある。炭化物・焼土を含むことは他の掘立柱建物跡と同様である。

遺 物

この掘立柱建物跡の柱穴からは、平安時代の土器片がわずかに出土したにすぎない。小破片であったため、図示はしなかった。また柱穴11から出土した柱根は、遺存状態が極めて悪く、図示は出来なかった。

ま と め

桜町遺跡から検出した掘立柱建物跡では、比較的大きな方の遺構である。主軸をそろえた29号・30号建物跡と共存していたのであろう。また梁行が3間ではなく、2間であれば、西側に庇が設けられた建物となる。

(福 島)

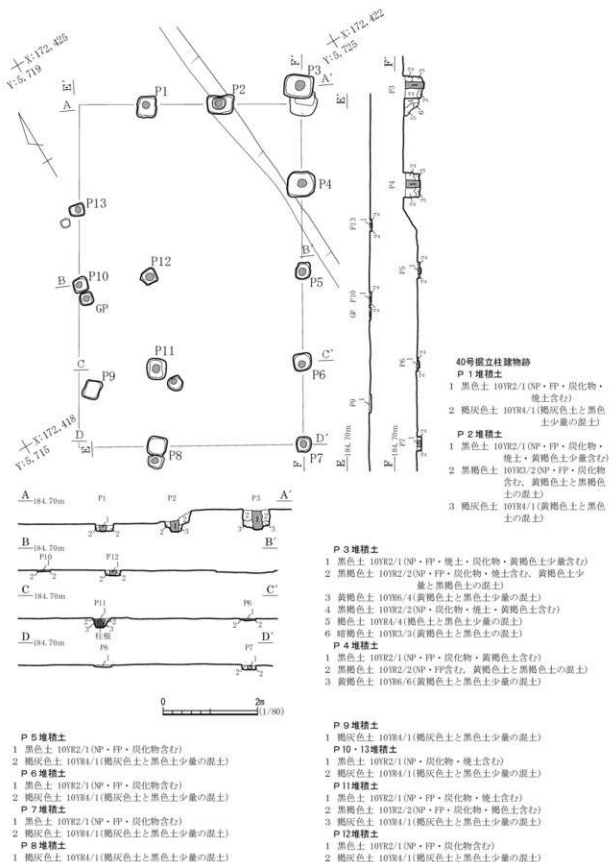


図75 40号掘立柱建物跡

41号掘立柱建物跡 (図76・82, 写真86)

遺 構

41号掘立柱建物跡は弥生時代後期後半に属する。調査区の中央部、D6-A7グリッドに位置する。10号周溝・31号掘立柱建物跡と重複し、本建物跡はいずれよりも古い。

本建物跡は近年の水路開削によって、その大部分を失っている。遺存する柱穴の配置から、東西棟の建物で、東西柱列が2間、南北柱列が1間と推定される。南北柱列を基準とする建物の向きは、ほぼ北を指す。近接する35号掘立柱建物跡と同じ方向となる。建物の規模は、南北柱列(P4-P5)が2.4m、P1-P6が2.7m、東西柱列(P1-P4)が3.5m、P5-P6が3.6mを測る。北側柱列の柱間距離は1.8mである。

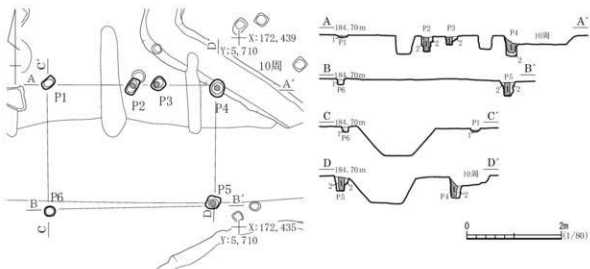
柱穴の平面形はいずれも円形である。その直径は15~24cmと小さい。深さはP1・6が10cmと浅く、P4が最も深く40cmである。柱穴底面の標高は一定でない。柱痕跡はP2・4・5で確認できた。直径10cm前後の丸太材を柱材として用いている。

遺 物

本建物跡のP2・4・5から弥生土器が出土した。図82-14はP5の掘形埋土から出土した。壺の底部付近の破片である。外面に燃糸文を施す。

ま と め

本建物跡は東西2間×南北1間の小型建物である。北側に近接する35号掘立柱建物跡と方向が一



41号掘立柱建物跡

P 1 埋積土

1 黒褐色土 10YR2/2(NP・炭化物・黄褐色土粒少量含む)

P 2 埋積土

1 黒褐色土 10YR2/2(NP・砂・炭化物・焼土・黄褐色土粒含む)

2 暗褐色土 10YR3/3(NP・炭化物・黄褐色土粒多量含む)

P 3 埋積土

1 黒褐色土 10YR2/2(NP・砂・炭化物・黄褐色土含む)

2 暗褐色土 10YR3/3(NP・黄褐色土粒少量含む)

P 4 埋積土

1 黒褐色土 10YR2/2(NP・砂・炭化物・黄褐色土少量含む)

2 暗褐色土 10YR3/3(NP・黄褐色土多量含む)

P 5 埋積土

1 黒褐色土 10YR3/2(NP・炭化物・黄褐色土含む)

2 黒褐色土 10YR3/2(NP・炭化物含む、黄褐色土少量と黒褐色土の混土)

P 6 埋積土

1 黒褐色土 10YR2/2(NP・砂・炭化物・黄褐色土粒含む)

図76 41号掘立柱建物跡

致する。建物跡の年代は、42号掘立柱建物跡と同様に、周辺に分布する周溝墓に先行する時期、弥生時代後期後半ごろと考えている。(福田)

42号掘立柱建物跡 (図77・82, 写真87・88)

遺 構

42号掘立柱建物跡は弥生時代後期後半に属する。調査区中央部、D6-A5・B5グリッドに位置する。本建物跡は14号周溝墓と重複し、その北西側に9号周溝墓、南側には17号周溝状遺構が分布する。14号周溝墓と本建物跡の柱穴に直接的な切り会い関係は確認できないが、周辺に分布する周溝墓の分布とその墳丘構造を復元的に見れば、本遺構は14号周溝墓に先行する時期の遺構と考えている。

本建物跡は南北棟の建物跡で、南北柱列が2間、東西柱列が1間である。南北柱列を建物の主軸とすると、その方向は真北に対して15度東に傾く。なお、東西柱列の間には、柱列から外側にずれた位置に、それぞれP7・P8が認められる。これら柱穴は、東西柱列に近すぎ、柱穴の深さ自体も極めて浅い。いわゆる榎持ち柱とするにはやや根拠が少なく、本建物跡に関連しない柱穴の可能性も指摘される。そのため本稿ではP7・P8については本建物跡に関連しない柱穴として、東西柱列の柱間は1間と考えている。建物の規模は、南北柱列が4.25m、東西柱列が3.78mを測る。南北柱列の柱間距離は2.1m～2.2mで、ほぼ一定している。

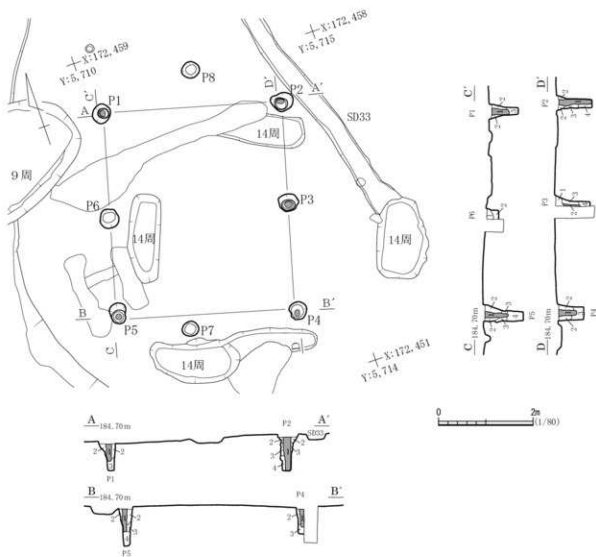
各柱穴の平面形は円形をなす。柱穴の上端部の大きさに比べ穴底の直径が小さい特徴があり、その断面形は漏斗状になる。柱穴の規模は、検出面の直径が38～42cmで、柱穴底面の直径が25cmである。柱穴の深さは、P6が25cmと浅いが、それ以外の柱穴は60～85cmと深い。柱穴の堆積土は、柱痕跡と埋土に大別できる。柱痕跡はP6を除くすべての柱穴で確認できた。柱材として、直径12cmほどの細い丸太材を用いている。掘方の埋土は黄褐色土と黒色土の混土で、硬くしまっている。

遺 物

本建物跡の各柱穴からは弥生土器が出土した。そのうち形状が分かるものを図82に示した。3は壺の体部上半の破片である。平行沈線間にやや斜め方向となる交互刺突を加えて波状隆線文とする。体部は摺糸文が地文となる。11・13・16は壺または甕の胴部破片で、外面に摺糸文が施される。18は外面に整形痕のハケメを残す甕の胴部破片である。

ま と め

42号掘立柱建物跡は、南北2間×東西1間の南北棟の建物跡である。周辺の周溝墓の分布から、9・14号周溝墓に先行する時期の建物跡と考えている。出土遺物の特徴は、9号・14号周溝墓の出土遺物と大きな時間差は認められないことから、9・14号周溝墓の造営に併せて廃絶した建物跡と考えている。(福田)



42号掘立柱建物跡

P 1 埴積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・砂・炭化物・焼土・黄褐色土極少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/2(NP・砂・炭化物含む, 黄褐色土との混土)
- 3 褐色土 10YR4/1(NP・炭化物含む, 黄褐色土と黒色土の混土)

P 2 埴積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・砂・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)
- 2 に近い黄褐色土 10YR3/4(NP・砂・炭化物・焼土・黒色土少量含む)
- 3 褐色土 10YR4/1(NP含む, 黄褐色土と黒色土少量の混土)
- 4 暗褐色土 10YR3/3(NP含む, 黄褐色土と黒色土の混土)

P 3 埴積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・炭化物・焼土・黄褐色土含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2(NP・炭化物・焼土・黄褐色土含む)
- 3 暗褐色土 10YR3/3(NP・黄褐色土・黒色土含む)
- 4 褐色土 10YR4/1(炭化物・黄褐色土少量含む, 褐色土と黒色土の混土)

P 4 埴積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・炭化物・焼土含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2(NP・焼土含む, 黄褐色土極少量と黒褐色土の混土)
- 3 暗褐色土 10YR3/3(NP・焼土含む, 黄褐色土多量と暗褐色土の混土)

P 5 埴積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・砂・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2(NP・炭化物・焼土含む, 黄褐色土と黒褐色土の混土)
- 3 暗褐色土 10YR3/3(NP・炭化物・焼土含む, 黄褐色土と黒色土の混土)
- 4 褐色土 10YR4/1(NP・炭化物含む, 褐色土と黒色土の混土)

P 6 埴積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(NP・FP・砂・炭化物・焼土含む, 黄褐色土と暗褐色土の混土)

図77 42号掘立柱建物跡

43号掘立柱建物跡 (図78~80・83, 写真89・90)

遺 構

43号・44号・45号掘立柱建物跡の3棟は、D6-G10, D7-G10グリッドにまたがって造られている。これらの建物跡の東側から北側にかけては、大きく円形に湾曲する23号溝跡が配置されている。この溝跡は、西側の36号溝跡と一連のものとするれば、半月の外形を描くように巡らされた形となる。掘立柱建物にともない、排水と区画を目的として造られた溝であろう。

23号溝跡からは、北部や東南部から須恵器・土師器破片がまとまって出土している。生活廃棄物の一部である。堆積土にも炭化物や焼土が含まれている。自然堆積である。

また西側から北西側には、83号・84号・86号土坑などの大型土坑や36号溝跡がある。この土坑や溝跡からも、平安時代の土器片が多数出土している。生活にともなう廃棄物であろう。このほか、建物跡の周辺にも多数の小穴がある。

D6-G10グリッド付近の柱穴群において、対応関係を検討したところ、柱穴1・柱穴2・柱穴3を結ぶ柱列を確認した。これに対応する柱穴を求めたところ、柱穴5・柱穴6・柱穴7を確認した。南端柱列では、柱穴6から西に0.8mに柱穴7、柱穴10から東に0.7mの地点に、小さな柱穴が位置している。しかし、北端柱列にはこれに対応する柱穴は無い。

また東端柱列では柱穴4を確認した。しかし、西端柱列については、両端の柱穴以外に、対応する柱穴は確認していない。柱穴の想定地点には、81号・104号土坑があることから、この土坑が掘削される時に、柱穴が失われたのであろう。

43号掘立柱建物は、桁行2間、梁行2間の側柱建物跡である。北端柱列の柱穴1の中央と柱穴3の4.1mである。また東端柱列では3.5mである。軸線はN-20°-Wである。西側にある25号掘立柱建物跡と対応する建物軸線である。柱穴の平面形は、矩形を基調としている。一辺0.2m程度と小型である。深さは、柱穴2が約0.4mと最も深くなっていた。このほかは、0.1m程度である。埋土は、黒褐色土系を基本に、黄褐色土が混ざっている。

遺 物

柱穴1の埋土から、平安時代前期の土師器甕が1点出土している。

ま と め

この掘立柱建物にともなう出土土器と周辺の23号溝跡や土坑などから出土する土器から見て、この遺跡の年代は平安時代であろう。建物の軸線は西側にある25号掘立柱建物跡と共通していることから、これらと関連する遺構であろう。 (福 島)

44号掘立柱建物跡 (図78~80, 写真89・90)

遺 構

D6-G10, D7-G10グリッドにまたがって、45号号掘立柱建物跡と重なるように、その内側

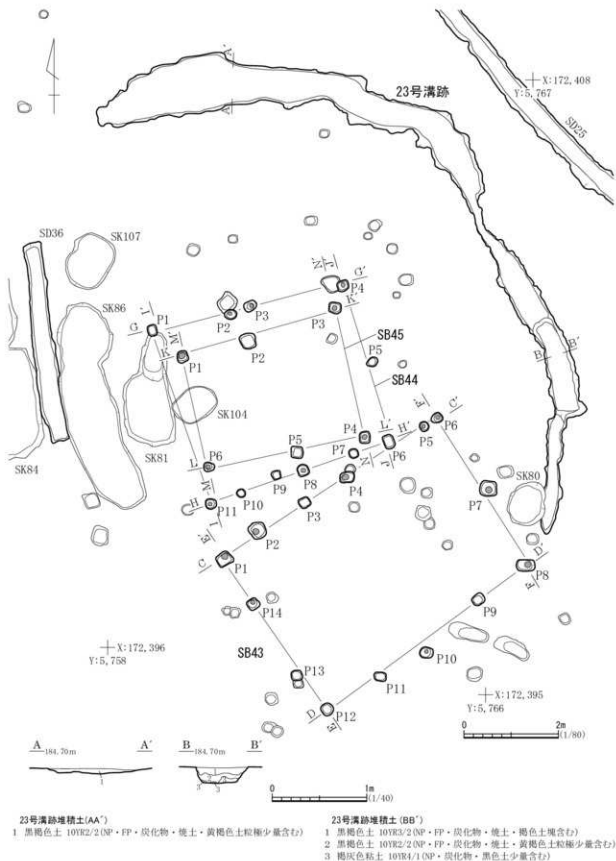
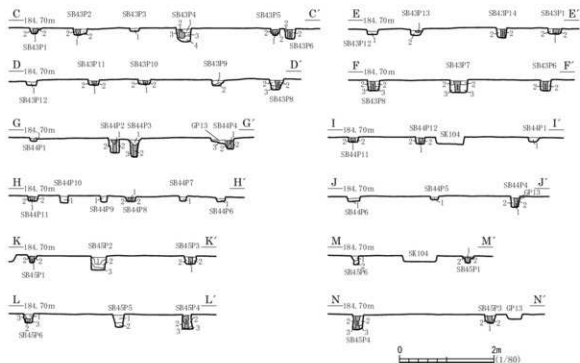


図78 43・44・45号掘立柱建物跡(1)

第2章 調査成果



43号据立柱建物跡(CC', DD', EE', FF')

P 1 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 褐色土 10YR1/1(黄褐色土と黒色土少量の混土)

P 2 堆積土

- 1 黒色土 10YR2/1(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土極少量含む)
- 2 褐色土 10YR1/1(NP含む, 黄褐色土と黒色土少量の混土)

P 3 堆積土

- 1 褐色土 10YR1/1(NP含む, 黄褐色土と黒色土少量の混土)

P 4 堆積土

- 1 褐色土 10YR1/1(NP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2(NP・炭化物・黄褐色土極少量含む)
- 3 褐色土 10YR1/1(NP含む, 黄褐色土と黒色土の混土)
- 4 褐色土 10YR1/4(黄褐色土と黒色土の混土)

P 5 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・炭化物・黄褐色土含む)
- 2 褐色土 10YR1/1(黄褐色土と黒色土の混土)

P 6 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・炭化物・黄褐色土含む)
- 2 暗褐色土 10YR2/3(NP含む, 黄褐色土と黒色土の混土)

P 7 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(NP・FP含む, 黄褐色土と黒色土の混土)
- 3 褐色土 10YR1/1(NP含む, 黄褐色土と黒色土の混土)

44号据立柱建物跡(GG', HH', II', JJ')

P 1 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土含む)

P 2 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 褐色土 10YR1/1(NP・FP含む, 黄褐色土と黒褐色土の混土)

P 3 堆積土

- 1 褐色土 10YR1/1(NP・FP・炭化物含む, 黄褐色土多量と褐色土の混土)
- 2 黒色土 10YR2/1(NP・FP・黄褐色土少量含む)
- 3 黒褐色土 10YR2/2(黄褐色土少量と黒褐色土の混土)

P 4 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土含む)
- 2 褐色土 10YR1/4(NP含む, 黄褐色土と黒褐色土の混土)

P 5 堆積土

- 1 褐色土 10YR1/1(黄褐色土と黒色土の混土)

P 8 堆積土

- 1 黒色土 10YR2/3(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(NP含む, 黄褐色土と黒色土の混土)
- 3 褐色土 10YR1/4(黄褐色土と黒色土の混土)

P 9 堆積土

- 1 黒色土 10YR2/1(NP・FP・炭化物・黄褐色土含む)
- 2 褐色土 10YR1/4(黄褐色土と黒色土の混土)

P 10 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/1(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 褐色土 10YR1/1(黄褐色土と黒色土の混土)

P 11 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3(NP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 褐色土 10YR1/4(黄褐色土と黒色土少量含む)

P 12 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・炭化物・黄褐色土含む)

P 13 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/2(NP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 褐色土 10YR1/1(NP含む, 黄褐色土と黒色土少量の混土)

P 14 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土少量含む)
- 2 褐色土 10YR1/1(NP・FP含む, 黄褐色土と黒色土の混土)

P 6 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土含む)

P 7 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)

P 8 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土・焼土少量含む)
- 2 褐色土 10YR1/1(黄褐色土と黒色土の混土)

P 9 堆積土

- 1 褐色土 10YR1/1(褐色土と黒色土の混土)

P 10 堆積土

- 1 褐色土 10YR1/1(褐色土と黒色土の混土)

P 11 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 褐色土 10YR1/1(NP・FP含む, 黄褐色土と黒色土の混土)

P 12 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 褐色土 10YR1/1(NP含む, 黄褐色土と黒色土の混土)

図79 43・44・45号据立柱建物跡(2)

45号掘立柱建物跡(KK', LL', MM', NN')

P 1 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・炭化物・黄褐色土少量、酸化鉄含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/2(NP・酸化鉄含む、黄褐色土と黒色土の混土)

P 2 堆積土

- 1 暗褐色土 10YR3/3(NP・砂・炭化物含む、黄褐色土少量と暗褐色土の混土)
- 2 褐灰色粘質土 10YR4/1(NP・砂含む、黄褐色土と黒色土の混土)
- 3 黒褐色土 10YR3/2(黄褐色土と黒色土の混土)

P 3 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・砂・炭化物・黄褐色土極少量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3(NP含む、黄褐色土と黒色土の混土)

P 4 堆積土

- 1 黒色土 10YR2/1(NP・砂・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2(NP多量含む、黄褐色土と黒褐色土の混土)
- 3 褐灰色粘質土 10YR4/1(黄褐色土と黒色土の混土)

P 5 堆積土

- 1 褐灰色土 10YR5/1(NP含む、黄褐色土と黒色土の混土)
- 2 褐色土 10YR4/4(褐色土と黒色土少量の混土)

P 6 堆積土

- 1 褐色土 10YR2/2(NP・砂・炭化物・黄褐色土少量含む)
- 2 褐灰色粘質土 10YR5/1(黄褐色土極少量含む、灰色粘土塊と黒色土の混土)
- 3 褐色土 10YR4/1(NP含む、黄褐色土と黒色土の混土)

図80 43・44・45号掘立柱建物跡(3)

に造られていた。付近柱穴群の対応関係を検討したところ、柱穴1・柱穴2・柱穴3を結ぶ柱列と柱穴4・柱穴5・柱穴6を結ぶ柱列を確認した。また両柱列の東西端をそれぞれに結ぶ直線とあわせて、矩形になる柱穴群を認識した。ただし柱穴2は北端柱列の西よりに造られ、柱穴5は南端柱列の東よりに位置している。したがって、北端柱列の柱穴2と、南端柱列の柱穴5を結ぶ桁行は軸線とは直交しない。

梁行1間、桁行2間の東西棟の建物跡で、軸線は、 $N-14^{\circ}-W$ に向けている。北端柱列は3.4m、西端柱列は2.2mである。東端柱列は2.7mである。柱穴を結ぶ直線は、台形気味の矩形である。柱穴の平面形は矩形を基調としている。一辺0.2m程度と小型である。深さは、0.4m程度である。埋土は、黒褐色土系を基本に、黄褐色土が混ざっている。

ま と め

この掘立柱建物にともなう土器類は、確認していない。ただし45号掘立柱建物と重なり、建物軸線もほぼ対応している。関連する掘立柱建物跡であろう。小型の45号掘立柱建物跡から一回り大きな建物に建替えたのであろうか。

(福 島)

45号掘立柱建物跡(図78~80、写真89・90)

遺 構

D7-G10グリッドを中心に検出した。23号溝跡の南西側にあたり、溝跡が続いていれば、一部が重なる位置にある。また43号掘立柱建物跡とも一部で重なっている。周辺の柱穴群を検討する中で、柱穴の確認されない空間とその北側、南側にはほぼ対応する柱列を確認した。柱穴1と柱穴6を結ぶ北端の柱列と柱穴8と柱穴12を結ぶ南端の柱列である。これをもとに柱穴1と柱穴12を結ぶ西端柱列を求めた。また東端柱列では柱穴6と柱穴8の間に柱穴7を認めた。

各柱列のうち、西端と東端では柱間に柱穴は対応しない。また南端柱列では、ほぼ等間隔に柱穴が造られているが、柱穴10が少し南側に外れた位置にある。これに関連して柱穴10と柱穴9の間に、さらに1個の柱穴が設けられた可能性がある。その部分は、GP7によって、失われていた。北端柱列はほぼ等間隔で柱穴が並んでいる。このうち柱穴5は44号掘立柱建物跡の柱穴5と重複していたが、新旧関係の把握はできなかった。

梁行は2間ないし3間、桁行5間の建物跡である。軸線は $N-35^{\circ}-W$ である。建物規模は、北

端柱列が長さ5.4m、西端柱列で4.0mである。各柱列を結ぶ矩形は台形である。柱穴は43号・44号建物跡と同様な大きさ・形である。埋土も大きな相違はない。

まとめ

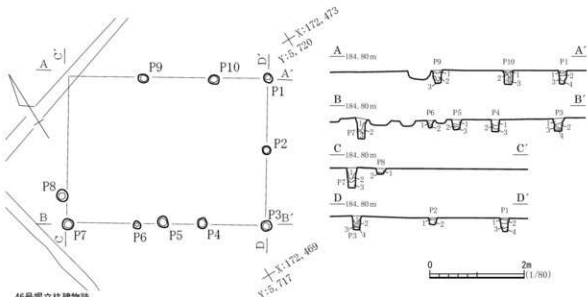
この建物跡は、柱穴間の結び付きに、不整合対応関係もある。しかし柱穴群の無い空間と各柱列を結ぶ直線が矩形となることから、建物跡であるとした。 (福島)

46号掘立柱建物跡 (図81・82, 写真91・92)

遺構

46号掘立柱建物跡は調査区の中央部、D6-B3グリッドに位置する。本遺構の西側には9号周溝墓、東側には13号周溝状遺構、南側には8号竪穴状遺構・70号土坑が分布している。

本建物は北隅の柱穴を欠くが、東西柱列が3間、南北柱列が2間の側柱建物跡と推定した。東西柱列の方向は、真北に対して33度東に傾く。建物の規模は、東西柱列(P3-P7)で4.2m、南



46号掘立柱建物跡

P1 堆積土

- 1 黒色土 10YR2/1 (褐色土粒含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2 (褐色土粒少量含む)
- 3 黒褐色土 10YR2/2 (砂・褐色土粒少量含む)
- 4 黒褐色土 10YR3/2 (褐色土粒・褐色粘土含む)

P2 堆積土

- 1 暗褐色土 10YR3/3 (褐色土少量と暗褐色土の混土)
- 2 黒褐色土 10YR3/2 (やや砂質、褐色土粒含む)

P3 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (NP少量、砂・褐色土粒含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (砂・褐色土粒多量含む)
- 3 黒色土 10YR2/1 (NP含む)
- 4 暗褐色土 10YR3/3 (褐色土多量と暗褐色土の混土)

P4 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (NP・褐色土粒含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (灰褐色土と黒褐色土の混土)
- 3 黒色土 10YR2/1 (灰褐色を含む)

P5 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (砂質、NP・褐色土粒含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (褐色土粒含む)
- 3 黒褐色土 10YR3/2 (灰褐色土と黒褐色土の混土)

P6 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (黒色土粒・褐色土粒含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (灰褐色土と黒褐色土の混土)

P7 堆積土

- 1 黒色土 10YR2/1 (NP・粘土塊含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/2 (褐色土粒含む、灰褐色土と黒褐色土の混土)
- 3 黒褐色粘土 10YR2/2 (褐色土粒極少量含む)

P8 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (砂少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/1 (やや砂質、褐色土粒極少量含む)

P9 堆積土

- 1 黒色土 10YR1.7/1 (砂極少量、褐色土粒少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/2 (褐色土多量含む)

P10 堆積土

- 1 黒色土 10YR1.7/1 (砂少量含む)
- 2 黒色土 10YR2/1 (褐色土粒極少量含む)
- 3 黒褐色土 10YR3/1 (褐色土と黒褐色土の混土)
- 4 黒褐色土 10YR2/2 (砂少量、褐色土粒含む)

図81 46号掘立柱建物跡

第2章 調査成果

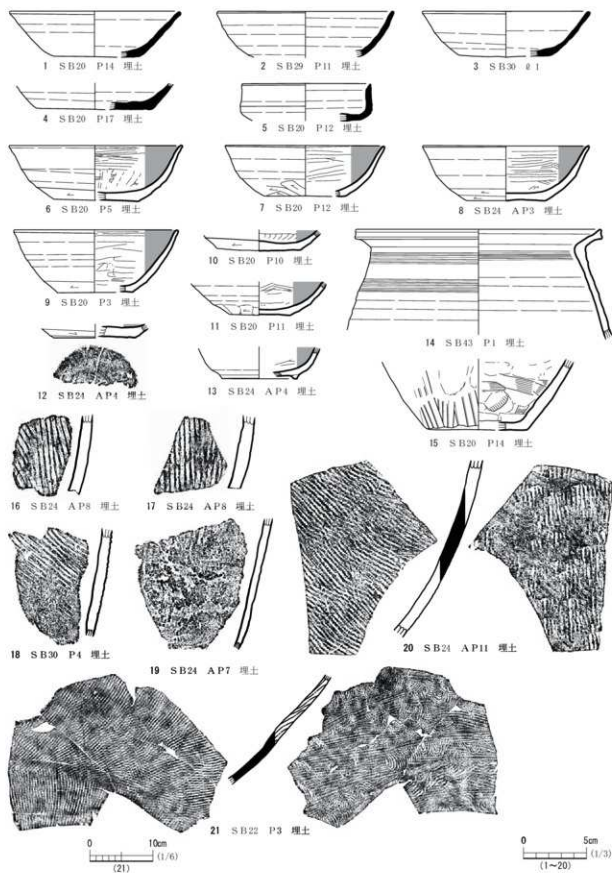


図83 掘立柱建物跡出土遺物(2)土師器・須恵器

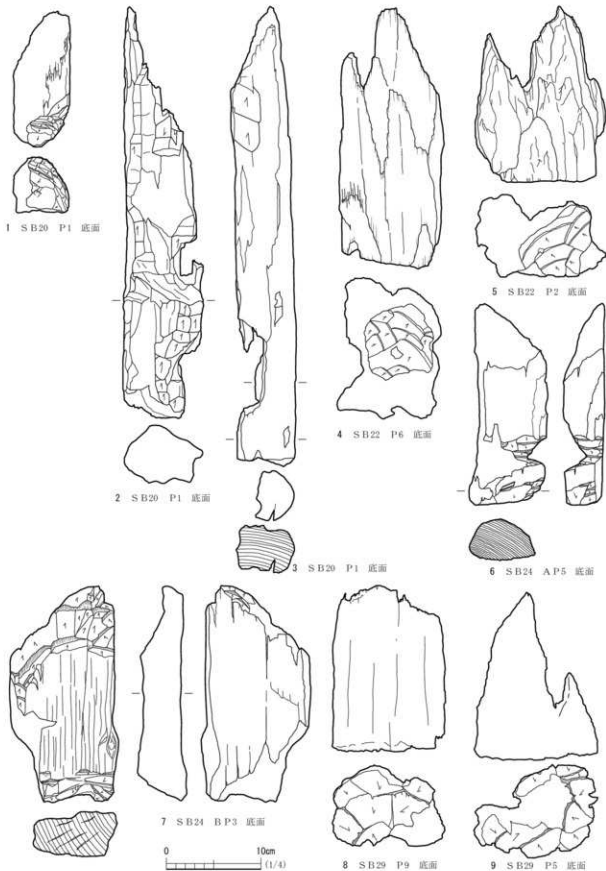


図84 掘立柱建物跡出土遺物(3) 柱材・礎板

第6節 土 坑

2次調査では土坑を45基確認した。土坑の形態や出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半頃の井戸跡・貯蔵穴・土坑墓・周溝墓の埋葬施設などを確認した。平安時代に属する土坑の多くは、掘立柱建物跡の周辺に分布する浅い土坑で、当時の生活ゴミとともに土器類を投棄した穴、いわゆる廃棄坑であろう。その他に平安時代に属する井戸跡を確認した。本節では、土坑の年代や性格ごとにまとめて報告し、検出位置や規模などの計測値は、表2・3に所収した。

1. 弥生時代の土坑 (図85~101, 写真93~100)

土 坑 墓

弥生時代の土坑墓は、64・69・74・75・101号土坑の5基が該当する。その内69号土坑は9号周溝墓の埋葬施設であり、本書第2節で所収した。本項では土坑の形状と出土遺物の関係が明瞭な101号土坑を中心に報告する。

101号土坑 101号土坑の平面形は、短軸に比べ長軸が長い楕円形となる。構造は墓坑の底面を埋めて平坦面をつくる。この平坦面の上に図89に示した遺物が直接置かれている状況が確認できる。また、棺材の痕跡は確認できない。このことから遺体は木棺には納めることなく、墓坑内に直接埋葬するものと推定される。遺物は図89に示す3点で、高環・小型甕・大型壺が副葬品となる。遺体とともにまとめて供え置いたものであろう。9号周溝墓の埋葬施設の一つである69号土坑のように、破碎土器とともに墓坑を埋める点と明瞭な違いがある。このことは周溝墓と土坑墓では、葬送儀礼に違う様式を採用していたのであろう。

図89-1は高環で、環身半分を失うがほぼ一個体である。環身は体部との境に明瞭な段があり、わずかに外反して開く口縁部となる。口唇部は鋭く面取りされ、内面に小さなかえりがつくられる。環身下端の段には沈線上の浅い凹線が2条めぐる。環身の内外面ともハケメの後にミガキを施す。脚部は円筒形で、下端部で屈曲して裾部に向かって大きく開く。裾端部は面取りされ、断面は三角形となる。脚部外面は密に磨きが施されるが、内面はナデを主体とする成形痕を残す。2は小型甕である。やや丸みを帯びて細長い体部で、その中位に最大径を持つ。口縁部は「く」の字状に開く。口縁部は内外面ともヨコナデで仕上げられる。体部はハケメの後に縦位から斜位のナデで器面が調整される。3は大型の長頸壺である。底部破片が全く出土していないことから、底部を打ち欠いたものが副葬されていた可能性が高い。口縁部の幅が長く、その下端に軽い段を持つ。頸部から口縁部にかけて、軽く外反して開く。体部は底部に向かって細くすばまり、体部上半に最大径を持つ。いわゆる倒卵形をなす体部器形である。内外面とも整形痕のハケメを明瞭に残す。これら遺物の年代は、いわゆる沈線文を多用する在地系土器が用いられていない点を評価し、9号周溝墓よりは新しい時期と考えている。

64・74・75号土坑 遺存状態が悪く明確な埋葬部は確認できない。平面形が長方形を基調とする。土坑の底面を埋めている。75号土坑では、土坑底面を埋める土の上部わずかに黒色土が確認できた。69号土坑に見られる木棺痕跡と共通する特徴である。さらに出土遺物が少なく、副葬状況は把握できないが、土器の破片が数点混入している点も共通する。69号土坑と同様に木棺墓で、破砕した土器とともに墓坑を埋めた可能性を指摘しておく。副葬品の出土状況から、木棺を用いない埋葬方法を採用する101号土坑とは明瞭な違いがある。 (福田)

井戸跡 (図88, 写真96・97)

93号土坑 調査区の北部、D6-C1グリッドにおいて、第Ⅲa層の上面を検出面として確認した。付近は八日町集落の西端部であり、これにともなう造成や擾乱の著しい場所である。ただし、この土坑の周辺では、表土層直下に沼沢火山灰を含む第Ⅲa層が遺存していた。土坑の南端は、近現代の水路によって失っているが、遺存状況は良好である。

検出面において、南北1.7m、東西1.8mの円形の落ち込みを確認した。最上部の堆積土は黒褐色土で、周溝墓の堆積土に近似していた。近現代の水路が南にあったことから、写真撮影の便を考慮して、西半部から掘り下げを開始した。当初は通常の土坑と考えて掘り下げた。この遺構が井戸跡と判明したのは、井戸跡底部直前になってからである。このため、井戸枠の西半分と井戸枠固定材は、現地で出土記録の作成はできなかった。

井戸の掘形は、井戸底面より上部は円筒形に造られている。壁はほぼ垂直で、一部では内傾していた。これに対して基底部は、截頭円錐を逆にしたようになっていた。また基底面は、砂礫層にまで達していた。検出面から基底部底面までは1.7mである。

基底部からは湧水が著しく、基底部の詳細な土層断面図の作成はできなかった。井戸底から基底部底面までは下部遺構の埋土である19層とした。このなかから桜町1式の土器がまとめて出土した。最下層に図96-12が横倒しに置かれ、その上に図96-13が同じく横倒しになっていた。この周辺に土器の破片を含んだ埋土が詰められていた。

基底部底面から井戸の底面までは、0.5m程度である。井戸底面は中央が少し凹んだ状態で、井戸枠下端から井戸中央部底面までは0.2m近く低くなっていた。これは、井戸を使用したとき生じた侵食であろう。また井戸枠の設置面は、検出面から深さ1.2m程度で平らに整えられていた。本来の表土面からすれば、1.5m以上はあろう。

井戸枠は、掘形中央に垂直に据えられた状態で出土した。外形の直径は48cm、内径は45cmである。高さは60cm前後まで遺存していた。また井戸枠底部は、外側に割り材を井桁に組んだ造作により固定されていた。4～6本の割り材を平らに並べて重ねたものである。割り材の端が長すぎる場合は、掘形の壁を掘って空間を確保していた。また割り材の表面にはイネ科の茎が束になって付着していた。割り材とともに置かれたものであろう。この上に、灰褐色粘土と黒色粘土を混じえた土を水平に詰めて井戸枠を据えていた。この部分の埋土は12層～17層に区分した。

井戸枠の内部底面からは、口を南に向けて図94-1が出土した。井戸に落ち込んだ状況である。使用時の最終段階に近い資料である。9層～11層までが使用時あるいは直後に形成された土層であろう。第1層～第8層は、井戸が廃棄された後に堆積した土層である。第6層～第8層には、白色粘土塊などが含まれている。人為的な埋め戻しの可能性が高い状態である。3層～5層までは、斜めに堆積している。やはり灰白色の粘土を含んでいる。埋め戻しの土であろう。これに対して2層では砂が縞状に入っている。自然堆積により形成された土層であろう。最上部に自然堆積土があるのは、完全に埋め戻されなかったか、あるいは埋め戻しが不十分で、井戸枠部分が陥没したのであろうか。それとも上部土層の表土化であろうか。

遺物 (図93～98, 写真136～142・152)

出土した遺物は土器類と井戸枠・構築材、それに昆虫や種子などの自然遺物である。このうち自然遺物については、付章にまとめて報告を行った。

遺物が出土した土層は、大きく3群に分かれた。①群、1層と2層は周辺からの混入である。3層～8層も埋め戻しであれば同様であろう。②群、9層～11層は、井戸の使用時における土器である。③群、12層～18層の土器は井戸構築時の混入品である。また、井戸枠や割り材もこの時の遺物である。19層は下部遺構構築時の資料である。この土層の土器は、構築に一括して意図的に納められた土器である。

①群は、図93-1～20である。沈線文による文様、交互刺突文、ツمام凸帯という在地の土器とともに、北陸系の土器15～20が出土している。15は口縁部下端の頸に刻み目をめぐらしている。

②群は、図93-21・図94-1である。図93-21～27は在地系土器である。28-32は北陸系土器である。浅い受け口の口縁部、丸く収めた口唇が特徴的である。すべて甕の破片である。図94-1は在地の要素と北陸、それに北関東方面の要素をあわせた土器である。口縁部はいわゆる月影甕の特徴があり、口縁部は受け部を持ち、外面は擬凹線に似た凹凸がある。

口縁部頸の外面には、ツمام凸帯で波状の凹凸を巡らされている。在地の要素である。頸部外面は櫛描きによる波状文、簾状文の繰り返しと沈線文が描かれている。北関東地方の要素である。体部は縄文である。

作り方では、均一で薄い器壁に仕上げられている。ケズリ、あるいはカキトリによる整形が施されたのであろうか。カキメの痕跡はみられない。体部内面はナデミガキである。底部付近にある細かな凹凸は焦げ付きによるものであろうか。これに対応する部分の外面は、熱変化による劣化が著しい。体部上半には斜め右上りの粗い沈線が巡っている。乾燥が進んだ段階に施されている。頸部から口縁部内面は横方向のヘラミガキにより整えられている。頸部は幅広く、口縁部は細かい。

③群は、図92-33～34、図95～97である。図92-33・34は井戸構築時の在地系土器である。32は櫛描波状文が施されている。図95・96・97-1は在地系要素の強い土器である。沈線、押し引き沈線、ツمام凸帯、刺突文、それに縄文を組み合わせて文様が施されている。口縁部が波状になるもの、あるいはヘラ押しや縄押しによる口唇面のキサミ文も多くある。

図96-1は口縁部が開く山形口縁の壺上半部である。山形突起は6単位であろう。沈線文といわゆる交互刺突文が顕著である。頸部の文様では、沈線の起点に中央に円形刺突で盲孔を配置している。3は沈線が多用されている。口唇下外面は竹管を斜めに押し連ねた文様が配されている。4は二段にツمام凸帯がめぐらされている。5の口唇は外傾する平面に特徴がある。6は口唇にヘラを斜め置きしたキザミがある。沈線は、上下で向きを違えて配置されている。7は縄文が施されていない。ツمام凸帯がある。8は縄文で、口縁部にしたに頸がある。9・10は縄が水平方向に施されている。図97-1は、口縁部外面にかすかなツمام、頸部外面に細い沈線、体部に横行縄文が施されている。内面はナデで仕上げられている。ハケメは施されていないらしく、器壁には凹凸がある。

図96-11は沈線が多用された土器である。口縁部が大きく膨れて、外傾している。4単位の波状口縁で、口唇上の突起に対応して側面に沈線で環を描いている。頸部外面は波状文であるが、乱れている。頸部から体部は平行沈線が施され、これを段違いに縦に区画した文様が施されている。体部中央下には上を向く半円が沈線で描かれている。内部は粗い仕上げのナデである。

図96-12は細頸壺である。体部の肩が張って径の広い底部となる。外面は縦方向のヘラミガキである。13は体部中央に最大径を持って、頸部がすばまって口縁部は大きく外反する。口唇に斜め置きのキザミが巡っている。内面の整形は、カキトリの上からナデが施されている。14は頸部から上は不明である。体部上半に最大径があり、なで肩である。外面は縄文、内面は上半が横方向のハケメ、下半はナデである。図94に似た器形である。外面下半部の加熱による劣化、体部外面の炭化物付着も同じである。

図97-2は口縁部外面の擬凹線とツمام上げ凸帯が特徴的である。3も同様な土器である。いわゆる月影甕の頸に、刻み目を巡らせた特徴がある。4~8は外傾して広がる口縁部で口唇は丸く膨らませる特徴がある。ヨコナデ仕上げである。12はこれらより、傾斜が急になっている。9は斜めに大きく開く口縁、10は急傾斜で小さく開く口縁である。多くは内外面に炭化物が付着している。

図97-11は体部中位に最大径がある。なで肩の外面に、先端の丸い櫛先で描沈線が施されている。中位は横方向の短いハケメ、下部は縦方向のハケメである。外面には炭化物が付着している。内部は中位に斜めハケメが残っているが、その上下はナデミガキである。また最上端にカキトリ痕がみられる。

16~19は、底部近くの破片である。ハケメが多用されている。20の体部下外面は縦方向のミガキで仕上げられている。上半はナデである。内面は底部から下半にかけて渦巻き状にナデが施されている。上部はナデで、下半部とは仕上げ方が異なっている。分割成形の痕跡である。22・23もハケメである。24は体部下半の破片である。外面はハケメ、内面の底部近くがハケメで、それより上は縦方向のナデである。

図97-14・15は口唇が欠けている。受け口となる口縁である。両方とも外面に炭化物が付着している。割れ口に炭化物は付着していないので、この炭化物は使用時のものであることを示している。13の頸はなめらかであるのに対して、14は先端が鋭く尖っている。15の外面は、スリット状の皮膜

となっている。一部では、それがはがれている。

図97-21は胴の長い小型甕である。口縁部は外へ傾いている。体部外面はナデ、内面は横ハケを基本に整形されている。

図97-25~28には高坏脚部を集めた。いずれも外面はヘラミガキである。脚部の円孔は外側から内側に向かって穿孔されている。25・26・28は坏の中央部から粘土塊を充填する方法で坏底を作っている。これに対して27は、脚部上半を絞りを絞上げて作り、この上に坏部をのせる作り方らしい。数少ない作り方である。内面は脚端がハケメで整えられている。脚端部は鋭く内傾く段である。坏底部と脚部外面に黒色の皮膜が付着している。このほか29は磨石の破片である。

図98には、井戸枠と構築材13点を図示した。井戸枠の樹種は、トチノキである。掘り下げ時に半裁したために内部を削り貫いたのか、割材を合わせたのかを現地で確認できなかった。取り上げた破片を接合した結果、井戸枠の合わせ面は確認していない。丸太を削り貫いて作られていると推定している。

井戸枠の外面は、表皮を除去した後、表面を整えられていたが、加工痕跡は劣化のため不明である。内面は丸刃の工具痕が遺存している。井戸枠の小口に向かって軸線方向に削り取った痕跡である。刃幅は4cm以上である。小口面は幅3cm前後である。小口面を回るように細かな工具痕が連続している。小口は軸線に対して、ほぼ直角になるように調整されている。

図示した構築材の樹種は、トネリコ属シオジが5点、キハダが5点、エノキが2点、クワ1点、不明1点である。直径15cm前後の幹材をミカン割にしたものや丸太材である。長さは、最長で120cm程度である。削り加工の施された材は少ない。7は、キハダである。先端の一方が杭先状に加工されている。また側面の一部にイネ科植物が付着している。8は、直径30cm前後のクワの丸木材である。表面を削り整えて、面取りがなされている。11はエノキの丸太材である。直径5cm程度である。表面にイネ科の植物が付着している。網目状にも見えるが、明確な規則性は把握できなかった。構築材を組み合わせたときに、足場を補強することを目的として、構築材の間に詰められたのであろうか。

まとめ

93号土坑は、下部構造を造り、その上に井戸枠を設置して、これに構築材を井桁に組むという特異な構造の井戸である。また下部構造からは、弥生時代後期の各種土器が多数出土した。井戸底部から出土した土器と合わせて、当時の土器組成を知る上で基準となるものである。（福島）

貯蔵穴

91・94号土坑が該当する。平面形が円形の土坑で、直径1.5m前後、深さが1.3~1.5mと深い特徴がある。出土遺物に土器類の他に、木製農具や建物部材がある。なお、これら土坑の土壌分析は付章に所収した。

91号土坑 91号土坑は周溝墓群の北東部に位置し、周囲には井戸跡の93号土坑、91号土坑と同じ

く貯蔵穴である94号土坑が分布する。弥生時代の遺構分布が比較的希薄な場所となる。91号土坑の構造は円筒形に深く掘り込まれた穴である。検出面はLⅢ a層とした沼沢バミスを含む褐色粘土層で、底面はLV層としたグライ化した砂礫層に達している。

土坑内の堆積土は、上層部分は黒褐色粘土である。土坑が半ば埋没してくぼみとなった部分に堆積する自然流入土である。下層はLV層を起源とする壁面の崩落土を含む黒褐色土である。7層～11層を中心とする中層部分から木製品が出土している。壁面崩落土を含む堆積土中に、木製品など遺物が含まれることから、土坑の廃絶後に投棄された遺物と判断している。砂礫層となるLV層に相当する部分の周壁は崩落が顕著で、壁面がオーバーハングする。本来的には円筒形に真っ直ぐ掘り込まれているのであろう。15層は土坑底面を薄く覆う黒色粘土層である。土坑の機能時に堆積した土層と判断した。

土坑の堆積状況について、15層より上層部分は壁面崩落土を含むレンズ状に堆積する自然流入土によって埋没している。このことから、土坑は本来的に開口した状態で機能していたと判断し、貯蔵施設としての性格を考えている。

91号土坑の出土遺物は、91・92図に示した。土器類は、底面上の15層から出土したものが多く、土坑の機能時期に近い時期と判断した。木製品は7～11層とする中層部分からまとまって出土している。土坑廃絶後で、半ば埋まりきらずにくぼみとなった場所に投棄された木製品と考えている。しかし、崩落しやすい場所を掘り込む土坑であるため、埋没にかかる時間は短期間であろう。土坑底面から出土する土器と、年代をたがえるほどの時間差は想定されない。

図91-9は口縁部と頸部の境に交互刺突が施された壺である。交互刺突文は円形竹管状の刺突具を用い、斜め方向となる上下の刺突を加えている。やや立体感がなく、波状隆線文とはならない。

10～12は押し引き沈線で文様を描く壺である。頸部には楕円形、体部下半には下向きの連弧文が描かれる。15～17は北陸系土器の甕である。口縁部下端に段を持ち、口唇部が丸みを帯びて、受け口状に外反して開く。18・19は甕の底部破片である。19は底部外面が低い輪台となる。

20は11層から出土した鍔身である。形態的な特徴から狭鍔に分類できる。頭部は長く、その端部は直角に切りそろえられる。刃部先端は欠損するが、側縁部は丸くなる。柄孔周囲の隆起部分から右側が破損して失われているが、側縁部分を丁寧に削り整え、補修して使用していたのであろう。柄孔の角度が鋭角になることから、隆起部が前面となる。鍔身の加工痕は数種観察でき、その加工にはナイフ・ノミなどの鉄器が用いられていると判断した。身部の加工痕は、木目にそって平坦に整える加工痕で、断面が三角形となる片刃ナイフであろう。隆起部側縁の加工痕は、隆起の形状に添って身に直行する方向で打ちおろして削られている。工具の刃部幅が5cmほどで、刃先が丸く湾曲するチョウナ状の工具であろう。隆起表面は、右側は破損時の割れ口をのこしている。左側はやや幅広いの工具痕で、木目に沿って平坦に整える加工が観察できる。柄孔は丸ノミ状の工具を用いられて開けられる。柄の形状に合わせて、柄孔の表面を削り整えられている。

第2章 調査成果



図85 弥生時代の土坑(1)(63・64・67・68・70・73号土坑)

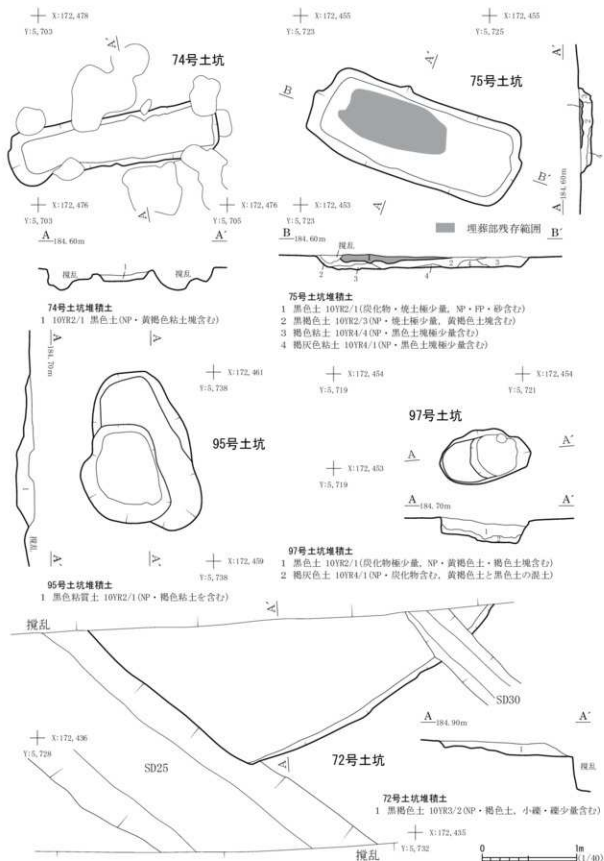


図86 弥生時代の土坑(2)(72・74・75・95・97号土坑)

第2章 調査成果

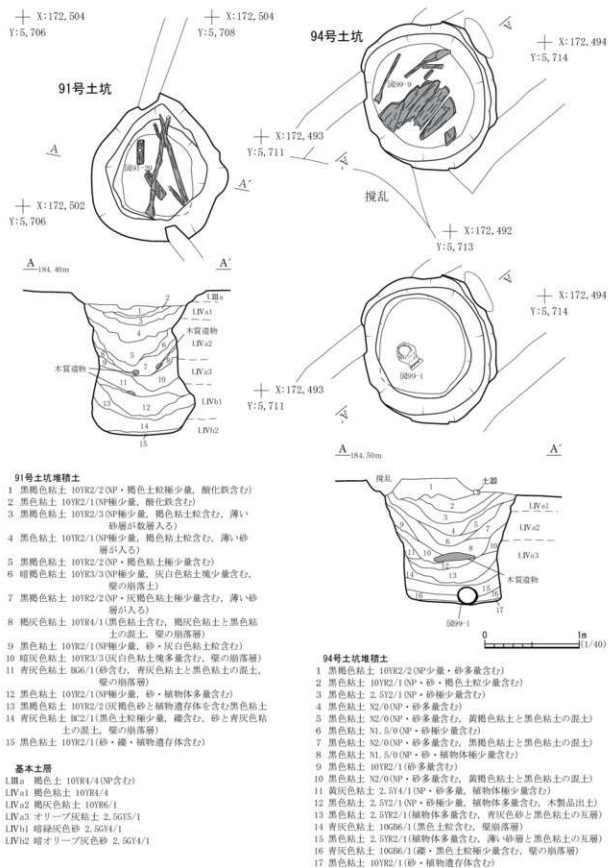


図87 弥生時代の土坑 (3) (91・94号土坑)

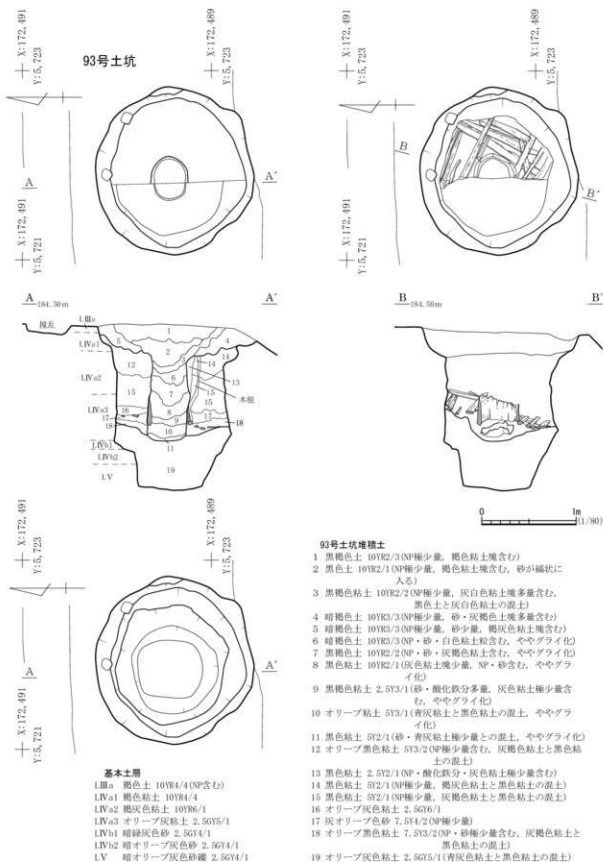


図88 弥生時代の土坑(4)(93号土坑)

第2章 調査成果

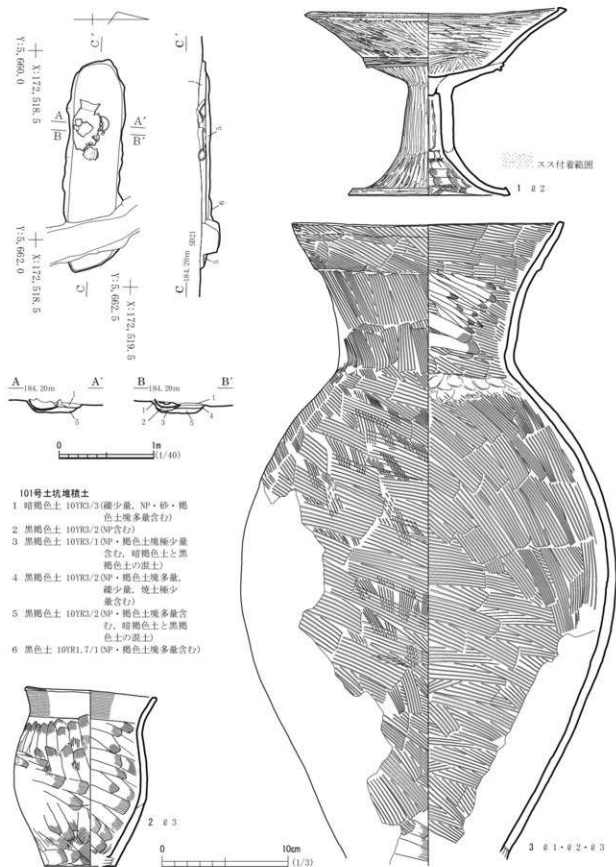


図89 101号土坑

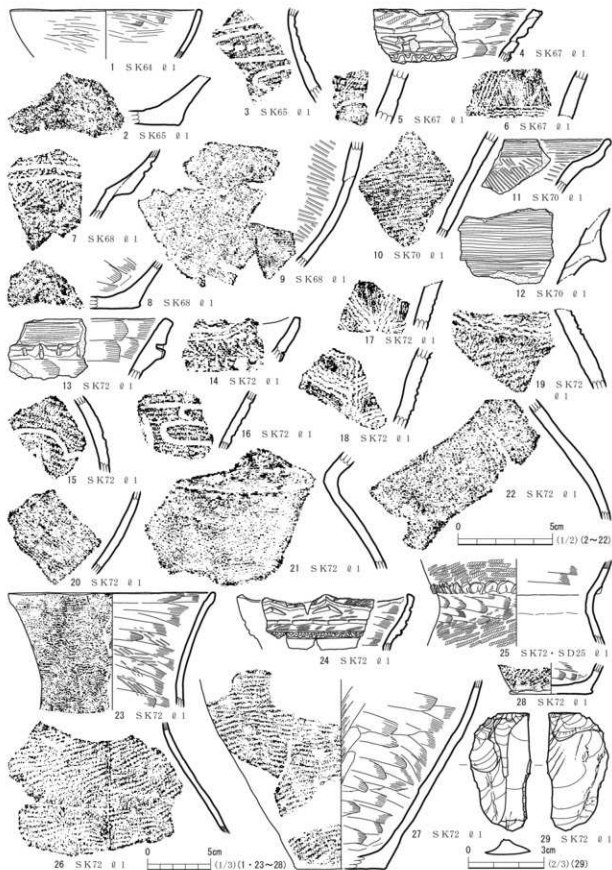


图90 64·65·67·68·70·72号土坑出土遺物

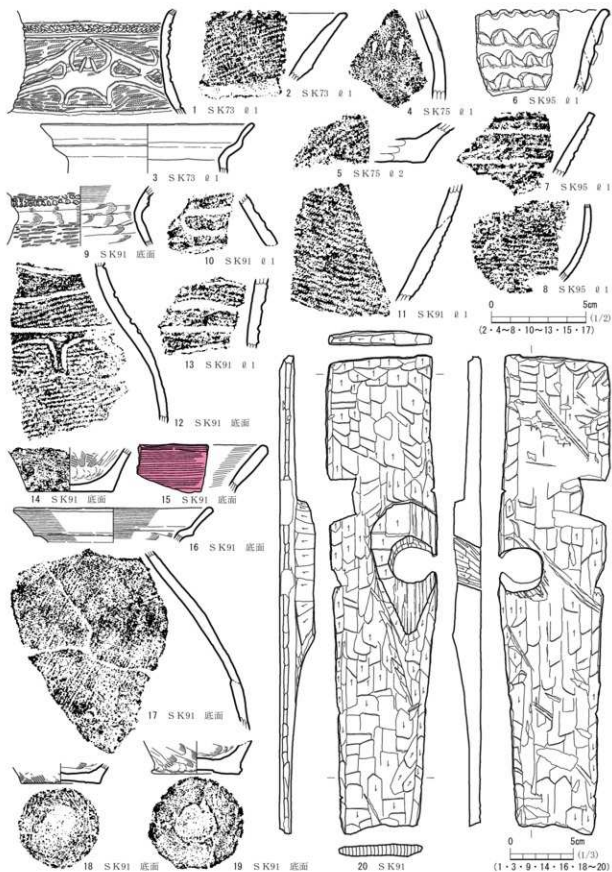


図91 73・75・91号(1)・95号土坑出土遺物

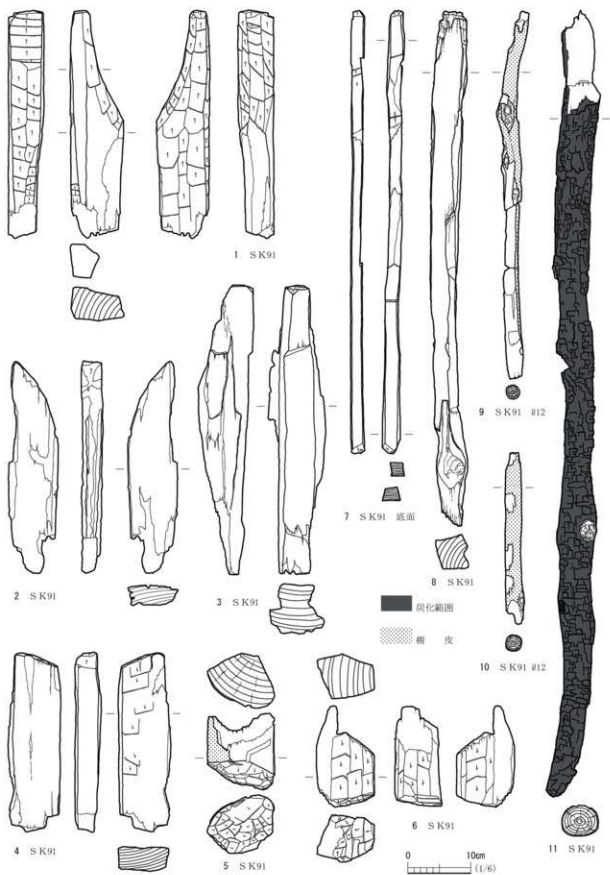


圖92 91号土坑出土木製品(2)

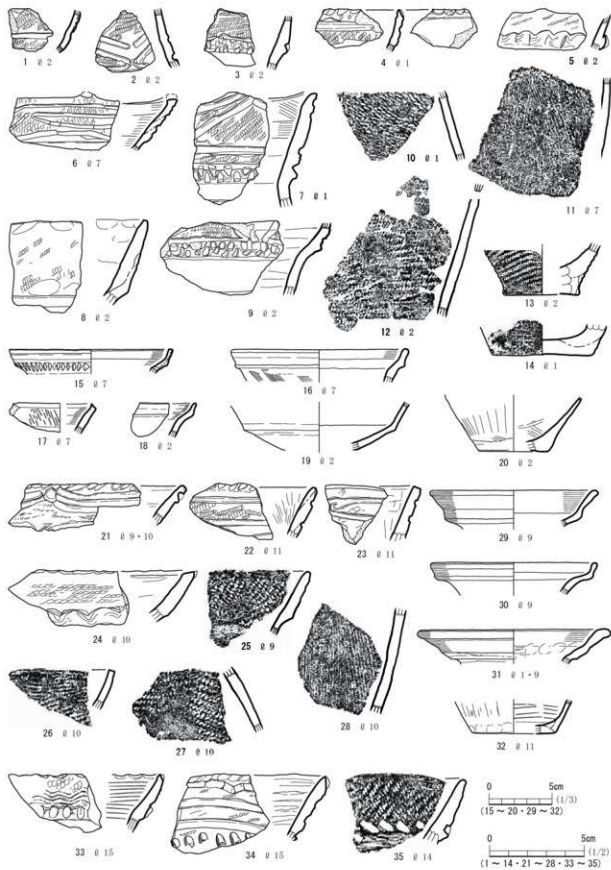


図93 93号土坑出土遺物(1)

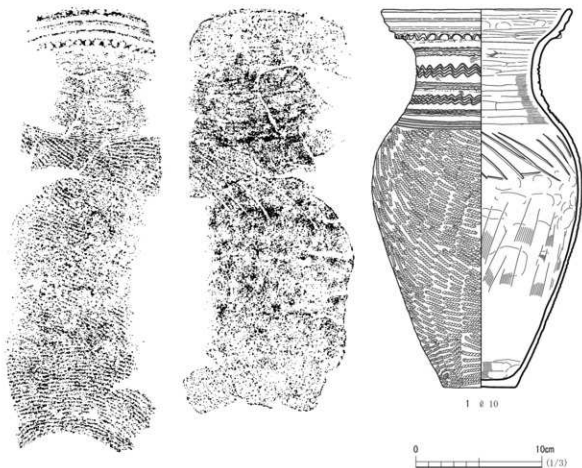


図94 93号土坑出土遺物(2)

図92-1~6は建物部材であろう。1~4はいずれも板材で、厚さは3cmほどである。炭化や腐食のため全体的な形状は不明であるが、建物の壁材の一部であろうか。1は先端部が細く切り揃えられる。側縁部を整える面取り加工が施される。2は側縁部が丸く加工される。表面は摩滅著しく、加工痕は不鮮明である。3は腐食著しく上面部分がわずかに遺存する程度である。状面部分に幅30cmの浅い段差が観察できる。何らかの材と組み合わせるための造作であろうか。4は端部が四角に切り揃えられた板材である。表面にやや幅広い刃部の加工痕が観察できる。5・6は炭化や腐食のため全体的な形状は不明であるが、柱材の一部であろうか。割り材を用いて、先端部を斧状工具で切り揃えられる。7は用途不明の棒状木製品である。割り材を用いて断面が四角くなるように面取りされる。8は割り材である。外皮は遺存していない。9~10は芯持ち材で、両端部が遺存していないため用途は不明である。部分的に外皮が遺存している。枝を切り払う加工が残る。11は芯持ち材で、杭であろうか。

94号土坑 94号土坑は周溝墓群の北東側に位置し、91・93号土坑の他に弥生時代の遺構が希薄な場所に分布する。91号土坑と同様に、円筒形に掘り込まれた深い穴である。その底面はL V層としたグライ化した砂礫層に達している。

土坑内の堆積土は、9層までの上層部分は黒色粘土で、レンズ状堆積を示す自然流入土である。

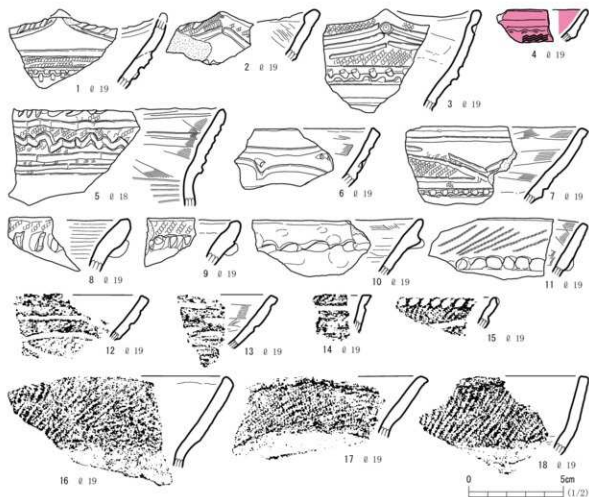


図95 93号土坑出土遺物（3）

10層以下は壁面の崩落土と植物遺存体を含む黒色粘土層が交互に堆積する。黒色粘土層を詳細に観察すると、薄い砂層と黒色粘土が互層をなして堆積する。土坑の埋没過程において、土坑は人為的に埋め戻すことなく、開口した状態で放置されていたことが分かる。その後、壁面の崩落と降雨の影響による自然流入土で埋没している。なお、木製品は12～15層に集中して出土している。土坑廃絶後に土坑が半ば埋まった状態の所に投棄した木製品と判断した。17層は土坑底面を薄く覆う黒色粘土層である。土坑が機能していた時期の堆積物と判断した。この堆積状況から、近接する91号土坑と同様に、本来的には開口した状態で機能していた土坑であり、貯蔵施設としての性格を想定している。

94号土坑の出土遺物は図99～101に示した。土器類は底面上から出土したものが多く、図99-1は底面上に横倒した状態で出土した壺である。土坑の廃絶時に近い状態で出土したものである。木製品は12～15層の部分で出土した。土坑が崩れやすいLIV層を掘り込むことを勘案すれば、土坑の廃絶とそれほどの時間差はないと考えている。

図99-1は広口壺である。体部中央に最大径を持ち、頸部に向かってくびれる。口縁部の幅は狭く、下端部にやや肥厚した段を持つ。口唇部には撚糸文の回転によるキザミを施す。口縁部下端に

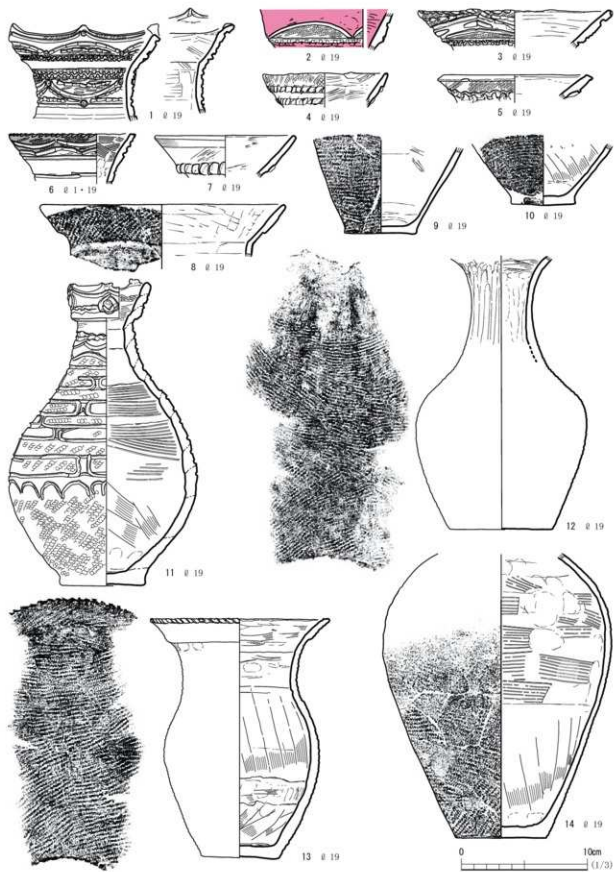


图96 93号土坑出土遗物 (4)

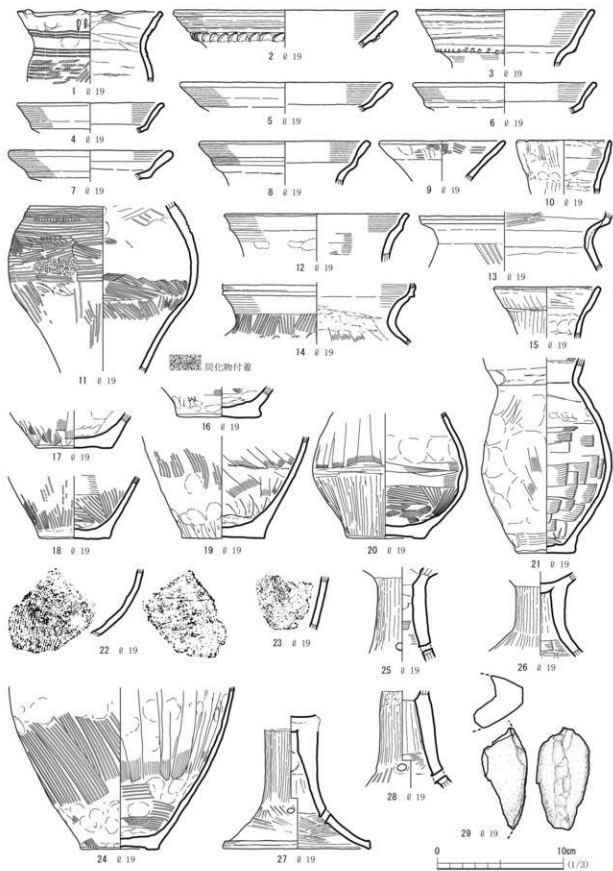


図97 93号土坑出土遺物(5)



図98 93号土坑出土木製品

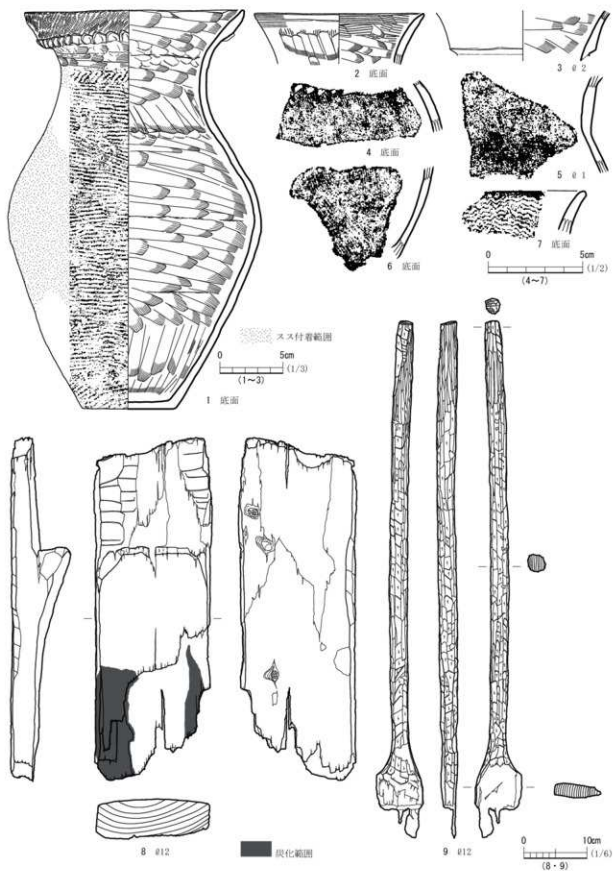


図99 94号土坑出土遺物 (1)

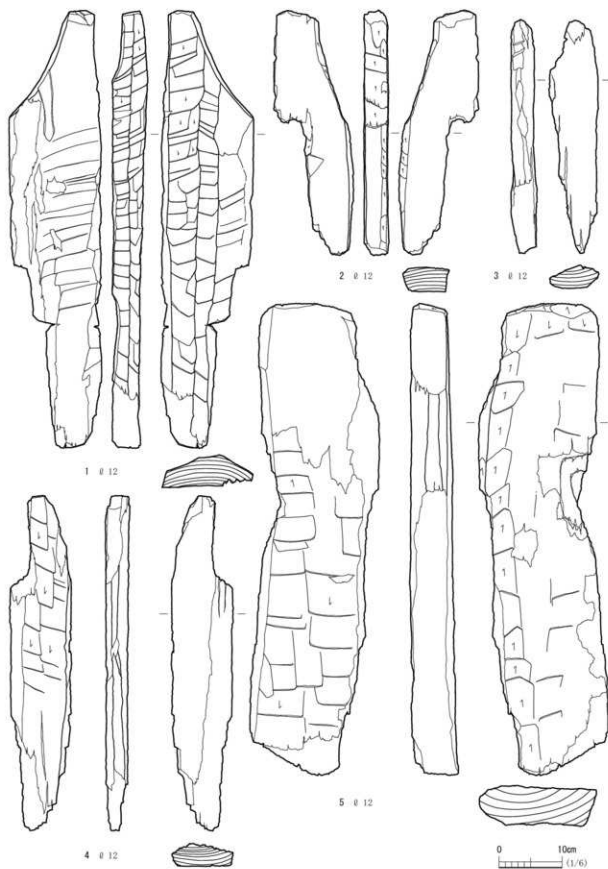
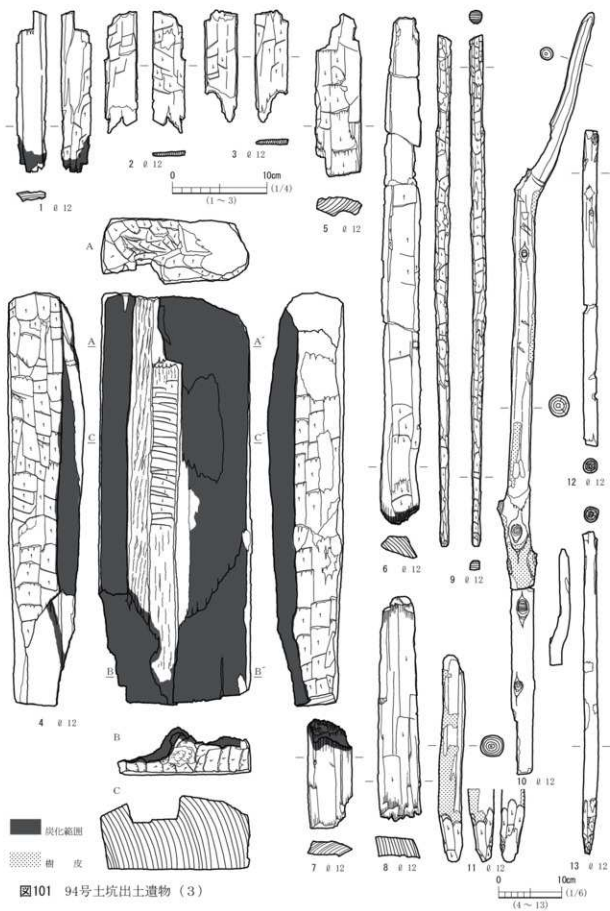


图100 94号土坑出土遗物(2)



は指頭押圧によるキザミで加飾される。口縁部と体部は地文に撚糸文が施され、頸部に撚糸の結節部が観察できる。また体部中位で最大径となる部分を中心に、使用による煤が付着している。内面はナデを主体に丁寧な器面調整となる。2は壺であろうか。口縁部が外傾して開く。口唇部直下に浅い凹線がめぐる。内外面ともハケメの後にナデで器面調整される。3は北陸系甕の口縁部破片である。口縁部幅が広く、下端に段を持つ。4～6は成形にハケメを多用する北陸系甕の破片である。4は体部上半にヘラ状工具の刺突による列点がめぐる。7は壺であろう。口縁部に櫛歯状施文具による横位の波状文が施される。

8は木製の梯子破片である。出土位置は土坑南側の周壁に接して、足掛けの部分を周壁側にむけて正立した状態で出土した。梯子の幅が18cm、厚さが4cmである。足掛けは幅5cmで、直角に切り込まれている。表面が炭化しているため、加工痕は不明瞭である。9は身幅が狭く、掘り棒であろう。土坑北西側の12層中から出土した。一木造で、ミカン割りした材から、身と柄を削りだしている。身の形状は、柄から徐々に幅を増して身に至る。身の先端部を欠損している。身の断面形は、側縁がやや角ばる紡錘形になる。柄は先端部のケズリ加工が丁寧で、その断面形が丸く整えられる。中位から身部にかけては、やや粗い加工で、その断面形は多角形になる。加工痕の観察から鉄製工具を用いて加工している。

図100-1～5は切り欠きなどの加工を施す板材で、建物部材であろうか。10層下部から12層上面から出土した。1・2は端部が丸みを帯びて細く削られる板材である。形状は図92-1・2と酷似する。1は裏面が平坦に整えられるが、表面は両側面を斜めに面取りし、断面形は山形となる。3～5は板材の破片である。摩滅著しく、加工痕は不鮮明である。5は比較的大きい板材である。外皮に近い部位の材を用いている。加工痕の観察から、刃部幅が3～4cmほどのチョウナ状の鉄器と推定される。刃先は木目に直交するようあたり、木目に沿って一方向に削っている。これらの加工痕は木材を平らに削る粗い加工で、その後面取りなどの表面の仕上げ加工は確認できない。また表面の摩滅が著しいものが多い点から、長期にわたり外気にさらされた部材と判断している。建築部材として具体的な部位は不明であるが、粗い加工の板材が長期にわたり外気にさらされた状態を勘案すれば、床材や壁材の一部となるのであろうか。

図101-4は建物部材であろう。図101-4は長さが65.4cm、幅が24.1cm、厚さが10.2cmを測る、大型の建物部材である。上面に幅4.5～7.8cm、深さ3.0cmの溝状の切り込みが観察できる。溝底面の右側に比べて、左側は摩滅している。引き戸となる敷居であろうか。外面は摩滅や炭化が著しく、加工痕は不鮮明である。

図101-1～3は加工痕がのこる板材である。用途は不明である。5～8は用途不明の割り材である。炭化したものが多く、加工痕などは不鮮明である。9は用途不明の棒状木製品である。丁寧な面取り加工される。上部の断面形は丸く整えられ、下部は方形になる。10～13は芯持ち材を用いた杭状木製品である。10・11は接合しないが同一個体である。上端は枝が二股に分かれている。用途は不明である。13は上端を欠損するが、細い杭状木製品である。杭状木製品の先端部の加工は

鋭く、ナタなど鉄器の存在が伺える。

性格不明の土坑

堅穴状遺構に類似するもの(72号土坑)、その他性格不明なもの(63・67・68・70・73・95・97号土坑)である。

72号土坑は他の土坑に比べ、規模が大きく、底面が平坦になる特徴がある。6・8号堅穴状遺構と形態的に類似する。出土遺物は図90-13~29である。交互刺突による波状隆線文や指頭押圧によるキザミによって加飾され、燃糸文を地紋に押し引き沈線で文様を描く在地系土器(13~16, 24~28)。櫛歯状施工具で文様を描く北関東系土器(17~19, 23)。23はやや彫りの浅い櫛歯状施工具を用い、口縁部直下から横位の波状文を施す。樽式土器に類似する。さらに成形時にハケメを多用する北陸系土器(20~22)がある。いずれも甕の体部破片で、ハケメが観察できる。

その他の土坑については、平面形や底面の状態が安定しないもの、出土遺物からも遺構の性格を特定する知見は得られていないものを一括した。年代はいずれも弥生時代後期後半頃である。

2. 平安時代以降の土坑(図102~110, 写真101・102)

廃棄坑

本項で廃棄坑とする土坑は、掘立柱建物跡の周辺に分布する浅い穴で、D6-C9, D6-F10, D7-D2グリッドの大きく3地点で確認できる。堆積土は炭化物や焼土を含む黒色土と黄褐色土が混ざった人為堆積で、土器類が多量に出土する特徴がある。これら土坑の性格は、当時の生活ゴミを投棄するために掘られた穴と判断している。廃棄坑の平面形や規模などから、以下の1~2類に分類した。

1類廃棄坑：平面形が円形または楕円形を基調とし、直径1m前後の小型土坑。

(80・81・82・87・88・96・98・104・105・106・107・110・111号土坑)

2類廃棄坑：平面形が楕円形または隅丸長方形で、長径が2m以上と大型になるもの。

(83・84・85・86号土坑)

各類土坑の分布状況と掘立柱建物跡との関係をまとめると、以下のとおりとなる。

①29・30号掘立柱建物跡の間に分布する88・105・111号土坑(1類廃棄坑)。

②25・44号掘立柱建物跡の間に分布する82・107・80号土坑(1類廃棄坑)、83・84・86号土坑(2類廃棄坑)。

③45号掘立柱建物跡の脇に分布する81号土坑(1類廃棄坑)。

④43号掘立柱建物跡の周辺に分布する80・104号土坑(1類廃棄坑)。

⑤39号掘立柱建物跡に付随する85号土坑(2類廃棄坑)。

⑥20号掘立柱建物跡に付随する106号土坑(1類廃棄坑)。

⑦87・96・98・110号土坑(1類廃棄坑)に伴う掘立柱建物跡は不明であるが、これら土坑の南

側に分布する可能性がある。

⑧ 2間×2間の総柱建物跡周辺には、廃棄坑が分布しない。

⑨ 掘立柱建物跡の南側に廃棄坑は分布しない。

各類廃棄坑と掘立柱建物跡との関連からすれば、平面形や規模の違う廃棄坑が複数基混在して分布する傾向が見られる。掘立柱建物跡と廃棄坑の形状や規模に関連性は低いと判断した。次に出土する遺物との関連について、土器類の器種は坏や甕を主体とし、筒型土器の破片が少量混じる程度である。これらは日常生活雑器であることは明らかで、廃棄坑を伴う掘立柱建物跡が居住を目的とする建物と判断している。また、倉庫と考えられる2間×2間の総柱建物跡の周辺に廃棄坑が分布しない点も、当時の生活ゴミとともに不要となった土器類を投棄した穴とすることに矛盾しない。

廃棄坑の数と規模は、掘立柱建物跡に居住する人の数と、その存続期間に影響されるのであろう。さらに廃棄坑が掘立柱建物跡の南側に分布していない点が挙げられる。建物の正面が南向きであったことは間違いなく、南側にある程度の広さの空間を確保することが、集落内で共有していたことが分かる。

廃棄坑から出土した遺物は、図107～109に示した。弥生土器は周辺の周溝墓群からの流れ込みと判断した。古墳時代後期から奈良時代の土器を少量ながら含むが、平安時代の土師器や須恵器が主体を占める。平安時代の土器の器種については、土師器が坏・甕に筒型土器が少量ある。須恵器は坏が多く、その他に甕・長頸瓶・高台付坏・高台付皿がある。日常生活で使用する雑器である。

図107-1～5は78号土坑から出土した。1は成形にロクロが用いられる土師器坏で、内面がミガキの後に黒色処理される。底径が大きく、体部が直線的に開く器形である。底部外面はロクロの回転を利用したケズリで調整される。2～5は須恵器の坏である。底部から口縁部にかけて直線的に立ちあがる器形である。底部はロクロ回転を利用したケズリで調整される。

図107-6～10は80号土坑の遺物である。6は須恵器の坏で、底部付近の破片である。7は高台付坏で、高台が貼り付けられ、ロクロの回転を利用して整えられる。8は須恵器甕の口縁部破片である。口唇部下端がわずかに垂下する。9・10は土師器の長胴甕である。9は頸部が「く」の字に屈曲し、口縁部が大きく開く。10は体部下半の破片で、平行タタキメが観察できる。

図107-11～18は83号土坑の出土遺物である。11は丸底となる土師器坏で、成形にロクロが用いられていない。体部外面はケズリで器面調整され、口縁部はヨコナデで仕上げられる。内面は摩滅するが、口縁部付近は横位のミガキが観察でき、その後に黒色処理される。12・13は須恵器の坏である。やや器高が低く、底部から口縁部にかけて直線的に開く器形である。14・15は須恵器の高台付皿であろう。幅の短い口縁部が上方に屈曲して立ち上がり、体部との境に段を持つ。16～18は土師器の長胴甕である。16は頸部で「く」の字状に屈曲して口縁部が開く。口唇部は上方につまみ上げられる。18は体部下半の破片で、平行するタタキメが残る。

図107-19は84号土坑から出土した須恵器の坏である。底部から直線的に立ち上がる器形で、その断面形が逆台形となる。

図107-20~27は85号土坑から出土遺物である。20・21は須恵器の坏である。やや底径が広く、器高が低い。22はロクロを用いて整形された土師器坏である。体部はやや内湾気味に立ちあがる器形である。内面はミガキの後に黒色処理される。23は土師器坏で、黒色処理が施されていない。底径が広く、器高が低い。24は須恵器の高台付坏である。坏の体部下半はやや丸みを帯びる。高台は貼り付けられて、ロクロの回転を利用して整えられる。25は土師器の甕である。幅の短い口縁部が大きく開く。27は土師器で筒形となる。いわゆる製塩土器と称される筒形土器とは、胎土や製作方法が異なる。用途は不明である。外面は縦位のケズリにより器面が調整される。内面は指オサエの後に縦位のナデで器面が整えられる。口縁部は内外面ともヨコナデで仕上げられる。26は球形の石で、磨石であろうか。

図109-1は86号土坑から出土した須恵器の坏である。やや内湾気味に立ち上がる体部となる。底部外面には墨書が見られ、「福」であろうか。

図109-1・3・8・9は89号土坑の出土遺物である。2・3須恵器の坏である。8は土師器の坏で、やや丸味尾帯びる体部で口唇部がわずかに外反する。9は筒形土器の口縁部である。粘土紐積み上げ痕が残るやや粗雑なつくりである。

図109-4は87号土坑から出土した須恵器の甕である。体部上半の破片で、内面に同心円文のアテ具痕が残る。

図109-5・6・10~12は92号土坑の出土遺物である。5は丸底となる土師器の坏で、成形にロクロが用いられていない。口縁部がわずかに外反する。体部はケズリで器面調整され、口縁部はヨコナデで仕上げられる。内面はミガキの後に黒色処理される。6は須恵器の坏である。底部から直線的に開く器形である。体部外面に墨書があり、「吉」であろう。10・11は筒形土器の口縁部破片である。口唇部は指でつまみ上げられる。12は土師器の甕である。外面に平行タタキメが残る。

図109-14は99号土坑から出土した須恵器坏である。底部外面はロクロの回転による削り再調整される。

図109-17は105号土坑から出土した。有段丸底となる土師器坏である。口縁部はやや丸みを帯び、ヨコナデで仕上げられる。平底風になる底部はケズリが観察できる。

図109-13は98号土坑から出土した須恵器の長頸瓶である。体部は球形となり頸部との境にリング状の突帯がめぐる。頸部は直線的に立ち上がり、口縁部に向かって開く。

弥生土器は周辺に分布する周溝墓などからの流れ込みであろう。弥生土器の特徴では、周溝墓出土のものとは内容は変わらない。その中で特徴的な遺物を図108に示した。10は口縁部が大きく外傾して開く壺であろう。口縁部の文様帯に鋸歯状になる隆帯を配し、隆帯の結節部にボタン状粘土粒を貼り付ける。さらに隆帯に添って円形竹管による刺突が施される。11は口縁部がやや内湾気味に開く壺である。口縁部に沈線で弧状文を描き、その沈線に添って刺突が施される。10・11は本遺跡で出土した在地系弥生土器の文様のな特徴では極めて少ない。北海道地域で見られる後北C₂・D式土器に類似する。しかし、これら土器の胎土は在地で製作された土器と同じ特徴である。

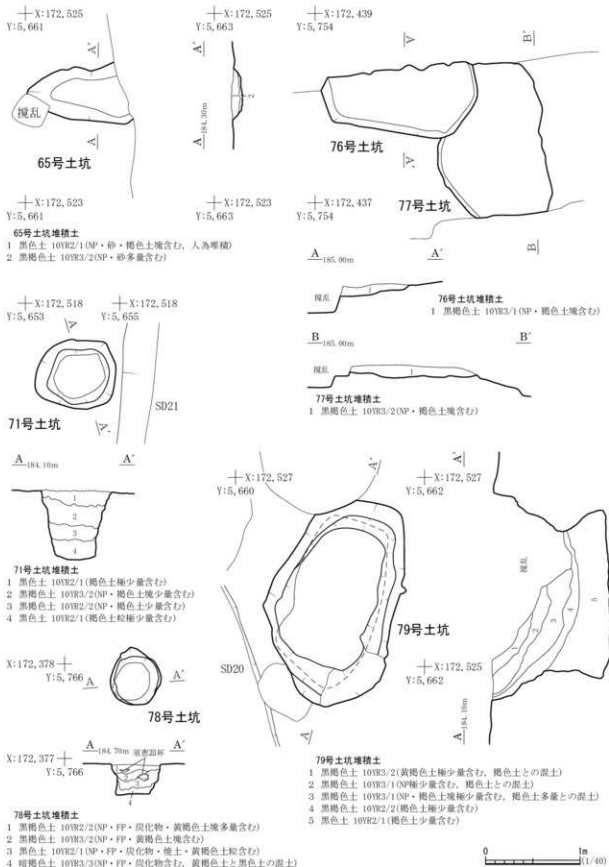


図102 平安時代以降の土坑 (1) (65・71・76～79号土坑)

第2章 調査成果

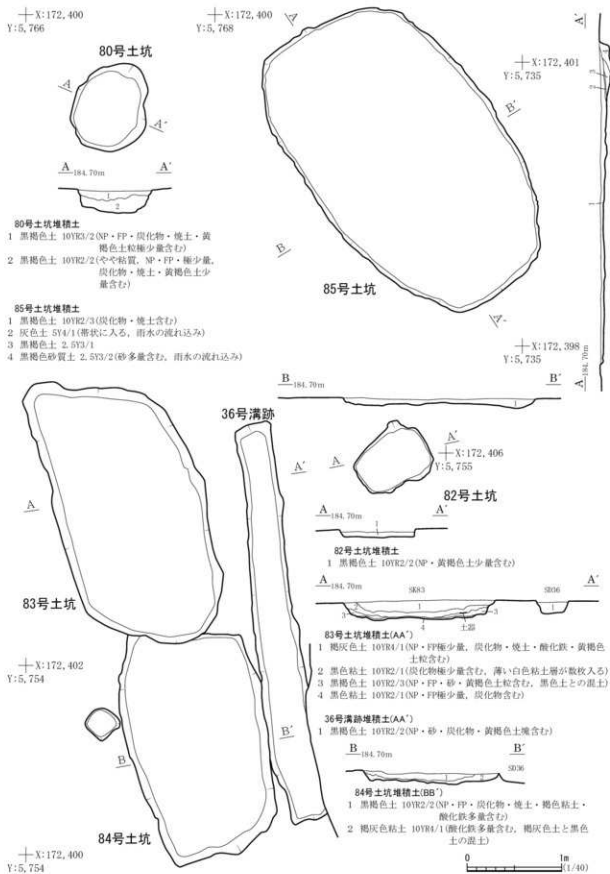


図103 平安時代以降の土坑(2)(80・82~85号土坑)

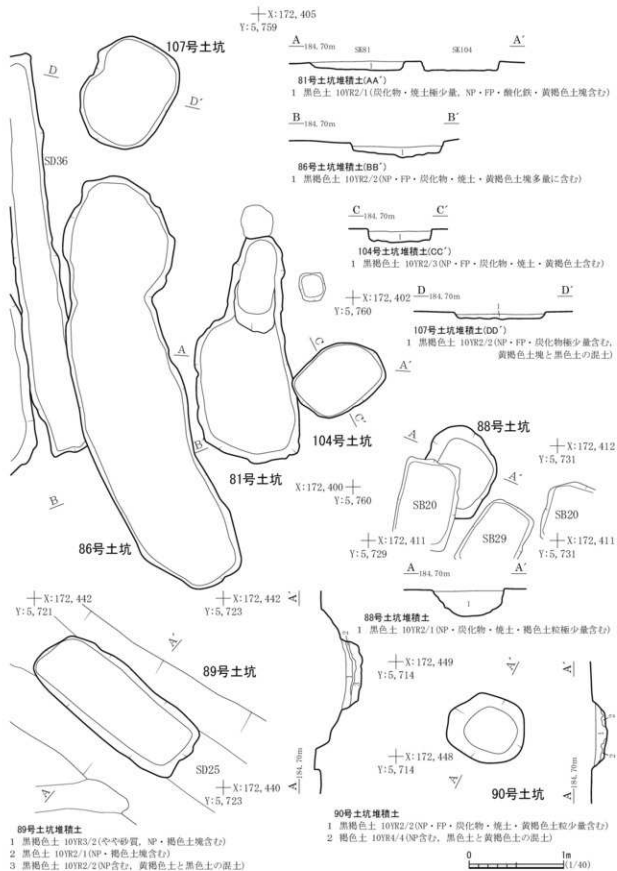


図104 平安時代以降の土坑 (3) (81・86・88~90・104・107号土坑)

第2章 調査成果

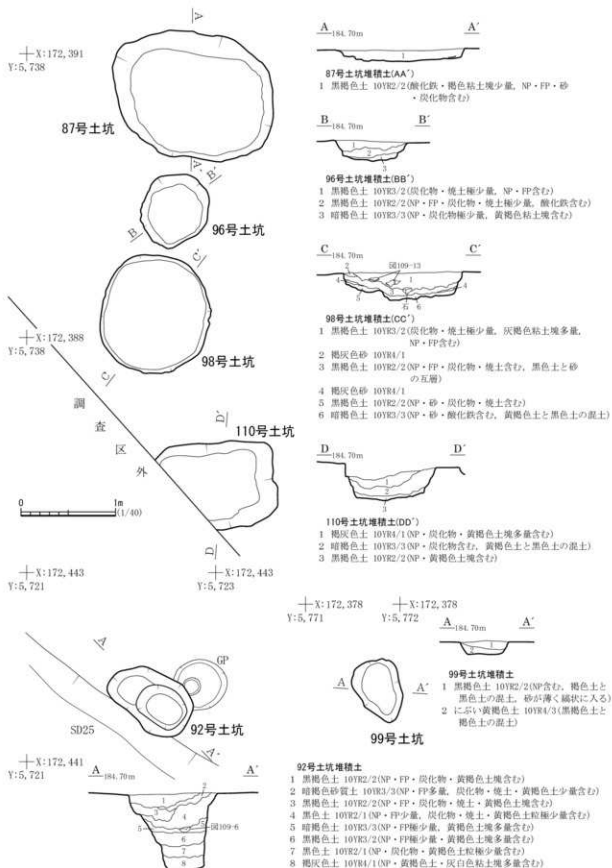


図105 平安時代以降の土坑(4)(87・92・96・98・99・110号土坑)



図106 平安時代以降の土坑 (5) (102・105・106・108・111号土坑)

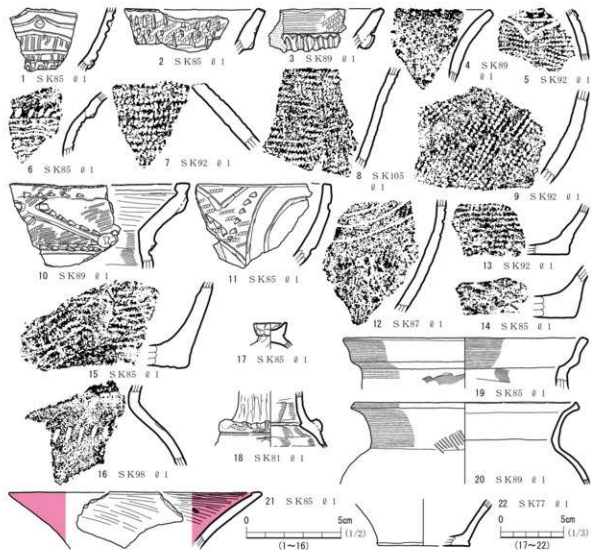


図107 77・81・85・87・89・92・98・105号土坑出土遺物

井戸跡

102・108号土坑は井戸跡である。井戸跡の構造や出土遺物から108号土坑は平安時代、102号土坑は江戸時代（17世紀代）に属する。

108号土坑 108号土坑は調査区の北西隅に位置し、弥生時代に属する21号溝跡が完全に埋没した後に造られている。構造は円筒形に掘り込まれた掘形とその内部に設置された井戸杵からなる。井戸跡周囲に覆屋を構成する柱穴などは確認できない。掘形の直径は70cmと小さい。検出面からの深さは72cmと浅く、底面はLIVb層とした黄褐色粘土層である。井戸杵は北側にわずかに遺存する程度である。その構造は底面から5cmほど上の壁面に板材を並べ、板材の下部を小さい木杭で固定している。

108号土坑からは平安時代の須恵器・土師器、木質遺物が出土した。その他に井戸杵の部材がある。図109-18・19は、成形にロクロが用いられた土師器の坏である。底部外面はロクロの回転を

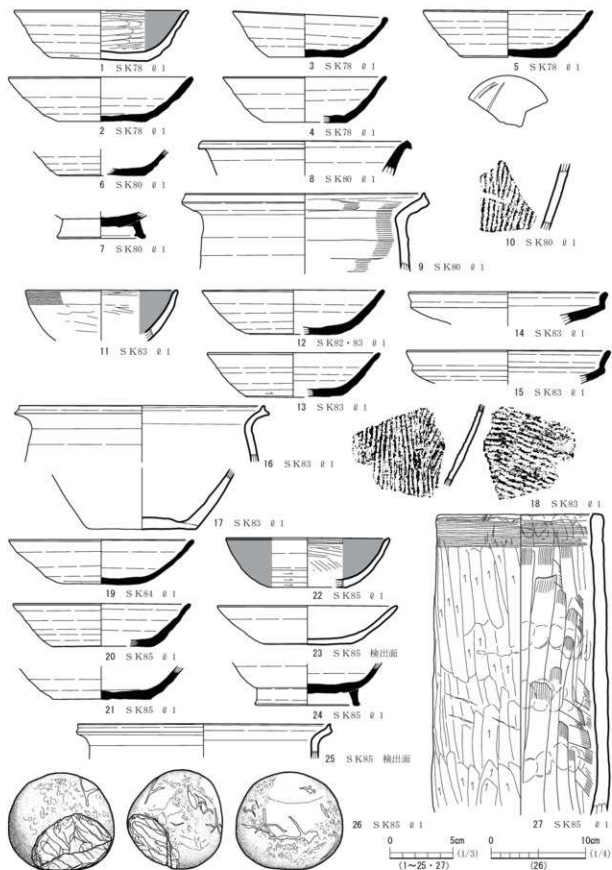


図108 78・80・82~85号土坑出土遺物

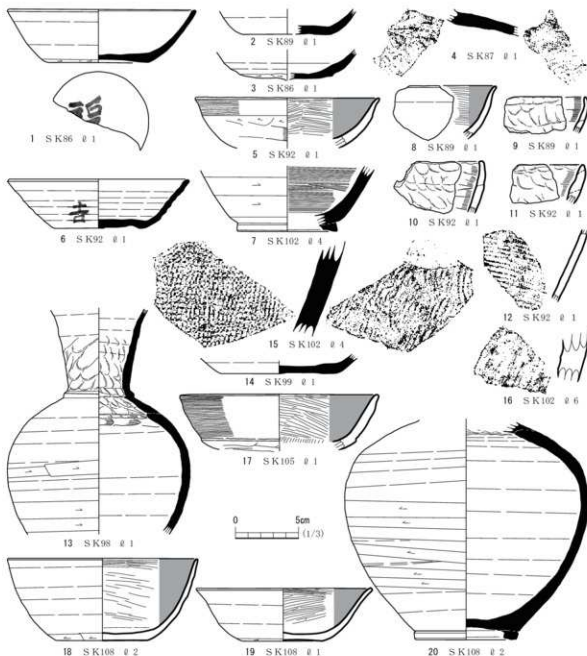


図109 86・87・89・92・98・99・102・105・108号土坑出土遺物

利用したケズリで再調整される。内面はミガキの後に、黒色処理が施される。18は、やや坏身が深く、内湾気味に立ち上がる体部の器形である。19は器高が低く、体部が直線的に開いて立ち上がり、口縁部が軽く外反する器形である。20は須恵器の長頸瓶である。体部上半は丸みを帯びて頸部に向かってすばまる。体部下半はロクロの回転を利用したケズリで器面が整えられる。底部には断面が四角になる高台が貼り付けられる。

図110-4は5層上面から出土した木質遺物である。薄い板目材であるが、用途は不明である。10・11は井戸枠である。外面には板材に加工した際の、剥ぎ取り痕が観察できる。5～9は井戸枠を固定する杭である。いずれも樹皮が残ったままの芯もち材で、先端部を尖らせた簡単なつくりである。

108号土坑から出土した土器の特徴から、平安時代に属すると判断した。また本土坑の東側に平安時代の道跡と考えられる19・20号溝跡がある。この道跡から東には平安時代の遺構は存在していないことから、本土坑の西側に集落を構成する建物跡が分布する可能性が高い。

102号土坑 102号土坑は井戸跡と覆屋で構成される。井戸跡は円筒形に掘り込んだ掘形とその内部に設置された木組みの井戸枠からなる。掘形の平面形は円形を基調とする。深さは117cmと深く、その底面はL V層とした砂礫層に達している。堆積土の観察から、井戸枠を壊して、人為的に埋め戻していると判断した。

井戸枠の構造は、角材に製材した材をホゾ接ぎ加工を施して櫓状に組み、それに板材を横に渡している。井戸枠内部の規模は一辺が60cmとなる。井戸枠と掘形の間はこぶし大の石を含んだ土を充填させている。

覆屋は井戸跡を覆うように造られている。近現代の用水路によって壊されているため、井戸跡の南側に2基の柱穴を確認しただけである。そのため覆屋の詳細な規模は不明である。柱穴は直径35cmで、深さは18～32cmを測る。柱穴の底面には根固め石が確認できる。井戸内から出土したツルベ桶から、覆屋には滑車を取り付けられていたであろう。

102号土坑からは平安時代の須恵器長頸瓶1点、近世陶器片1点、ツルベ桶1点、ザル1点が出土し、その他に井戸枠部材が出土した。図110-1はツルベ桶である。底部が小さくなる四方桶で、その断面形が逆台形となる。口縁部にはツルベ縄をかける取手が渡されている。桶の構造は底板1枚と側板4枚を組み合わせ、その固定には竹釘が用いられている。正面と背面となる側板には溝が彫り込まれ、その部分に左右の側板を組み合わせる。正面の側板には補修孔と考えられる孔がある。紐として固定されていたのであろう。2はザルの破片である。部分的に遺存し、その形状は不明である。3は井戸枠の一部である。芯持ち材を製材して角材となる。各材はホゾ接ぎで組み合わせており、クサビが打ち込まれて固定されている。

102号土坑の年代は放射性炭素年代測定によって、ツルベ桶が17世紀後半頃の年代を得た。

3. その他の土坑

これら以外の土坑として、65・71・76・77・78・79・89・90・92・99号土坑の10基が該当する。65・67・71号土坑は調査区の北西端に位置する。いずれも遺構の形状や堆積土などの特徴から遺構の性格を特定するだけの所見は得られていない。

89号土坑は25号溝跡の底部で確認した。89号土坑の平面形は長方形で、25号溝跡の底面と長軸方向を揃えている。両遺構の堆積土中に、時間差を想定するだけの間層が観察できない。25号溝跡の底面が89号土坑付近だけ深くなり、周壁の傾斜が直立気味になるなど部分的な改変の痕跡が確認できる。25号溝跡の土層観察では、薄い砂層と黒色土が交互に重なる水性堆積が確認でき、25号溝跡に水が流れていたことが分かる。このことから25号溝跡の底面を部分的に深く掘り、水溜などの施設と考えている。

(福田)

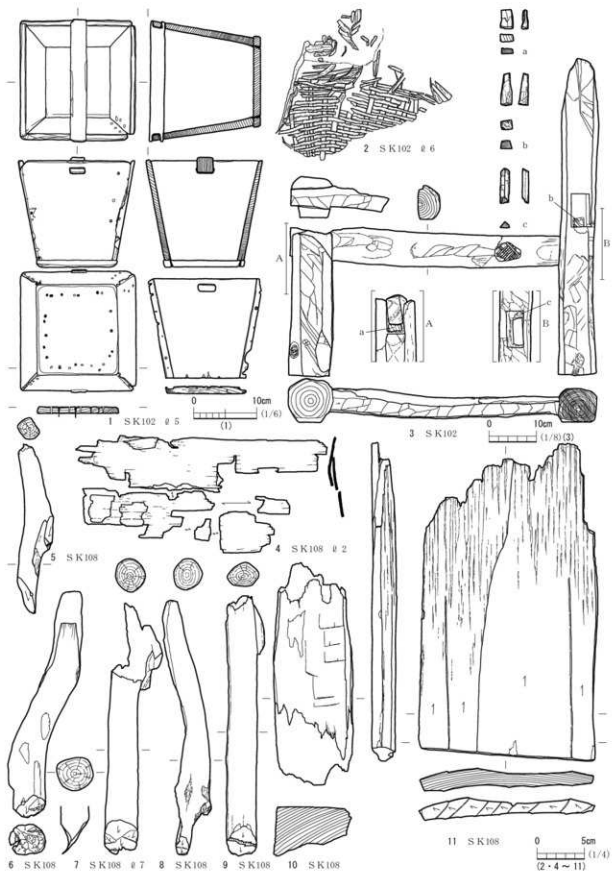


図110 102・108号土坑出土木製品

表2 土 坑 一 覽

土坑番号	探窟番号	位 置	平面形	規 模 (cm)			年 代	性 格	遺 物	備 考
				長径	短径	深さ				
S K 1	—	1次調査 (E8-12・J2)	楕円形	(210)	135	14	平安時代	陶甕坑	赤・土・須	『会津5』
S K 2	—	1次調査 (F8-A3・B3)	長楕円形	400	170	30	弥生時代後期	性格不明	赤・石・土	『会津5』
S K 3	—	1次調査 (E8-13)	楕円形	120	96	20	平安時代	陶甕坑	赤・土	『会津5』
S K 4	—	1次調査 (E8-13)	隅丸長方形	232	192	33	平安時代	陶甕坑	赤・石・土	『会津5』
S K 5	—	1次調査 (F8-A2・3)	楕円形	332	292	26	平安時代	陶甕坑	赤・石・土・須	『会津5』
S K 6	—	1次調査 (F8-A2)	円形	200	190	150	平安時代	井戸跡	赤・土・須・木	『会津5』
S K 7	—	1次調査 (E8-13)	円形	150	135	10	平安時代	陶甕坑	赤・土・須	『会津5』
S K 8	—	1次調査 (E8-A5)	楕円形	125	106	22	平安時代	陶甕坑	赤・土・須	『会津5』
S K 9	—	1次調査 (E8-14・J4)	楕円形	136	116	20	平安時代	陶甕坑	赤・土・須	『会津5』
S K 10	—	1次調査 (E8-14)	楕円形	200	162	22	平安時代	陶甕坑	赤・土・須	『会津5』
S K 11	—	1次調査 (E8-12・J2)	長楕円形	440	148	32	平安時代	性格不明	赤・土・須	『会津5』
S K 12	—	1次調査 (E8-14)	楕円形	225	182	44	平安時代	陶甕坑	赤・土・須	『会津5』
S K 13	—	1次調査 (F8-B2)	溝状	195	65	12	弥生時代後期	性格不明	赤	『会津5』
S K 14	—	1次調査 (F8-B2)	円形	74	74	16	時期不明	性格不明	—	『会津5』
S K 15	—	1次調査 (F8-E7)	溝状	262	53	18	平安時代	性格不明	土・須	『会津5』
S K 16	—	1次調査 (F8-A5)	円形	112	112	55	平安時代	陶甕坑	赤・土・須	『会津5』
S K 17	—	1次調査 (F8-A5)	不整形円形	145	135	16	平安時代	陶甕坑	赤・土・須	『会津5』
S K 18	—	1次調査 (F8-A5)	円形	145	140	15	平安時代	陶甕坑	赤・土・須	『会津5』
S K 19	—	1次調査 (F8-15)	溝状	552	123	32	平安時代	性格不明	赤・土・須	『会津5』
S K 20	—	1次調査 (E8-15)	不整形円形	115	100	28	時期不明	性格不明	—	『会津5』
S K 21	—	1次調査 (F8-E2)	溝状	198	33	10	時期不明	性格不明	—	『会津5』
S K 22	—	1次調査 (F8-A5)	長方形	265	202	30	平安時代	陶甕坑	赤・土・須	『会津5』
S K 23	—	1次調査 (F8-A5)	(円形)	160	(96)	22	平安時代	陶甕坑	土・須	『会津5』
S K 24	—	1次調査 (E8-14)	長方形	182	(54)	22	平安時代	性格不明	土・須	『会津5』
S K 25	—	1次調査 (F8-A5)	不整形円形	112	105	20	平安時代	陶甕坑	土	『会津5』
S K 26	—	1次調査 (F8-A5)	楕円形	125	113	26	平安時代	陶甕坑	赤・土・須	『会津5』
S K 27	—	1次調査 (F8-A2)	長方形	173	92	26	平安時代	性格不明	赤・土・須	『会津5』
S K 28	—	1次調査 (F8-A2)	長方形	142	73	28	平安時代	性格不明	土・須	『会津5』
S K 29	—	1次調査 (E8-12)	楕円形	92	70	13	時期不明	性格不明	赤・土・須・陶	『会津5』
S K 30	—	1次調査 (E7-19)	隅丸長方形	102	82	14	時期不明	性格不明	赤・土	『会津5』
S K 31	—	1次調査 (E7-19)	不整形長方形	(340)	325	48	時期不明	性格不明	赤・土・須	『会津5』
S K 32	—	1次調査 (E7-19)	不整形円形	87	68	30	時期不明	性格不明	—	『会津5』
S K 33	—	1次調査 (F8-C4)	円形	103	103	50	平安時代	性格不明	赤・土・須	『会津5』
S K 34	—	1次調査 (F8-F9)	円形	188	188	114	平安時代	性格不明	赤・土・須	『会津5』
S K 35	—	1次調査 (F8-C5)	円形	98	86	85	平安時代	性格不明	赤・土・須	『会津5』
S K 36	—	1次調査 (E8-12)	円形	112	112	26	平安時代	陶甕坑	赤・土・須	『会津5』
S K 37	—	1次調査 (F8-D5)	(長方形)	(220)	100	22	時期不明	性格不明	—	『会津5』
S K 38	—	1次調査 (F8-D5)	不整形円形	145	136	36	平安時代	陶甕坑	赤・土・須・鉄	『会津5』
S K 39	—	1次調査 (F8-E7)	溝状	(348)	98	20	時期不明	性格不明	赤	『会津5』
S K 40	—	1次調査 (F8-E7)	溝状	290	32	10	弥生時代後期	陶甕の破片	赤	『会津5』
S K 41	—	1次調査 (F8-D7)	楕円形	112	60	14	弥生時代後期	性格不明	赤	『会津5』
S K 42	—	1次調査 (E8-12)	楕円形	145	112	8	平安時代	性格不明	土・須	『会津5』
S K 43	—	1次調査 (E8-A2)	隅丸長方形	147	125	22	平安時代	性格不明	赤・土	『会津5』
S K 44	—	1次調査 (E8-12)	楕円形	180	130	26	平安時代	性格不明	赤・土	『会津5』
S K 45	—	1次調査 (E8-14)	(楕円形)	190	(70)	26	時期不明	性格不明	—	『会津5』
S K 46	—	1次調査 (F8-C5)	(円形)	85	(70)	18	平安時代	陶甕坑	赤・土・須	『会津5』
S K 47	—	1次調査 (F8-B5)	楕円形	96	77	18	時期不明	陶甕坑	—	『会津5』
S K 48	—	1次調査 (E8-14)	隅丸長方形	77	63	10	平安時代	陶甕坑	赤・土・須	『会津5』
S K 49	—	1次調査 (E8-14)	溝状	200	85	8	平安時代以降	性格不明	赤・土	『会津5』
S K 50	—	1次調査 (E8-14)	溝状	180	68	12	時期不明	性格不明	赤・土・須	『会津5』
S K 51	—	1次調査 (E8-12)	隅丸長方形	(90)	88	14	時期不明	性格不明	—	『会津5』
S K 52	—	1次調査 (E8-14)	溝状	165	33	18	時期不明	性格不明	赤・土	『会津5』
S K 53	—	1次調査 (F8-A3)	隅丸長方形	70	70	40	時期不明	性格不明	—	『会津5』
S K 54	—	1次調査 (F8-A4)	方	105	90	47	時期不明	性格不明	赤・土	『会津5』
S K 55	—	1次調査 (F8-A2)	不整形円形	138	110	22	平安時代	陶甕坑	赤・土・須	『会津5』
S K 56	—	1次調査 (E8-13)	楕円形	115	75	22	平安時代	性格不明	赤・土	『会津5』
S K 57	—	1次調査 (F8-A3)	不整形長方形	82	80	35	平安時代	性格不明	赤・土・須	『会津5』
S K 58	—	1次調査 (F8-A3)	不整形円形	140	50	18	平安時代	性格不明	赤・土・須	『会津5』
S K 59	—	1次調査 (F8-A3)	(楕円形)	102	60	15	平安時代	性格不明	土・須・陶	『会津5』

表3 土坑一覽

土坑番号	探窟番号	位 置	平面形	規 模 (cm)		年 代	性 格	遺 物	備 考	
				長さ	幅					
S K60	—	1次調査 (F8-A4)	(隅丸方形)	(180)	(155)	25	平安時代	性格不明	赤・土・須	『会津5』
S K61	—	1次調査 (F8-G9)	楕円形	205	190	30	弥生時代後期	性格不明	赤・土製品	『会津5』
S K62	—	1次調査 (E8-J5)	(円形)	(73)	(62)	32	時期不明	性格不明	—	『会津5』
S K63	8600	(D6-E5)	楕円形	85	70	10	弥生時代後期	性格不明	赤	
S K64	8600	(D7-E1)	隅丸長方形	130	62	8	弥生時代後期	土坑墓	赤	
S K65	10200	(C5-G8)	(楕円形)	(100)	(65)	12	時期不明	性格不明	なし	
S K66	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	
S K67	8600	(D6-D5)	楕円形	160	106	20	弥生時代後期	性格不明	赤	
S K68	8600	(C5-H9)	隅丸長方形	120	105	0.25	弥生時代後期	性格不明	赤	
S K69	1700	(D6-A4)	残出部:不整形円形	175	102	30	弥生時代後期	9号埋藏層跡	赤・石	
			埋藏部:隅丸長方形	145	70	—				
S K70	8600	(D6-B4)	楕円形	118	92	16	弥生時代後期	性格不明	赤	
S K71	10200	(C5-F9)	不整形円形	88	76	74	時期不明	性格不明	なし	
S K72	8600	(D6-C7・D7)	(方形)	(310)	(230)	18	弥生時代後期	彫穴伏魔	赤	SD5-SD00より古い
S K73	8600	(D6-C4・D4)	円形	92	90	52	弥生時代後期	性格不明	赤	
S K74	8600	(D6-A3)	長方形	223	52	10	弥生時代後期	土坑墓	赤	
S K75	8600	(D6-C5)	長方形	228	90	15	弥生時代後期	土坑墓	赤	
S K76	10200	(D6-F7)	(楕円形)	(162)	(84)	12	平安時代	性格不明	赤・土	SK77より新しい
S K77	10200	(D6-F7)	(楕円形)	(150)	(125)	13	平安時代	性格不明	赤・土	SK76より古い
S K78	10200	(D7-G3)	円形	60	52	32	平安時代	性格不明	土・須・石	
S K79	10200	(C5-G8)	楕円形	220	140	125	平安時代	性格不明	須・木	
S K80	10300	(D7-G1)	楕円形	100	80	24	平安時代	陶器坑	土・須	SD23より新しい
S K81	10400	(D6-F10)	不整形円形	308	160	21	平安時代	陶器坑	土・須	SK104より古い
S K82	10300	(D6-F10)	隅丸長方形	80	65	10	平安時代	陶器坑	土・須	
S K83	10300	(D6-F10)	不整形円形	308	160	21	平安時代	陶器坑	土・須	SK84より新しい
S K84	10300	(D6-F10)	不整形円形	145	130	15	平安時代	陶器坑	土・須	SK83より古い
S K85	10300	(D6-D10・D7-D1)	隅丸長方形	350	210	15	平安時代	陶器坑	赤・土・須・石	5号・10号より新しい
S K86	10400	(D6-F10・D7-F1)	不整形円形	446	110	18	平安時代	陶器坑	土・須	SD36より古い
S K87	10600	(D7-D1・E1)	楕円形	165	135	15	平安時代	陶器坑	赤・土・須	
S K88	10400	(D6-C9・D10)	不整形円形	(90)	75	28	平安時代	陶器坑	土・須	SD20より古い
S K89	10400	(D6-C6)	長方形	186	76	50	平安時代	性格不明	赤・土・須	SD25より古い
S K90	10400	(D6-B6)	不整形円形	84	72	16	時期不明	性格不明	—	
S K91	8700	(D5-A10)	円形	145	138	150	弥生時代後期	貯蔵穴	赤・木・石	
S K92	10600	(D6-C6)	不整形円形	90	62	82	平安時代	性格不明	赤・土・須	
S K93	8600	(D6-C2)	円形	165	160	126	弥生時代後期	井戸跡	赤・木・石	
S K94	8700	(D6-B1)	円形	156	140	132	弥生時代後期	貯蔵穴	赤・木	
S K95	8600	(D6-D4・D5)	不整形円形	178	122	20	弥生時代後期	性格不明	赤	
S K96	10600	(D7-D2)	不整形円形	78	70	24	平安時代	陶器坑	土・須	
S K97	8600	(D6-C3)	楕円形	96	55	28	弥生時代後期	性格不明	赤	
S K98	10600	(D7-D2)	楕円形	122	114	30	平安時代	陶器坑	赤・土・須	
S K99	10600	(D7-G10)	不整形円形	95	70	15	平安時代	性格不明	赤・土	
S K100	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	
S K101	8600	(C5-G9)	楕円形	226	60	10	弥生時代後期	土坑墓	赤	SD30より古い
S K102	10600	(D6-F10)	円形	97	88	117	江戸時代	井戸跡	須・陶・木	
S K103	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	
S K104	10400	(D6-F10・G10)	不整形円形	95	70	15	平安時代	陶器坑	土・須	SK21より古い
S K106	10600	(D6-C9)	楕円形	114	(74)	20	古墳時代後期	性格不明	土	SD30-SD32より古い
S K106	10600	(D6-C9)	楕円形	105	78	12	平安時代	陶器坑	土・須	GP 8より新しい
S K107	10400	(D6-F10)	楕円形	118	84	8	平安時代	陶器坑	土・須	
S K108	10600	(C6-F1)	円形	70	(47)	72	平安時代	井戸跡	須・木	SD21より新しい
S K109	欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	
S K110	10600	(D7-D2・E2)	(長方形)	(122)	90	35	平安時代	陶器坑	土・須	
S K111	10600	(D6-C9)	隅丸長方形	160	88	34	平安時代	陶器坑	土・須	SD22-SD20より古い

・() 内の数字は遺存数を表す

・赤:赤土器 石:石器 土:土器 須:須器 木:木製品 陶:陶器

・1次調査『会津硬直北道路遺跡発掘調査報告5』2005年発行

第7節 溝 跡

今回の2次調査では溝跡を15条確認した。弥生時代の溝跡は21号溝跡で集落域を区画する溝となる。平安時代の溝跡は、集落の区画溝となる25・37号溝跡、それに続く道跡として19・20号溝跡を確認した。これ以外の遺構は、年代や性格を把握できたものは少ない。本節では溝跡の性格ごとにまとめて記述する。

1. 弥生時代の溝跡 (図6～8・111・112・115～117, 写真144・145)

弥生時代に属する溝跡には、21・32・34・35・38号溝跡が該当する。21号溝跡は集落域を区画する溝跡と考えているが、それ以外の溝跡は、いずれも小規模で、周辺の遺構との関連性が見られないなど、溝跡の性格を特定できる所見は得られていない。

21号溝跡 21号溝跡は調査区の北西部に位置し、北東から南西方向に向かって伸びる溝跡である。21号溝跡は、弥生時代の遺構が分布する南東方向に延びる微高地上の平坦地を南北に分断する。北側に弥生時代の遺構群を確認できないことから、生活空間を区画する溝となる可能性が高い。

21号溝跡は、底面が平坦となるように掘り込まれ、いわゆる葉研堀となる形状である。周壁は上端部が崩落して、傾斜が緩やかになるが、下半部は急傾斜で立ち上がる。調査区内で確認できた規模は、全長が40mを測る。溝幅は検出面で1.35m、底面の幅が0.5mを測る。溝跡内堆積土の観察から、2時期の造り替えが見られる。上層部分は壁面崩落土を含み、自然流入土で埋没している。底面は黒褐色粘土で、溝の機能時期に堆積した土層と判断した。

21号溝跡の遺物は、上層部分で平安時代の土器を含むが、下層から底面付近は弥生土器が主体を占める。図115-1～15は地文に撚糸文を施し、交互刺突文や押し引き沈線で文様が描かれる在地系土器を示した。16～22は櫛歯状施工具を用いて文様が描かれる土器で、北関東系土器である。波状文や格子文が主なモチーフとなる。また、21は文様のモチーフが在地系土器のものも見られ、在地化した特徴も見られる。

図116は整形にハケメを多用する北陸系土器を図示した。5は小型の広口壺である。口縁部と頸部に円形竹管による刺突が施される。体部上半は横位の波状沈線がめぐる。6・7・10は頸部で「く」の字状に屈曲する甕である。口唇部が上方に摘み上げられ断面が三角形となる。12は壺の頸部であろうか。直立する頸部で体部との境にリング状の突帯がめぐり、この部分にヘラ状工具によるキザミが施される。29～32は鉢である。30は口縁部が大きく開き、口唇部内面が肥厚した受け口状口縁となる。31・32は有段口縁となる鉢である。内外面とも丁寧な磨きが施される。33～40は高坏である。脚部の形状から、円筒形の脚部から裾部が広がるもの、ラップ状に広がるものがある。さらに坏部と脚部の接合方法に数種認められる。坏部に直接脚部を接続するもの(34～36)、脚部内に坏部底面となる粘土塊を充填させるもの(33・40)がある。

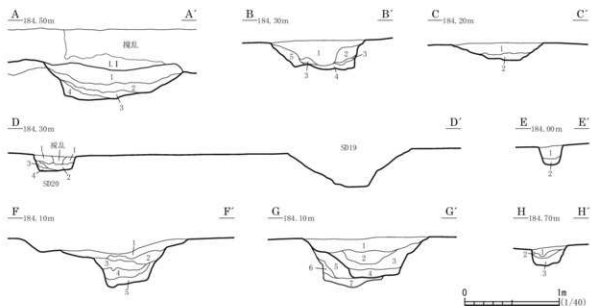
第2章 調査成果

21号溝跡は、2時期の造り替え痕跡が見られ、比較的長期に渡って維持・管理されていた溝と考えている。年代は出土遺物の特徴から、桜町Ⅲ式期まで機能していたと判断した。（福田）

2. 平安時代の溝跡 (図6～8・111～114・118～125, 写真146)

2次調査区において平安時代の主要な溝跡は、北部から中部にかけて平行して延びる19号・20号溝跡、南東部から北西に延びる25号溝跡、南東隅から西に向かう37号溝跡の3組である。その他に掘立柱建物跡の周囲をめぐる23・36号溝跡がある。

19号・20号溝跡 19号・20号溝跡は、自然堤防の軸線に沿うような方向で、真っ直ぐに伸びている。軸線はN-7°-Wである。東側の19号溝の方が規模も大きく、また深い。両溝の軸線芯間は、



19号溝跡堆積土(AA')

- L1 黒褐色土 10YR3/2(砂・褐色土粒含む)
- 1 黒褐色土 10YR2/2(砂多量, NP・褐色土塊含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2(NP・褐色土塊含む)
- 3 暗褐色砂質土 10YR3/3(NP少量含む, 褐色土と暗褐色砂の混土)
- 4 黒色砂質土 10YR2/1

19号溝跡堆積土(BB')

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・砂多量, 褐色土粒少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2(NP・砂少量, 黄褐色土塊多量含む)
- 3 黒色粘土 10YR1.7/1(NP・砂・褐色粘土粒少量含む)
- 4 黒褐色砂 10YR3/2(NP・砂多量, 黒色粘土少量含む)
- 5 黒褐色粘土 10YR2/1(NP微量, 砂多量含む, 黄褐色土と黒褐色粘土の混土)

19号溝跡堆積土(CC')

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・PP・砂・炭化物・焼土含む)
- 2 暗褐色砂質土 10YR3/3(NP・砂・焼土・黒色土粒極少量含む, 水性堆積)

20号溝跡堆積土(DD')

- 1 黒色土 10YR2/1(NP・褐色土塊含む)
- 2 黒褐色砂質土 10YR3/2(砂含む)
- 3 黒褐色土 10YR2/2(褐色土と黒褐色土の混土)
- 4 黒褐色砂質土 10YR3/2(黄褐色土と黒褐色土の混土)

21号溝跡堆積土(FF')

- 1 黒褐色土 10YR2/2(褐色土粒少量, NP含む)
- 2 黒色土 10YR2/1(NP少量, 褐色土粒・灰黄褐色粘土塊極少量含む)
- 3 黒褐色土 10YR2/2(NP少量, 褐色土粒・灰黄褐色粘土塊極少量含む)
- 4 黒褐色土 10YR2/2(NP多量含む)
- 5 黒色粘土 10YR2/1(NP・灰黄褐色粘土塊少量含む)

21号溝跡堆積土(GG')

- 1 黒色土 10YR2/1(NP多量含む)
- 2 黒色粘土 10YR1.7/1(NP・褐色粘土塊少量含む)
- 3 黒褐色粘土 10YR2/2(NP・褐色土粒多量含む)
- 4 黒色粘土 10YR2/1(NP微量, 褐色土粒少量含む)
- 5 黒褐色粘土 10YR2/2(NP少量, 褐色粘土塊多量含む)
- 6 にごり・黄褐色粘土 10YR5/4(褐色粘土と黄褐色粘土の混土, 壁の崩落土)
- 7 黒褐色土 10YR3/2(NP多量, 青白色土塊少量含む)

24号溝跡堆積土(EE')

- 1 暗褐色土 10YR3/4(NP・灰黄色土塊・黒色土塊多量含む)
- 2 黒褐色粘土 10YR2/2(NP・灰黄色土塊少量含む)

38号溝跡堆積土(HH')

- 1 黒褐色土 10YR3/2(NP・砂含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2(NP極少量含む)
- 3 黒褐色土 10YR2/3(NP・砂含む, 黄褐色土と黒褐色土の混土)

図111 調査区北半部の溝跡土層断面 (19～21・24・38号溝跡)

おおよそ3.4mである。

19号溝跡の断面形はU字形を基調としている。最も遺存する部分で、幅2.5m、深さ0.4mである。堆積土は4層に区分した。すべて自然堆積である。20号溝跡も同様な形で、幅1.6m、深さ0.2mである。堆積土も同様である。

古代の道は、側溝の片方を深くする特徴がある。また出土遺物も、平安時代より新しいものは含まれていない。この両溝を合わせて、平安時代の道路遺構であろう。道幅4mは、平安時代における平安時代の集落内道路としては、大きい道であろう。

図113と図114-1～7に時期の判明する出土遺物を示した。図113-1・3・13・24は刺突による文様が施されている。24の工具は、棒先が楕円形で木目による凹凸がある。1の下端は交互刺突である。3は、口縁上面に凹線を巡らし、これを外面からヘラ先で押さえる列点を配置している。9・10は凹線である。21・22は楕円平行線で区画した紋様である。19は捻糸である。

26～30には底部破片を示した。26の外面は縄文、27・28はハケメである。30はつまみ出した高台の底部外面に粘土紐を貼り付けている。この部分はナデツケで整えられている。外面は細かなハケメである。内面はナデとハケメである。甕の底部破片であろうか。33・34は高坏である。29は奈良時代の大型壺であろう。31・32同様である。図114-1～3も奈良時代の須恵器坏である。

図113-35は石錐であろう。幅に比べて厚さが薄い形である。36・37は剥片である。

25号溝跡 25号溝跡は、調査区の南東部から北西方に向かって延びている。遺存する長さは、おおよそ70mである。軸線方向は、ほぼN-45°-Wである。9号周溝墓の南溝の手前で二つに分岐している。分岐した溝は、それぞれ9号周溝墓の南溝と東溝に至っている。

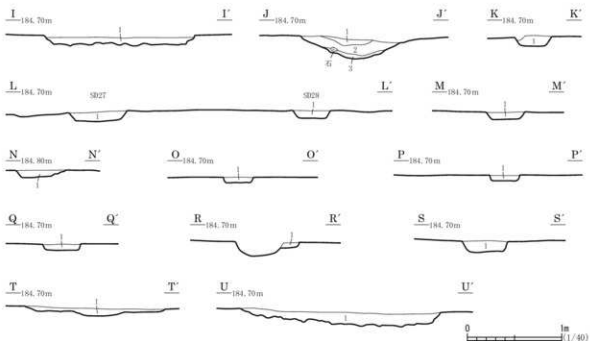
調査区中央部では、周溝墓や周溝状遺構の東南端をかすめるように延びている。これらの遺構では、平安時代まで、墳丘等の高まりが遺存していたからであろうか。少なくとも地表面に何だかの痕跡があったのであろう。この部分の溝は、検出面で幅1.1m、深さ25cmである。断面形は幅広いV字形である。堆積土は自然堆積である。弥生土器と平安時代の土師器と須恵器が含まれていた。

南部ではわずかに遺存する状況であった。とくにD6-f8グリッドでは途切れていた。しかし、この部分で溝は北東に長さ8mばかり屈曲して、突出部を形作っていた。そして再び元の方で延びていた。この突出部を出入り口の可能性を考えたが、確認はできなかった。

この溝の南西側には平安時代の遺構が集中しているのに対して、北東側ではこれと対応する遺構は検出されていない。当時の集落を区画する溝であろうか。

図119～121には、弥生土器を示した。図119-1～26は、沈線と刺突による文様の施された土器片である。桜町I式土器である。1～4は押し引き沈線が多用されている。5・19～21は刺突と交互刺突による文様の施された破片である。22・23には刺突文と凸帯つまみ上げて波帯とした文様が特徴的である。7～9・11～18は沈線が多用されている。7～9・13は三角あるいは菱形区画であろう。11は三角と半円の組み合わせ。14は円弧を上下に対応させている。17・18は平行沈線のなかに列点文を配置している。

第2章 調査成果



22号溝跡堆積土(II')

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・FP・炭化物・焼土・黄褐色土塊極少量含む)

25号溝跡堆積土(JJ')

- 1 黒褐色土 10YR3/2(褐色土との混土)
- 2 黒褐色土 10YR3/1(砂質, NP・黄褐色粘土塊含む)
- 3 黒褐色土 10YR3/1(砂質, 炭化物極少量含む)

26号溝跡堆積土(KK')

- 1 黒色土 10YR2/1(NP含む)

27号溝跡堆積土(LL')

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP極少量含む)

28号溝跡堆積土(LL')

- 1 黒色土 10YR2/1(NP極少量含む)

29号溝跡堆積土(MM')

- 1 黒色土 10YR2/1(NP少量含む)

30号溝跡堆積土(NN')

- 1 黒色土 10YR2/1(NP極少量, 褐色土塊含む)

31号溝跡堆積土(OO')

- 1 黒色土 10YR2/1(NP少量, 黄褐色土粒極少量含む)

32号溝跡堆積土(PP')

- 1 黒色土 10YR2/1(NP極少量, 褐色土粒含む)

33号溝跡堆積土(OO')

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP・炭化物・黄褐色土粒含む)

34号溝跡堆積土(RR')

- 1 黒褐色土 10YR2/2(NP少量, 黄褐色土粒極少量含む)

35号溝跡堆積土(SS')

- 1 黒色土 10YR2/1(NP・炭化物・焼土・黄褐色粘土塊多量含む)

37号溝跡堆積土(TT', UU')

- 1 暗褐色砂質土 10YR3/3(NP・FP・砂・炭化物含む, 砂と黒色土が薄く互層に入る, 水性堆積)

図112 調査区南半部の溝跡土層断面 (22・25~35・37号溝跡)

図119-23~33, 図120-1~11は, 縄文と燃糸の多用された土器片である。図119-24はつまみ上げ波状凸帯である。25・26・32の口縁部にはヘラ先状工具による列点状の押さえが施されている。28の口縁部外面は燃糸, 口縁部上面も燃糸の圧痕である。27・32の口縁部上面も同様である。31の口縁部下端の段には, 燃糸縄圧痕が施される。35は綾織である。37は蓋の頂部破片である。図120-1~11は壺の体部破片である。図120-7・11は, 内面にハケメが観察できる。

図120-12~25は沈線の多用された土器片である。13・18は波状文。14~17は半截竹管の平行沈線である。綾杉状の文様である。19は櫛描波状文と簾状文が施されている。22は櫛描波状文と平行沈線である。24は櫛描簾状文近似しているが, 細かな押し引き沈線文を集合させた紋様である。25は櫛描波状文である。図120-26~29は底部破片である。

図121には北陸系土器を集めた。1~6に口縁部破片を集めた。1は口縁部下端が突き出して

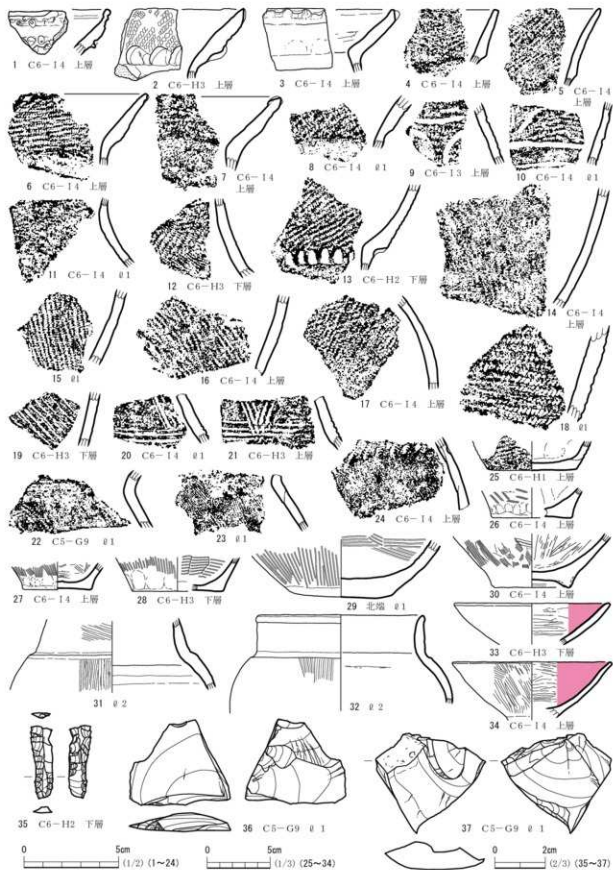


圖113 19号溝跡出土遺物 (1)

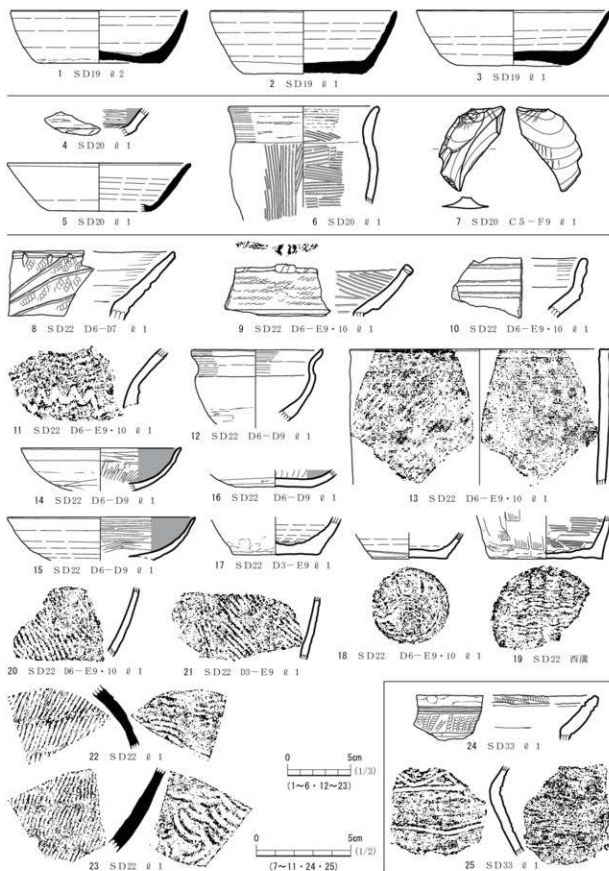


図114 19号(2)・20・22・33号溝跡出土遺物

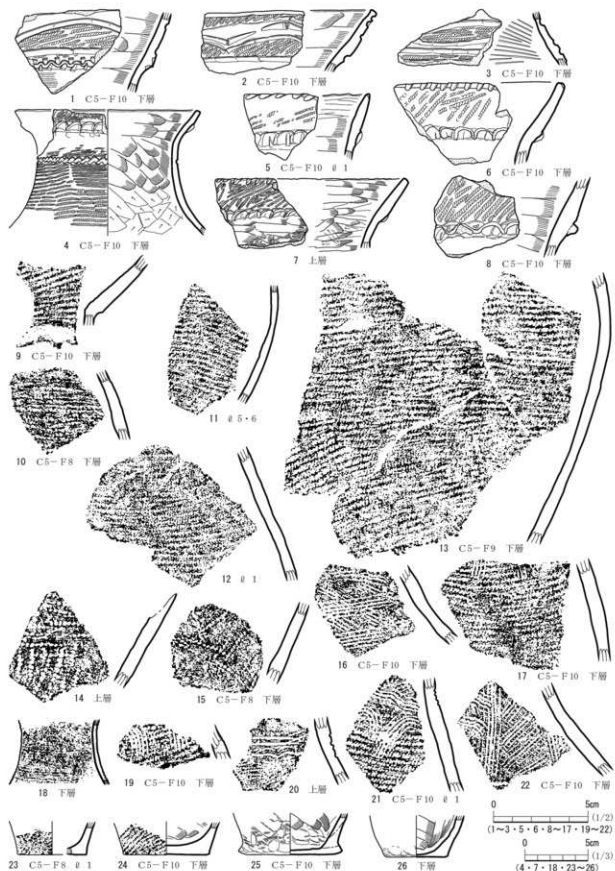


圖115 21号溝跡出土遺物 (1)

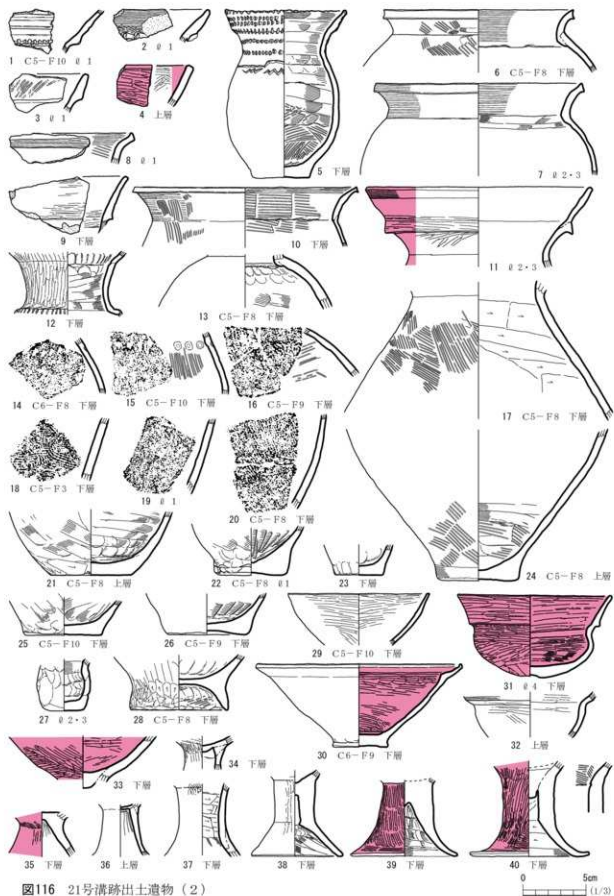


図116 21号溝跡出土遺物(2)

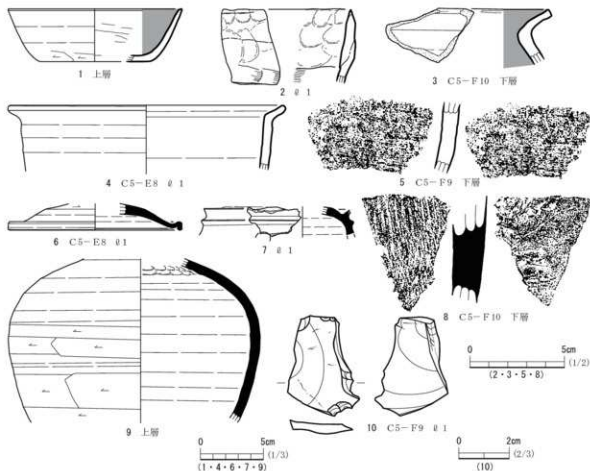


図117 21号溝跡出土遺物（3）

いる。2は「く」の字状である。4は擬凹線がある。7～12は体部破片である。8と11には肩部の列点文がある。また、16は広口壺の頸部である。

図121～13は高坏の坏部破片である。13には口縁部内面に小さな凸線が3条ある。14の口縁部上面は帯状に平たく、端部は内側に突き出している。15は坏の屈曲部である。17～21は脚部破片である。上端は円盤充填技法である。21は台の一種であろうか。

図122～124には平安時代を中心とする土師器・須恵器を示した。土師器は坏と長胴甕、瓶、筒形土器である。図122-1は栗罎式の坏である。2～24はロクロ成形の坏である。底部は回転ヘラケズリで再調整されるものが多い。5の体部下外面に角張った∞記号に似た沈線記号が施されている。24は高台の破片である。21～26は筒形土器である。製塩土器の一種で焼き塩の容器であろう。

図123には、長胴甕と瓶の破片を示した。長胴甕の下半部には平行叩板の痕跡がそのまま残っている。底部は砲弾形に近いが、平底となる。15・16は瓶である。15は強く屈曲して平らな底部、16は「く」の字形の底部である。

図124に須恵器を示した。坏と長頸壺、小壺、それに大甕が出土している。大半は平安時代であるが、一部に奈良時代のものも含まれている。11は坏蓋である。頂部の肩が張っている。2は底部が広い。14は葉壺であろう。15～19は長頸壺である。21は小壺である。22は大甕の口縁部である。

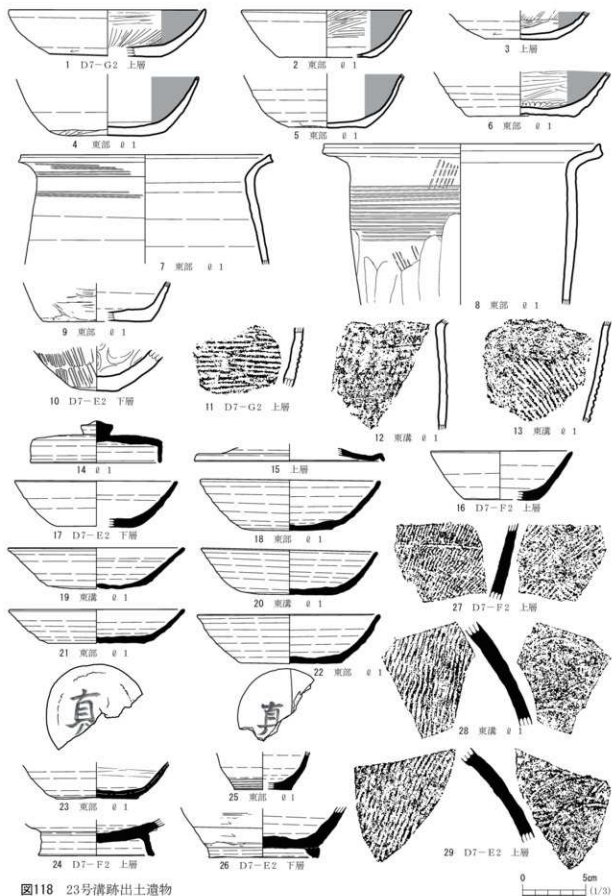


図118 23号溝跡出土遺物

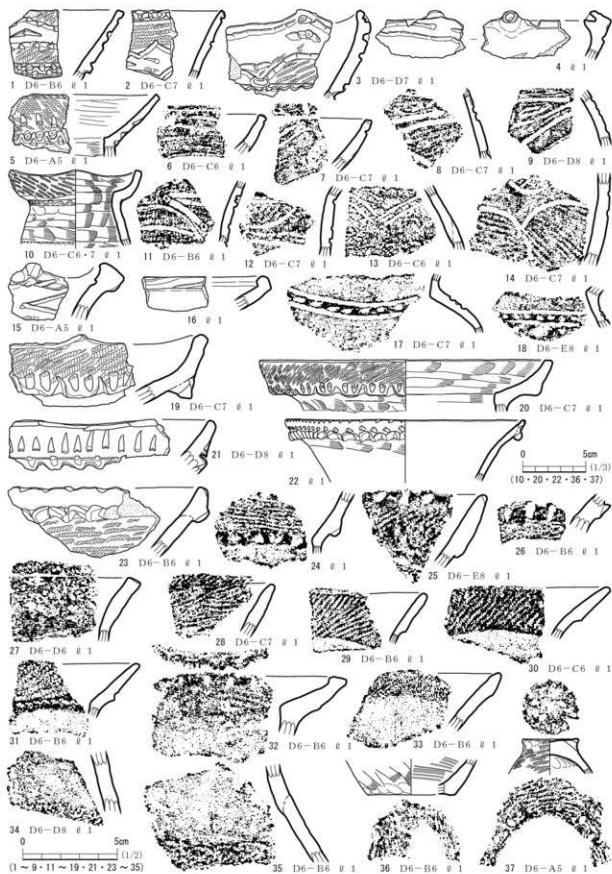


図119 25号溝跡出土遺物 (1)

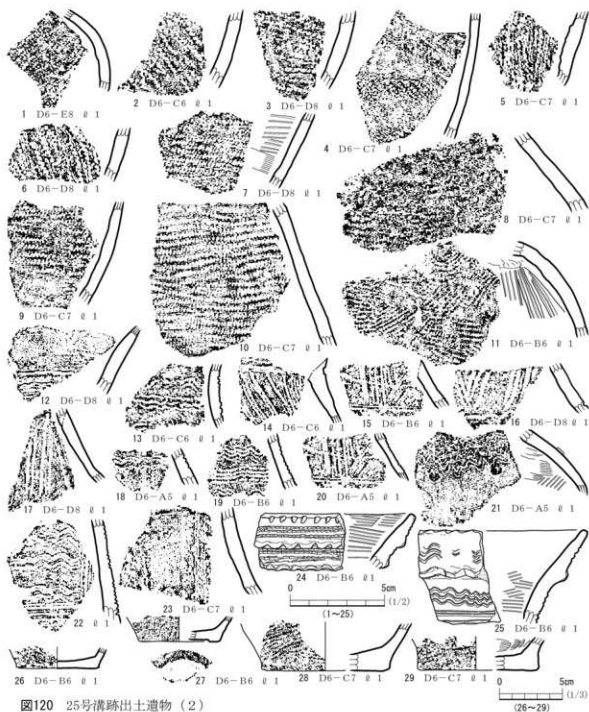


図120 25号溝跡出土遺物(2)

23は小型甕の底部である。両方とも平底である。25～29は甕の体部破片である。

37号溝跡 37号溝跡は、調査区の南端近くを東から西に流れていた。底面近くがわずかに遺存していたにすぎない。堆積土に砂土が多く含まれていたことから、流水のあったことを示している。

軸線はN-85°-Wである。東端は、幅2m、長さ4mの不整形な土坑状になっていた。また西部では20号周溝墓近くから、2条の溝が重なっていたが、出土遺物に時期の大きな相違はない。出土した遺物は、大半が平安時代の土器類である。これに弥生時代の土器と石器類が少々混ざっていた。図125-1～19は平安時代の土器である。3・6・8・12は土師器で、それ以外はすべて須

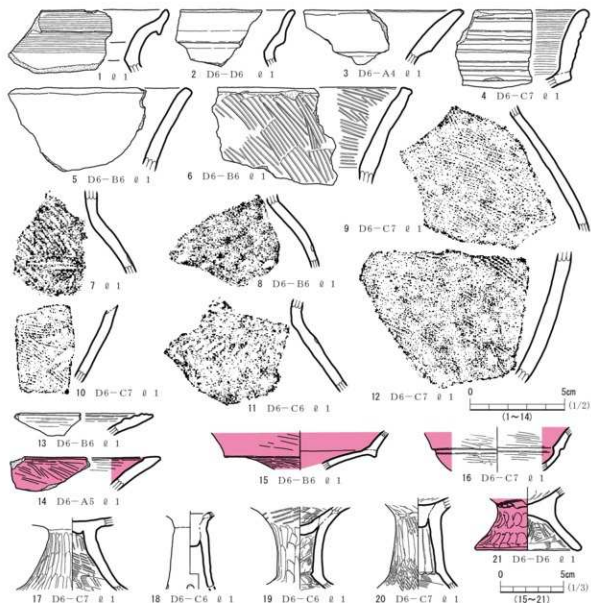


図121 25号溝跡出土遺物（3）

患器である。須恵器坏の底部には、ヘラ切りの痕跡が残っている。13は小壺、14・15は長頸壺であろう。弥生土器のうち、22の外面はハケメが顕著で、埴輪のような整形が施されている。20は口縁部外面に粘土板を貼り付けた痕跡がある。23の石織は形の整った優品である。（福島）

23・36号溝跡 23・36号溝跡は44・45号掘立柱建物跡を囲む溝跡である。23号溝跡の南側が途切れて全周しないが、南北に長い長楕円形の空間を区画している。その規模は、長軸の長さが12m以上、短軸の長さが9.5mを測る。

23号溝跡は底部付近を確認した程度と遺存状態が悪い。そのため草木根による攪乱も多く、溝跡の平面形も乱れ、溝幅も一定しない。北側の溝幅が1.2mと最も広く、東側の溝幅が0.5mと全体的に狭くなる特徴がある。溝跡の深さは5cmほどで、その底面も凹凸が顕著である。東側は部分的に20cmと深くなる。一方、36号溝跡は23号溝跡に比べ、整った形状で、直線的に延びる溝跡である。

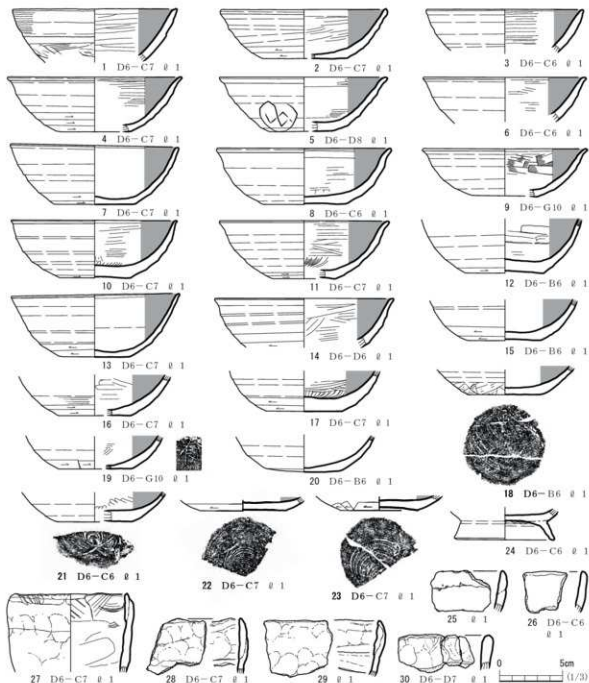


図122 25号溝跡出土物（4）

検出面から底面までの深さは15cmである。溝跡内の堆積土は炭化物や焼土を含む黒褐色土で、いずれも自然流入土である。底面上は壁面の崩落土を含む褐灰色粘土層が薄く覆っている。

出土遺物は図118に示した。23号溝跡の東側に集中する傾向がある。平安時代に属する土師器・須恵器が大半を占め、弥生土器は少ない。土師器の器種は坏・甕である。坏は成形にロクロが用いられる。図118-1は器高が低く、底径が大きくなる特徴がある。底部外面から体部下半はロクロの回転を利用したケズリで調整される。内面はミガキの後に黒色処理される。7～13は平底となる長胴甕で、成形にロクロを用いている。体部下半には平行タクキメが残る。

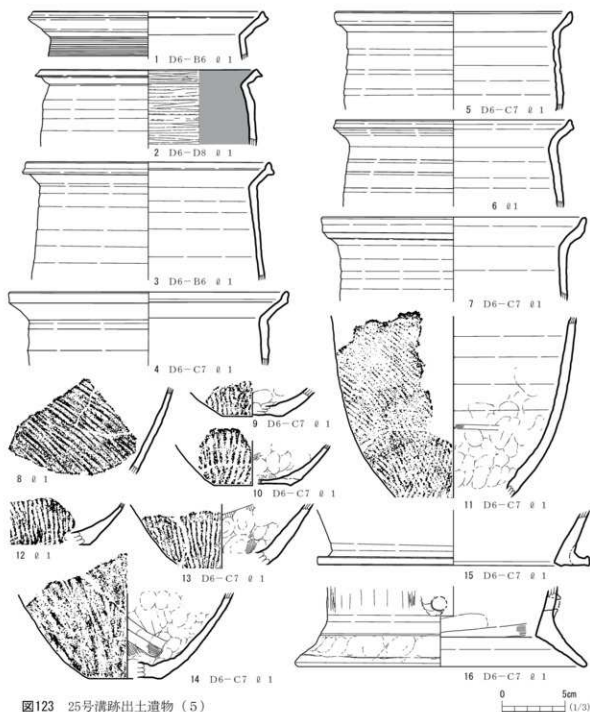


図123 25号溝跡出土遺物（5）

須恵器の器種は、蓋・坏・高台付坏・瓶類・甕がある。図118-14は蓋で、端部が直角に垂下する器形である。つまみの頂部が上方に突き出す円盤形をなす。23-26は坏である。器高が低く、底部から直線的に開く。底面は回転ヘラケズリにより整形される。21・22の底部外面には「真」の墨書がある。24は高台付坏または皿の底部であろう。25・26は瓶類の底部破片である。25は小型品であろう。26は長頸瓶であろうか。断面が三角形となる高台が貼り付けられる。27-29は甕の体部破片である。外面は平行タタキメ、内面はアテ具痕が観察できる。27の外面には、タタキメの後に浅い沈線がめぐる。

(福 田)

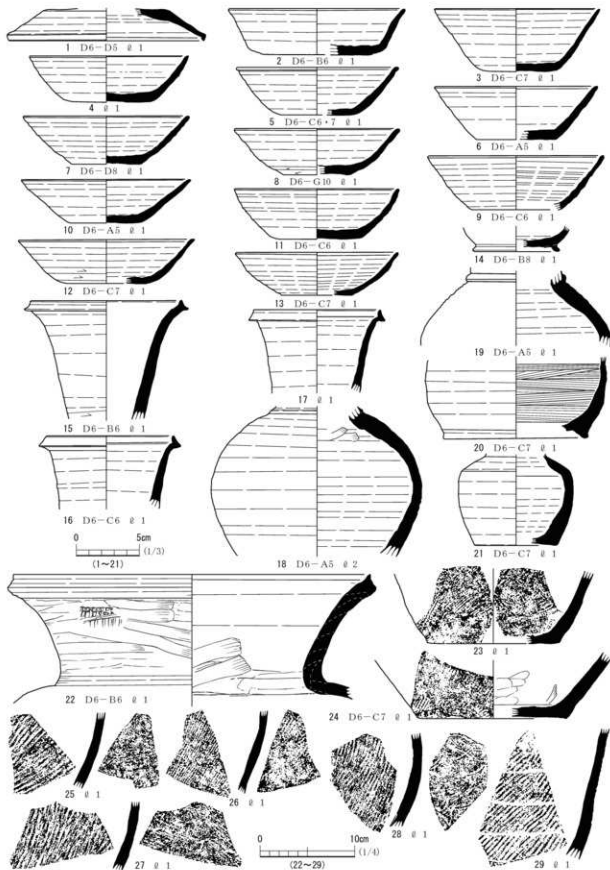


図124 25号溝跡出土遺物 (6)

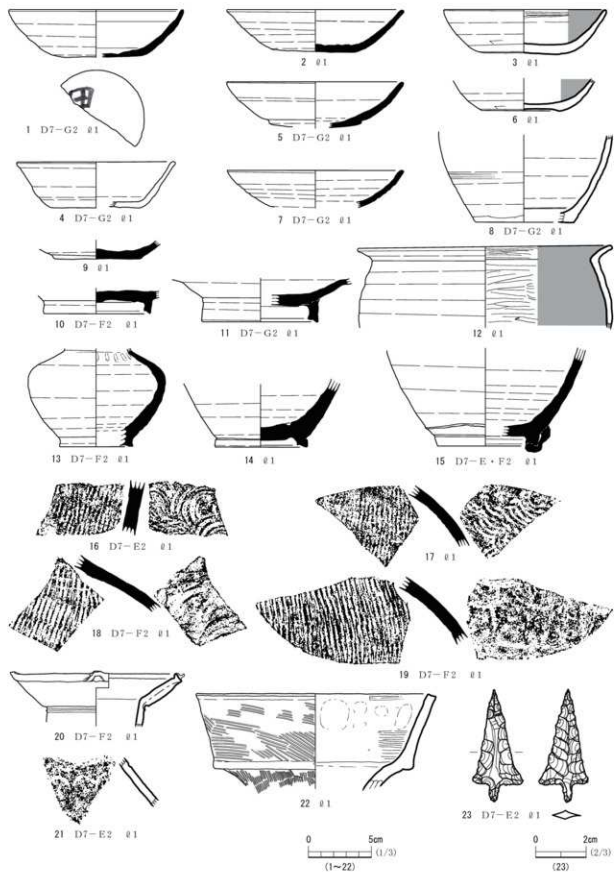


图125 37号溝跡出土遺物

第8節 その他の遺構と遺物

本節では、その他の遺構として調査区内に点在する小穴群と遺構外出土遺物を報告する。小穴群は建物跡を構成する柱穴と考えられるが、不規則な配置で明確な建物跡とならないものを一括した。遺構外出土遺物は、弥生土器と平安時代の遺物が大半を占める。その他に古墳時代後期と近現代の遺物がわずかに出土した。

1. 小穴群 (図126)

小穴群は調査区の中央部から南部にかけて多く分布する。柱穴の多くは柱穴であるが、その配置に企画性が乏しく掘立柱建物跡を構成しない。出土遺物がなく時期不明であるが、小穴の形状や堆積土などの特徴から、弥生時代と平安時代に属するものに大別できる。

弥生時代の柱穴は、9号周溝墓の東側から15号周溝墓の北側の範囲で確認できた。柱穴の多くは、直径20cm前後と規模が小さい。これらは弥生時代の掘立柱建物跡を構成する柱穴に類似する特徴である。また周辺には26・42号掘立柱建物跡など、周溝墓に先行する時期の建物跡が分布する。図126-10は、17号周溝状遺構に接するD6-A6グリッドGP6から出土した柱材である。放射性炭素年代測定から弥生時代後期の年代が得られている。42号掘立柱建物跡と同様に、周溝墓に先行す

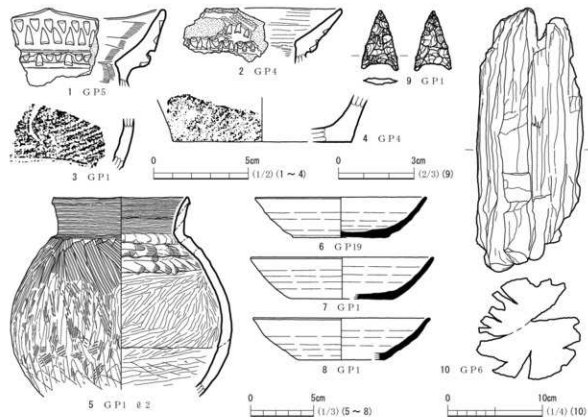


図126 柱穴出土遺物

る建物の柱穴の一つの可能性が高い。

平安時代の柱穴は調査区南部、20号掘立柱建物跡周辺のD6-C9グリッド、43～45号掘立柱建物跡の周辺のD7-F1グリッドにまとまって確認された。柱穴の分布に規則性が見出すことができず、掘立柱建物跡を構成しない。柱穴の特徴は、直径30cm前後で、平面形が方形を基調とする。弥生時代の柱穴とは平面形や規模ともに明瞭に区分できる。

その他に古墳時代に属する小穴は、C5-G10グリッドのGP1だけである。周辺にこれに関連する遺構は確認できない。堆積土の状態から、自然流入土で埋没する穴で、柱穴の構造とは明らかに異なる。性格を特定するだけの所見は得られていない。

柱穴出土の遺物は図126に示した。いずれも柱穴の埋土内部から出土したもので、柱穴の年代に直接関わる出土状況ではない。1～4は弥生土器の壺であろう。交互刺突文と押し引き沈線より文様が構成される。5は古墳時代後期に属する土師器の甕である。やや下膨れぎみの球形となる体部である。口縁部と体部の境に段を持つ。体部はハケメで器面を整形する。上半部はハケメを残すが、下半部はケズリを施して器面を整える。その後単位幅の細いミガキ状のナデで仕上げられる。口縁部はヨコナデで整えられる。6～8は須恵器の坏である。底径が大きく、器高が低い特徴があり、底部から口縁部に向かって直線的に開く器形である。底部はロクロの回転を利用して、ヘラを用いて切り離されている。

2. 遺構外出土遺物 (図127)

2次調査では遺構外出土遺物として、弥生土器・石器、古墳時代後期の土器、平安時代の土器が出土している。遺物の出土量は、古墳時代後期の土器は極めて少なく、弥生土器と平安時代の土器が主体となる。調査区内は近年の土地改変が著しいため、LⅡ層とした遺物包含層が遺存する範囲も少ない。なかでも調査区中央部から北西側で、埋没河川の上層部分にLⅡ層が遺存し、弥生土器などが比較的まとまって出土した。

図127-1～13は刺突文と押し引き沈線で文様を描く在地系の弥生土器である。1～3は交互刺突による立体的な波状隆線文が施される。4・5は口縁部下端の段で器面が厚くなった部分に刺突が施される。肉感的な波状隆線文にならない列点状の刺突である。7～11は口縁部下端に指頭押圧によるキザミが施された土器である。7は口縁部に浅い凹線がめぐる。9は指頭押圧によるキザミが2段に配され、その間には櫛歯状施文具による波状文が描かれる。10・11のキザミは、ヘラ状工具が用いられている。14～21は櫛歯状施文具を用いて本様を描く北関東系の弥生土器である。4～5本歯となる櫛歯状施文具を用いて、横位の波状文が数条描かれる。22～25は北陸系の弥生土器である。器種は甕である。22・23は体部上半に列点状のキザミが施される。24・25は整形痕のハケメを残す。26は底部に焼成前の穿孔が認められる。体部の器形が鉢形になる甕であろうか。27は壺または甕の底部破片である。外面にハケメが観察できる。28～30は剥片石器である。29は側縁に細かい2次加工を施す。

(福 田)

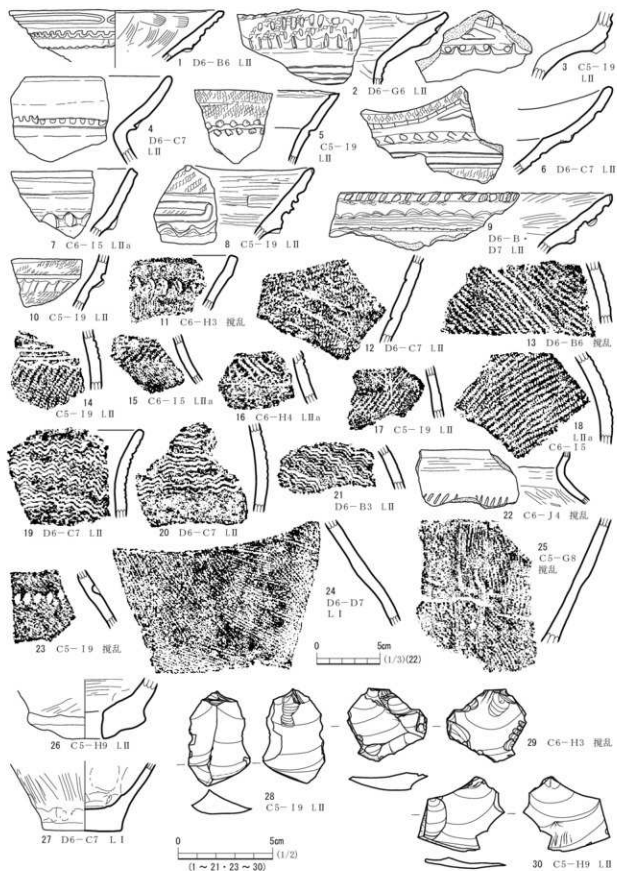


图127 遺構外出土遺物

第3章 ま と め

桜町遺跡の調査において、弥生時代後期後半に属する多数の遺構と遺物を確認した。桜町遺跡における遺構群の分布状況とともに周溝墓群の変遷も把握することができた。この調査成果を基に、弥生時代から古墳時代への移行期ともなう在地社会の変化に着目した考察を加え、本書のまとめとしたい。

第1節 弥生時代の遺物について

東北地方南部における弥生時代後期の土器編年について、先学の研究・論考は多数見られる。在地系土器に混じる外来的要素の強い遺物をもとに広域編年を試みる研究も枚挙にいとまない。しかし、现阶段の研究成果を概観すると、各論考における土器群の認識や編年の位置付けなどに不整合が看取でき、該期の土器編年が確立していないことは明白である。

こうした研究成果の一応の整合性が見られない事情を踏まえ、本稿の目的として、桜町遺跡で確認できた弥生土器の特徴、つまり在地系土器とともに出土する外来系土器とのセット関係を明確にすることから始める。次に桜町遺跡の土器群を基準とし、会津地域の該期資料、ことさら出土状況が明確なものと比較し、弥生土器編年の再構築を試みる。さらに桜町遺跡の景観を復元するとともに、いわゆる倭国の外縁地域にあたる会津地域と周辺地域との積極的交流を通して得られた精神的・物質的文流が、「会津地域にもたらした変化」に着目し、その実像について考えてみたい。

1. 弥生土器の定点資料

桜町遺跡で出土した弥生土器の特徴として、いわゆる天王山式の文様の要素を残す在地系土器（A群土器）に加えて、北関東地域や北陸地域を外来的土器（B・C群土器）が混ざり、それら土器の文様の要素や製作技法などが折衷し、在地化した土器も含まれるとした（2005年『会津縦貫北5J』）。今回の2次調査においても、1次調査の成果を大きく逸脱する事例はなく、各土器群の明確なセット関係を補完する93号土坑、101号土坑、1号土器棺墓の資料、さらには周溝墓の変遷とそれに伴う土器の時間的変化を把握できる資料を得た。本項では、改めて土器の内容と出土状況を確認し、土器編年作業において定点となる資料を提示する。

93号土坑の土器 93号土坑は井戸跡と考えている。その構造は、十分な湧水が得られる深さに達する掘形を掘り、掘形底面を埋めつつ、丸太材をくりぬいた井戸枠とそれを固定するために割り材を用いて木組みされる。最終的に掘形内に設置された井戸枠を埋め込んで井戸とする厳重な構造となる。このことから井戸の構造的特徴と遺物の出土状態を整理すると、以下の通りとなる。

①井戸跡廃絶後の埋没過程において、遺構内に流入した土に混入した土器（図93-1～20）

第3章 まとめ

②井戸の機能時期から廃絶直後の土器（図93-21～35，図94-1）

③井戸の掘形掘削から井戸完成まで、井戸の構築時の土器（図95～図97）

特に③については、井戸跡の掘形底面にまとまって埋納された状態で出土している。井戸の構造を評価すれば、構築作業に極めて近い時期に限定できる遺物で、別時期の遺物が混入しえない時間的にも空間的にも限定された、閉じた性格の一括資料となるのは言うまでもない。②と併せれば、93号土坑の機能時期の上限および下限を確定できる土器群と理解できる。93号土坑の遺物、特に③とA～C群土器のセット関係を図128に図示した。

【A群土器】基本的には体部外面に摺糸文をはじめとして縄文が施される壺形土器を主体とする土器群である。器形では広口壺、長頸壺、細頸壺がある。口縁部から体部上半にかけて施される文様の要素から、A1類～A4類に分けた。さらに壺の器形と文様要素の組み合わせで、さらに数種のバリエーションがある。

A1類：押し引き沈線によって文様を描き、口縁部下端や頸部に円形竹管状の刺突具を用いた上下方向の交互刺突を加え、立体的な波状隆線文を施すもの。

A2類：押し引き沈線による文様が多用され、交互刺突による装飾がないもの。

A3類：口縁部の下端に指頭押圧によるつまみ上げでキザミを施すもの。沈線と交互刺突による加飾がないもの。

A4類：上記の文様の要素がなく、地紋となる摺糸文が施されるもの。

A1類を特徴付ける交互刺突の施文方法について、口縁部下端の交互刺突文は、肥厚した口縁部下端の上方部にもみ横位沈線で区画し、沈線の下側から交互刺突を加えている。頸部の交互刺突は平行沈線の間で、器面が盛り上がった部分に交互刺突を加える。交互刺突文の分析をする能登遺跡（会津坂下町）の例と比較すると、施文方法に共通点も見られるが、93号土坑の遺物には、刺突方向がやや斜めで、交互刺突による波状隆線文が肉感的でなく、やや乱れた印象がある。

A1・A2類に見られる沈線文の文様構成では、口縁部・頸部・体部で文様帯が区分できる。

口縁部文様帯は連弧文を主体とする。連弧文を面違い配置し、各連弧文の接続点に円形竹管を用いた器面に直角に押し当てた盲孔が配される。さらに円形竹管で器面に対して斜めになる刺突を重ねたV字状刺突を配する。

A3類の指頭押圧によるキザミは、広口壺・長頸壺に特徴的に見られる。装飾方法は、粘土紐を突帯状に貼り付け、その上部にキザミを加えるもの。口縁部下端の肥厚化した段の部分にキザミを施すものがあり、口縁部にキザミを数段めぐるせるものも少量ながら観察できる。

【B群土器】櫛歯状施文具を用いて文様を描く土器である。93号土坑の遺物では最も出土量が少ない。全体的な器形が分かるものはないが、壺が主体を占め、器形は長頸壺、広口壺であろう。文様は波状文、廉状文である。93号土坑の出土物には、十王台式土器に顕著な文様である、縦位区画とその内部に斜格子文・波状文を描くものは確認できない。

②とした図94-1に示した広口壺が該当する。口縁部から体部上半にかけて櫛歯状施文具による

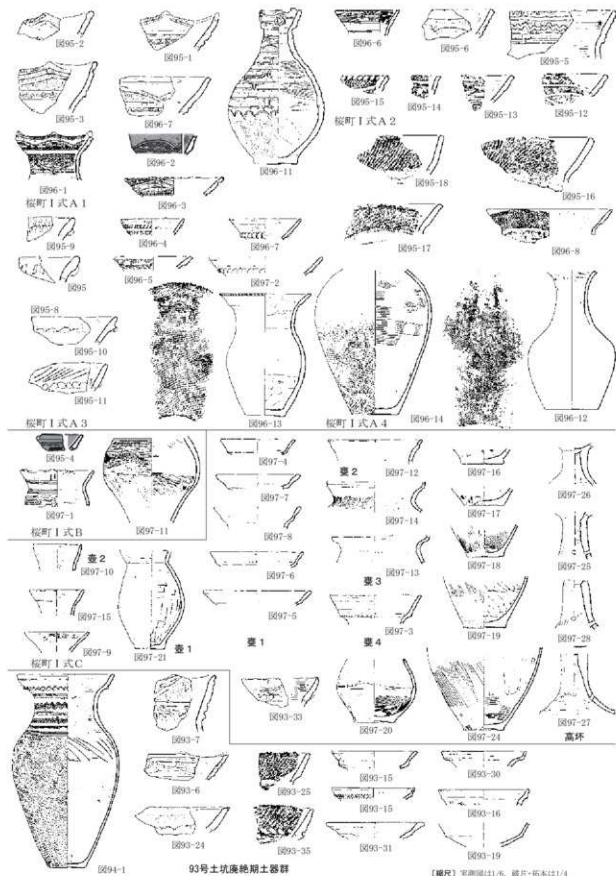


図128 桜町I式 (93号土坑一括資料)

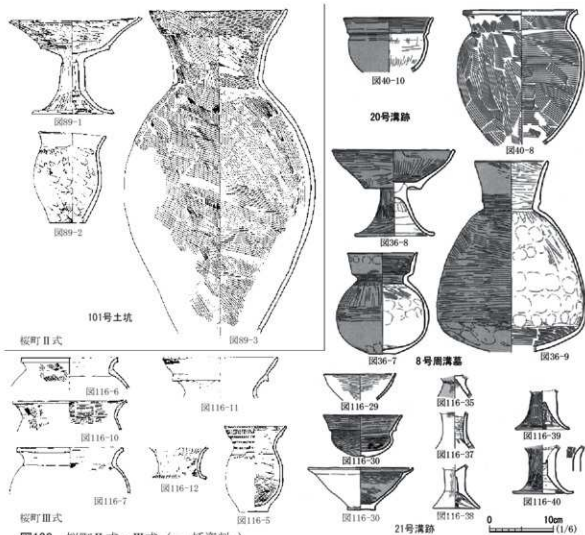


図129 桜町Ⅱ式・Ⅲ式（一括資料）

波状文が施される。加えて口縁部には北陸系土器に顕著な擬凹線，口縁部下端にはA3類に見られる指頭によるキザミが観察される。A～C群土器が折衷する土器が見られる。また③でも，97図2・3・11にも折衷土器が含まれ，93号土坑の機能時期には既に在地化した土器である。

【C群土器】器面に整形時のハケメを残し，裝飾性に乏しい北陸系土器である。器種に壺・甕・高環がある。A・B群と比べ，甕・高環が卓越する。壺・甕の口縁部形態から数種に分類できる。

壺C1：頸部に対して口縁部が大きく外傾して開く壺。

壺C2：垂直気味に立ち上がる頸部で，体部の器形が細長くなるもの。口縁部と頸部の境に段がないもの，口縁部下端に軽い段を持つものも含まれる。

甕C1：口縁部の幅が短く，内外面ともに段をもつ有段口縁となる。口唇部がやや肥厚し，全体的にやや曲線的なプロポジションになる。

甕C2：口縁部幅が狭く，外面にのみ軽い段をもつ。口唇部が上方につまみ上げられる。

甕C3：口縁部幅が狭く，口縁部下端に鋭い段を持ち，端部が垂下する。

甕C4：口縁部幅が長く、口縁部下端の段が外面にのみに残るもの。

高 環：脚部のみが出土であるため、坏身の器形は不明である。脚部の形状は、坏身から直線的に延びて裾部に向かって大きく開く。漏斗を逆にした形状の脚である。

その他にC群甕の要素として、甕C1と甕C4には、浅い沈線上の横線、いわゆる擬凹線が数条めぐるのが確認できる。A3類にも取り入れられて、在地化の一端が見られる。また口縁部下端にキザミを施す要素は、口縁部幅が狭い甕C2と甕C3には見られない特徴がある。

93号土坑の廃絶期、前述する②の土器では、甕C1と甕C2が見られる。②に伴う土器が少なく、土器群全体の把握には留意する必要があるが、93号土坑の機能時期には、甕C1、甕C2に偏重が見られる。

1号土器棺墓の土器 1号土器棺墓は15号周溝墓の墳丘内部に位置する土器棺墓で、15号周溝墓の機能時期の範疇で捉えられる。土器棺墓は3個体の長頸壺で、A群土器だけで構成される。大型壺(図31-1・4)の内部に壺2個体(図31-2・3)を副葬している。文様の種類から大型壺はA3類、副葬された小型壺はA4類、図31-2は文様構成がA2類であるが、沈線文でなくB群で多用される櫛歯状施文具で文様が描かれた折衷土器である。93号土坑出土遺物との比較では、A3類を含む点では共通するが、A1・A2類がない後出的要素が見られる。

101号土坑の土器 101号土坑は土坑墓と考えている。出土遺物に図89-1～3に示す大型長頸壺・小型甕・高環がある。重複する遺構もなく、各遺物の出土状況に乱れた痕跡が確認できないことから、大型長頸壺の下に高環、大型長頸壺の底部付近に小型甕を配し、3点のセットで副葬されたことに間違いない。

図89-1は高環で、坏身は体部との境に明瞭な段があり、わずかに外反して開く口縁部となる。口唇部は鋭く面取りされ、内面に小さなかえりがつくられる。坏身下端の段には沈線上の浅い凹線が2条めぐり、脚部は下端部で屈曲して裾部に向かって大きく開く。裾端部は面取りされ、断面は三角形となる。C群の高環脚に類似する特徴が見られる。2はC2甕で、口縁部は「く」の字状に開く。口縁部は内外面ともヨコナデが施される。3は大型の長頸壺である。撚糸文を施さず、ハケメを残す。C群の整形方法と共通する。一方、器形はC群の壺・甕とは明らかに異なり、A3類とした長頸壺に近い。

101号土坑の土器の特徴としては、A1類・A2類土器が全く見られない点で、93号土坑の土器との明らかな相違点で、より後出的要素と考えている。

2. 周溝墓の変遷と弥生土器の変化

上記の定点資料を踏まえ、2次調査で確認した周溝墓の構築順序を把握し、それに伴う土器の変遷を検討する。本書において周溝墓とは別に、周溝状遺構とした(6・12・13・17・21・22・24号周溝状遺構)がある。これら遺構は周溝墓に比べ、周溝の形状や底面が安定しないものを区別した。6・13・17号周溝状遺構は円形周溝の内部空間に小型建物を伴うもので、いわゆる平地式住居の特

徴に酷似する。これらは周溝墓群とは明確に分離した場所に分布しない。周溝状遺構間で重複する痕跡もなく、墓域内に継続して長期間に渡り存在した痕跡も見られない。これらの点から住居跡とは別の性格を持つ、祭祀的要素が強い遺構の可能性もある。また、24号周溝状遺構は周溝が部分的に遺存するもので、前方後方形の周溝墓となる可能性がある。

周溝墓の構築順序 桜町遺跡の周溝墓は、大きく3つの形態に分けられる。①墳丘が方形または長方形で、周溝の四隅が途切れる（1・2・3・4・5・7・8・9・14号周溝墓）。その内5・9号周溝墓は最も規模が大きく、墳丘規模が14mとなる。②墳丘の形状が、いわゆる前方後方形になる（10・15・16号周溝墓）。16号周溝墓は大型周溝墓である。③墳丘の形状が、いわゆる前方後円形になる（11・18・19・20・23号周溝墓）である。

桜町遺跡において周溝墓の分布状況を概観すると、大きく3箇所にまとまりが認められる。1つは1次調査で確認した①の四隅切れ周溝墓群である。この一群には②・③とする周溝墓が含まれない特徴がある。2つは2次調査区中央部の9号周溝墓から15号周溝墓まで、南東方向に列をなして分布する一群である。3つは2次調査区南部に分布する16号周溝墓を中心に、その西側から南側を衛星状に取り囲むように分布する一群である。15・16号周溝墓の間は、約12mの距離があり、両者の主軸方向も異なる。後述するが、周溝墓や出土土器の特徴からすれば、15号・16号周溝墓に年代的な差異はなく、造墓集団の違いと認識できる。

次にそれぞれの周溝墓群の構築順は、周溝墓の配置、特に互いに近接する周溝の形状に現れてくる。近接する周溝墓の周溝を観察すると、一方の周溝の形状が大きく崩れ、その幅も極端に狭くなる。これは周溝墓の構築にあたり、後続する周溝墓が先行する周溝墓の周溝に近接させ、周溝上端部は一部共有するように造られた結果であり、周溝の乱れは直接的に、構築順を示すものと考えられる。周溝墓の構造の特徴から、①四隅切れ周溝墓→②前方後方形周溝墓→③前方後円形周溝墓への大きな変遷を確認できる。

各周溝墓群の詳細な構築順序については、北側の周溝墓では、10号・15号周溝墓の周溝が特徴的で、それぞれ北側に接する17号周溝状遺構・11号周溝墓の形状に合わせて、周溝が部分的に狭まる。つまり9号・14号→17号→10号→11号→15号周溝墓の連続性が観察できる。さらに周溝の形状が不明であるが、11号周溝墓と15号周溝墓の間に12号周溝状遺構・24号周溝墓が後続する可能性がある。北側では①四隅切れ周溝墓に後続して、②と③が混在して営まれる。

南側では、16号周溝墓の周溝に面する18・19・20号周溝墓の周溝が乱れる点から、16号周溝墓が先行する点は間違いない。18～20号周溝墓の間で周溝の乱れからは構築順序が特定できない。また周溝が途切れる部分に着目すると、18・19号周溝墓のみが周溝底面が深くなる。10号周溝墓以降で、前方後円形や前方後方形となる周溝墓には見られない特徴である。さらに本遺跡の周溝墓が微高地に沿って一列に並ぶ特徴を評価すれば、16号→20号→23号→18・19号周溝墓とする順序が想定できる。

周溝墓の構造変遷 ①は墳丘形と周溝の形状が特徴的になる。墳丘形が長方形と正方形になるも

のに分けられる。墳丘の規模が5m前後の小型周溝墓は、墳丘形が長方形になるものが多い(2・3・7・8号周溝墓)。大型周溝墓となる9号周溝墓の墳丘形は正方形となる。次に周溝外側の形状に特徴が見られる。方形墳丘に対して周溝が直線的に延びるもの(1・2・3・5号周溝墓)。周溝外側が弧状に張り出すもの(9号周溝墓)が見られる。また周溝が途切れて土橋になる部分についても、周溝の端部が直線的に屈曲し、土橋の形状がバチ形に開くもの(2・3・8・9号周溝墓)がある。先学の研究では、弥生中期頃から四隅切れ周溝墓が出現し始め、周溝墓の形態変化としては、墳丘形が長方形から正方形への変遷が指摘される。しかし桜町遺跡では、周溝墓の構築順や出土遺物の検討から、四隅切れ周溝墓の形態変化を迫るものではない。ただ9号周溝墓の周溝が弧状に突出するなど、他の四隅切れ周溝墓とは明らかに異なる。9号周溝墓に後続して前方後方形周溝墓となる10号周溝墓に変遷することを評価すれば、桜町遺跡における四隅切れ周溝墓の最終形態が9号周溝墓となるのであろう。

②前方後方形と③前方後円形は墳丘形の違いは明確であるが、10号～15号周溝墓の構築順からすれば、②と③が混在する。一方、前方後方形となる16号周溝墓に後続する周溝墓がすべて③となることから、本遺跡の周溝墓の最終段階においては③前方後円形へ集束する変遷が確認できる。次に、周溝が途切れて土橋となる部分に特徴が見られる。周溝外端部が前方に張り出し、土橋の平面形が台形になるもの(10・15・16・20号周溝墓)。周溝端部の張り出しが弱いもの(11・18・19・23号周溝墓)がある。②は土橋部分の周溝外端が肥大化する。20号周溝墓以外の③は、周溝端部の肥大化は見られず、後の男壇遺跡5号周溝墓や宮東遺跡1号周溝墓などに見られる前方部の明確化は認められない。②・③の周溝墓の受容にあたり、画一化した周溝墓の特徴に限った強い影響力や築造規制も見られない。前述した①と同様に、他地域で派生した周溝墓の形態変化と桜町遺跡における周溝墓の形態変化も連動しない。周溝墓の導入については、時期を前後する特徴を持った既存の周溝墓を数種採用しているであろう。

周溝墓の出土土器 周溝墓の構築順序を基とした土器群の内容を確認し、前述した定点資料との比較を試みる。周溝墓の変遷をまとめると、下記のとおりである。

I期：四隅切れ周溝墓(1～5・7～9・14号周溝墓)

II期：9号周溝墓に後続する前方後方形・前方後円形周溝墓(10・11・15・16号周溝墓)

III期：16号周溝墓に後続する前方後円形周溝墓(18～20・23号周溝墓)

これらI～III期の周溝墓から出土した土器のセット関係を図130・図131にまとめる。周溝墓祭祀の用いられる赤彩された土器であるためか、生活痕跡を残す土器が少ない特徴がある。

【I期土器】A群土器が主体を占め、次にC群土器の出土量が多い。B群土器は極めて少ない。器種組成や器形的な特徴などは、93号土坑の資料と近い。

【A群土器】周溝墓出土資料では、器種は壺を主体とする点は変わりないが、その他に高環を含む。壺の器形は細頸壺・広口壺・長頸壺があり、その文様要素はA1類～A4類がある。A1類・A2類の文様構成は、基本的には93号土坑資料と同様に、沈線文で区画された内部に縄文を充填し、口

A 類土器 (在地系土器)

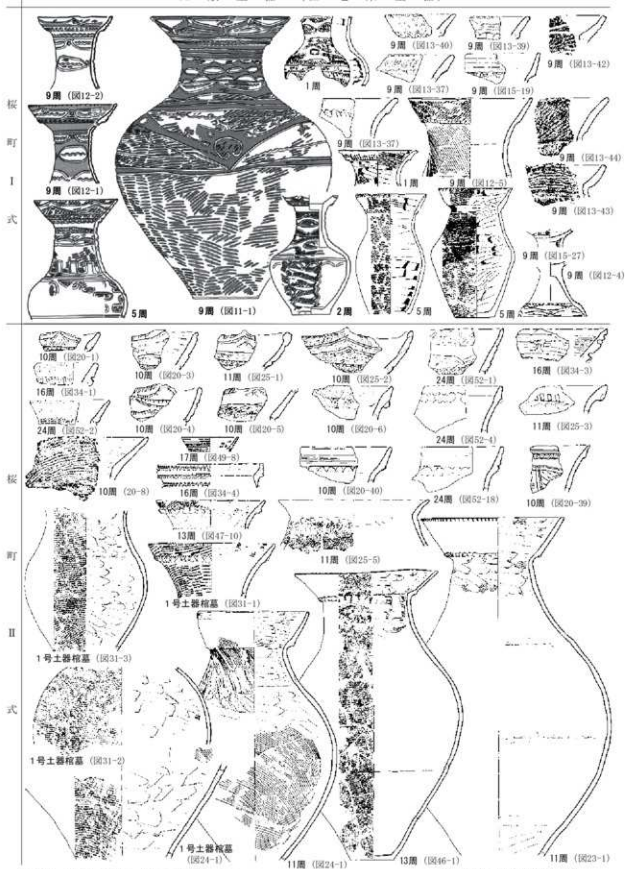


図130 周溝墓出土土器の変遷図 ①

(原尺) 実測図21/6、破片・拓本21/4

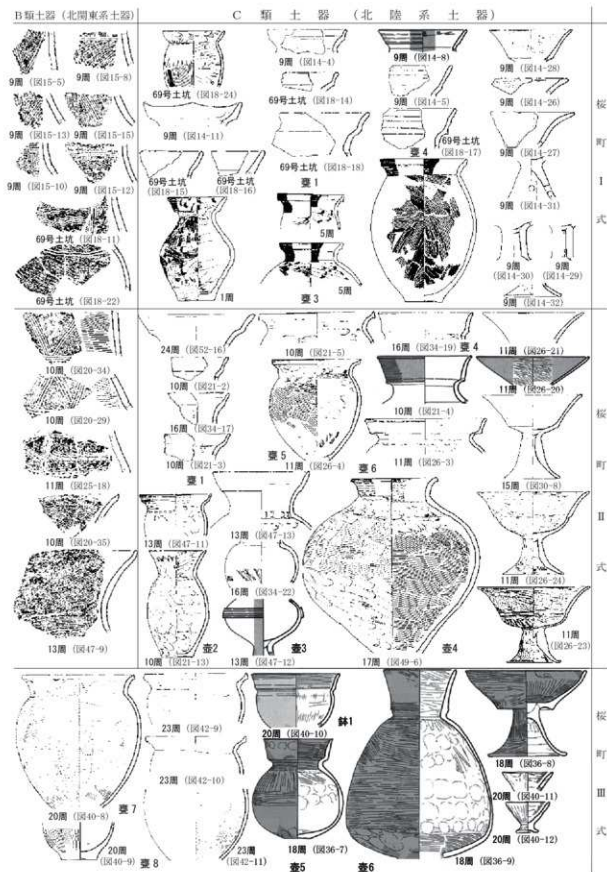


図131 周溝墓出土土器の変遷図②

〔縮尺〕実測図1/6、縮尺-拓本1/4

縁部下端や頸部に交互刺突による波状隆線文を施すものである。文様帯のモチーフとして、頸部の楕円形文や連弧文、矢羽形沈線文など、93号土坑資料にない数種のバリエーションが見られる。A3類は93号土坑資料と同様に、口縁部下端の肥厚化した段の部分に指頭押圧によるキザミを施す。

高坏は9号周溝墓にわずかに見られる。坏身や脚根部に沈線文で連弧文が描かれる。93号土坑資料を補完する資料であろう。

【B群土器】櫛歯状施文具を用いて鋸歯文・波状文、縦区画とその内部の斜格子文や波状文が描かれ、十王台式に類似する特徴がある。その他に3号周溝墓に廉状文が描かれる土器がある。93号土坑の②・③資料にも散見できる。

【C群土器】器種は壺・甕・高坏を主体とする。93号土坑資料の分類を基準とすると、甕C1～甕C4が確認できる。A群土器の地紋擦糸文とC群土器のハケメに代表される、器面調整の違いが見られるが、器形は在地のA群土器に類似する。外来系土器であるC群土器が土器製作方法に特徴を残すが、器形などは在地土器の影響を残している。

以上のことから、I期土器と93号土坑資料との間に、時間的な差異を示す違いを見出すことができない。各群土器のセット関係を見ても、両者の内容を大きく逸脱するものもない。93号土坑資料については、I期土器に極めて近い時期と理解できる。

【II期土器】I期土器と同様に、A～C群土器の出土比率に違いは認められない。

【A群土器】文様要素ではA1類・A2類など沈線文により文様を描く土器が少なくなり、A3類の増加傾向が看取できる。壺の器形では、細頸壺と広口壺の減少から、受け口状の口縁となる長頸壺に偏重が見られ、文様要素のA3類との組み合わせたものがある。またA群の高坏が消失する。

A群土器との折衷については、C群の要素である口縁部に凹線がめぐるもの、B群の要素である頸部文様帯に櫛歯状施文具による文様が描かれるものも見られ、内容的にはI期と同様に認められる。土器の製作方法では、整形時にハケメが多用されることが、I期に比べてより顕著になり、加飾の減少に伴ってハケメを残すものが多くなる。

【B群土器】出土量が少なく、I期と明瞭な変化は見られない。

【C群土器】壺C1・C2、甕C1～C4はI期土器から継続して残る。以下にII期で新たに出現する土器の特徴をまとめる。

壺C3：13号周溝状遺構の台付壺(図47-12)。体部器形がそろばん玉状をなし、体部最大径にタガ状の突帯がめぐる。

壺C4：17号周溝状遺構の壺(図49-6)。体部の器形が球形で、頸部から外反する口縁部となる。

甕C5：11号周溝墓の甕(図26-4)。口唇部が上方につまみ上げられ、その断面形は甕C3に類似する。体部は球形で、小さい底部に向かってすばまる器形。

甕C6：10・11号周溝墓の甕(図21-4・図26-3)。口縁部の幅が長い有段口縁壺であるが、甕C4に比べて口縁部内面の段が明瞭となる。

高 環：11・15号周溝墓の資料が特徴的である。I期と同様に、坏身が外反して大きく開き、坏身内面の見込みが平坦となるもの（図30-8）。この他に坏身下半の器形がやや丸みを帯びるものが見られる。（図26-23・24・26）

II期土器と定点資料との比較について、93号土坑の資料とは、A群土器ではA1類・A2類が減少する傾向にある。一方で、93号土坑で少量であったA3類が顕著に見られる。また1号土器棺墓や101号土坑の大型壺も同様に、II期のA群土器に特徴的に見られる長頸壺と共通する器形になる。C群土器では、I期で見られた甕C1～甕C4がII期でも一定量が見られる。その他に93号土坑の資料にない甕C5・甕C6がある。高環では93号土坑資料は坏身がなく、明瞭な比較は困難であるが、坏身下部の器形が丸くなるものはI期に含まれない。

周溝墓の変遷と併せて、93号土坑の資料に見られないものが含まれる。I期土器よりも後出的要素として、II期土器を創出するに足る資料と位置付けた。

【III期土器】II期土器に比べ、A群・B群土器が極端に減少し、C群が主体を占める。

【A群土器】破片資料が多く、全体的な器形の分かるものがない。周辺域からの流れ込みが含まれる可能性が高い。周溝の底面に近い場所から出土した資料に限れば、A1・A2・A3類とした装飾的な文様要素が施された壺は極めて少なく、体部に地文となる捺糸文を施しただけのものになる。

【B群土器】III期に伴うものは確認できない。

【C群土器】器種は壺・甕・鉢・高環がある。甕などは、II期に比べて、器形や口縁部の形状にバリエーションが少なく、統一感が見られる。

壺C5：18号周溝墓の壺（図36-7）。体部の器形が球形で、口縁部幅が長く有段口縁となる。

壺C6：18号周溝墓の壺（図36-9）。体部の器形が下膨れて、口縁部幅が長く、下端に軽い段を持つ。壺C6は特異な器形で、会津地域での出土例は極めて少ない。

甕C7：II期で見られた甕C5に比べ、体部の器形に変化はないが、「く」の字に屈曲する頸部となる甕（図40-8）。

甕C8：甕C7と器形の変化はないが、口唇部の断面形が鋭い三角形となる甕（図42-9・10）。

高 環：18号周溝墓の資料のみである。坏身は下端部に段を持ち、外傾して開く器形で、坏身の見込みが水平になる。脚部は坏身との接合部からラッパ状に開く。その他にミニチュア高環も見られる。

鉢C1：II期に見られない器種で、体部の器形が半球形となる鉢（図40-10）。口縁部は壺C6に見られる有段口縁となる。

III期土器は出土量が少ないが、C群土器が卓越する点で、A群土器を一定量含んでいたII期土器とは明確な相違点がある。周溝墓の変遷とも併せて、桜町遺跡の最終期にあたる土器群である。

3. 桜町遺跡出土弥生土器の編年的位置づけ

桜町遺跡の弥生土器を編年的に位置付けるにあたり、土器の変化が当時の人々の生活に与えるイ

ンパクトが大きく、土器の器形変化は住居構造の変化をはじめとして生活スタイル全般に関することは言うまでもない。土器の文様等に表出される変化についても同様で、前型式からの伝統的文様の退化や新要素の出現もまた、当時の社会的な生活様式の変化と捉えることができる。また、当時の人々の生活圏を拡大的に見れば、伝統的な在地社会にない系譜の土器が混ざり、時にはそれらが内外ともにオリジナルな姿を止めないほど融合した、全く別の特徴を持つ土器となるものも出現する。つまり、征服・移住など人的交流、交換・交易など経済的交流、文化・宗教など精神的交流、地域間交流の表現形としては多様を極めるのであろうが、当時の人々の地域間交流の結果が、土器の変化として表された側面を重要視したい。

桜町式の型式設定 土器型式の設定にあたり、単なる土器の文様変化ではなく、当然土器の変化に現された生活様式の変化を捉えることが主目的となる。会津地域における弥生時代後期の土器についての研究はあるが、集落跡や墓制など遺構と関連づけて、当時の社会の実態を解明に迫る研究が少ない点も指摘できよう。桜町遺跡の調査成果からは、弥生時代後期の掘立柱建物跡や周溝墓を確認できた調査例である。会津地域における古墳時代の受容を視野にいれ、これまでの通説となっている研究成果を再検討すべき成果がある。そこで本遺跡から出土した弥生土器を編年的に位置付けるにあたり、弥生土器の一括性およびその変遷を把握できたことから、新型式を設定するに足る要件が揃ったと判断できよう。型式名は桜町遺跡の名を冠し、桜町式とした。桜町式の設定基準は以下の通りである。

- (1) 93号土坑の③から出土したものを定點資料とした。
- (2) 周溝墓の変遷に伴うⅠ期からⅢ期まで土器群の変化を把握した。この変遷をもとに、桜町Ⅰ式～桜町Ⅲ式と3時期に細分する。
- (3) 在地系のA群土器に加えて、外来系のB群・C群土器が含まれる。さらにA～C群土器の文様要素が融合するものも含まれる。なお、胎土の観察から、各群土器ともすべて桜町遺跡の近郊で製作されたもので、明確な搬入品はない点を指摘しておく。

桜町式土器の編年の位置付け 桜町式土器の年代幅は、概ね弥生時代後期の天王山式以降から、古墳時代前期に属する土師器の出現までの期間内に相当する。桜町式土器の分布については、本項では桜町遺跡が所在する会津地域を対象として、その変遷を確認する。広域的な編年の位置づけについては、後述する弥生時代後期の複雑な社会や地域間交流の活発化が背景にある。つまりは伝統的な土器に外来的要素が加わり、それが在地化する。さらに在地化して変質した外来的要素が他地域に伝播することが想定される。こうした変化が各地で一律に生じるわけなく、外来的要素との接触に起因し、そこからドミノ倒しのように他地域に波及することには、ある程度の時間差が存在するものと推定される。一応の編年試案を想定して表4に示したが、その詳細な検討は別稿を用意したい。

桜町Ⅰ式以前 桜町Ⅰ式の設定基準が、93号土坑に見られるA群とした在地土器にB群・C群の外来系土器を伴うことである。当然桜町Ⅰ式以前の土器としては、外来系土器の影響を含まない

段階と理解できる。会津地域で類例を求めれば、能登遺跡（会津坂下町）や細田遺跡（会津坂下町）や和泉遺跡（会津若松市）に相当する。いわゆる天王山式土器の特徴を持つ土器群である。福島県の天王山式土器については、先学の研究成果によって弥生時代後期前半に位置づけられる。その中で時期細分が試みられており、研究者によっては天王山遺跡（白河市）の標識資料との位置付けに相違が認められる。例えば、会津地域では、和泉遺跡→能登遺跡→天王山遺跡の変遷が提示されている（石川2004年）。天王山遺跡・能登遺跡→和泉遺跡の変遷（猪狩2000年）などの考えもある。

まず桜町Ⅰ式のA群土器と能登遺跡資料との分析を始める。能登遺跡の壺は、頸部が筒形で、口縁部が広口となる広口壺が主体となる。桜町Ⅰ式に能登遺跡に見られる頸部が筒形になる広口壺が少ない。その他に細頸壺、頸部から胴部にかけて徐々にすぼまる長頸壺が一般的に見られる。桜町遺跡では壺の器形に多様なバリエーションが認められる。能登遺跡の資料で主体を占める交互刺突文と沈線文の文様要素は、桜町A1類・A2類に桜町Ⅰ式にも継続して確認できる。ただ沈線文の図柄や、能登遺跡で多用される連弧文は、桜町遺跡でも残るが、能登遺跡にない楕円形文や矢羽形文が組み合わせられた複雑な図柄が描かれる。一方、能登遺跡の資料にはA3類の長頸壺が含まれない。桜町Ⅰ式に後続する桜町Ⅱ式で偏重がある。能登遺跡の資料が桜町Ⅰ式に先行するものである。

能登遺跡の調査では、掘立柱建物を含む集落や周溝墓など墳墓群も現段階では未確認である。北陸地域では川原町式、天王山式土器の出土が見られ、地域間交流の一端が垣間見えるとされる。しかし能登遺跡では北陸地域の土器は見られない点から、この段階では会津地域に変化を及ぼすほどの地域間交流が未発達な段階と結論づけられる。あるいは北陸地域で出土する天王山式系土器が桜町Ⅰ式期の土器である可能性も指摘できよう。桜町Ⅰ式以前の会津地域では、東北地方の伝統的な生活様式であり、西日本的な「弥生文化」を受容していない段階と評価できる。

桜町Ⅰ式 桜町Ⅰ式の中でC群土器の甕が特徴的になる。93号土坑の資料には甕C1～甕C4が見られる。甕類の主体を占めるものは、口縁部の形態が甕C1とした一群である。会津地域では屋敷遺跡C1類甕に類例が認められるが、その他の類例は極めて少ない。他地域の事例では、玉山古墳（いわき市）の弥生土器がある。弥生時代後期に属する遺構群の弥生土器で、第二群土器が該当する。これらは桜町Ⅰ式A1～A4類土器が玉山1類～4類にあたり、玉山5類には桜町甕C1～C3を含んでいる。玉山古墳第二群土器と桜町93号土坑の資料は共通する特徴を持っている。

桜町A3類は、口縁部下端の段に指頭押圧によるキザミを施す。この特徴はいわゆる踏瀬大山式（中村1976年）とするもので、明戸遺跡の資料に代表されて天王山式の次型式として設定される。設定基準となる口縁部に縞描波状文を施す資料も93号土坑資料（図93-33）にある。A3類にB群土器の櫛歯状施文具による波状文が融合したものと捉えている。踏瀬大山遺跡では表採資料、明戸遺跡は器形が復元できるものが少なく、C群土器との明確な供判関係は不明である。93号土坑資料にA3類が含まれることから、これらの資料は桜町Ⅰ式期に位置付けられ、中通り地域に所在することから北陸地域との交流が少ないことが現れているのであろう。

福島県浜通り地方の横山古墳や八幡台遺跡、平窪諸荷遺跡（いわき市）に見られる、いわゆる八

幡台式（馬目1980年）との関連について、横山古墳群1号・4号住居跡の資料には天王山式に類似する沈線文で文様を描く桜町A1類・A2類も含まれる。4号住居跡の大型長頸壺が桜町9号周溝墓の長頸壺に類似する点、櫛描文を施す土器が含まない点に特徴がある。八幡台遺跡では桜町A3類に東関東の十王台式土器の文様要素と融合したものも含まれる。浜通り地方は、天王山式土器の影響が少なく、十王台式土器の影響が強い地域である。中通り地方の資料と同様に北陸系土器が少ないことから明確でないが、桜町I式と同じセット関係を持つ玉山古墳第二群土器、八幡台遺跡や横山古墳の資料は、桜町I式の範疇で位置付けられる。この時期は平窪荷遺跡で方形周溝墓が出現する時期にあたり、桜町遺跡をはじめとする会津地域の墓制の変化と共通している。

次に近県の類例として、八幡山遺跡（新潟県新潟市）の資料は、桜町I式甕C1は八幡山遺跡2期に見られる。八幡山遺跡2期にはB群東北系土器としたものも含まれ、沈線文や交互刺突文で飾られた桜町A1・A2類土器の他にA3類も一定量見られる。また東北系土器の器形も能登遺跡で顕著である頸部が筒形をなす広口壺は少なく、口縁部が受け口なる長頸壺が主体となり、器形的にも桜町I式と類似する。桜町I式の土器、特に93号土坑資料の中には、甕C5とした、口縁部の内外面ともに段を形成する有段口縁となる甕、いわゆる月影甕が含まれない。桜町I式の年代は、八幡山遺跡2期の土器群と大きな矛盾はなく、北陸地域でいう法仏式期に併行すると考えている。

桜町I式期は会津地域の伝統的な社会（能登遺跡段階）に、他地域との交流を通じて外来的要素を受容し、それが在地社会に変化をもたらす大きな画期、言わば「縄文的社会」から「倭国的社会」への変革期と位置付けられよう。また、桜町I式土器が日本海側の新潟県から福島県浜通り南部までの分布域が見られる。この時期の地域間交流の活発化とそれによって在地社会にもたらされた変化を考える上で極めて象徴的な事例と理解できよう。

桜町II式 周溝墓の変遷から創出された土器型式である。桜町I式に見られる器種・器形の土器も一定量含まれる。桜町II式で出現する新たな要素は、A1類・A2類の減少とA3類長頸壺の顕在化、甕C4・甕C5の出現である。定点資料である101号土坑の大型壺は、口縁部下端のキザミやハケメとなる器面調整に違いがあるが、器形はA3類で顕著な11号周溝墓の長頸壺などと酷似する。この点ではA群長頸壺とC群の製作技法が融合した土器となる。101号土坑の土器セットに、高坏は15号周溝墓の高坏、小型壺は10号周溝墓の壺に器形や製作技法に共通点が見られる。

会津地域の類例では、甕C5に分類した10号・11号周溝墓の資料は、館ノ内遺跡（喜多方市塩川町）の2号周溝墓の資料と類似する。荒屋敷遺跡（喜多方市塩川町）の4号性格不明遺構は17号周溝墓出土の胴部が球形となる壺と類似する。これらの資料は桜町II式に相当する。

屋敷遺跡（会津若松市）の112号土坑と3号周溝状遺構、三城冨家北遺跡（猪苗代町）22号土坑などに甕C1が見られる。これら遺構の出土土器には、桜町I式で顕著なA1類・A2類が含まれない。甕C1は桜町II式にも一定量見られ、屋敷遺跡3号周溝状遺構（図189-552）は桜町II式で見られる甕C4と類似する。屋敷遺跡・三城冨家北遺跡の類例は、桜町II式段階と考えられる。

会津地域の桜町II式に相当する周溝墓は、桜町遺跡と荒屋敷遺跡、館ノ内遺跡で確認されている。

荒屋敷遺跡4号性格不明遺構と館ノ内2号周溝墓は、いずれも四隅切れ周溝墓に分類される。周溝が途切れる部分が外側に大きく反りかえる形状をなす。北陸地域において四隅切れ周溝墓の最後期に見られる特徴がある。両遺跡の周溝墓から出土する土器は、桜町遺跡の四隅切れ周溝墓から出土する桜町Ⅰ式土器とは異なり、むしろ桜町Ⅱ式土器との類似点が見られる。この時期桜町遺跡では四隅切れ周溝墓が造られなくなり、代わって10・11号周溝墓に代表される方形墳丘または円形墳丘の前面が途切れる前方後方（後円）形周溝墓が採用されはじめる時期となる。

桜町Ⅱ式の年代は、甕C5がいわゆる月影甕に類似することから、北陸地域の月影式に併行すると考えている。在地系土器の沈線文など装飾的要素が減少と北陸系土器の増加があり、外来的要素の在地化を積極的に行う一方で、新しい墓制の受容などからも、当時の社会情勢の変化に対応した在地社会となっていた。例えるならば「会津社会が弥生時代的な国際情勢（倭国）の中に位置付けられ、その変化に連動した在地社会となる」段階であろう。

桜町Ⅲ式（古墳受容1段階） 桜町遺跡の18・19・20号周溝墓出土の土器を基準とする。A群とした在地土器よりもC群の北陸系土器が卓越する。器種は壺・甕・高坏・鉢がある。周溝墓出土土器のためか、該期の北陸系土器にある器種が一部欠落する。桜町Ⅲ式を特徴付けるものが甕C7・甕C8と壺C5、高坏である。これらの特徴から周辺遺跡の出土例を検討する。

桜町Ⅲ式の類例は、中西遺跡（会津坂下町）4号・6号住居跡、宮東遺跡（会津坂下町）3号・4号周溝墓・4号土坑、鶴塚遺跡（喜多方市塩川町）1号円形周溝墓が挙げられる。中西遺跡では竪穴住居跡の資料で、桜町Ⅲ式とした土器群にない器種、特に丸底となる直口壺や器台を含んでいる。甕の口縁部形状に着目すれば、甕C7・甕C8に酷似するものを含む。中西6号住居跡の高坏が桜町18号周溝墓、桜町遺跡21号溝跡の高坏と、器形や製作技法など共通する。周溝墓出土の資料では、宮東遺跡3号・4号周溝墓がある。いずれも円形周溝墓で周溝の一端が途切れる。桜町遺跡20号周溝墓に見られる土橋部にあたる周溝端部が外側に肥大しない特徴があり、桜町遺跡18号・23号周溝墓に酷似する。宮東3号周溝墓の遺物（第10図1）は有段鉢である。器形は違うが口縁部幅が長い有段口縁となる壺C7の口縁部形態に近い。宮東4号周溝墓の資料（第12図）は周溝出土の資料である。4号土坑は4号周溝墓の台状部内に設けられた埋葬施設の一つと考えられる。4号土坑の資料（第26・27図）をあわせて比較する。甕では、第12図8は桜町Ⅱ式甕C5、第26図1は桜町Ⅱ式にある甕C1、同図7は桜町Ⅲ式の壺C7に類似するものが見られる。第27図13の高坏は桜町遺跡18号周溝墓の高坏と器形的に近い。また4号土坑には桜町遺跡では全く出土していない、皿状をなす身を持つ器台が見られる点も特徴的である。周溝墓の平面形では、桜町Ⅱ式に11号周溝墓も含まれるが、宮東4号周溝墓の出土土器に桜町Ⅱ式で見られる在地土器のセット関係が見られない点から、一応は桜町Ⅲ式としておく。鶴塚遺跡1号円形周溝墓は、周溝墓の平面形が宮東3号・4号周溝墓などに近く、周溝が途切れる部分が肥大しない。周溝墓に伴う出土遺物が図示されていないが、遺跡内から出土した高坏の脚部などは、桜町Ⅲ式とした21号溝跡の資料に近い。

桜町Ⅲ式期は、墓制では完全に四隅切れ周溝墓の造営が停止する。代わって前方後円形周溝墓が

主体となる。土器はA群とした在り土器が極端に少なくなり、C群の北陸系土器が多くなる。北陸地域の土器との統一性が生じている。土器から見れば、生活様式も北陸地域と変わりないのであろう。弥生時代の最終末から西日本的な古墳を受容する時期として、「弥生時代的な社会（倭国）から古墳時代的な社会（ヤマト王権）への変化に対し、その準備態勢が整う時期として、古墳受容期」と評価できよう。

4. 古墳受容期の土器の変遷

桜町遺跡の調査成果が会津地域の古墳時代の開始にも関わるため、四隅切れ周溝墓の造営停止から定型的な前方後円墳の出現までの墓制の変遷を古墳受容期とした。それに伴う会津地域の土器の変化をまとめてみる。なお、古墳出現期を前後する時期の墳墓の名称について、周溝墓・低墳丘墓・古墳などと研究者によって様々で、学史的に問題があることは理解しているが、本項では各報告の名称をそのまま用いた。

東北地方南部における古墳時代前期を前後する土器編年については、1993年日本考古学協会新潟大会で示された広域編年の新潟シンボ編年と対比させて、辻秀人によって編年案が提示されている（辻編年）。これによると辻編年Ⅰ期は、新潟シンボ編年5・6期に相当し、北陸系土器の波及を画期とする。辻編年Ⅱ期は布留式・廻間Ⅲ式と併行する段階、新潟シンボ編年7期。辻編年Ⅲ期は小型丸底鉢の出現を画期とし、新潟シンボ編年8期以降としている。桜町遺跡の資料との対比から、桜町Ⅰ式・Ⅱ式は辻編年Ⅰ期以前になる。桜町Ⅲ式（古墳受容第1段階）は、辻編年Ⅰ期に一部が含まれる。本項で用いた古墳受容期の各段階は、概ね辻編年Ⅰ期～Ⅱ期の中で位置付けられよう。

古墳受容期第2段階 この時期は稲荷塚遺跡（会津坂下町）の1号・2号・4号周溝墓が該当する。桜町Ⅲ式期（古墳受容第1段階）の周溝墓が円形墳丘を主体とする。一方、古墳受容期2段階は現在のところ、全て方形墳丘となる点である。桜町遺跡では桜町Ⅱ式期には方形墳丘と円形墳丘の周溝墓が混在し、桜町Ⅲ式期では円形墳丘となり周溝墓の造営を終えている。桜町Ⅲ式以降は会津坂下町を中心とする会津盆地の外縁地域に遺跡が増加する傾向が見られる。古墳時代の開始にあわせて集落域の再編成があったのであろう。稲荷塚遺跡の周溝墓は、定型化した前方後円墳となる柞ヶ森古墳の出現期まで、すべて方形墳丘の周溝墓が造営される。古墳受容期は方形墳墓の造営に強い規制うけ始めた段階で、桜町Ⅲ式期までの周溝墓と明確な違いがある。

この段階の土器と桜町Ⅲ式との違いは、丸底となる直口壺と小さい皿状の器台が顕在化する土器群で、複合口縁壺を伴わない段階とした。壺・甕は頸部がやや緩い「く」の字に屈曲し、口唇部が三角形になる。器形の全容を分かる資料は少ないが、概ね桜町Ⅲ式と同様である。一方高坏の製作方法では、桜町Ⅲ式まで見られた脚部と坏部の接合に粘土塊を充填させるものがなくなる。その他に、いわゆる東海系土器が少数ながら混ざる点にある。しかし東海系土器の評価について、会津地域での出土例は、稲荷塚2号・3号周溝墓の高坏などごく一部の器種に見られる程度である。これ以外の器種で東海系土器の特徴をもつ、いわゆるS字口縁甕なども極めて少ない。

墓制の変化について、東海地域の古墳受容期は、廻間遺跡などの例では前方後方墳が主体となる。会津地域でも桜町Ⅲ式から古墳受容第2段階への変化において、墓が前方後方形への変化が見られる。これが東海系土器の出現に併せた変化にとらえがちであるが、前方部の形状の違いは明確で、稲荷塚1号・2号・4号周溝墓の前方部とは明確に異なる。この点からも東海系土器の出現が在地社会、特に墓制の変化に与える影響は少ないと考えられ、画期の基準としては妥当性を欠く。

古墳受容期第3段階 稲荷塚遺跡（会津坂下町）3号・5号周溝墓、宮東遺跡（会津坂下町）2号周溝墓、男壇遺跡（会津坂下町）2号～5号周溝墓が該当する。周溝墓は古墳受容第2段階と同様に、前方後方形となる墳丘形である。特に前方部の側縁部を長く区画し、前方部先端までは全周しない周溝に特徴がある。前段階の周溝墓が途切れて土橋になる部分に比べ、より前方部として明確化される。

また前方部の側縁が墳丘部の周溝に比べて、細長く延びる特徴が見られる。桜町Ⅱ式期とする桜町10号・16号周溝墓の土橋部分の形状とは明に異なる。また前方部側縁の周溝が、墳丘を巡る周溝よりも浅くなる特徴がある。古墳時代前期とした明確に前方部の先端まで周溝が巡る稲荷塚6号周溝墓や宮東1号周溝墓にも見られる。定型的な前方後円（後方）墳の最初期段階にも共通して見られる形態である。

この段階の墳丘祭祀に用いる土器は、前段階から継続する高坏・器台・直口壺などに加えて、複合口縁壺が採用される。複合口縁壺は胴部が球形からやや尻すぼみの器形で、頸部が細く直立気味に立ち上がる。口縁部は頸部から外傾して開くが、男壇遺跡3号周溝墓の資料に見られる、外面に比べて内面側の段がないものがある。さらに祭祀具として特化されていないため、底部穿孔されるものを含まない。また男壇3号周溝墓の複合口縁壺では、体部と頸部の境に粘土紐を貼り付け、その上にキザミを施すものがある。いわゆる棒状浮文による装飾された複合口縁壺も含まない。

古墳時代前期に区分した男壇1号周溝墓、稲荷塚6号周溝墓、宮東1号周溝墓、内屋敷遺跡（喜多方市塩川町）4号周溝墓の複合口縁壺は、底部穿孔したものが墳丘祭祀に用いられる。壺の機能が失われ、祭祀遺物に特化され、後の壺形埴輪への変化が見られる。

先学が指摘するように、杵ガ森古墳の平面形が宮東1号周溝墓と類似する点や箸中山古墳との企画性から、畿内地域との関連を含めれば定型化した前方後円墳の出現と理解できる。さらに杵ガ森古墳を前後する時期に畿内系の複合口縁壺が会津地域に出現する。底部穿孔された複合口縁壺が祭祀具への変化が弥生時代的な周溝墓から本格的な古墳時代となる前方後円（後方）墳の祭祀行為への変化と考えられる。古墳受容期2・3段階は弥生時代から古墳時代への過渡期として在地社会の変革期であろう。

まとめ 古墳受容期の各段階については、墓制の変遷を基にした土器の変化として捉えた細分を試みた。これら土器は周溝墓や古墳の墳丘祭祀に伴う祭祀具の一つである。定型化した前方後円墳の出現を画期として、全国的に画一化された畿内的な祭祀を会津地域でも受容したものと考え、土器群の変遷をとらえた。

5. 土坑出土の木製品について

弥生時代後期に属する木製品は、91・93・94号土坑から出土した。木製品の種類は、91・94号土坑から農具（鎌・掘り棒）、建物部材、杭、93号土坑から井戸枠および井戸構築材が出土した。本項では農耕具と建物部材を中心に木製品の特徴をまとめる。

農具 鎌（図91-20）は狭鎌に分類される。頭部が長く、その端部は直角に切りそろえられる。刃部は先端が欠損するが、側縁部は丸く整えられる。柄孔周囲の隆起部分は水滴形をなす。隆起部の右側が破損して失われているが、側縁部分を丁寧に削り整え、補修して使用していたのであろう。福島県内では弥生時代後期に属する鎌の出土例は知られていない。東北地方でも弥生時代中期の中在家南遺跡（宮城県）など数例があるが、弥生時代後期の鎌は現状で確認できない。

桜町遺跡の鎌は、角形となる長い頭部が特徴である。この形状の鎌は、弥生時代前期には既に出現している。この形状に近い弥生時代後期の鎌は、江上A遺跡（富山県）に類例が見られる。該期の北陸地域出土の鎌では、下老子笹川遺跡（富山県）などに見られる頭部が細くすぼまるナスビ形となる鎌が主流となり、水田耕作に用いられたとされる。桜町遺跡の鎌は、これらの鎌とは形状が異なるが、水田稲作だけでなく農作業の中で多様な用途に用いられる農耕具であろう。

掘り棒（図99-9）は、刃部を地面に突きあて、土を突き崩すための道具である。前述の鎌と同様に福島県をはじめとする東北地方では出土例は知られていない。他地域の類例では、弥生時代前期水走遺跡（大阪府）、弥生時代後期に属する池上曾根遺跡（大阪府）など十数例が確認できる。掘り棒はシンプルな構造から「掘る」用途を想定される。農作業では水田の水路開削など、その使用頻度はきわめて高い。また93号土坑などの穴の掘削や周溝墓の構築など「掘る」作業は多様である。そうした農作業以外の土木作業等にも用いられた可能性もある。

建物部材 91号土坑の図92-1～11、94号土坑の図99～図101が該当する。建物部材の種類や具体的な機能は不明な点が多い。建物部材の加工痕などの特徴から、図99-8は梯子、図101-4は引戸の敷居か、図92-1～4、図100-1～5は壁または床と推定される板材、図92-8～11、図101-5～9は屋根の一部であろうか。これら建物部材の出土状況は、91・94号土坑の廃絶直後に投棄されたものである。部材の一部が焼け焦げ、その形状が酷似したものを含むことから、同一建物の可能性が高い。建物のすべての部材もなく、その具体的な部位を特定するにはいらないが、梯子を含むことから高床建物を想定している。また引戸の敷居とした図101-4は厚さ10cmを超える大きな部材である。これを用いた建物とすると、大型の高床建物と考えられる。今回の調査で確認できた弥生時代後期に属する26・27・28・34・42・46号掘立柱建物跡は、いずれも小規模な建物跡で、その柱材も直径10cmほどの細い丸太材が想定している。これらの建物部材を用いた建物跡としては、あまりに華奢である。調査区外に大型建物群が存在する可能性がある。

木製品の加工痕 木製品の加工痕を観察し、その製作方法と製作に用いた工具の復元を試みる。鎌や掘り棒の加工痕は、比較的明瞭に観察できる。加工痕は製品としての仕上げ段階、一部補修に

関する痕跡と判断した。

鎌の加工痕は数種観察できた。鎌の表面が平滑に整うことから、その加工に鉄器が用いられているのであろう。身部は木目にそって平坦に整える加工で、断面が三角形となる片刃ナイフの加工痕であろう。隆起部側縁の加工痕は、隆起の形状に添って身に対して直行する方向に打ちおろしている。工具の刃部幅が5cmほどで、刃先が軽く湾曲するノミまたはチョウナ状の工具であろう。隆起表面は、右側は破損時の割れ口をのこしている。左側はやや幅広の工具痕で、木目に沿って平坦に整える加工が観察できる。柄孔は幅の狭い丸ノミ状の工具を用いられて開けられる。柄の形状に合わせて、柄孔の表面が削り整えられている。

掘り棒はミカン割りした材から、身と柄を削りだす一木造である。身は柄から徐々に幅を増す形状で、身の断面形は側縁が角ばった紡錘形になる。身を前面に置いて持ち、工具を前に押し削る加工が推定される。柄は割り材を細く棒状に削る加工である。柄上端部の断面形は丸く、中位から身部にかけての断面形は多角形に面取りされる。掘り棒の加工痕はすべて仕上げ工程の加工で、ナイフ状の鉄器が用いられたと推定している。

建物部材は外気にさらされた部分が風化するためか、加工痕は不鮮明である。図100-1は表面を平滑に整える加工痕と考えられ、木目に沿って削る工具の動きが復元できる。工具の刃部の当たりは、刃先が止った位置に残る。刃部幅が約5cmで、刃先が直線となる工具と考えている。図101-4は、溝の内部などに見られる仕上げ加工の痕跡がわずかに残る程度である。工具先端が当たる痕跡からは、刃部が薄く直線となる工具で、ノミ状の鉄器が考えられる。

その他に、91号土坑の柱材(図92-5・6)や93号土坑の井戸枠を固定する割り材(図98-2～15)にも加工痕が観察できる。これらは原木または素材を「切断」や「割る」などの加工痕である。切断痕は側縁部から打撃を加え、最後に折り切る。斧状の工具が用いられているのであろう。割り材は木器加工や板材などに多用されている。明確な加工痕が遺存していないが、クサビなどを用いて原木から割り取っている。

桜町遺跡では金属器の出土はないが、木製品の加工痕の観察から、多様な種類の金属器が存在すると考えられる。一方桜町遺跡から出土した石器は少なく、石鏃や石錐を除けば、いずれも剥片の側縁部に調整剝離を加えた程度のものである。木材加工に関わる石器、特に磨製石斧の出土も見られない。さらに木製品に残る加工痕に相当する石器もない。前述の能登遺跡は、石器の出土量も桜町遺跡に比べればかなり多く、石器の種類も多用である。また木材加工に用いられる石斧のみならず、石器の使用頻度が高いことを示している。桜町遺跡の特徴が、東北的な伝統社会から外来的要素を取り入れた社会への変化に表れている。こうした地域交流の活発化に伴い、鉄器が入手可能になり、急速に石器から鉄器に置き換わる時期になったのであろう。

まとめ 従前までの研究では、会津地域において弥生時代後期には稲作が行われず、生活基盤が狩猟・採集に依存する社会であり、弥生時代終末期に北陸地域からの人の移動に伴って、西日本の集約的な稲作技術が会津地域で再開された(辻2003年)と考えられていた。

桜町遺跡の木製品は、出土遺物の検討から桜町Ⅰ式期に相当する。該期の木製品としては、福島県をはじめとして東北地方でも類例が知られていない。鎌の形態的な特徴から、その用途は水田耕作に用いられる鎌である。土壌分析結果からも稲粃や弥生土器の糊痕とあわせて、桜町遺跡近郊で稲作が行われていたことを具体的に証明する遺物となる。このことから稲作を生活基盤とする西日本的な生活スタイルを会津地域でも受容していたことを示し、当然、稲作技術だけではなく、いわゆる弥生文化に象徴される集落構造・生活様式・精神や宗教観なども含まれる。桜町遺跡の調査成果から桜町Ⅰ式期には、北陸地域に代表される外来的要素を持った土器の出現に併せて、高床建物を含む掘立柱建物跡を主体とする集落を営み、方形周溝墓による葬送儀礼を受容した社会に変化したと理解できる。その変化は在地系土器と外来系土器が融合した土器、外来系土器のある特定器種のみを選択的に取り入れて用いられる点を既に指摘した。このことは先学の研究で提示された北陸地域からの人の移動（征服）だけでは説明がつかない。在地社会と外来社会特に北陸地域との交流に直接的原因を求めるのではなく、在地社会が外来的社会との交流の結果として、在地社会の内在的な変化を出発点として捉えるべきであろう。さらに後続する古墳時代の在地社会のあり方を考える上でも、弥生時代から古墳時代への変化の過程が、西日本の変化と変わりなく、会津地域でも確認できるという点を改めて評価したい。

第2節 周溝墓の築造企画について

桜町遺跡の9号周溝墓は墳丘の外周をめぐる周溝を確認しただけである。墳丘などは近年の耕作などにより削平されて既に失われている。当然、先学の研究や墳丘が遺存する周溝墓などの事例から、9号周溝墓においても外表施設としての墳丘が想定される。本節では9号周溝墓の構造、墳丘の平面形やその高さについて検討し、9号周溝墓の本来的な姿を復元する。

1. 9号周溝墓の構造

9号周溝墓の特徴は、方形墳丘で、その外周をめぐる周溝の四隅が途切れ、四辺に配された周溝の外側が弧状に突出した形状にある。さらに各周溝の外縁が正方形となる墳丘の対角線の交点を中心とする円周に一致する。

墳丘の平面形 四隅切れ周溝墓の形状については、館ノ内遺跡（喜多方市塩川町）の1号・2号周溝墓の発見から、山陰地域に顕著に知られる四隅突出形墳丘墓との類似が指摘されている（1998年）。確かに周溝が途切れる部分に着目すれば、四隅突出形が想定できるが、墳丘の平面形を検討する場合は、周溝が途切れる四隅部の造形が問題となる。第一に突出部を含めて周溝がめぐり、墳丘と外部が明確に区画されるか否か。第二に墳丘の四隅部が稜線をもつ四角形となるか、方形墳丘の角を切り落としたスロープ状の平坦面になるかである。

山陰地域の四隅突出形墳丘墓は、突出部は墳頂平坦面に至る通路が発達して出現したと理解され

る。ただし島根県西谷3号墓や宮山4号墳などは突出部に列石をめぐらせて外部と区画するものもある。一方北陸地域でも杉谷4号墓（富山県）、一塚遺跡21号墓（石川県）では、突出部の周溝が狭く浅くなるが、周溝が全周する四隅突出墳丘墓となる。同様の特徴を持つ四隅突出墳丘墓は、高尾山遺跡26号墓（静岡県）などでも見られ、東海地域でも分布が確認できる。小羽山遺跡30号墓（福井県）は、丘陵上に分布する四隅突出形の墳丘墓である。突出部先端までめぐる周溝は明確でないが、墳頂平坦面から突出部にかけてはスロープとなる。現状では突出部の隔絶にばらつきが認められる。これらの墳丘墓が丘陵上に分布し、周溝によって丘陵を分断して墳丘を造られる。立地上の違いによって突出部の造形が変わる可能性がある。これら四隅突出形墳丘墓の周溝は突出部に向かって張り出す形状となる。

会津地域の類例として指摘された館ノ内遺跡1号・2号周溝墓は、幅の狭い周溝が四隅部に向かって軽く湾曲する形状で、四隅突出形墳丘墓の周溝とは明らかに異なる。周溝の形状からは、荒屋敷遺跡（喜多方市塩川町）4号性格不明遺構とした周溝墓が挙げる。突出部先端を区画する周溝はないが、四隅部に向かって周溝端部が鋭く突出する形状は酷似する。

次に桜町9号周溝墓の特徴の一つである周溝外縁が弧状に突出する事例は、長伏遺跡（静岡県）、鷹ノ道遺跡（静岡県）、朝日遺跡（愛知県）などの四隅切れ周溝墓がある。長伏遺跡10号墓は周溝が途切れる部分の幅が広く、四隅突出形墳丘墓の例からすれば、周溝が途切れる部分はスロープ状の通路となるのであろう。また、墳丘が遺存する鷹ノ道2号墓は墳丘角に稜を持つ方形墳丘となる。さらに朝日遺跡（愛知県）の四隅切周溝墓は、周溝が途切れる部分の幅がかなり狭い。この場合は鷹ノ道2号墓と同じく墳丘角にスロープとならない可能性が高い。

墳丘の高さと傾斜 墳丘の高さ及び墳丘斜面の傾斜角の復元では、墳丘側に面する周溝の壁面がポイントとなる。墳丘が残存する王山遺跡（富山県）、瓜生堂遺跡（大阪府）、赤坂今井墳丘墓（京都府）、西山1号墓（福井県）、小羽山30号墓（福井県）などの事例では、墳丘の傾斜角は、周溝の底面から墳頂部までの間に屈折することなく、周溝内側の傾斜に沿って造られている。

墳丘の高さについては、弥生墳丘墓が古墳時代の前方後円墳などに比べて低く、いわゆる低墳丘墓と称されるように低い。平野部に造られる王山3号墓では周溝底面から約2m、瓜生堂14号墓では約1.5mと低く、丘陵尾根を削り出して構築される小羽山30号墓が2.7mと若干高い。平野部に立地する桜町9号周溝墓の墳丘高も2m前後であろう。また墳丘の傾斜角は、比較的残りの良い北溝や東溝の墳丘側の傾斜角を平均して、約70度とした。

2. 築造方法の復元

9号周溝墓の平面形は、スロープ部を含めれば四隅突出形となる墳丘を想定した。その構築方法は①地表面の整地、②周溝墓の平面形を測量、③周溝の掘り込みと墳丘の積み上げ、④墳丘の整形と仕上げ、⑤墓坑の掘削、⑦埋葬完了まで一連の作業工程が想定される。

9号周溝墓は墳丘だけでなく当時の地表面も残っていないため、①や③の詳細は不明である。草

木の影響がある表土層はある程度除去して掘削するのであろう。また墳丘の盛土には周溝の掘削土を用いるのであろう。なお、瓜生堂遺跡の事例では墳丘盛土の積み方が数種確認されている。⑤は9号周溝墓の各周溝で確認された周溝底面を平坦に整える最下層の土を想定している。この土は周溝底面を覆う人為的な堆積土である。この土の起原は、周溝掘削土により墳丘が積み上がった状態であることは確かで、墳丘斜面の整形作業によって周溝内に削り落とした土を、墳丘外に除去するのではなく、周溝底面を平坦に均したものと推定される。⑥・⑦は周溝墓の埋葬時期と墳丘構築時期に関連する。瓜生堂遺跡（大阪府）では墳丘構築後に墓坑が掘り込まれている。9号周溝墓とその埋葬施設である69号土坑では、その前後関係を特定できないが、69号土坑が墳丘上でも中心からずれた位置にあり、9号周溝墓の主たる人物の埋葬施設とは考えにくいことから、69号土坑は9号周溝墓の墳丘が完成した後に掘り込まれた追葬と推定している。

②は9号周溝墓の形状に大きく関わるものである。前述したとおり、築造時の姿は周溝底面と墳丘側の周溝壁によって規定される。復元に関わる基礎的なデータとして、墳丘の規模は周溝底面と接する墳丘斜面の裾部を基準とし、周溝の遺存状態が良好である南北辺の長さ14.0mを採用する。周溝外縁を通る円周規模は、四隅部のスロープ裾は当時の地表面と一致することから、周溝の上端を基準とし、直径9.9mとした。墳丘の高さと当時の地表面の高さは復元の根拠がないが、ここでは周溝底面から墳頂部までの高さを仮に2m、地表面の高さは周溝底面から1m上とした。墳丘の傾斜角は周溝の傾斜角から約70度とする。

平面形の計測 9号周溝墓の特徴は、前述したように墳丘部の正方形と周溝外縁の円形の2つの要素がある。どちらの要素を基準として、周溝墓の平面形を描くのが問題となる。

A：墳丘となる正方形を描き、その対角線の交点を中心として周溝外縁となる円を描く。

B：周溝外縁となる円をもとに、円周上に墳丘となる正方形を描く。

両者の作図方法ともに方形墳丘となる正方形の描き方に違いがある。Aの場合は、直角三角形の三平方の定理を基とし、三辺の長さの比が3：4：5であることを基準とする。直角点に面する二辺が方形墳丘の辺と一致するように直角点を配して正方形を描く。この場合は、3：4：5の比であり、辺の比が4となる部分が墳丘となる正方形の一辺（14m）となる。次に墳丘部となる正方形の対角線の交点を中心点として周溝外縁となる円を描く。

Bの作図方法は、最初に周溝外縁となる円を描く。円の中心点を通る直線を基に、垂直二等分線を引き、垂直二等分線と中心点を結ぶ直径と円周との交わる点を求める。円周上の4つの交点を結び正方形を描く。この場合、正方形の辺の長さは、円の中心点を直角点とする直角二等辺三角形の斜辺となる。9号周溝墓は周溝外周と方形墳丘の頂点が一致することから、方形墳丘（一辺14.0m）を作図する際の基準は、円周の半径（約9.9m）である。

A・Bいずれの方法でも作図は可能であるが、周溝外縁の円周と方形墳丘の頂点が一致することから、Bの方法が容易に作図できる。9号周溝墓の築造には周溝外縁となる円が重視されているのであろう。これら具体的な計測には、杭などで基準点を設定し、ロープを用いて地表面に作画する

のであろう。

墳丘高の計測 錘をつけた糸などを落とした垂線を基準として、墳丘斜面の角度と水平面を設定する。垂線を利用して同じ高さの3点を設定し、そこを基準として各周溝の底面の高さをそろえる。9号周溝墓の各周溝底面は、いずれも標高184.0mで揃う。周溝の傾斜角は、垂線と墳丘斜面の長さを斜辺、周溝の底面を辺とする直角三角形で表現されて角度が設定される。この斜辺を手がかりとして、周溝を掘り込むと同時に墳丘を形づくるように土を盛り上げる。9号周溝墓の墳丘高を周溝の底面から仮に2mと設定すれば、墳丘斜面の角度が約70度であることから、墳丘頂部の平坦面は一辺12.5mとなる。

四隅部のスロープの復元にあたっては、最も良好に遺存する北東隅を基準とした。周溝間の幅を基に墳丘角が切り落とされた形状で、墳丘頂部の平坦面から周溝外縁の円周に接するように設ける。スロープの平面形は墳頂から裾に向かって広がる扇形をなす。上記の復元値からは、スロープの角度は約23度で、その幅は墳丘頂部で2.4m、裾部で3.0mとなる。

まとめ 9号周溝墓の方形墳丘と周溝外縁の円形となる2つの特徴から、9号周溝墓の構築方法や築造時の姿について、周溝外縁を通る円を基準とした復元を試みた。周溝のみを確認し、墳丘が残る事例が少ないため、今回の復元案がすべて当てはまらない事例も多い。四隅切れ周溝墓の変遷の中で、9号周溝墓をどのように位置付けるかが課題として残る。

四隅切れ周溝墓は、弥生時代中期頃の伊勢湾沿岸から静岡県までの東海地域には成立が見られる。弥生時代後期も四隅切れ周溝墓が継続して営まれ、墳丘の形状が時期を経るごとに長方形から正方形に変化するとされる。また四隅切れ周溝墓は北陸地域でも散在でき、山陰地域で顕著な四隅突出形墳丘墓との関連から、いわゆる北陸型四隅突出墓という形態も出現する。四隅切れ周溝墓の分布からみても、弥生時代中期から後期にかけて広範囲にわたる地域間交流が認められる。さらに各地域内で周溝墓自体が変化する状況が確認できる。桜町遺跡9号周溝墓は弥生時代後期後半頃に位置づけられ、この時期には東海地域では、既に墳丘が正方形になる四隅切れ周溝墓が存在している。一方桜町遺跡の土器群は北陸地域との地域間交流に大きな影響を受けていることも指摘した。前述した長伏遺跡（静岡県）の類例も見られるが、東海地域との直接的な祖型を求めるには物証が皆無である。北陸地域との地域間交流を経て、会津地域に四隅切れ周溝墓が受容されたと考えている。

次に先学が指摘する山陰地域の四隅突出形墳丘墓との関連について、北陸地域の杉谷遺跡4墓（富山県）の事例など、周溝が突出部を区画し、全周するかどうかとは別に、各周溝端部の形状が突出部に向かって鋭く外側に突出する特徴が看取できる。館ノ内遺跡（喜多方市塩川町）1号周溝墓の周溝とは、明らかに異なる特徴である。会津地域で強いて類例を求めれば、荒屋敷遺跡（喜多方市塩川町）4号性格不明遺構の周溝がより近いだろう。当然、山陰地域の四隅突出形墳丘墓との直接的なつながりを示す知見はない。前述した土器群の内容を検討しても、桜町遺跡をはじめとする会津地域の四隅切れ周溝墓の受容には、北陸地域を経由した周溝墓が祖型として求められる。

（福田）

第3節 会津平における古墳時代のはじまり

会津平、会津盆地の平坦面を地元ではこのように言う。そこは、周囲を除しい山地に囲まれた会津のなかで、一面に美田の広がる土地である。会津が会津であるのは、豊かな会津平の米作りがあったからである。会津平で本格的な稲作農耕が開始されたのは弥生時代後期、今から約2000年前である。今ある会津の原型はこの時代に誕生した。

これまで弥生時代後期の東北地方は、北海道の縄文文化との関連が強いと考えられていた。つまり農耕ではなく、狩猟・採取が重要な生業となっていたとみなされていた（辻2003など）。出土する土器は縄文文化の伝統を継承した交互刺突文、沈線文、それに縄文を組み合わせ構成されていた。これとともに石器も出土していることがその理由であろう。集落の具体的な状況も、解明されていなかった。

ところが桜町遺跡の1次調査では、弥生文化に特徴的な周溝墓が検出された。さらに、2次調査では、掘立柱建物跡や井戸、土坑、周溝墓が検出され、当時の墳墓や農耕集落の景観が明らかになった。また各種遺構からは、土器や鍬、掘り棒、建築部材、稲や豆の栽培植物の種子が出土した。

この調査結果は、水田耕作が放棄され狩猟・採集に基盤を置く生活が復活したとされてきた会津平における弥生時代後期像、これを前提に古墳が突然出現するとされたこれまでの歴史理解（甘粕1993・辻1993など）を、大きく変えることになった。そこで、今回の調査結果をもとに、弥生時代から古墳時代に移行する会津平の社会変化について考えてみた。

1. 桜町遺跡（2次調査区）の時期別変化

2次調査で検出した弥生時代遺構は、周溝墓9基、周溝状遺構4基、掘立柱建物跡6棟、竪穴状遺構4基、溝跡1条、土坑15基程度である。このうち土坑については、これ以外にも、次期の限定できないものがある。各の遺構特徴、重複関係、出土遺物などの検討から、今回検出した遺構は、つぎのとおりである。

桜町Ⅰ式期 調査区中部を中心に集落と墳墓が営まれている。42号掘立柱建物跡と6号竪穴の間に直径20m前後で、遺構の希薄な空間がある。集落にともなう広場であろう。この部分を取り巻くように、各遺構が造られている。

居住施設は掘立柱建物である。26号・35号・41号・42号・46号掘立柱建物などである。建物規模は小さく、10～17㎡の規模である。最大の35号掘立柱建物跡は、桁行4.25m、梁行4.0mである。掘立柱建物の柱穴は、小さい割に掘形が深く掘られている特徴がある。住居や倉庫類であろう。建物群軸線は不統一である。また35号掘立柱建物跡の周辺からは、多数の柱穴を確認している。その中に柱根の遺存した例があり、炭素年代測定によって、弥生時代後期であると理解して、矛盾しないことを確認している。

竪穴状遺構については、調査者の間で見解の相違がある。竪穴住居跡とする考えと生活廃棄物を

処理した土坑とする考えである。堅穴建物遺構とするには、柱穴や焼土面が未確認であること、平面形が楕円形や不正円形で一定しないことから、ここでは一応、土坑と考えておく。堅穴状遺構は掘立柱建物の周辺に造られ、近くには小型土坑もある。小型土坑も、堅穴状土坑と同様に開口した状態で使用された穴であろう。

円筒形的大型土坑は、北部で3基確認されている。91号・93号・94号である。このうち93号土坑は井戸跡である。直径50cmの原木丸太を半截してくりぬいた井戸枠が使われ、その下端を割り材で固定しているという特異な造り方である。また井戸枠下部には、砂利層に連する基礎構造があった。

この部分からは、甕を中心に高坏や壺の破片がまとまって出土している。類例のない構造の井戸である。基礎構造から出土した甕には、内外面に油煙・炭化物が分厚く付着したものも含まれている。煮炊きに使用されたことを示している。このほか、高坏、細頸壺などがある。井戸の構築にとまなう祭祀や呪術の遺構であろうか。

91号・94号土坑は、円筒形大型土坑である。直径1.5m、深さ1.3~1.5mである。掘形底面は湧水線に達しており、多数の木質遺物が出土した。木製鎌や掘り棒、建築部材などである。建築部材の中には梯子や框状の部材もあった。この中には、表面が炭化しているものも少なくない。開口していた穴に、廃材を廃棄したのであろう。梯子などの建築部材の出土は、桜町遺跡に掘立柱建物が存在したことを示している。大型土坑は通常、貯蔵穴などの用途が考えられる。稲の籾殻、豆類、麻の実などの出土もこの一端を示している。

井戸跡は、検出面で直径1.8m前後、掘形底面までの深さは検出面から1.7mである。この井戸は、強固な基礎構造と割り貫き式井戸枠を持っていた。類例のない特異な構造である。規模・構造からみて、集落の主要な公共施設とみなすことができよう。今回の調査でも井戸の周辺には建物跡や墳墓は造られていなかった。井戸の周辺は、広場的な空間となっていたからであろう。

四隅切れ周溝墓は、9号と14号の2基がある。14号は42号掘立柱建物跡と重複しているが、14号周溝墓のほうが新しいと考えている。9号周溝墓の方台部から検出した遺構は、69号土坑のみである。埋葬施設のひとつであろう。土器片と石鎌が出土している。このほか、方台部から柱穴などは確認していない。集落とともに周溝墓があって、他の施設が造られなかったのであろう。また9号周溝墓からは、大小の細頸壺と甕、それに高坏が周溝から出土している。

桜町Ⅰ式期の調査区中部では、集落の一郭が明らかになった。掘立柱建物を中心とする建物、廃棄坑、貯蔵坑、井戸、広場、それに周溝墓である。出土遺物には、石器、鎌や梯子、建築部材、稲や麻の実、豆などの栽培植物がある。会津平における農耕集落の原風景が明らかになった。それは、北陸地域の弥生時代集落と大きく異なる景観ではない。この段階の会津平では、北陸地域と基本構造の変わらない農耕社会が確立していたことになる。

桜町Ⅱ式期 引き続き、居住区の近くに墓地が造られている。住居様式は、13号・17号周溝状遺構の掘立柱建物である。前段階の集落から継続している。周溝状施設の一方に開口部を残し、中央に掘立柱建物を設けている。溝は、幅と深さに凹凸があり、周溝墓と比べると不整形である。掘立

柱建物の防水施設である。また土器片も出土しているので、生活用品の廃棄場も兼ねているのであろうか。部分的に遺存する12号周溝状遺構も、このような住居跡であろう。この時期でも、継続して広場の周りに居住施設が造られていた。

これとともに自然堤防の高所には、周溝墓が並んで造られる。10号周溝墓から16号周溝墓である。遺存状況の比較的良好な10号や11号周溝墓では、周溝幅が一定して造られ、溝壁の立ち上がりもしっかりしている。周溝状遺構とは、この点が異なっている。形態的には、10号・15号・16号周溝墓で、方形台部の一辺に土橋状施設が設けられている。土橋は周溝の一部が途切れた形態である。土橋は、周溝の外側へ「ハ」の字形に開いているが、周溝幅から大きく飛び出すことはない。10号と16号周溝墓の土橋は北東側に、15号周溝墓は南西側に土橋状施設が造られている。これに対して11号周溝墓は円形の台部で、北西側に土橋状施設が造られている。

10号・11号・15号・24号周溝墓は、周溝を接するように造られている。一方、15号周溝墓と16号周溝墓の間には、比較的大きな空間がある。造営に関わる人のまとまりに、何らかの区別があったのであろう。土器型式から周溝墓の造営関係を把握することは難しいが、北西端の9号周溝墓から南西側に向かって造営されたと考えている。16号周溝墓の突出部は、他の周溝墓と比べて少し発達しているように見える。

調査区の北西部では土坑墓を確認した。101号土坑である。東西方向に軸線を置いた墓坑である。大小の甕と高環が副葬されていた。周溝墓から出土する土器と同じ種類である。101号土坑は長さ2m以上であり、成人の埋葬が可能な大きさである。周溝墓に埋葬されない人々の墓も存在したのであろう。このほか、時期は不明確ながら、74号・75号土坑も同様な土坑墓である。

桜町Ⅲ式期 居住施設は確認していない。検出したのは周溝墓3基と周溝施設2基、溝跡1条である。このほか62号土坑も、この時期の可能性はある。周溝墓は、調査区南端の18号・19号・20号周溝墓である。前段階の16号周溝墓に溝を接するように造られている。18号・19号周溝墓は調査区外に延びていること、遺存状態がよくないことから、形は不明確である。台部は円形を基調とし、これに土橋状施設が付く形の可能性が高い。19号周溝墓では土橋の東側周溝部分が特に深くなっていた。後の男壇古墳などに特徴的な溝である。

20号周溝墓は円形の台部から「ハ」の字形に突き出した土橋を持っている。くびれは明確に造られている。突出部を挟む溝は幅が広がっている。突出部は先端部を失っているが、他の円形周溝墓と比べると発達している。また21号・22号周溝状遺構は、規模が小さいことから周溝墓ではない。住居の排水溝でもないらしい。造られた目的は限定できなかった。

このほか、調査区の北西部で断面形が「V」の字形の溝を検出している。検出面からの深さは0.8m以上である。これに、表土を加えると本来の深さは1mを越える深さになる。造り替えがある。自然堤防の西端に沿って造られており、集落の区画施設であろうか。桜町Ⅲ式の土器片が比較的多く出土している。溝の掘削時期は不明であるが、廃絶はこの時期である。同様な溝は、坂下町男壇遺跡でも検出されている。

2. 四隅切れ周溝墓の受容

会津平の弥生時代後期から古墳時代前半にかけて、土器編年と対比して周溝墓および古墳を配置したのが図132～137である。また変化の過程と要素を表4に示した。

桜町Ⅰ式期以前 この時期の墓は、屋敷遺跡などで土器陪墓が検出されている程度である。あるいは土坑墓も継続して営まれていたであろう。会津美里町油田遺跡（会津美里町教育委員会2009）では、縄文時代晩期から弥生時代中期まで継続する再葬墓・土坑墓が検出されている。そして弥生時代中期後半になると土坑墓に移行する。この時、以前のように遺体を分解して二次的に処置する痕跡はみられなくなるという。葬送儀礼の変化は、死者に対する思想の変化の反映である。

弥生時代中期、会津若松市川原町口遺跡や一ノ堰B遺跡では、多数の土坑墓が集まって墓地を形成していたが、土坑墓間に規模や副葬品による格差は無い。この時期の墓制からは、首長層の存在を確認することはできない。近接地域では、新潟県三条市内野手遺跡から山草荷式期の四隅切れ周溝墓が検出されている（三条市教育委員会1999）。しかし会津平において、周溝墓は未確認である。

能登式期の墓制は、良好な調査例に恵まれていない。屋敷遺跡などで、土器陪墓や土坑墓が知られる程度である。周溝墓がこの時期に受容されていたとしても、普及はしていないであろう。北陸方面との交流は、管玉や平玉の搬入が想定されるが、土器類の出土例は少ない。北陸の弥生時代中期、小松式の土器は、坂下町中間津台畑遺跡と会津若松市一ノ堰B遺跡から出土しているにすぎない（石川2004）。

弥生時代後期以前、集落は山間高地に分布していた。会津平において、低地の集落はほとんど確認されていない。山間部や丘陵・扇状地に集落が営まれる状況は、縄文時代と大きな違いはない。農耕が営まれていたとしても、畑作が主体と推定される。多くの集落が立地する環境は、大規模な水田を営むには不都合な場所である。たとえば下郷町南倉沢稲干場遺跡からは、弥生時代中期の墓が検出されている（福島県教育委員会2003）。標高750mの高地である。南倉沢地区では、江戸時代においても稲作は行われていない。また、遠賀川系土器が出土した三島町荒屋敷遺跡も、山間部の遺跡である。会津美里町油田遺跡では、米や小麦と共にクルミやトチなどが出土しているが、再葬墓や土坑墓が検出されている。縄文的生活要素を強く残していた。

弥生時代後期から古墳時代にかけて、東北地方には北海道系の統縄文文化が南下する。これは気候の寒冷化とも結びついて、部分的に伝えられた農耕文化が衰退して縄文的な生業が復活したと考えられていた。天王山系土器自体も、縄文的な装飾が施されている。会津平における天王山系土器をともなう集落も、北方系文化との結びつきが強調され、農業よりもおける狩猟・採集を基盤にした生業に高い比重を置いていたとみなされていた（辻2003など）。

ところが弥生時代後期、能登式期の会津平では、低地で集落が急速に増加する。低地の遺跡を調査すれば、ほとんどの場所から天王山系の土器が出土する。会津平における集落の立地条件、また後続する集落の状況からすれば、水稲農耕を主な生業と転換していた可能性が高いと推定されよう。

ただし、具体的な生活については不明な点が多く残されている。水田遺構や農具は未発見である。利器は石器が主体であった。能登遺跡からは、剥片石器や石斧類が数多く出土している。また環濠集落や高地性集落など間、防御施設をともなう集落は確認されていない。この時期、能登式期の土器には、北陸や北関東との活発な交流はみられない。

桜町Ⅰ式期 会津平に周溝墓が受容されるのは、桜町Ⅰ式期になってからである。四隅切れ周溝

時期区分	弥生時代後期			影	古墳受容期		古墳時代 古坟クマド
	法弘王台(標)	法弘王台(標)	法弘王台(標)		古墳受容期後半	古墳前期	
北陸地域の土器	能登	桜町Ⅰ	桜町Ⅱ	桜町Ⅲ(古墳受容期前半)	古墳受容期後半	古墳前期	
北関東地域の土器	能登	桜町Ⅰ	桜町Ⅱ	桜町Ⅲ(古墳受容期前半)	古墳受容期後半	古墳前期	
会津地域の土器	能登	桜町Ⅰ	桜町Ⅱ	桜町Ⅲ(古墳受容期前半)	古墳受容期後半	古墳前期	
周溝	四隅切れ周溝墓	桜町Ⅰ	桜町Ⅱ	桜町Ⅲ(古墳受容期前半)	古墳受容期後半	古墳前期	
農器	方形周溝墓	桜町Ⅰ	桜町Ⅱ	桜町Ⅲ(古墳受容期前半)	古墳受容期後半	古墳前期	
墓	円形周溝墓	桜町Ⅰ	桜町Ⅱ	桜町Ⅲ(古墳受容期前半)	古墳受容期後半	古墳前期	
	前方後方墳	桜町Ⅰ	桜町Ⅱ	桜町Ⅲ(古墳受容期前半)	古墳受容期後半	古墳前期	
古墳	前方後円墳	桜町Ⅰ	桜町Ⅱ	桜町Ⅲ(古墳受容期前半)	古墳受容期後半	古墳前期	
	方(円)墳	桜町Ⅰ	桜町Ⅱ	桜町Ⅲ(古墳受容期前半)	古墳受容期後半	古墳前期	
土	土	桜町Ⅰ	桜町Ⅱ	桜町Ⅲ(古墳受容期前半)	古墳受容期後半	古墳前期	
	土	桜町Ⅰ	桜町Ⅱ	桜町Ⅲ(古墳受容期前半)	古墳受容期後半	古墳前期	
土器	土器	桜町Ⅰ	桜町Ⅱ	桜町Ⅲ(古墳受容期前半)	古墳受容期後半	古墳前期	
	土器	桜町Ⅰ	桜町Ⅱ	桜町Ⅲ(古墳受容期前半)	古墳受容期後半	古墳前期	
集落遺跡	集落遺跡	桜町Ⅰ	桜町Ⅱ	桜町Ⅲ(古墳受容期前半)	古墳受容期後半	古墳前期	
	集落遺跡	桜町Ⅰ	桜町Ⅱ	桜町Ⅲ(古墳受容期前半)	古墳受容期後半	古墳前期	
会津盆地内の社会変化	会津盆地内の社会変化	桜町Ⅰ	桜町Ⅱ	桜町Ⅲ(古墳受容期前半)	古墳受容期後半	古墳前期	
	会津盆地内の社会変化	桜町Ⅰ	桜町Ⅱ	桜町Ⅲ(古墳受容期前半)	古墳受容期後半	古墳前期	

墓である。四隅切れ周溝墓は、東海地方を起源とする墓制である。この墓制は、本格的な農耕生活の導入とともに分布圏を東方に拡大したと考えられている(山岸1996など)。これが関東地方南部に到達するのは、弥生時代中期になってからである。中部高地や北陸方面にもこの頃までに伝播する。

弥生時代中期までの四隅切れ周溝墓は、細長く直線的な溝を基本としている。桜町遺跡1次調査において検出した1~3号周溝墓もこの形態を踏襲している。ただし四隅の土橋幅は、他の地域の例と比べて開く傾向がある。今回検出した14号周溝墓も同様である。

9号周溝墓は、周溝の方台部が真一直ぐに造られているのに対して、周溝の外側は弧を描くように造られている。4条の周溝を合わせた周溝墓の外郭線は円形となる。このような周溝墓も、やはり東海地域の新しい段階でみられる形態である。桜町Ⅰ式期に伝播した形である。

埋葬施設については、9号周溝墓の方台部で確認した69号土坑が推定できる程度である。この土坑



は方台部の中心から外れているので、埋葬施設としては従位にある。別に中心となる埋葬があったと推定される。周溝埋葬も念頭に調査を行ったが、桜町遺跡では痕跡も確認していない。

9号周溝の深さは、現状で0.6m以上である。本来の表土からは1m以上を想定しなければならぬ。方台部には、少なくとも1m以上の墳丘があったはずである。中心となる埋葬施設の痕跡が失われていることから、現状より1m以上の高さを想定することも可能である。そうすると、墳丘と周溝の途切れた部分を合わせて復元される周溝墓の形態は、四隅突出形になる。

周溝墓から出土した遺物は、9号周溝墓、69号土坑と15号周溝墓、1号土器棺以外は、すべて周溝からである。69号土坑から出土した副葬品の石鏃は、優品である。桜町Ⅰ式期の遺構では、能登式期と比べると石器の出土数が減少している。他に剝片と石錐、石匙、磨石、石皿などが出土しているが、数は極めて少ない。93号土坑や91号土坑から出土した木製井戸枠、建築部材の加工痕から見て、桜町遺跡でも鉄器は使われていた。それでも副葬品には、伝統的な石鏃を納めたのである。この石鏃は扁平で軽く、縄文時代の狩猟用石鏃と変わりはない。武器として使用する目的で作られたものではない。

同時に出土した土器片には、甕と高坏がある。埋葬儀礼にともなう土器の破砕行為であろうか。墓坑やその上に土器片を集める例は、弥生時代中期にある。会津若松市川原町口遺跡などである。この伝統を伝えていよう。また北陸地域の周溝墓でも、埋葬施設から土器片が出土している例がある。長岡市（旧寺泊町）屋鋪塚遺跡などである（寺泊町教育委員会2004）。

周溝墓からは、壺・甕と高坏が出土している。壺には大小がある。文様は、沈線や交互刺突文などで装飾されている。甕は調理用の煮炊き用具である。弥生時代後期から古墳時代の前半に盛行したいわゆる軽量薄甕の特徴をもっている。土器は、食器や調理道具である。これらが出土することは、周溝墓で飲食をともなう葬送儀礼などが、執り行われた結果であろう。

9号周溝墓の土器は、在地の土器が主体となっている。広口壺、長頸壺、細頸壺、それに高坏である。この時期、北陸方面では、多様な器種で構成される土器群に特色がある。これと比べると桜町Ⅰ式土器の器種分化は少ない。大型器台や装飾器台などは、会津平では数例が確認されたにすぎない。

桜町Ⅰ式土器は、前段階の要素を受け継いで、在地の独自性を保持している。北陸地域や北関東方面の要素を合わせた土器も作られるが、客体的である。周溝墓とそれともなう祭祀が会津平で受容される時、受容される土器の一部が選択されている。このことは、受容の主体が会津平にあったことを示している。

この時期、周溝墓のほかに土坑墓と土器棺墓がある。周溝墓でも9号周溝墓は、周溝も含めると全長21mに達する大きさであるのに対して、1号や4号周溝墓では長さ5～6mである。周溝墓のなかにも大小の格差があり、さらに土坑墓や土器棺に葬られた人々が出現したことになる。

また桜町遺跡の1次調査区と2次調査区の間で、周溝墓の造られなかった地区がある。2次調査区でも、15号と16号周溝墓の間で、周溝墓群を区分するような空間が設けられていた。桜町遺跡を

構成した人々の間にも、さらに周溝墓を造る幾つかのまとまりが存在していたのであろう。

桜町Ⅱ式期 四隅切れ周溝墓の造営は、この時期のうちに終了する。代わって方台部の一辺に突出部の造られた周溝墓が導入される。田中新史のBⅠ型周溝墓である(田中1986)。さらに円形周溝墓も出現する。桜町遺跡10号・15号・16号周溝墓である。突出部は周溝の幅から大きく突出することはない。これとともに、甕を主体とする北陸系土器の割合が増加する。在地の土器では、沈線文が衰退して、ツمام凸帯やキザミ文が多くなる。

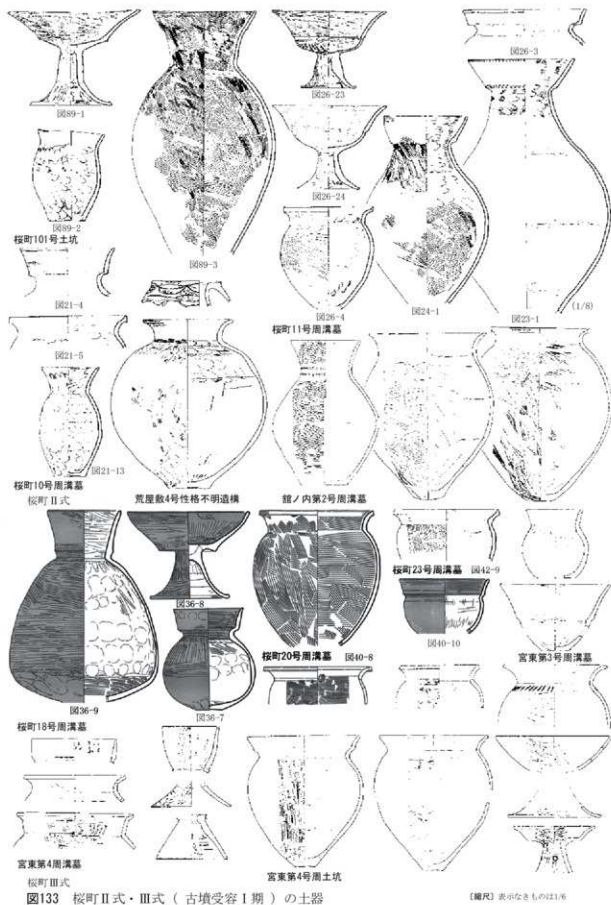
喜多方市塩川町荒屋敷遺跡SX04は、周溝墓の一辺とそれに対応する両端の一部を検出したにすぎない。四隅切れ周溝墓の一部である。周溝のなかほどは平行であるが、両端は土橋部分に合せて跳ね上がるように終わっている。四隅の切れた土橋部分を強調した形である。復元される全体の形は、石川県白山市(旧松任市)一塚21号周溝墓と同じである(松任市教育委員会1995)。

一塚遺跡21号周溝墓では、月形式に属する土器が周溝から出土している。四隅突出形から山陰地域との関連が指摘されているが、同じ遺跡のなかで在来の四隅切れ周溝墓も検出されている。さらに静岡県高尾山遺跡(袋井市教育委員会1990・1996)などでも、在来系周溝墓から四隅突出形周溝墓の成立する過程が明らかにされている。土橋が発達することにより、このような四隅突出形墳丘墓が出現したのであろう。山陰の四隅突出形墳丘墓とは別に、東海地方起源の四隅切れ周溝墓から東日本型の四隅突出形周溝墓が出現したのである。

喜多方市(旧塩川町)館ノ内1号・2号周溝墓も、山陰の四隅突出形墳丘墓との関連が指摘されている(塩川町教育委員会1998)が、同様な変化のなかで理解しておく。この周溝墓も、溝で墳丘部を区画することが原則となっている。時期は、報告書(塩川町教育委員会2004)でいう古墳時代ではなく、桜町Ⅱ式期に属していると考えられる。この周溝墓を最後に、会津平で四隅切れ周溝墓は造られなくなる。

集落においては、竪穴住居の存在が明確になる。一方、周溝をめぐらせた掘立柱建物を造る住居は衰退する。会津坂下町稲荷塚1号・6号竪穴住居跡や中西遺跡5号竪穴住居跡である。方形あるいは隅丸方形を基調とする平面形、四本柱の竪穴式住居である。これに地床炉がともなう。稲荷塚6号竪穴住居跡では、南壁の近くに方形貯蔵穴があり、4本柱の支柱を想定できる位置に柱穴が検出されている。古墳時代中期にカマドが受容されるまでは、この竪穴住居が一般的である。矩形竪穴住居は、弥生時代後期に関東地域で普及する形態であるが、関連する土器類の出土量は少ない。いわき市八幡台遺跡では、同時期においてすでに方形竪穴住居が出現している。八幡台遺跡の土器は、作り方や文様器形などに桜町Ⅰ式と共通する要素を持っている、何らかの交流が想定されよう。古墳時代における竪穴住居の方形化は、斉一的な現象であり、特定地域との関連でとらえることは出来ないのではないだろうか。

四隅切れ周溝墓の受容 弥生時代後期、会津平に本格的な水稲農耕が開始されるとき、先進地域からの技術の導入が不可欠である。当時の会津地域において、その場所は、関東地方北部や仙台平野ではなかった。手本となったのは北陸方面である。この時期、北陸方面の遺跡からは縄文の施さ



れた土器、いわゆる天王山系土器が出土する。会津平と北陸方面との交流、急速に活発となった結果に注目したい。

桜町遺跡から出土した北陸系土器の胎土は、ほとんどが在地土器と同じである。つまり土器自体が交易の対象とされたのではなく、また土器に詰められた中身も交易物ではない。さらに、北陸地域の特徴的な器台や裝飾高環などはほとんど出土しない。出土する北陸系土器は甕が中心で、少数の高環と壺が含まれている。大半が実用的な土器で、顕著な裝飾は施されていない。会津平で作られた土器である。土器を作る人が来て、在地の要請に合わせて選択的に作った土器である。

北陸地域と会津平は、気候も、沖積平野の状況も近似している。北陸の農業技術は、会津平の農耕に適している。このことは両地域が近接しているだけでなく、交流が活発化する必然性があった理由であろう。開拓が開始されたばかりの会津平には、耕地とする土地は豊かにあった。北陸の農業技術を身につけた人は、会津平の人々にとって得がたい人材として受け入れられたであろう。

弥生時代後期の北陸東部では、高地性集落が発達する。戦争を伴う動乱期である（甘粕1993など）。これを逃れて、会津方面に移動する人々も少なくなかったのではないだろうか。この時期の会津平には、高地性集落や強固な防衛的施設の存在は確認されていない。戦乱や軍事的緊張をうかがわせる兆候を見つけることは困難である。北陸地域と比べれば安全な場所である。

能登式期から桜町式期に至る墳墓の変遷、桜町遺跡調査からの農耕具や建築部材、稲穀殻・麻と豆の種子出土、また屋敷遺跡と桜町遺跡の掘立柱建物跡と井戸の存在は、会津平において北陸方面と大きく異なることのない農耕集落が形成されていたことを物語っている。確かに縄文の施された土器を使用しているが、生業の中心は狩猟・採集ではなかった。土器や墳墓が選択的受容であることは、在地社会の継続的・自立的な変化を示している。変化の自主性は、会津平が堅持していた。

生業の変化は、社会構造の変化をともなう。この変化は、考古学的には墓制の変化で把握することになる。周溝墓は、同形・同大で群在する特徴があり、弥生時代前期では個人墓であるが、弥生時代中期には、「家族墓」に転化するとして理解されている。この時、関西地方の周辺では、墳丘に複数埋葬がなされるのに対して、東日本では、墳丘に中心的な埋葬施設があり、周溝に付随的な埋葬施設が敷設される特徴がある（都出1984）。

桜町遺跡の調査結果は、弥生時代前・中期とは異なり、集落をともに営む人々の間に、周溝墓を造営するまとまりを単位とする人間の集まりが出現したことを意味している。ただし、現在のところ桜町式期の周溝墓は、桜町遺跡以外では未確認である。また周溝墓から埋葬施設の検出例は、極めて少ない。桜町9号周溝墓のみである。したがって会津平で、周溝墓が普遍的に出現していたかどうか、葬られた人物の数、その関係は不明である。

農業、しかも水稲農業を営むには、耕地の開拓から水路の掘削という土木工事に始まり、農作物に関する知識や技術、道具類の製作、各種協業などと、複雑な維持管理が前提になる。さらに土地と水利をめぐる近隣の人々との交渉も生じる。水稲農業はある程度の労働力の集中がなければ成

年代	弥生時代後期			
土器型式	能登式	桜町Ⅰ式	桜町Ⅱ式	桜町Ⅲ式
		<p>桜町1号周溝墓 桜町2号周溝墓</p> <p>桜町5号周溝墓</p> <p>桜町9号周溝墓</p>	<p>荒原敷4号性格不明遺構</p> <p>館ノ内第1号周溝墓 館ノ内第2号周溝墓</p> <p>桜町10号周溝墓 桜町15号周溝墓</p> <p>桜町16号周溝墓</p> <p>桜町11号周溝墓</p>	<p>桜町20号周溝墓</p> <p>桜町18号周溝墓</p> <p>桜町23号周溝墓</p>

図134 会津地域における周溝墓から古墳への変化(1)

立しない。この労働力を集めた人々のまとまりを統合して、集落が構成されていたのである。その人間関係を表示するのが、周溝墓である。葬儀は、その人の社会的役割や地位に合わせた規模と様式が求められるからである。周溝墓の大小やまとまりは、集落を構成する人々のまとまりや役割を反映して造られたであろう。

四隅切れ周溝墓は、東海地方を起源に北方や東方に伝播している。この時点で、墓制を受け入れた側、伝えた側の間に、後の古墳に見るような政治的な連合を想定する研究者はいない。周溝墓の規模に中核から周辺に及ぶ規模や規格の較差はない。弥生農耕社会の文化規範として、首長に類する人々は、周溝墓に葬らなければならないという共通意識が生まれていたのである。その意識が必要な葬送儀礼となって、社会での制度化が進行したのであろう周溝墓は、会津平で農耕社会が本格化することにより、変化した社会構造を反映した墓制である。

また会津平の周溝墓からは、L字やコ字形、あるいはI字形溝を組み合わせた周溝墓はほとんど知られていない。わずかに喜多方市塩川町内屋敷遺跡で、その痕跡が知られている程度である。この形の周溝墓は、東海地方などでは弥生時代後期に出現しているが、会津平では十分に受容されないまま、次の前方後方・前方後円形周溝墓に移行している。北陸地域という中間地帯を挟んだことから生じた現象である。古い周溝墓の形が継続して四隅切れ周溝墓が特異な形に変化したのである。周辺地域における受容形態のひとつである。

3. 前方後円形・前方後方形周溝墓の受容

四隅切れ周溝墓の造営が終了して、周溝の一部を掘り残す前方後円形、前方後方形の周溝墓が造られた。この段階では前方部端線は不明確である。北陸の土器編年という月影式期から白江式期である(田島1986)。この段階の中頃からは、東海系の土器類の一部が会津平にもわずかではあるが出現する。遺跡から出土する土器の特徴に相違があるが、比較的短期間であったと考えている。周溝墓から古墳へと移行する中間期である。

古墳受容期前半 (桜町Ⅲ式期) 桜町遺跡2次調査における周溝墓造営の最終段階である。四隅切系周溝墓は造営されなくなり、代わって前方後円形の周溝墓が出現する。桜町遺跡では、前方後方形の周溝墓は確認していないが、他遺跡の宮東3号・4号周溝墓は、円形墳丘の一部が土橋状になる例である。また20号周溝墓は、括れ部が明確になり、前方部の発達が始まっている。円台の形は、整った正円は少なく、歪んだ形である。このほか、弥生時代的な土器棺墓は、桜町遺跡では確認されていないし、他の遺跡でも同様である。この時期までに造られなくなるのであろう。

土器では、北陸系土器を受容・消化して、土師器に続く会津系土器への変化が一段落した段階である。甕、高環、鉢、壺などの器種はあるが、北陸の土器群と比べると器種の分化は少ない。桜町遺跡以外の資料では、小型器台がある。図133宮東4号土坑の資料である。これは、「広く浅い環部のある高環(器台)」として能登地域と関連を指摘された土器である(坂井・川村1993)。高環や壺も北陸方面とも関連する土器であろうか。

このほか、比較的規模の大きな溝も検出されている。桜町21号溝跡や男壇1号溝跡である。これらの溝跡は、断面形がV字で直線的に延びている。部分的に確認されているにすぎないので、環濠とする積極的な根拠は乏しい。桜町21号溝跡は、自然堤防の縁辺近くに造られている。用水溝よりは、むしろ区画施設の可能性を考えるべきであろう。

古墳受容期前半でも新しい時期には、突出部も未発達な方形周溝墓BⅠ形が確認されている。またこの頃から、東海系土器が若干出土がするようになる。図136の稲荷塚2号・4号周溝墓では東海系高坏や小型器台、直口壺などである。小型器台・脚部の大きく開く高坏、直口壺など、新しい器形が出現する。しかし装飾器台については、出土例はあるが数は少ない。またS字口縁の甕や手焙形土器など、この時期に特徴的な東海地域も出土していない。東海地域との直接的な結びつきは想定できない。会津平では、古墳出現に際して東海地域の影響はそれほど大きくない。

古墳受容期後半 周溝墓は、突出部が発達して周溝幅を越えて長くなる。しかし先端部を区画する溝は設けられていない。田中新史のBⅡ段階である(田中1986)。会津坂下町を中心に男壇遺跡、稲荷塚遺跡、宮東遺跡で、前方後方形周溝墓が多数確認されている。男壇5号周溝墓もこの段階であろう。検出された周溝墓では、前方後方形が大半で、前方後円形は男壇5号周溝墓のみである。

この段階の周溝墓は、後方部の溝が深くなる特色がある。特に方台部を廻る周溝の中央部と突出部の付け根部分が深く造られている。突出部左右の溝を深くすることにより、後方部の墳丘をより強調する効果がある。これに対して突出部の溝は、先端に向かって急速に浅くなる。墳丘が突出部まで続いていることは無かったのではないだろうか。また、周溝に埋葬施設の痕跡はない。

周溝墓の規模は、大きな男壇2号墓でも、全長25m程度である。桜町1式期の9号周溝墓と比べて大差はない。小型の男壇5号周溝墓は12m程度である。この段階で、周溝墓の規模に大きな格差は生じていない。集落の首長層を統合する大首長は出現していないと考えられよう。

周溝墓にともなう土器は、複合口縁壺が新たに導入される。この壺は、葬送儀礼のなかで重要視され、後に古墳の埴輪へと転化する。複合口縁壺は、主要な畿内系土器の形である。この形態の土器が会津平でも受容されたことになる。

また甕や壺の口縁部端部は、それまでの三角形から端部がつまみ上げられる形態になる。この口縁部は、北陸系甕の特徴として、注視された要素である(坂井・川村1993)。一方、畿内系の布留甕の特徴である口縁端部の小さく内面に突き出す形の甕は、会津平の遺跡からは出土していない。周溝墓の変化は、北陸地域を介した間接的な動きの反映である。

前方後円・後方形周溝墓の普及 庄内式期には、各地の土器が移動することが知られている。東海系土器は、東日本から畿内に分布圏を拡大するし、北陸系土器は関東から畿内、さらには九州からも出土する。山陰系土器も関東から九州にわたって進出する。また畿内系土器は東西に分布圏を拡大する。これとともに奈良盆地には、東海や北陸などの土器が、河内平野では中国地域や四国地域の土器が出土する。土器の交流は、人の交流・移動の結果である(赤塚1992など)。

また庄内式期は、大きな変革期である。多くの集落の断絶と再編成が広範囲で行われる。環濠集

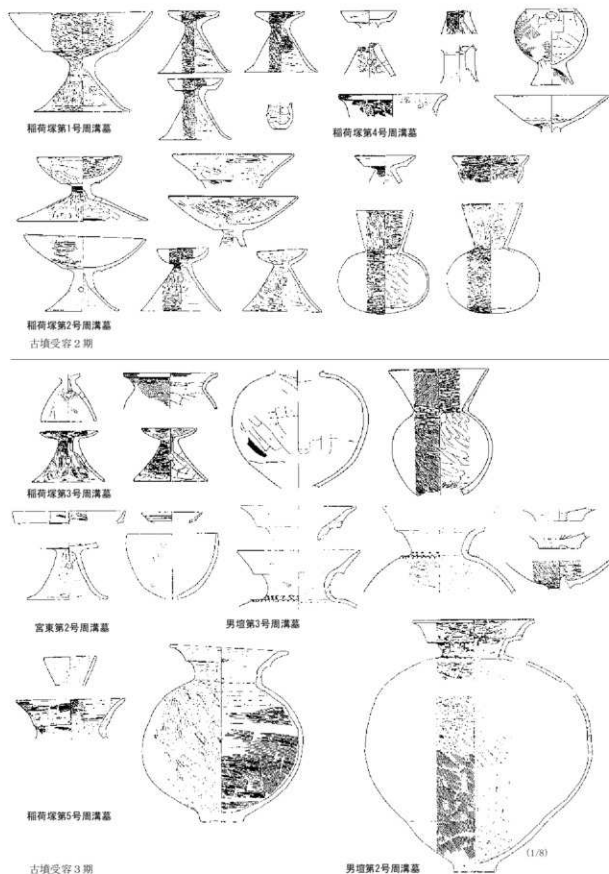


図136 古墳受容2期・3期の土器（後半）

【縮尺】表示なきものは1/16

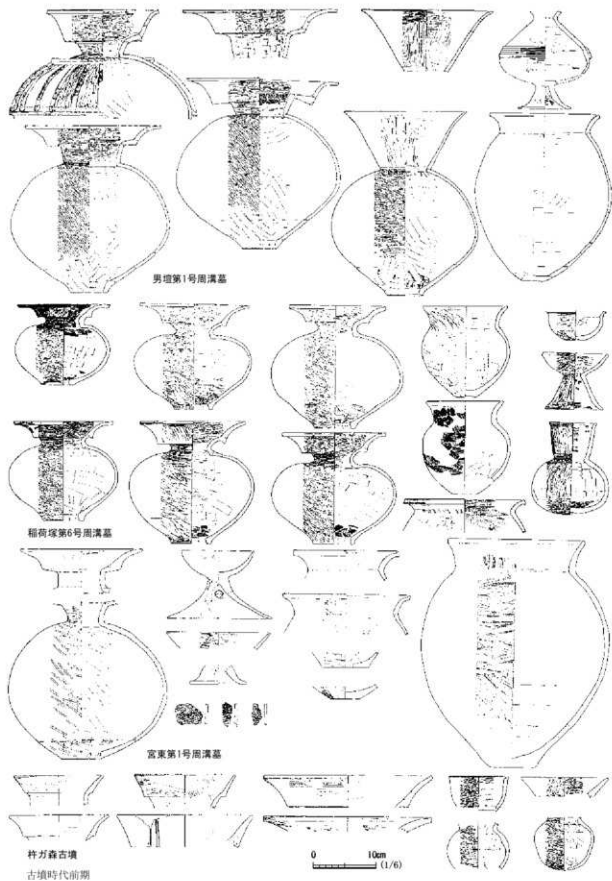


図137 古墳時代前期の土器

落の解体である。高地性集落もこの頃までに廃絶する。集落の再編や移動は、社会の構造変化の反映である。生活の基盤が変化し、手工業生産や物流拠点など、社会システムを担う場所が変化し、それまでの集落システムが廃棄されたことになる。そして、弥生時代に特徴的な銅鐸や青銅武器祭具を用いた祭祀も廃絶する。それまでの秩序が崩れて社会が再生する時、必ず戦いや紛争が生じる。『魏志東夷伝倭人条』の倭国大乱物語も、この一端を伝えている。

ただしこの余波が、会津平に及んだ痕跡は確認されていない。高地性集落は、日本海側では新潟県南部まで、太平洋岸では群馬県より以西の地域で確認されているが、それより東の地域では未確認である。会津平の集落でも、防御的な施設は確認されていない。会津平では、引き続き平和な状況を継続していたと推定される。

会津平では弥生時代の四隅切れ周溝墓に継続して、一方に突出部の設けた周溝墓が受容される。さらにこの突出部が発展して、前方後円形・前方後円形の墳丘墓が出現する。そしてそれが古墳となる。この過程は、田中新史や赤塚次郎が説明する段階変化に合致している（田中1986ほか・赤塚1992ほか）。中核地では、このような変化が、試行錯誤を繰り返して成立したことから、各墳丘形態が重畳して造られた（赤塚1995）。しかし会津平においては、中核地域の墳丘変化が時間経過を辿って受容されたことにより、かえって典型的な変化過程を遂げたのではないだろうか。

弥生時代後期の西日本では、すでに大型墳丘墓が出現していた。山陰の四隅突出型墳丘墓や岡山県橋築遺跡などである。そして庄内式期になると、前方後方（後円）形の墳丘墓は、かなりの広範囲に分布することが知られている（文化財研究会1988など）。東北地方南部から宮崎県にわたる地域からBⅡ・BⅢ式（田中1986）に類する墳丘墓が確認されている。さらに韓国からも同様な周溝墓が検出されている。墳丘墓を造り、首長に類する人物を葬るという習俗は、広範囲に受け入れられていた。習俗の伝播・普及は、人々の活発な移動と交流の結果である。そして社会は変化し、一体化が進む。庄内式期の地域間交流により、古墳に類する墳丘墓も普及したのであろう。古墳を造る思想的基盤は、この段階で萌芽していたことになる。

4. 古墳造営の開始

古墳の特徴 前方部先端に溝が設けられ、前方部が明確になり、前方後円形・前方後方形の古墳としての形が確立する。会津平における古墳時代の開始である。国府クルビ式期である。

稲荷塚6号墳は前方後方形、宮東1号墳は前方後円形であるという墳形の違いはある。しかし、後円部と後方部を廻る周溝は、前方部の溝より一段深く造られている。この特徴は、石川県宿東山1号墳（石川県埋蔵文化財センター1987）と共通している。この古墳は、丘陵上に造られた全長21.4mの前方後円墳である。後円部は、直径15.7m、高さ2.6mである。後円部を廻る溝は幅1.5～2m、深さは2m近くにもなる。一方前方部の溝は浅く、墳丘の高さも0.5m程度である。宮東1号墳や稲荷塚6号墳の墳形も、これに近い形状である。

杵が森古墳からは、古墳年代の決め手となる土器は出土していない。わずかな破片が出土してい

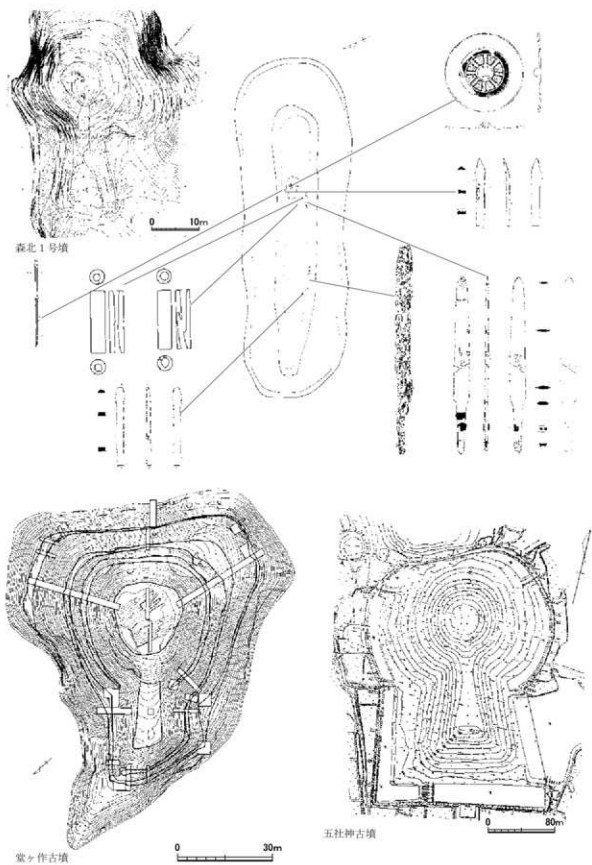


図138 会津の前期古墳と関連古墳

るのみである。重複関係にある桜町Ⅱ式期の竪穴住居跡よりも新しいが、周辺の周溝墓との関係は微妙である(田中敏1993)。周溝墓から出した土器のうち、稲荷塚1号・4号・2号は古墳受容期前半とした土器である。また3号・5号は2段階の土器である。これらの周溝墓より、杵ガ森古墳を古く位置づけるのは無理であろう。また土器破片ながら、複合口縁壺の破片も出土している。(図158)。

杵ガ森古墳の墳丘長は45.6mである。この古墳の墳形については、奈良県箸墓古墳を1/6にした規格で造られたとされている。(澤田秀実1991)確かに、墳丘形を合わせた形態は見事に合致している。しかし周溝の形態、それから復元される墳丘の立体的な形状の検討も必要である。杵ガ森古墳の周溝は稲荷塚6号墳や宮東1号墳と共通している。つまり後円部を巡る周溝が深く造られ、前方部が著しく浅くなる特徴がある。石川県分校カン山古墳(加賀市教育委員会1979)の周溝も同様である。この形態であれば、想定される墳丘は、後円部が半球状であり、前方部は平端な平場である。これは、箸墓古墳の立体形と大きく異なる。さらに会津平で精美な段築が造られた古墳は、会津大塚山古墳などの大型古墳のみである。杵ガ森古墳の後円部は変形が著しく、段築の有無は不明である。

男壇1号墳は、矩形の方墳である。墳丘は南北21.3m、東西16.9mである。長辺の中央部に狭い土橋状の施設がある。周溝は、四隅が切れることなく巡っている。ただし、西周溝の中央に畦状の土橋が設けられている。これと同様な施設は、石川県御経塚シンデン10号墳にもある。古墳時代になると東北地方南部の方墳にも、周囲に溝を巡らす形態が普及する。南溝の一部が狭くなっているのは、先行する2号周溝墓に規制された結果である(会津坂下町教育委員会1990)。北溝の東部には、溝幅が広くなり矩形の突出部がある。周溝内埋葬の可能性もある施設である。中型方墳のひとつである。

低地に造られた古墳に対して、新たに丘陵上や会津平を見渡す山頂に造られた大型古墳が出現する。会津坂下町森北1号墳、会津若松市堂ヶ作古墳である。森北1号墳は、全長41.4mの前方後方墳と報告されているが、後方は痩せ尾根に造られているためあって、歪んだ形になっている。この段階の古墳では唯一、埋葬施設の発掘調査が実施されているので、少し詳しく見ておきたい。

前方部は、くびれ部から先端に向かって高くなり、最高所は墳丘基底部から1.6mである。細長く前端に向かって伸びている。この形状は前方後円墳にはあるが、前方後方墳には少ない形である。後方部墳頂平坦面とくびれ部の比高差は4.3mである。またくびれ部から墳頂平坦面に続く坂がある。後方部の稜線は不明瞭で、等高線は円形を描くようになっている。くびれ部において、左右の後方部辺が直角に対応することから前方後方墳であるとされたが、後方部先端側の等高線は円形となっている。軸線はN-40°32'-Wである。墳丘部や周溝からは、複合口縁壺が出土している。壺形埴輪の一種であろう。

埋葬施設からは、銅鏡、武器、玉、工具という前期古墳の基本的な副葬品がそろっている。埋葬施設は、墳頂面の直下にあったが、これは東北地方南部の前期古墳ではそれほど特異なことでもな

い。郡山市大安場古墳でも、畿内前期古墳のような大きく、深い墓坑は検出されていない。

埋葬施設は、割竹木棺の一方が尖った形態で、舟形木棺と報告されている。墳頂面の表土を除去した直下に、長さ6.7m、幅2.2m程度の隅丸長方形である。この中央に木棺が据えられていた。木棺の軸線はN-64°-Wで尖った側を西にしていた。木棺の長さは5.34m、最大幅0.92mである。墳丘の形状に大きな乱れがないことから、墳頂面は築造当初の高さから大きく削平されていることは無いであろう。

木棺の南東部中央寄りでは東から、木箱に納められた放射状区珠文鏡、この付近から鉋、鉄針が出土している。またこの西には、槍先と管玉が出土した。そして槍先の元方に対応して漆皮膜があった。槍柄に塗布された漆であろう。漆皮膜の近くからは鉋が出土した。遺体は東部を南東側に置いて、木棺の中央に納められたと考えられる。その他、木棺内から土器片が若干出土している。また墳丘斜面や周溝からは、赤彩の施された複合口縁壺を中心とした土器が出土している。

堂ヶ作古墳は、三方の尾根が集まる標高382.5mの山頂に立地し、この地形を利用して造られている。ふもとの山裾とは、比高差110mもある。墳丘長84m、前方部2段、後円部3段の段築と報告されている（会津若松市教育委員会1991）。前方部は平坦で、後円部から前方部に続くスロープは設けられない形である。地形の制約から、全体の形は整っていない。前方部先端は刃物の切っ先形、後円部は無花果形である。段築も、会津大塚山の帯状に巡る整ったテラスとは大きく異なっている。また葺石も部分的に確認されている程度である。墳頂部からは赤彩された複合口縁壺などが集中して出土している。壺形埴輪の一部であろう。

この段階から、新たに焼成前に底部が穿孔された複合口縁壺が墳墓に採用される。体部器形は球形で、中央に最大径がある。頸部は外傾して立ち上がるもの、大きく外反して湾曲するものがある。前者では口縁部に平面を設けているのに対して、後者では頸部からそのまま口縁部端に至る。口縁部は大きく水平方向に伸びて、端部や角張っている。儀器として古墳専用につられた土器である。この土器は、会津坂下町男壇1号墳や同町稲荷塚6号墳、同宮東1号墳、森北1号墳、堂ヶ作古墳から出土している。また長頸壺にも、焼成前に底部が穿孔された例がある。土器の外表面はミガキで仕上げられ、赤彩も施される。儀器化が進んだ土器である。甕では、口縁端部を小さくツマミ上げたもの、あるいは丸くおさめたものもある。内外面とも、ハケメが顕著である。ただし畿内の布留式甕は、出土例の確認はされていない。

堂ヶ作古墳の立地条件・規模から、造営には膨大な労力と物資が必要である。それまでの墳丘墓とは格段の違いである。そこまでして、古墳に葬られる人物が現れたことになる。また古墳を造営する組織を運営し、古墳祭祀を主催するのは後継者である。それは会津平の大首長のひとりである。

この段階になって会津平の墳墓規模にも、較差が生じる。大型の堂ヶ作山古墳は、墳丘長さ84m程度である。杵が森古墳・森北1号墳は、墳丘長さ40m程度である。小型の稲荷塚6号墳は墳丘長さ24.6mである。墳形も前方後円墳、前方後方墳、方墳などがある。発掘調査の実施されていない古墳にも、同時期の大型古墳があろう。例えば、喜多方市塩川町観音森古墳などである。

古墳時代前期には、それまで比較的小規模な周溝墓を造営していた会津平の中から、大型古墳に葬られる首長層が出現して、世代を重ねるようになった。阿賀川東岸の会津若松地区では堂々作古墳一太塚山古墳、日橋川北岸の喜多方塩川町東部では、観音森古墳と田中・舟森山古墳、旧鶴沼河口部の会津坂下地区ではこれより規模は小さいが杵ガ森古墳、さらに鎮守森古墳と亀ヶ森古墳、それに阿賀川北岸の喜多方市山崎地区でも、虚空蔵森古墳と灰塚山古墳がある。これ以外にも中小の古墳が知られている。会津平で3ないし4箇所地域核となる首長とこれを支える小首長層が出現したことを示している。

これらの古墳について、畿内の古墳と対比した築造規格が検討されている。堂々作古墳の築造企画について、甘粕健や澤田秀実は奈良県五社神古墳との類似を指摘している（甘粕1992・澤田1992）。しかし堂々作古墳の平面形は、段築の平坦面も一定しないし、幅も狭く不定形である。五社神古墳の後円部は前方部から明確な段が造られているのに対して、堂々作古墳ではスロープとなっている。葺石についても、定式化した構築技法のようには見えない。畿内の前期古墳の外表施設と比較すれば、相異は著しい。古墳の形も、正確な測量によって造られた畿内の大型前方後円墳と比べれば、著しく不整形である。五社神古墳自体の年代観も、現在では古墳時代前期後半に位置づけられている（白石2009）ので、堂々作古墳よりは新しい可能性が高い。

古墳の外形は、畿内前期古墳のモデルを定型的に受容したのではない。巨大化した前方後円墳（後方墳）という情報を受けて、在地の技術を集めた古墳が造られたのであろう。会津平が、行動の主体性をもった選択的受容の一つである。畿内と遜色のない古墳は、次の会津太塚山古墳の出現を待たなければならなかった。

5. 集落・首長・物流

集落の再編成 会津平においても、前段階の周溝墓から古墳への飛躍は大きい。古墳を造営するには、膨大な労力と資材を確保して、それを運用する組織の存在が前提である。それは新しい社会システムの成立を象徴する構築物である。倭国の各地に出現した大型古墳に葬られた人物は、それまでの首長と比較して比較にならない強力な権力を保有していたと推定される。

大きな権力が出現する過程には、戦いが惹起する。会津平征服や移住説（甘粕・辻1993など）による古墳時代の開始が説かれる一因である。果してそうであろうか。会津平では、弥生時代後期にはすでに鉄器化が進み、本格的な農耕社会が形成されていた。庄内式期には古墳の原型となる周溝墓も造られていた。この状況は、北陸西部の状況と大きな相違はない。しかも周溝墓や土器の受容にさいしては、それぞれの要素を選択して受容している。つまり選ぶ側が自主的な判断を保持していた。選択的受容である。日常的な土器は、縄文と刺突文により装飾が施されている。在地の伝統を継承する土器である。会津平に居住する人々が主体となった変化であることの反映である。

これらに着目すれば、会津平における古墳の出現を征服説・移住説で説明することは無理がある。しかも紛争や戦争状況を示す高地性集落や環濠集落は確認されていない。征服や移住がなされた場

合、必ず軋轢が生じる。ところが、会津平にその痕跡はない。古墳時代前期の会津平において、周辺地域と比べて多くの大型古墳が出現する理由は、弥生時代後期以来の成熟した農耕社会が形成され、そこに平和が保たれていたことである。

古墳時代の開始と前後して、有力古墳の近くに政治・宗教の中心となる大集落が多くある場所新たに出現する。奈良盆地における纏向遺跡がそうである。会津平においても、桜町遺跡や屋敷遺跡が途絶する一方で、大型古墳の周辺に集落群が集中する傾向がある。会津坂下町周辺や喜多方市塩川町東部などである。近隣の阿武隈川流域や新潟県地域でも、同様な例が確認されている。郡山市大安場古墳の南側には、山中日照田遺跡や正直B遺跡などが営まれている。新潟県胎内市城の山古墳の周辺でも、大塚遺跡や天野遺跡という集落がある（胎内市2006）。

会津平で前期古墳が集中する場所は、特に低湿地が発達している。耕地の開発、水路の維持管理、洪水対策が十分であれば、豊かな土地になる場所である。土地が豊富な一方で労働力が不足する場合、集落を集めて労働力の確保をすることにより、各種の開発が可能になる。富を生む。蓄積された富は、社会資本の充実に投資される。耕地の拡大と用水路の掘削、集落の建設がその投資の対象である。人々を集めてこれらの作業に当たる社会システムが、古墳の出現と前後して確立したのであろう。この事業を推進するためには、首長に類する役割を担う人物が必要になる。古墳に葬られた人物は、この役割を担った人物であろう。古墳の被葬者、首長の社会的役割は、結果した集落群の繁栄を図る使命があった。

物流システム 古墳受容前後の会津平は、鉄器時代になっていた。自給自足で集落を営むことは出来ない段階である。各種の社会資源が必要であった。古墳時代の社会資源は、宗教思想や国内外の情報、各種生活用品と道具、装身具、武器・武具・農工業技術、労働力、食料などである。このうち会津平自体で獲得できるものは、食料と労働力・山と湖沼の産物である。外から入手しなければならないのは、情報と思想、技術、装身具、武器、鉄素材、塩などの海産物である。いずれも、古墳時代の生活に必要不可欠なものである。

必要な社会資源を入手して、これを配分するのは首長の役目である。会津平の3ないし4大古墳群を束ねる各首長は、会津平内の折衝とともに、外に向けて交渉を行う役割があった。古墳の造営が畿内で開始された時、会津平の外を代表するのは、北陸の勢力ではなく、その背後にある倭王権である。各種社会資源を獲得するには、倭王権を中核とする社会資源の分配システムに参加する必要があった。

古墳時代の物流は、倭国各地の首長が相互に存在を認めて、必要な社会資源を交換するシステムである。この結節点を象徴する構築物が古墳である。中核地域における古墳は、各地域の弥生時代墳丘墓の要素を集めて創設された墳墓である（近藤義郎1983）。それぞれの地域の有力首長達が、共に造るものであった（白石2009）。そこに首長連合が想定される一因がある。この連合関係では、倭王権の優越を認めても、それは支配や統治という関係では無かったであろう。

会津平の首長 古墳時代の首長層は、墳墓として古墳を築造することにより、その実力と権威を

示していた。古墳の造営には多大な労力が必要となる。労働組織の編成である。それは政治的指導性が求められる。大古墳の出現は、大きな労働力の集中が可能な社会が出来たことを示している。また首長層の協業により古墳を造り、その祭儀に参加することは、各種社会資源の交換関係を首長間の相互承認行為となる。会津平においても同様に、地域内各首長間の協業により古墳が造られたのではないだろうか。集落の統合により生まれた首長が集約する労働力、更に各首長層の協業が墳丘の大型化を可能にしたのである。会津大塚山古墳や亀ヶ森古墳は、古墳時代前期における会津平の実力を今も示している。

ただし、古墳の造営が倭王権の承認のもとに規格や規模が決定された、あるいは副葬品の量と質が被葬者の地位や身分を反映しているかは別である。田中琢によれば、古墳の築造は単なる流行にすぎない(田中1991)。杵ガ森古墳や堂ヶ作古墳の被葬者は、倭王権の存在を認識していたであろう。しかしその先、九州地域の状況まで視線の先にあったかは不明である。はたして倭王権は、会津平やそのほかの地域の、詳細な政治状況を把握していた上で、在地首長の序列を決めることが可能であろうか。地方統治制度の未発達な当時の状況では無理であろう。

古墳は、画一的、定型化した構築物とされているが、古墳の構成要素に分解してみると、それぞれの地域色がある。会津平の出現期古墳と畿内の前期古墳を比較すれば、墳丘形や埋葬施設の造りに相異がある。古墳は、それぞれの首長とその首長が率いる集団の技術を結集して造られたのである。古墳を造ることにより、自らの集団が持っている実力を示すためである。このことにより、倭国の首長間、地域間の交易・交流そして政治的優位を保つ手段としたのであろう。そうして、古墳を造ることにより政治・経済・思想を介した倭国世界に参入したのである。古墳を造る主体は、それぞれの地域である。

古墳時代前期、倭国の全域を統治する行政機構は存在していない。倭人、少なくとも倭国人という共通意識も無かったであろう。倭国は、倭王権を中核として、各地域に出現した首長間の相互承認による緩やかな結び付きの上に成り立っていたのであろう。杵ガ森古墳や堂ヶ作古墳の出現は、中核地域とそれほど遅れることなく、会津平もこの結び付きに加わったことを示している。

前期古墳の副葬品に、呪術的な要素が強く見られることは古くから注目されていた。小林行雄は、前期古墳の被葬者が司祭者的性格を持っていたことを強調している(小林1961)。また広瀬和雄は、古墳は神となった首長を葬る施設と考えている(広瀬2003)。軍事的支配者、行政権力者ではなく宗教的な権威である。

集落や集落群を率いるには、経済力や武力以外に、精神的な権威も必要になる。そこに、宗教的権威が求められたのではないだろうか。首長が葬られた古墳に、宗教的権威やそれを象徴する器物が副葬されたのも、これが理由である。

前期古墳の分布限界線は、米沢盆地から大崎平野を結ぶ線がある。現在までの所、この場所で弥生時代の周溝墓は確認されていない。会津平で周溝墓が出現する時、それを導入する社会的状況に無かったからであろう。これらの場所では、古墳の出現は会津平より一段遅れる。

この地域に古墳が出現する頃、いわゆる北陸系土師器も姿を現す。しかしこの土師器は、直接の北陸系ではなく、会津において変形した土師器ではないだろうか。桜町諸型式の土器は、北陸の要素を受容しながら在地の土器と融合して、会津平独自の土器に変化している。会津平より北の地域で古墳が出現する時、北陸地域がはたした役割を会津平が担ったからであろう。会津平は当時、東北地方南部における中核であった。

6. おわりに

これまで、会津平に古墳が出現する前後に、在地社会が激変すると考えられていた。縄文的な生業を基本とする社会が、突然古墳時代に遭遇したような理解である。縄文系土器から突然、古墳時代的な集落と墳墓、そして北陸系土師器が普及する状況である。これをもとに会津平の古墳時代は、北陸からの直接的な移住や征服により開始されたとする説が提唱されてきた（甘粕1993・辻1993など）。

ところが、桜町遺跡の調査によって判明した会津平における弥生時代後期の集落や墳墓の状況、出土した土器や農具・建築部材は、北陸地域のそれと弥生時代後期から基本的に変わりが無かったことを示していた。四隅切れ周溝墓の造営から前方後方形・前方後円形周溝墓を経て、古墳が出現する過程であり、井戸や掘立柱建物からなる集落景観であり、木製農具と籾殻や麻・豆などの栽培植物の出土である。

それは、会津平が北陸地域と歩調を合わせて、弥生時代から古墳時代への変化を歩んだことを物語っている。一方、弥生時代後期の北陸地域における天王山系土器の出現も、この地域との濃密な相互交流の一端を示していよう。もはや会津平における古墳の出現が、倭王権を背景にした北陸勢力による征服説・移住説で説明することは出来ない。今後は、会津平における弥生時代後期のより具体的な社会の解明を踏まえて、古墳時代の開始を分析することが求められよう。（福島）

引用・参考文献

◀発掘調査報告書・市町村史▶

- 〈福島県〉
- 福島県教育委員会 1987 「国宮総合農地開発事業 母畑地区遺跡分布調査報告」11
『福島県文化財調査報告書』第17集
- 福島県文化振興事業団 1990 「能登遺跡」『福島県文化財調査報告書』第242集
1991a 「屋敷遺跡」『福島県文化財調査報告書』第262集
1991b 「和泉遺跡」『福島県文化財調査報告書』第263集
2002 「江平遺跡（第1分冊）」『福島県文化財調査報告書』第394集
2005 「荒屋敷遺跡（4次）・桜町遺跡（1次）」『福島県文化財調査報告書』第430集
2008 「沼ノ上遺跡」『福島県文化財調査報告書』第454集
- 福川村教育委員会 2006 「桜町遺跡発掘調査報告」『福川村文化財調査報告書』第4集
- 会津坂下町教育委員会 1985 「若宮地区分布調査報告書」『会津坂下町文化財調査報告書』第7集
1988 「館ノ内遺跡・細田遺跡」『会津坂下町文化財調査報告書』第14集
1990a 「宮東遺跡・男壇遺跡」『会津坂下町文化財調査報告書』第16集
1990b 「樋渡台畑遺跡」『会津坂下町文化財調査報告書』第17集
1991 「臼ガ森古墳」『会津坂下町文化財調査報告書』第23集
1992 「古館遺跡・高畑遺跡」『会津坂下町文化財調査報告書』第27集
1992 「宮ノ北遺跡」『会津坂下町文化財調査報告書』第28集
1993 「亀ヶ森古墳」『会津坂下町文化財調査報告書』第37集
1994 「東館遺跡」『会津坂下町文化財調査報告書』第41集
1994 「宮ノ北遺跡（第2次調査）」『会津坂下町文化財調査報告書』第42集
1995 「杵ガ森古墳・稲荷塚遺跡発掘調査報告書」『会津坂下町文化財調査報告書』第33集
2003 「中平遺跡・男壇遺跡」『会津坂下町内遺跡発掘調査報告書』第54集
- 創価大学・会津坂下町教育委員会 1999 「森北古墳群」
- 田村山古墳周溝調査報告書刊行会 1981 「会津田村山古墳」
- 会津若松市教育委員会 1994 「川原町口遺跡」『会津若松市文化財調査報告書』第36号
1999a 「史跡 若松城跡」Ⅲ『会津若松市文化財調査報告書』第64号
1999b 「矢玉遺跡」『会津若松市文化財調査報告書』第61号
2000 「西木流 A 遺跡・東高久遺跡」『会津若松市文化財調査報告書』第66号
2004 「屋敷遺跡」『会津若松市文化財調査報告書』第94号
- 河東町教育委員会 1979 「南原遺跡」
1981 「倉道遺跡」
- 塩川町教育委員会 1994 「鶴塚遺跡発掘調査報告書」『塩川町埋蔵文化財調査報告』第1冊
1998 「館ノ内遺跡」『塩川町文化財調査報告』第4集
1999 「古屋敷遺跡」『塩川町文化財調査報告』第6集
2004 「内屋敷遺跡」『塩川町文化財調査報告』第12集
- 新鶴村教育委員会 1990 「東台遺跡」『新鶴村文化財報告書』第10集
- いわき市教育委員会 1998 「平窪諸荷遺跡」
2001 「横山 B 遺跡」『いわき市埋蔵文化財調査報告』第77冊
2002 「横山古墳群」『いわき市埋蔵文化財調査報告』第82冊
2002 「植田郷 B 遺跡」『いわき市埋蔵文化財調査報告』第85冊

- 白河市 2001 「自然・考古」『白河市史』第四巻資料編1
堂々作山古墳調査団・会津若松市教育委員会
- 1991 「堂々作山古墳」Ⅰ『会津若松市文化財調査報告書』第17号
1996 「堂々作山古墳」Ⅲ『会津若松市文化財調査報告書』第50集
- 東北学院大学文学部史学科セミナー・原町市教育委員会
- 1996 「高見町A遺跡発掘調査報告書」『原町市埋蔵文化財調査報告書』第12集
- 保原町教育委員会 1999 「大鳥城発掘調査報告書」『保原町文化財調査報告書』第4集
- 福島県立博物館 1993 「会津若松市村西遺跡発掘調査報告書」『福島県立博物館調査報告書』第26集
- 〈山形県〉
(財)山形県埋蔵文化財センター
- 2004a 「浜江遺跡 第2・3次発掘調査報告書」
『山形県埋蔵文化財センター調査報告書』第124集
- 2004b 「高橋南遺跡・葛瀬江1遺跡・葛瀬江2遺跡発掘調査報告書」
『山形県埋蔵文化財センター調査報告書』第132集
- 2005 「向川原遺跡 第5・6次発掘調査報告書」
『山形県埋蔵文化財センター調査報告書』第141集
- 2007 「庚塚遺跡発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財センター調査報告書』第161集
- 米沢市教育委員会 1983 「八幡堂遺跡」『米沢市埋蔵文化財調査報告書』第8集
1988 「比丘尼平遺跡発掘調査報告書」『米沢市埋蔵文化財調査報告書』第21集
- 〈新潟県〉
新潟県教育委員会 1979 「下谷地遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書』第19集
2000 「裏山遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書』第96集
2006 「正尺C遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査報告書』第165集
- 新津市教育委員会 2001 「八幡山遺跡発掘調査報告書」
2004 「八幡山遺跡群発掘調査報告書 一第11・12・13・14次調査一」
- 三条市教育委員会 1999 「内野手遺跡・経塚山遺跡」『三条市文化財報告書』第10号
- 柏崎市教育委員会 1987 「西岩野」『柏崎市埋蔵文化財調査報告書』第7集
1990 「吉井遺跡群」Ⅱ『柏崎市埋蔵文化財調査報告書』第13集
- 上越市教育委員会 2007 「吹上遺跡範囲確認調査報告書」
2008 「釜蓋遺跡範囲確認調査報告書」
- 〈富山県〉
富山県教育委員会 1983 「南太閤山1遺跡」『都市計画街路 七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要』
(財)富山県文化振興財団
- 2006 「下老子笹川遺跡発掘調査報告」
『富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告』第31集
- 富山市教育委員会 1984 「富山市呉羽丘陵古墳分布調査報告書」
- 〈石川県〉
石川県立埋蔵文化財センター
- 1986a 「近岡遺跡」
1986b 「漆町遺跡」Ⅰ
1987 「吉竹遺跡」
1988 「漆町遺跡」Ⅱ
1989a 「漆町遺跡」Ⅲ
1989b 「漆町遺跡」Ⅳ
1987 「宿東山遺跡」
1990 「松任市一塚イノツカ遺跡」

- 1992 『竹松遺跡群』
 1995 『谷内・杉谷遺跡群』
 2000 『金沢市 戸水C遺跡・戸水C古墳群（第9・10次）』
- 石川県教育委員会 2002 『加賀市 猫橋遺跡』
 金沢市教育委員会 1996 『西念・南新保遺跡』Ⅳ『金沢市文化財紀要』119
 寺井町教育委員会 1997 『加賀 能美古墳群』
 松任市教育委員会 1995a 『旭遺跡群』Ⅰ
 1995b 『旭遺跡群』Ⅱ
 1995c 『旭遺跡群』Ⅲ
- 〈福井県〉
 福井県教育委員会 1966 『王山・長泉寺山古墳群』
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
 1986 『古河遺跡発掘調査概報』『福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報』2
 1994 『長泉寺遺跡』『福井県埋蔵文化財調査報告』第29集
- 鯖江市教育委員会 1987 『鯖江市埋蔵文化財調査報告 西山古墳群』
 2008 『史跡王山古墳群環境整備事業報告書』
- 清水町教育委員会 2003 『風巻神山古墳群』『清水町埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅶ
- 福井県郷土史懇談会 1976 『太田山古墳群と糞置庄』
- 〈静岡県〉
 静岡県埋蔵文化財調査研究所
 1990a 『高尾向山遺跡』『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告』第23集
 1990b 『川合遺跡（遺構編）』『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告』第25集
 1992 『瀬名遺跡（遺構編Ⅰ）』Ⅰ『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告』第40集
- 掛川市教育委員会（株）川島デベロップ静岡県人類学研究所 1994 『向山遺跡発掘調査の記録』
 （株）静岡新聞社・静岡市教育委員会
 1996 『鷹ノ道遺跡』『静岡市埋蔵文化財報告』35
- 袋井市教育委員会 1996 『高尾向山遺跡』Ⅱ
 2004 『愛野向山Ⅱ遺跡』
- 三島市教育委員会 1999 『長伏六反田遺跡』
- 〈愛知県〉
 愛知県埋蔵文化財センター
 2009 『朝日遺跡Ⅷ 総集編2009』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第154集
- 〈島根県〉
 出雲市教育委員会 2006 『西谷墳墓群 一平成14年～16年度発掘調査報告書一』
 島根県埋蔵文化財調査センター
 2003 『宮山古墳群の研究』『鳥取県古代センター調査研究報告書』16
- ≪論文≫
- 赤塚 次郎 1992 『東海系のトレース 一3・4世紀の伊勢湾沿岸地域一』『古代文化』第44巻第6号
 古代学協会
 1989 『古墳文化共鳴の風土』『研究紀要』第7号 愛知県埋蔵文化財センター
- 阿部 朝衛 1990 『新潟県阿賀野川以北の古墳時代前期』『北越考古学』第2号 北越考古学研究会
- 安藤 広道 1996 『大形方形周溝墓から見た南関東弥生時代中期社会』『みずほ』第18号 大和弥生文化の会
- 飯島 義雄 1998 『古墳時代前期における「周溝をもつ建物」の意義』『群馬県立歴史博物館紀要』第19号
 群馬県立歴史博物館
- 池田 淳子 1997 『弥生集落研究の一視点 一西日本の特殊建物のとらえ方を通して一』『新潟考古学談話会会報』

第17号 新潟考古学談話会

- 石神 怡 2002 「方形周溝墓の東進・西進」『青いガラスの燦き 丹後王国が見えてきた』
大阪府立弥生文化博物館
- 石川日出志 1990 「天王山式土器編年研究の問題点」『北越考古学』第6号 北越考古学研究会
2000 「天王山式土器弥生中期説への反論」『新潟考古学』第11号 新潟県考古学会
2001 「弥生後期湯舟式土器の系譜と広がり」『北越考古学』第12号 北越考古学研究会
2004 「弥生期天王山式土器成立期における地域間関係」『駿台史学』第120号 駿台史学会
- 石川ゆずは 2005 「弥生時代中期～古墳時代前期にかけての木製容器 —小型容器・制物桶を中心に—」
『富山考古学研究』第8号 富山県文化振興財団
- 伊藤 敏行 1988 「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究Ⅱ」『研究論集』Ⅳ 東京都埋蔵文化財センター
伊藤 雅文 1989 「石川における前半期古墳小考」『北陸の考古学』Ⅱ（石川考古学研究会々誌）第32号
石川考古学研究会
1996 「能登半島の古墳—海の古墳の理解をめぐる—」『石川考古学研究会々誌』第39号
石川考古学研究会
- 梅沢 重昭 1994 「毛野」形成期の地域相 —前方後方墳及び周溝墓の分布を中心に—『駿台史学』第91号
駿台史学会
- 大原 道則 1991 「方形周溝墓観察の一視点（1）」『研究紀要』第8号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
岡本淳一郎 1998 「弥生時代周溝状遺構に関する一考察」『富山考古学研究』創刊号 富山県文化振興財団
岡本淳一郎他 1999 「佐野台地における古墳出現期の土器について」『富山考古学研究』第2号
富山県文化振興財団
- 小田木治太郎 1989 「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」『北陸の考古学』Ⅱ（石川考古学研究会々誌）第32号
石川考古学研究会
- 及川 良彦 1998 「関東地方の低地遺跡の再検討 —弥生時代から古墳時代前半の「周溝を有する建物跡」を中心に—」
『青山考古』第15号 青山考古学会
1999 「関東地方の低地遺跡の再検討（2） —「周溝を有する建物跡」と方形周溝墓および今後の集落研究
への展望—」『青山考古』第16号 青山考古学会
- 藤山 誠一 2006 「弥生時代の大塚土坑 —東海地域を中心として—」『研究紀要』第7号
愛知県埋蔵文化財センター
- 春日 真実 1994 「山三賀Ⅱ遺跡出土の古墳時代前期土師器について」『新潟考古学談話会報』第14号
新潟考古学談話会
- 川上 洋一 1999 「大和の井戸とその周辺」『みずほ』第30号 大和弥生文化の会
- 木田 清 1998 「法仏式土器の認識と再確認」『石川考古学研究会々誌』第41号 石川考古学研究会
- 黒沢 浩 2006 「墓場の変容 —再葬墓から方形周溝墓へ—」『墓場の考古学』第13回東海考古学フォーラム
実行委員会
- 桑原 久男 1999 「大和における井戸の成立と展開」『みずほ』第30号 大和弥生文化の会
- 小泉 範明 1998 「石田川式土器の再検討（1） —甕形土器を中心として—」『群馬県立歴史博物館紀要』
第19号 群馬県立歴史博物館
- 駒見佳香子 1993 「前方後方墳の規格」『土曜考古』第17号 土曜考古学研究会
- 小森 紀男 1988 「古墳出現期における外来系土器の検討 —栃木県内出土例を中心として—」『栃木県考古学会誌』
第10集 栃木県考古学会
- 佐伯 英樹 1999 「特集2 滋賀県弥生時代研究の現状と課題 2. 前方後方形周溝墓」『滋賀考古』第21号
滋賀考古学研究会
- 鈴木 源 1998 「伊勢林前式・輪山式土器の再検討」『法政考古学』第24集 法政考古学会
- 高橋 浩二 1995 「越中における古墳出現期の様相 —墳墓・古墳と集落の検討から—」『大境』第17号
富山考古学会
- 高橋 実ほか 1983 「北陸の弥生・古墳時代の壑穴住居址 —弥生時代後期～古墳時代初頭の壑穴住居址を中心として—」

- 『北陸の考古学』（石川考古学研究会々誌）第26号 石川考古学研究会
- 高林 真人 2002 「方形周溝墓とS字 ー東京都豊島馬場遺跡を中心にー」『新潟考古学談話会報』第26号
新潟考古学談話会
- 滝沢 規朗 2002 「新潟県北部地域の弥生時代中期後半から後期の土器について」『新潟考古学談話会報』
第26号 新潟考古学談話会
- 野田 豊文 2007 「弥生時代後期における北陸系・東北系・八幡山の野焼き方法について（予察）」『新潟考古学談話会
会報』第32号 新潟考古学談話会
- 2009 「新潟県の月影甕 ー外来系甕の検討2ー」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会
- 田中 新史 1977 「市原市神門四号墳の出現とその系譜」『古代』第63号 早稲田大学考古学会
1984 「出現期古墳の理解と展望 ー東国神門五号墳の調査と関連してー」『古代』第77号
早稲田大学考古学会
- 栃木 英道 1983 「器台形土器の形態の変遷について」『北陸の考古学』（石川考古学研究会々誌）第26号
石川考古学研究会
- 利根川章彦 1997 「前方後方形墓・方形墓群の構成 ーいわゆる「飛躍しえない被葬者層」の行方ー」
『埼玉県立博物館 紀要』22 埼玉県立博物館
- 中川 寧 1996 「山陰の後期弥生土器における編年と地域間関係」『島根考古学会誌』第13集
島根考古学会
- 2000 「出雲における木製農耕具の変遷について」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会
- 長瀬 出 2000 「東京都豊島馬場遺跡における「方形周溝墓」の再検討」『法政考古学』第26集
法政考古学会
- 2003 「南関東地方における「周溝をもつ建物」の検討 ー東京都北区豊島馬場遺跡の再検討を中心にー」
『法政考古学』第30集 法政考古学会
- 中野 知照 2000 「鳥取県岩美町新井三嶋谷墳丘墓の調査」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会
- 中村 五郎 1995 「弥生土器・縄文土器・古式土師器」『福島考古』第36号 福島県考古学会
- 新宅 輝久 1998 「弥生時代竪穴住居地の柱根加工について ー下老子笹川遺跡の事例よりー」
『富山考古学研究』創刊号 富山県文化振興財団
- 野田 豊文 2006 「新潟県における「天王山式土器」について」『新潟考古学談話会報』第31号
新潟考古学談話会
- 野水 晃子 2000 「越中・越後における弥生時代後期後半の土器について」『新潟考古学談話会報』
第22号 新潟考古学談話会
- 橋本 澄夫 1989 「加賀・能登の前方後円（方）墳」『北陸の考古学Ⅱ』（石川考古学研究会々誌）第32号
石川考古学研究会
- 林 純子 2008 「弥生時代中期後半における方形周溝墓と土器棺墓の様相 ー千葉県の事例分析からー」
『法政考古学』第34集 法政考古学会
- 原田 幹 1992 「北陸における東海系土器の動向 ー古墳時代初頭前後の様相ー」
『石川考古学研究会々誌』第35号 石川考古学研究会
- 広井 造 1995 「越後における前方後方形墳墓の出現」『新潟考古』第6号 新潟県考古学会
- 深堀 茜 1998 「下老子笹川遺跡出土の木製鏝について」『富山考古学研究』創刊号富山県文化振興財団
1999 「北陸の木製農耕具集成（1）」『富山考古学研究』第2号 富山県文化振興財団
- 福田 聖 1991 「溝中土壘小考」『研究紀要』第8号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
2004 「方形周溝墓と土器Ⅱー概観 その1ー」『研究紀要』第19号埼玉県埋蔵文化財調査事業団
2005 「方形周溝墓と土器Ⅲー概観 その2ー」『研究紀要』第20号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
2006 「旧入間川水系下流域の周溝墓と周溝（上）」『研究紀要』第21号
埼玉県埋蔵文化財調査事業団
2007 「方形周溝墓と周溝の覆土と出土状況Ⅱ ー豊島馬場遺跡ー」『研究紀要』第22号
埼玉県埋蔵文化財調査事業団

- 2008 「比企地域における方形周溝墓の土器配置と群構成」『研究紀要』第23号
埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 藤井 整 2006 「近畿地方の弥生墓制—墓場の考古学によせて—」『墓場の考古学』
第13回東海考古学フォーラム実行委員会
- 藤田 三郎 1999 「弥生時代の井戸と唐古・鏡遺跡の井戸」『みずほ』第30号 大和弥生文化の会
- 藤永 照隆 2000 「島根県出雲市西谷墳丘墓群の最新調査成果」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会
- 古川 登 1993a 「北陸地方の四隅突出型墳丘墓について」『島根考古学会誌』第10集 島根考古学会
1993b 「北陸地方西部における弥生時代墓制の変容」『滋賀考古』第9号 滋賀考古学研究会
1994 「北陸型四隅突出型墳丘墓について」『大境』第16号 富山考古学会
- 古屋 紀之 1998 「墳墓における土器配置の系譜と意義—東日本の古墳時代の開始—」第104号 駿台史学会
2004 「北陸における古墳出現前夜の墳墓の変遷—東西墳墓の土器配置系譜整理の一環として—」
『駿台史学』第120号 駿台史学会
2008 「弥生墳丘墓の破砕・穿孔土器と葬送儀礼—研究史の整理と実験の試み—」
『地域と文化の考古学』Ⅱ 六一書房
- 前田 清彦 1999 「北陸の木棺墓とその展開」『北陸の考古学』Ⅲ（石川考古学研究会々誌）第42号
石川考古学研究会
- 宮越 健司 2006 「伊勢湾地方における方形周溝墓に関わる問題」『墓場の考古学』
第13回東海考古学フォーラム実行委員会
2007 「伊勢湾周辺地域における方形周溝墓の埋葬施設」『研究紀要』第8号
愛知県埋蔵文化財センター
- 宮本 哲郎 1983 「土器底部の成形と法量の検討—金沢駅西地区における弥生・古墳時代遺跡出土の土器底部
を中心に—」『北陸の考古学』（石川考古学研究会々誌）第26号 石川考古学研究会
- 中島 雄二 1991 「関東地方東部における古墳出現期の様相Ⅰ（古墳出現前夜の様相）」『研究紀要』第8号
埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 村田 健二 1991 「関東地方東部における古墳出現期の様相Ⅱ（古墳出現前夜の様相）」『研究紀要』第8号
埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 谷内尾晋司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』Ⅱ（石川考古学研究会々誌）
第26号 石川考古学研究会
- 山岸 良二 2000 「再検討・千葉県内の「方形周溝墓」（第9回）」『東邦考古』24 東邦考古学研究会
2001 「再検討・千葉県内の「方形周溝墓」（第10回）」『東邦考古』25 東邦考古学研究会
2003 「再検討・千葉県内の「方形周溝墓」（第12回）」『東邦考古』27 東邦考古学研究会
2004 「再検討・千葉県内の「方形周溝墓」（第13回）」『東邦考古』28 東邦考古学研究会
2005 「再検討・千葉県内の「方形周溝墓」（第14回）」『東邦考古』29 東邦考古学研究会
2009 「再検討・千葉県内の「方形周溝墓」（第17回）」『東邦考古』33 東邦考古学研究会
- 吉川 正 1998 「四隅突出型墳丘墓の成立と展開」『島根考古学会誌』第15集 島根考古学会

《書 籍》

- 新潟県考古学会編 1999 「第3章 弥生時代・古墳時代」『新潟県の考古学』高志書院
- 浅川 滋男編 1998 「先史日本の住居とその周辺」同成社
- 石野 博信 1985 「古墳文化出現期の研究」学生社
- 川村 浩司 2003 「古墳出現期時の研究」高志書院
- 樺山 林織・山岸 良二編 2005 「方形周溝墓研究の今」雄山閣
- 黒崎 直 2007 「阿尾島古田墳群の研究—日本海中部沿岸域における古墳出現過程の新一研究—」
富山大学人文学部考古学研究室
- 佐原 真編 1983 『弥生土器Ⅱ』ニュー・サイエンス社
- 鯖江市教育委員会編 2009 『方形周溝墓の埋葬原理Ⅱ—東日本の弥生墓制—』鯖江市教育委員会
- 島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター 2007 「四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究」
庄内式土器研究会 1997 「庄内式併行期の古墳出土土器」『庄内式土器研究』Ⅲ 庄内式土器研究会

- 1998 「北関東を中心とした庄内式併行期の土器の移動」『庄内式土器研究』XVI 庄内式土器研究会
 1999a 「庄内式併行期の土器生産とその動き」『庄内式土器研究』XIX 庄内式土器研究会
 1999b 「庄内式併行期の土器交流拠点」『庄内式土器研究』XX 庄内式土器研究会
 2003a 「越の国を中心とした庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XXVI 庄内式土器研究会
 2003b 「越の国を中心とした庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XXVII 庄内式土器研究会

- 田中 琢 1991 『日本の歴史② 倭人争乱』集英社
 寺沢 薫 2010 『弥生時代政治史研究 青銅器のマツリと政治社会』吉川弘文館
 但馬考古学研究会編 2004 『台状墓の世界』但馬考古学研究会・両丹考古学研究会
 樋上 昇ほか 2008 「特集 弥生・古墳時代の木製農具」『季刊 考古学』第104号 雄山閣
 広瀬 和雄ほか 1999 「特集 墳墓と弥生社会」『季刊 考古学』第67号 雄山閣
 福田 聖 2000 『ものが語る歴史シリーズ③ 方形周溝墓の再発見』同成社
 埋蔵文化財研究会 1991 『弥生時代の掘立柱建物 本編』第29回研究会実行委員会
 森 浩一編 1980 『三世紀の考古学 上巻 三世紀の自然と人間』学生社
 山岸 良二 1991 『原始・古代日本の墓制』同成社
 山岸 良二ほか 2005 「特集 弥生墓制の地域展開」『季刊 考古学』第92号 雄山閣

◀図録・発表要旨・資料集等▶

- (財)大阪府文化財センター 2006 『古式土師器の年代学』
 赤塚 次郎編 2002 「弥生・古墳時代 土器Ⅱ」『考古資料大観』第2巻 小学館
 茨城県考古学協会・十王町教育委員会1999 『十王代台式土器制定60周年記念シンポジウム 茨城県における弥生時代研究の到達点 弥生時代後期の集落構成から〜』
 小矢部市教育委員会 2005 『出土建築材資料集 一編文・弥生・古墳時代編一』
 設楽 博己 1996 「IV戦について考える—10 東日本の戦いの始まり—」『倭国乱れる』朝日新聞社
 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
 2006 『島根県における弥生時代・古墳時代の木製品集』
 第3回考古フォーラム三重県実行委員会 1995 『前方後方墳を考える』千曲川水系古代文化研究所
 1981 『箱清水式土器 一編描文と鉄丹の文化一』千曲川水系古代文化研究所
 東海埋蔵文化財研究会 1991 「第Ⅲ分冊 関東・中央高地編」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生器』
 第8回 東海埋蔵文化財研究会 浜松大会
 鳥取県埋蔵文化財センター 2009 「建築部材(考察編)」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告』4
 富山考古学会 1999 「発表要旨・資料集」『富山平野の出現期古墳』富山考古学会
 奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録 近畿古代編』
 1989 『平城宮出土墨書土器集成』Ⅱ
 1993 『木器集成図録 近畿原始編』
 独立行政法人奈良文化財研究所2003 『平城宮出土墨書土器集成』Ⅲ
 新潟考古学会 2005 『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
 東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会 2000 『東日本弥生時代後期の土器編年』第9回 東日本埋蔵文化財研究会・福島大会
 福島県立博物館 1994 『企画展 会津大塚山古墳の時代』
 藤本 彌城 1983 『常陸那珂川下流の弥生土器』
 弥生時代研究会 1990 『「天王山式期をめぐって」の検討会 記録集』

写真図版



1 桜町遺跡周辺航空写真 (1947年 旧建設省地理調査所作成)

△を結ぶ交点が本年度調査区中央



2 2次調査遠景（南西から）



3 2次調査区全景（1）（北西から）



4 2次調査区全景(2) (真上から)



5 2次調査区全景 (3) (北西から)



6 2次調査区北部 (真上から)



7 2次調査区全景（4）（南東から）



8 2次調査区南部（真上から）



9 2次調査区部分

- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1 9号周溝墓周辺検出 (南から) | 2 北部南全景 (北東から) |
| 3 北部北全景 (南東から) | 4 13号周溝墓状遺構周辺全景 (真上から) |
| 5 中央部竪立柱建物跡周辺全景 (北から) | 6 南部20号周溝墓周辺全景 (南から) |
| 7 南部16号周溝墓周辺検出 (東から) | 8 南部検出 (南から) |



10 9号周溝墓全景 (真上から)



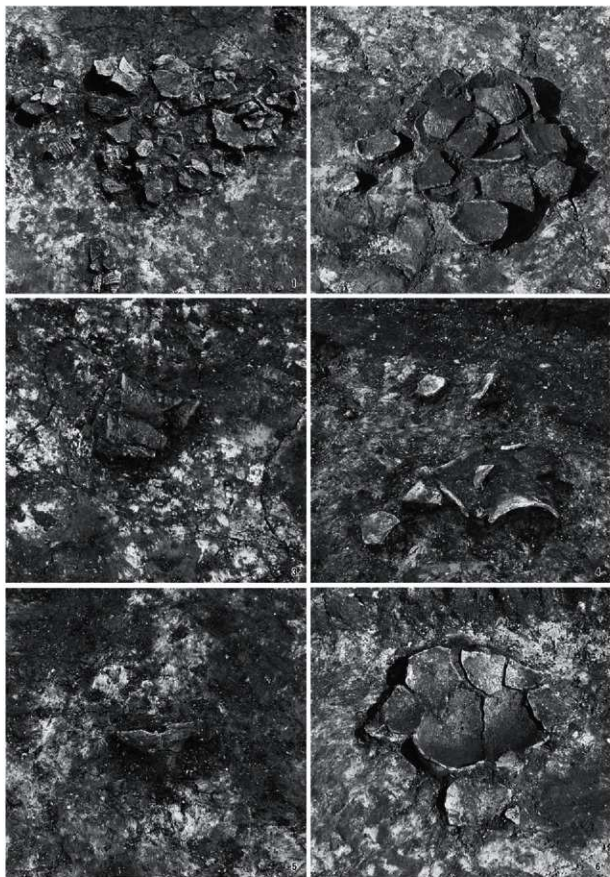
11 9号周溝墓細部 (1)

1 検出 (南から) 2 全景 (北から)
3 全景 (東から) 4 全景 (南から)



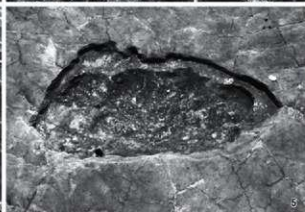
12 9号周溝墓土層断面

- 1 北溝土層断面（東から） 2 北溝貼底土層断面（東から）
 3 南溝土層断面（東から） 4 南溝貼底土層断面（東から）



13 9号周溝墓細部(2)

- | | |
|------------------|-----------------|
| 1 南溝遺物出土状況(西から) | 2 南溝遺物出土状況(南から) |
| 3 東溝遺物出土状況(南東から) | 4 北溝遺物出土状況(南から) |
| 5 北溝遺物出土状況(西から) | 6 北溝遺物出土状況(南から) |



14 69号土坑細部

- 1 第3面遺物出土状況（北東から）
 2 検出（北東から）
 3 東西土層断面（西から）
 4 南北土層断面（西から）
 5 第4面確認（東から）



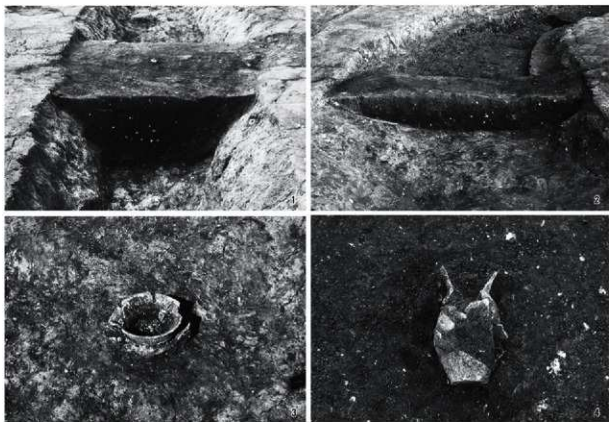
15 10号周溝墓周辺全景（真上から）



16 10号周溝墓全景（南から）

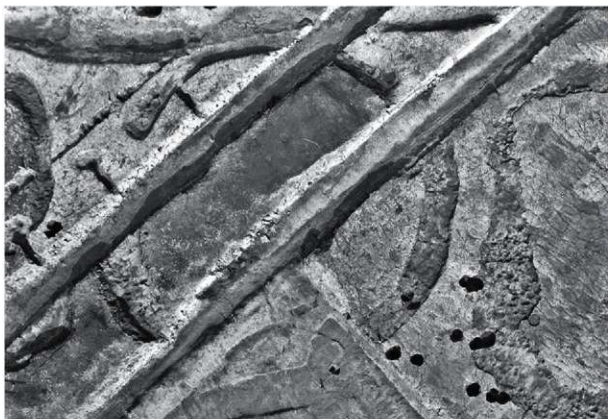


17 10号周溝墓検出（北東から）

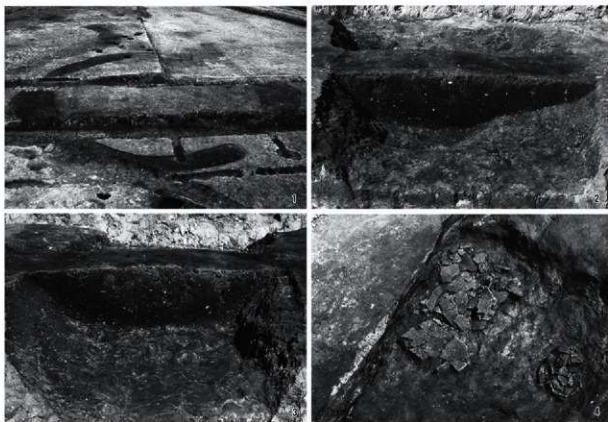


18 10号周溝墓細部

1 土層断面（北東から） 2 土層断面 a（南から）
3 遺物出土状況（南から） 4 遺物出土状況（南から）



19 11号周溝墓全景（真上から）



20 11号周溝墓細部

1 検出（北から） 2 土層断面B（南から）
3 土層断面C（南から） 4 遺物出土状況（西から）



21 14号周溝墓全景（東から）



22 14号周溝墓細部

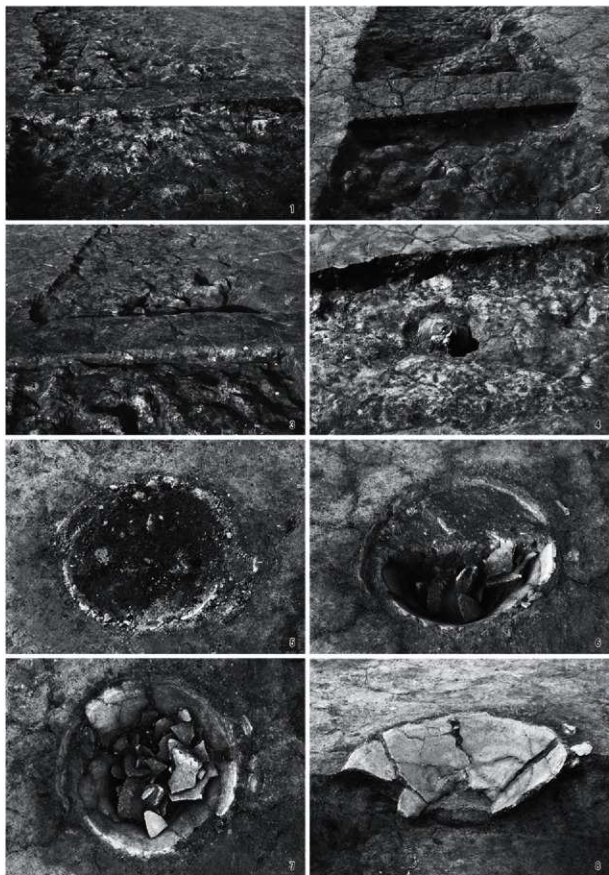
1 北溝土層断面（東から） 2 西溝土層断面（南から）
3 東溝土層断面（南から） 4 南溝土層断面（西から）



23 15号周溝墓全景（真上から）

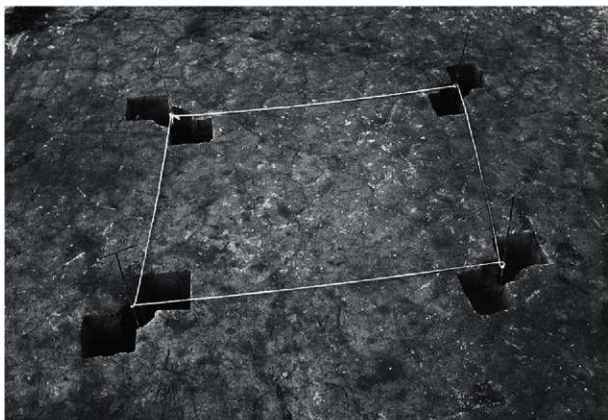


24 15号周溝墓検出（南西から）

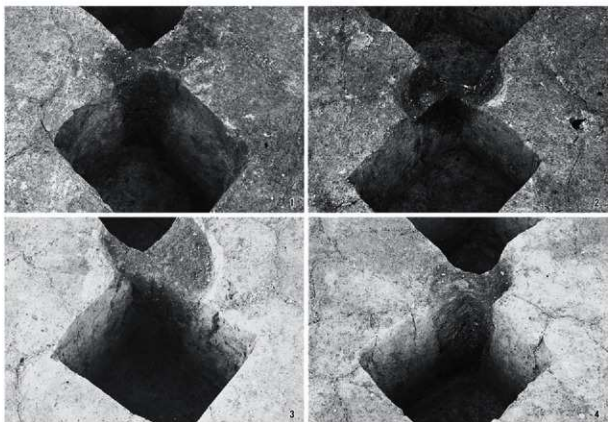


25 15号周溝墓細部

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 1 東横土層断面 (南から) | 2 北横土層断面 (東から) |
| 3 西横土層断面 (西から) | 4 北溝遺物出土状況 (北東から) |
| 5 1号土器棺出土 (南から) | 6 1号土器棺土層断面 (南から) |
| 7 1号土器棺出土状況 (真上から) | 8 1号土器棺断面 (南から) |



26 27号掘立柱建物跡全景（南から）



27 27号掘立柱建物跡細部

1 P 1 土層断面（北から） 2 P 2 土層断面（北から）
3 P 4 土層断面（東から） 4 P 3 土層断面（南から）



28 16号周溝墓全景（真上から）



29 16号周溝墓検出（南東から）

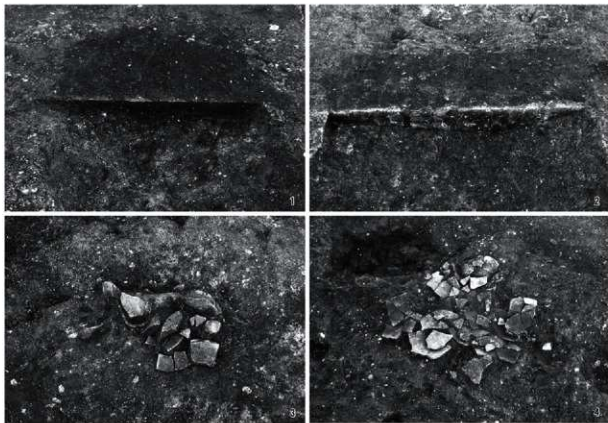


30 16号周溝墓細部

- 1 南境土層断面 (東から) 2 東境土層断面 (南から)
 3 東境土層断面 (北から) 4 東境北西境土層断面 (西から)



31 18号周溝墓全景 (南東から)

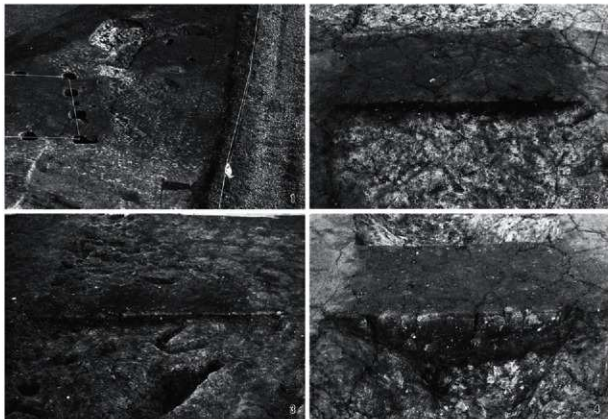


32 18号周溝墓細部

1 南溝土層断面 (東から) 2 北溝土層断面 (西から)
 3 土器出土状況 (西から) 4 北溝遺物出土状況 (南から)



33 19号周溝墓検出 (東から)

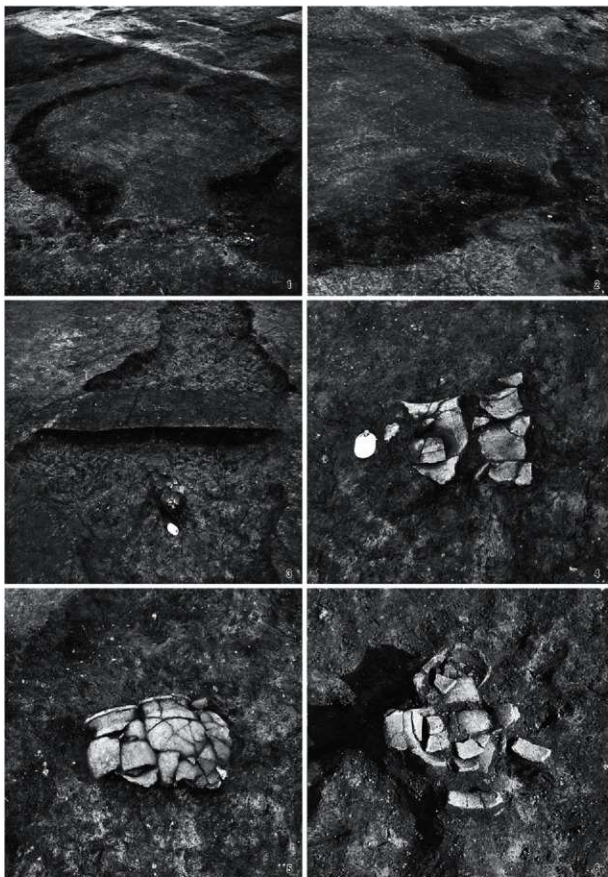


34 19号周溝墓細部

- 1 全景（北西から） 2 東土層断面（南から）
 3 東土層断面（南から） 4 西土層断面（南西から）



35 20号周溝墓全景（真上から）



36 20号周溝墓細部

- | | |
|-------------------|-----------------|
| 1 検出 (南から) | 2 検出 (西から) |
| 3 東くびれ部土層断面 (南から) | 4 土器出土状況 (南西から) |
| 5 北壁土器出土状況 (西から) | 6 土器出土状況 (南から) |